

論考

特集 女が書く、女を書く—文学の中の在日朝鮮人女性

序

—何が書かれるのか、何を書こうとするのか

在日朝鮮人女性はどう描かれてきたか：

1970年代以前の在日男性作家による女性表象

戦後を生きる「オモニ」

金史良の日本語作品に描かれた朝鮮人女性

日本文学にあらわれた「不逞鮮人」と朝鮮人女性

—中西伊之助「不逞鮮人」と田宮虎彦「朝鮮ダリヤ」を手がかりに—

伊地知紀子

宋恵媛

鄭鎬碩

高橋梓

原佑介

投稿論文

1970-80年代日本の市民運動史における映画『江戸時代の朝鮮通信使』と上映運動

1930年代における阿部知二の朝鮮認識と文学的抵抗——「冬の宿」をめぐる

山口祐香

廣瀬陽一

研究ノート

八尾の朝鮮人の生活とできごと—1945年以前を中心として

在日コリアンにおける「民族舞踊」の継承とその意義

—朝鮮学校の民族舞踊部指導者へのインタビューから—

鄭栄鎮

徐希寧

寄稿

日韓わだかまりの淵源

—大韓民国の正統性から問い直す—

徐正根

キルチャビ

日本の「韓国学」、人文・社会科学分野の研究と教育の動向

—国際高麗学会日本支部と関西地域の大学を中心に—

許南麒と七冊の日本語詩集

裴光雄

任正赫

書評

金学鉄著・大村益夫編訳『たばこスープ』（金学鉄文学選集1—金学鉄短篇小説選）

木宮正史『日韓関係史』

李里花編著『朝鮮籍とは何か——トランスナショナルな視点から』

許玉汝『羽が生えたように』

橋本みゆき編著、猿橋順子／高正子／柳蓮淑著

『二世に聴く在日コリアンの生活文化—「継承」の語り』

宮島美花

朴一

李洪章

金正守

伊地知紀子

論考

特集 女が書く、女を書く—文学の中の在日朝鮮人女性

序

—何が書かれるのか、何を書こうとするのか—	伊地知紀子	1
在日朝鮮人女性はどう描かれてきたか：		
1970年代以前の在日男性作家による女性表象—	宋恵媛	4
戦後を生きる「オモニ」—	鄭鎬碩	14
金史良の日本語作品に描かれた朝鮮人女性—	高橋梓	26
日本文学にあらわれた「不逞鮮人」と朝鮮人女性		
—中西伊之助「不逞鮮人」と田宮虎彦「朝鮮ダリヤ」を手がかりに—	原佑介	40

投稿論文

1970-80年代日本の市民運動史における映画『江戸時代の朝鮮通信使』と上映運動—	山口祐香	53
1930年代における阿部知二の朝鮮認識と文学的抵抗——「冬の宿」をめぐって—	廣瀬陽一	66

研究ノート

八尾の朝鮮人の生活とできごと—1945年以前を中心として—	鄭榮鎮	79
在日コリアンにおける「民族舞踊」の継承とその意義		
—朝鮮学校の民族舞踊部指導者へのインタビューから—	徐希寧	89

寄稿

日韓わだかまりの淵源		
—大韓民国の正統性から問い直す—	徐正根	101

キルチャビ

日本の「韓国学」、人文・社会科学分野の研究と教育の動向		
—国際高麗学会日本支部と関西地域の大学を中心に—	裴光雄	124
許南麒と七冊の日本語詩集—	任正燦	131

書評

金学鉄著・大村益夫編訳『たばこスープ』（金学鉄文学選集1—金学鉄短篇小説選）—	宮島美花	139
木宮正史『日韓関係史』—	朴一	142
李里花編著『朝鮮籍とは何か——トランスナショナルな視点から』—	李洪章	147
許玉汝『羽が生えたように』—	金正守	150
橋本みゆき編著、猿橋順子／高正子／柳蓮淑著		
『二世に聴く在日コリアンの生活文化—「継承」の語り』—	伊地知紀子	152

学会報告

2021年度学会活動—		154
投稿規定・執筆規定—		157
編集後記—		160

特集

序—何が書かれるのか、何を書こうとするのか



伊地知紀子

2021 年度日本支部大会のシンポジウムテーマは、「女が書く、女を書く—文学の中の在日朝鮮人女性」である。大会テーマに「女」が取り上げられるのは、このたびが初となる。このテーマでのシンポジウムを企画した背景には、日本での韓国女性文学ブームへの戸惑いがある。

2018 年 12 月にチョ・ナムジュ『82 年生まれ、キム・ジヨン』（筑摩書房）で一気に加速化したといわれる日本でのブームは、現在も絶賛進行中である。2017 年全米図書賞最終候補となった、コリアン・アメリカンのミン・ジン・リーによる『パチンコ』が 2020 年には日本語訳出版され、柳美里『JR 上野駅公園口』（モーガン・ジャイルズ訳『TOKYO UENO STATION』）が 2020 年の全米図書賞（National Book Award 翻訳文学部門）を受賞、と話題に事欠かない。在日コリアンについてさほど関心のない人も、これらの作品を手に取り魅力を語る様子は、さまざまな媒体に溢れている。韓流が K-Culture と変換され、ワールドワイドな広がりを生み出している、その一環としてこれらの現象は取り上げられる。

だがしかし、在日コリアンという呼称が登場するよりも、ずっと以前、植民地期から文学作品の書き手として、また書かれる対象として、朝鮮人はいた。その軌跡は、在日朝鮮人文学という領域を生むに至っている。この事実と、昨今の韓国女性文学ブームの双方を視野においた時、とある疑問が沸き起こったのである。在日朝鮮人文学と韓国女性文学とはどこで何がどう異なるのだろうか。

か。わかりやすい違いとして、後者には「女性」という文字が入っている。韓国女性文学は、書き手が女性であることを目印として括られているが、他方の在日朝鮮人文学はどうか、とはたと思い至ったのである。在日朝鮮人文学において書く主体として、あるいは書かれる客体として、「女性」を主題に論じてきた軌跡はどれ程の蓄積があるのだろうか、と改めてテーマ化することにした。

そもそも、カテゴライズには常に境界のあり方が問題になる。在日朝鮮人文学といっても、使用言語、書き手、主人公なのか否か、文中で発話しているのか否か、公刊されたものなのか否か、など見極めの困難を数えれば際限がないであろう。国際高麗学会は文学を専門とするところではないので、こうした困難を精査するのではなく、見極め難さを生み出すものを学際的に論じることを旨とする場でもある。そこで、韓国、女性、文学、登場人物の在日コリアン、といった言葉が本屋のポップに描かれるような気軽さでメディアに流れる現状を遠くに見ながら、今大会シンポジウムでは、こうした現象を生み出す主体でもあり客体でもある在日朝鮮人女性と文学という観点から、「女が書く」とは、「女を書く」とは、いかなる営みなのか読み解いていきたいと考えたのである。

本シンポジウムの司会を担当した私は、文学が専門ではないが、在日朝鮮人女性にライフヒストリーを聞いてきた者として、また「オモニハッキョ」という識字教室に通っていたことがある者として、今大会のテーマはごく身近にあった。「オ

モニハッキョ」という名が示すように、この識字教室で学ぶのは在日朝鮮人女性がほとんどであった。私が参加していた1990年代後半、教室に通う人びとは70歳代を中心とし、ハングルを書ける人はごくわずかであった。平仮名の読み書きを始めるクラス「あ」組で、私が向かい合った女性は、当時60代半ばで、鉛筆を持つ練習から始め、「あ」の横の線をまっすぐ引けないと何度もそこから書き直していた。少し書いて声に出して読んでみては、鉛筆を置いて、よもやま話に花が咲く。キムチを漬ける作業の細かさ、客への対応、従業員とのやりとり、自分の家族の歴史、自身の経験への考察、それらから感じ考えた社会を、時に優しく、時に力強く、関西弁と済州語、そして韓国語を交えて語る。

目の前で語る彼女の息づかいを含めて書き文字にすることの困難に頭を抱えながら、自分の書く文章を眺めては、参照する文献に登場する在日朝鮮人女性の姿があまりに範型化されていることに疑問を持っていた。今回のシンポジウムは、長年の疑問が文学領域から解きほぐされていく多くの気づきを得られるものとなった。

宋恵媛さんによる「在日朝鮮人女性はどう描かれてきたか：1970年代以前の在日男性作家による女性表象」は、まず時期区分が重要である。70年前後に日本の「商業文学界」に「在日朝鮮人文学」というカテゴリーが認知されるようになり、その書き手は在日朝鮮人男性であった。これを境に、客体＝書かれる対象としての在日朝鮮人女性像は、暴君の父によって虐げられる母に集約されてきた。本報告では、それ以前の女性像を掘り起こすことで、民族団体のスローガンや朝鮮民主主義人民共和国の理念、加えて当時の政治情勢が、主体＝書き手としての在日朝鮮人男性に与えた影響を読み解いていく。対象とするのは、日本語の作品だけではなく、60年代後半以降に不可視化された朝鮮語の作品も含まれる。これらの中で表現された女性たちの姿は、解放直後の生きづらさを日本政府へ直訴する女性、55年総連結成後には積極的に学ぶ女性、対等な関係にある妻といった、多彩

な女性像である。何を対象として分析するかによって、描き出される像が異なることが具体的に示されると同時に、誰に向けて何を伝えようとしてきたのかによって、描き出された女性像が変形していく様がみて取れる。ここで、私が出会った女性たちの息づかいは、かねてから書かれていたにもかかわらず、時代とともに不可視化されて一元的なイメージへと固定化されてきたことをようやく知り得たのである。また、加えて本報告では、70年前後までに書き言葉を専有してきた男性たちによって、女性たちの固有名を消されていったことが指摘されている。この非対称な関係を表象する語彙が、「オモニ」である。

鄭鎬碩さんによる「戦後を生きる『オモニ』」では、この「オモニ」表象に焦点を当てている。鄭報告では、在日朝鮮人女性を表象する際に多用される「オモニ」という言葉が、ある特定個人の母を示す単語であることを超え、多様な意味づけがなされてきた様相を検証する。発話者が誰であるのか、その立場は何かによって意味づけは異なる。表象の歴史性と重層性を形成してきたのは、在日朝鮮人だけではなく日本人によるものもある。問われているのは、包容力や忍耐力を必然とするような母性イメージを相対化し、在日朝鮮人の歴史的文脈を加味したうえで、解釈停止＝意味の固定化に陥らない作用機序の分析の必要性を問う。なるほどこの問いから、日本語で交わされる会話や書かれる文章の中で、「母」や「お母さん」を用いず「オモニ」と表現する者に対して「なぜそう呼ぶのか」という省察を導くのだと理解できるのである。

「オモニ」言説の分析は、在日朝鮮人女性がどのように書かれ、彼女たちの何が書かれるのかという本シンポジウムのテーマを一つの単語から考察するものである。同テーマについて一人の書き手の表現に着目したのが、高橋梓さんによる「金史良の日本語作品に描かれた朝鮮人女性」である。高橋報告では、「日本語作家」として知られる金史良の作品において、朝鮮人女性の描き方の変遷を読み解いていく。一連の作品からみて取れるのは、朝

鮮人女性は固有名を持つ主体ではなく、朝鮮人男性の家族役割で表現されることが多く、主人公男性は「標準語」話者、朝鮮人女性は「方言」話者として登場することである。見事に関係の非対称性が抽出されている。ただ、高橋報告は、この点を取り出すにとどまらず、朝鮮人女性を題名とした作品も取り上げることで、彼女らの描かれ方をおして金史良の問題関心の変遷を抽出することを試みている。このことは、表現を書き手＝主体に還元せず、何が書かれ、何を書こうとするのかという本シンポジウムのテーマの射程を現代に近づけるものとなる。

朝鮮人女性の声を奪い、客体に押し留めてきたものは何であるのか。この問いが、現在進行形であり続けてきた、そして現在もうそうであることを原祐介さんが、「日本文学にあらわれた「不逞鮮人」と朝鮮人女性—中西伊之助「不逞鮮人」と田宮虎彦「朝鮮ダリヤ」を手がかりに一」で述べている。原報告は、小池東京都知事による関東大震災時朝鮮人虐殺否定論を導入に置いた上で、日本人から「不逞鮮人」と表象される朝鮮人男性とその対となる脇役の朝鮮人女性表象を介して、支配者が自己正当化に用いる言説装置が作動する場面を解析する。この二作品に共通する点は、朝鮮人女性が幾重にも「他者」にされていた現実である。ただ、踏まえるべきは、支配者もまた一元的ではなかったという構造の問題である。自己表現の手

立てを近代化の中に見つけた女性は、何とか発声するも「民族」からの逸脱とされ、嘆く朝鮮人男性はますます血気盛んとなる。その姿に一定の理解を示す「良心的」日本人男性との関係を、原報告は「誇りやたくましさを神聖視する民族主義をめぐる男性植民者と男性被植民者のホモソーシャルな関係が透けてみえる」と指摘する。ただ、必ずしもすべての男たちが同じ振る舞いをしたのではなかった。ここに、今私たちが汲みうる転機も潜む。全てを主体に還元できないのである。

本シンポジウムの四報告を受け、改めて声を奪われてきた女性たちの姿が顕になり、それでも何らかの手段で発声しようとしてきた彼女たちに出会うことができた。私が「オモニハッキョ」で出会った康さんは、固有名を持った存在として教室の席に座っていたのである。冒頭で触れた韓国女性文学の勢いに瞠目しながらも、在日コリアンをZAINICHIと表記する研究成果が次々に生み出されている近年の動向にも目を向けながら、多様な議論を丁寧に積み重ねるなかで、地域と属性を超えた知の地平が開かれるのではないかと熱い期待を抱いたシンポジウムとなった。当日、浮葉正親さん、洪ジョンウンさん、岡崎 享子さんからは、各報告への充実したコメントを頂いた。

最後に、病を押して登壇くださった浮葉正親さんのご冥福をお祈りいたします。

特集

在日朝鮮人女性はどう描かれてきたか：

1970年代以前の在日男性作家による女性表象



宋恵媛

日本語要旨

在日朝鮮人の男性作家たちが日本の商業文学界で注目されるようになった1960年代後半から長い間、在日朝鮮女性たちのイメージは、家父長制の犠牲者としての母に代表される、従属的な地位に甘んじる人物として固着化されていた。本稿では、それ以前、つまり1945年の植民地「解放」後約20年間に書かれた小説を中心に、在日朝鮮人社会の内部での在日朝鮮人女性表象を分析した。まず、在日朝鮮人の書き手がジェンダー化されており、一世、二世、1950年前後の「密航」者たちのいずれにおいても、男性たちが創作活動に取り組むうえで圧倒的に有利な条件を持っていたことを指摘した。その後、男性作家による女性表象の変遷を3つの時期に分けて追った。この期間に最も多く表現された女性 は母である。1960年代初めに総連コミュニティ内で在日女性の「母親化」が始まり、それが在日作家たちの作品にも反映される過程も本稿では論じた。

本稿では、1960年代後半以前の文学作品の中の女性像が実は多様なものであったことを明らかにすると同時に、それ以後に日本人読者に向けて日本語で書くようになったことで加えられた要素、あるいは失われた要素の存在を指摘した。

・キーワード：在日朝鮮人文学 女性表象 冷戦 脱植民地化 金石範

英文要旨

Male Zainichi Korean (Korean residents in Japan) writers began to gain attention in the Japanese commercial literary scene in the late 1960s. In literary works, Zainichi Korean women have been portrayed as subordinated figures typified by silenced mothers and victims of colonialism and the patriarchal system. This paper focuses on Japanese and Korean language fictions written in the early decolonization decades from 1945 to around 1970 and interrogates how male Zainichi Korean writers regarded their female compatriots during the decolonization process that coincided with the Cold War.

First, this study shows that among the first-generation Koreans, second-generation Koreans, and the South Korean exiles that came to Japan around 1950, Zainichi Korean writers were predominantly male. Subsequently, it traces the transition in the representation of women in the early postwar period, followed by analyzing the changes in the representation of the mother, which was the most frequently represented female character in this period. The paper points out a tendency to attribute all married women to the role of mother in the Zainichi community from the 1960s onwards.

Images of women portrayed as vulnerable in Zainichi literature written in Japanese since the late 1960s can be considered unidimensional. Some elements in the representation of Zainichi Korean women were added or lost in the literature written in Japanese for Japanese readers.

はじめに

1945年の朝鮮解放（以下「解放」と略記）後、「在日朝鮮人文学」という文学カテゴリーが日本社会で認知されるようになったのは、金石範、金泰生、高史明、李恢成、金鶴泳などの作家たちが日本の文学媒体で存在感を示しはじめた1970年前後のことである¹⁾。それと同時に、在日朝鮮人女性のイメージは、暴君的な父親と対照的な虐げられた弱々しい母のそれで覆われていった²⁾。

本稿は、日本の商業文学界に登場する以前の男性の書き手たちが在日朝鮮人女性をどのように描いていたのかを、小説を主な対象として検討するものである。在日朝鮮人コミュニティの内部において、脱植民地化を目指す集団的な文化的営為が行われていた時期を扱う。

実は、日本語作品と朝鮮語作品が混じり合うこの時期の「在日朝鮮人文学」には、同胞女性たちの姿がそこかしこに刻まれている。金達寿が朝鮮女性が日本女性よりも貞節だと称賛する随筆を発表したのは1946年のことだったが³⁾、そのような在日朝鮮男性たちのジェンダー観はその後どのように変化していったのか。「解放」直後に在日民族団体が掲げた「封建的遺習の精算」や「男女平等」といったスローガンは、どれだけ実践されたのか。日本や南北朝鮮の政治情勢はどのように在日女性表象に反映されたのか。早くから在日社会に紹介された朝鮮民主主義人民共和国（共和国）の社会主義的な男女平等の理念は、男性作家たちにどのように影響を与えたのか⁴⁾。公的資料に残されることがほとんどなかった在日朝鮮人女性たちにまつわるこのような問いに、文学作品を手がかりにして迫ってみたい。

だがその前に、そもそもこの時期に小説を書きえたのは誰だったのかという問いを立てる必要が

あるだろう。朝鮮人たちの渡日の経緯や教育歴には、ジェンダー差が厳然として存在していたからである。世代の違いもまた、在日朝鮮人たちのライティング行為に大きな影響を与えた。

一世女性の大半は初等教育を全く受けておらず、識字率はごく低いものだった⁵⁾。彼女たちの一部が識字学習の機会を得るようになったのは1945年以後、とくに朝鮮民主主義人民共和国への「帰国」実現が目前に迫った1950年代後半に入ってからのことである。そこで学ばれたのは主に朝鮮語であった。女性たちが日本の夜間中学で日本語を学ぶ機会を得るのは、そのずっと後の1970年代以降のことである。一世女性によって作文や詩は書かれたものの、小説が書かれた痕跡は管見の限りではみあたらない。

二世女性たちの場合は、就学率は一世女性よりもはるかに高く、「解放」後には朝鮮学校で学んだ二世も少なくなかった。とはいえ、高等教育を受けた人数は同じ二世の男性に比べて圧倒的に少なかった⁶⁾。だがそのような中でも、二世女性による小説は1950年代からわずかではあるがみられる。これについては稿を改めて論じたい。

一方、植民地期に日本で高等教育を受けた一世男性たちは、「解放」直後から詩、戯曲、小説などの創作に取りかかることができた。金達寿や許南麒、李殷直、姜舜など、大学在学時から習作の発表を始めた人々である。なお、「解放」直後にはほとんどの一世作家が朝鮮語作品の創作にも取り組んだが、実際には日本語で発表された作品の方が多かった。

日本生まれの二世男性たちが文学作品を発表するようになるのは、1950年前後からのことである。「解放」後に朝鮮学校で教育を受けた二世たちによって朝鮮語作品も書かれたが、詩が主で、小説のほとんどは日本語で書かれた。そのなかで、1925年生まれ金石範はやや例外的な存在である。金石範は1950年代初めに日本語で小説の発表を始めたが、在日本朝鮮人総連合会（総連）傘下の在日本朝鮮文学芸術家同盟（文芸同）で活動していた1960年代の約7年間は朝鮮語でのみ創作活動を

行っている。

一方、1950 年前後に南朝鮮／大韓民国（韓国）から日本へ「密航」した知識人青年たちは、1950 年代から 1960 年代にかけての朝鮮語による在日文学運動において大きな役割を果たした。年齢的には在日二世たちと近かった彼らは、日本の大学で学んだり、朝鮮学校の教師をしたり、総連や民団組織で働いたりしながら創作活動を行い、在日朝鮮人文学団体の中ですぐに頭角を現した。朝鮮語小説の主要な書き手となった金民、柳碧、尹グワンヨン、林晃相といった男性作家たちは、総連内の文学運動が共和国と直結するにあたっての即戦力ともなった。

以上のように、渡航史、識字、教育、民族組織での役割などにおけるジェンダー差が、在日朝鮮人たちの創作行為には最初から染み込んでいた。なお、本稿で取り上げる作品のほとんどは、在日本朝鮮人連盟（朝連）—在日朝鮮統一民主戦線（民戦）—総連系列の組織の影響下にあった文学団体や同人の媒体に発表されたものである⁷⁾。イデオロギーの違いもまた、冷戦下で行われた在日朝鮮人たちの文学活動の条件に大きな影響を与えていた。

1. 「解放」直後に書かれた女性たち（1945 年～1950 年頃）

「解放」直後には、植民地下で虐げられていた同胞たちの姿を描いた作品がいくつも書かれた。金元基の短編「姉の結婚」（1946 年）⁸⁾もそのような作品の一つである。朝鮮に住んでいた少年時代に間近に見た 4 つ上の不幸な姉を、^{ハクサン}学相という男性が回想するという形式が取られている。

学相の姉は教育の機会を与えられなかった。「女が学問ができるということは、生意気になって不可ん。勉学をすると、どうしても夫や姑の言いつけに従順でない。家内争いは絶えないし、しまいに追い帰されることになって一生の不幸を招くことになるのがきまりじゃ」（40 頁）という父の考

えによるものだった。姉は 12、3 歳頃からは「男女七歳不同席」という慣習に従わされ、家の外に出ることも許されなかった。その後、姉はある病気にかかってしまう。すると同じく病気持ちの男を看病するために結婚させられた。「解放」後の日本で、学相はこの憐れな姉に心の中で次のように呼びかける。

丁度あなたが生れたその時は、私達の祖国朝鮮は日本の帝国主義に蹂躪されて間もない時でしたからね。父もそして大部分の人達も、精神的に忘我の状態だったから、その施行する教育方針にも迎合できなかったわけなんですからね。あなたも知っているでしょう。（49 頁）

長じて日本で学び近代的知を身につけた学相は、多くの朝鮮の女性たちが教育の機会を得られなかったことを、日本帝国主義と結びつけて解釈する。つまり、それは朝鮮人の親たちが子どもたちに帝国日本の教育を受けさせることを拒否した結果だというのである。このように学相は、自らの姉が家父長制と植民地主義の二重の犠牲者であることをはっきりと認識している。だが物語の最後では、「朝鮮にはあなたばかりでなくいくらでもあなたと同じ女がいる」（同頁）と、朝鮮女性たちに加えられた抑圧を肯定してしまう。その意味でこの作品は、父の朝鮮的な封建思想が、帝国主義の批判者としての在日一世の息子たちに手渡された瞬間を捉えたものとしても読むことができるだろう。

また、この作品を 1946 年に発表しえたということ自体からは、虐げられた朝鮮女性を描くことを阻んでいた、わずか一年前まで行われていた日本の検閲体制の存在が浮かび上がる。それと同時に、このような日本帝国主義の犠牲者としての朝鮮女性表象が、「解放」後の GHQ による検閲体制下においては許容されたものだったこともわかる。

一方、李殷直「生きてありなば」（1947 年）⁹⁾は、朝鮮のことばと歴史を学ぶ「解放」直後の在日女

性たちを写し取った作品である。4歳の息子を持つ粉姫は、二百戸ほどが固まって住む同胞集住地域で暮らしている。地域で開かれる週二回の講習会に通う、向学心ある女性である。その講習会は既婚女性たちを対象にしたもので、同胞男性たちが講師となって朝鮮語や社会問題を教えた。

粉姫の夫は妻が学習のために外を出歩くのを嫌うばかりか、子守からも逃げ回り、酔っ払って夜遅くに帰ってきては騒ぎ立てる。夫は建築業に従事したいという希望を持ちながらも実際にはヤミ屋の仕事しかできることがないという現実、鬱憤を溜めていた。粉姫はそんな夫に、「生きる力はみなに備わっているのだ」という講習会の講師の言葉を伝え、まともな暮らしができるよう力を合わせようと諭す。夫は改心し、その後は朝連の支部委員にも選ばれ、粉姫とともに毎晩学習するようになる。後述するように、在日同胞組織で学び視野を広げた妻が頑迷な夫を啓蒙するという筋立ては、その後の別の男性作家たちの作品にもしばしば見られる。

一方、朴元俊の小説「^{キムヤン}金嬢のこと」(1948年)¹⁰⁾は、戦後日本での階級闘争と民族主義運動に関わり、自己変革をしようと努力を傾ける金嬢こと金珠得を描いた短編である。視点人物は在日朝鮮人団体が運営する幹部養成校の男性教師で、若い金珠得の成長を見守る役どころである。聖戦を信じ中国で従軍看護師として働いた経歴を持つ彼女は、戦後に復員船で家族の住む日本に戻って来た。左翼全盛期となっていた日本社会の急激な変化に違和感を覚えながらも、朝鮮の信託統治と独立を協議した米ソ共同委員会の激励大会などに参加し、自分なりに学び直している。そんなある日、金珠得は朝鮮女性たちの集まりに参加し朝鮮人大衆の「生きた現実」を体得する、というのがあらずじである。

「金嬢のこと」は、在日朝鮮女性の脱植民地化過程を克明に記録した点で特筆されるべき作品である¹¹⁾。だが他方では、女生徒を見守る男性教師という固定化されたジェンダー役割の範囲内から出ることがなかったという限界も見せている。なお、

戦後日本の共産主義運動や朝鮮信託統治問題に触れたこの小説は、前述の「姉の結婚」とは異なりGHQの検閲で問題視された形跡が見られる。

これら三編の小説からは、「解放」直後の在日朝鮮男性作家たちが過去に同胞女性たちが置かれた悲惨な状況を認識し、彼女たちの「解放」後の変化をいち早く捉えていたことがうかがえる。植民地支配のくびきから解放されたことが、同胞女性たちの存在に目を向ける大きな契機となったことは疑いえない。この時期の男性作家たちが女性と教育の問題に着目したことについては、彼らがほぼ例外なく朝鮮人学校と関わることで生計を立てていたこととの関連も指摘できる。

2. 身近な同胞女性たちの発見 (1950年代前半～)

1950年代に入る頃には、日本生まれの二世男性や新たに「密航」でやってきた男性の書き手たちが文学作品を発表するようになった。折しも、日本各地で在日朝鮮人の若者たちが共和国や日本の文化運動に刺激を受けながら活発な文芸活動を行っていた時期である。ただし、この頃はまだ小説はあまり書かれておらず、日本のサークル文化運動でもそうだったように、作品の多くを占めたのは詩だった。作者たちの周囲の同胞女性は、しばしばそれらの詩のテーマとなった。たとえば、工場労働で油としみに汚れていた知り合いの女性が日本の北へと流れていったことを歌った詩(金希球「猪飼野」、1954年)¹²⁾、絵描きになる夢を持つ友人のK子に向け、日本でも朝鮮でも女性は封建制に苦しんでいるががんばれと呼びかける詩(方一「わが友に!」、1954年)¹³⁾などである。

これらの詩からは、書き手たちが同胞女性たちと比較的対等な関係を結んでいたことが見て取れる。日本人女性を配偶者とするが多かった一世男性作家たちとは異なり、二世や「密航」男性の書き手たちが同胞女性を恋愛や結婚の対象とする傾向にあったことも、このような女性への眼差

しの変化に影響を与えたとみられる。

抗議する一世女性の姿を書き取った作品が生まれるのも、1950年代に入ってからのことである¹⁴⁾。民族教育闘争、濁酒闘争、生活保護擁護闘争など、在日女性たちが抵抗の主体として関わらざるを得ない状況を生み出した、厳しい日本社会の差別がその背景にあったことは言うまでもない。

金民¹⁵⁾「西粉の抗議」(1953年)¹⁶⁾は、朝鮮戦争期の日本を舞台に、民族教育闘争に加わる在日一世女性を主人公として描いた短編である。40代後半の西粉^{ソフニ}は炭鉱事故で夫を「解放」直前に亡くし、小学生の息子を一人で育てている。買い出し、屑鉄拾い、焼酎作り、養豚、職業安定所での日雇い労働などでかろうじて生計を立てている。息子が通う朝鮮人学校は日本政府によって閉鎖されようとしていた。そんなある日、西粉は約500人が参加した東京都教育庁への抗議行動に加わる。朝鮮人たちの抗議にも押し黙ったまの教育庁課長を見たソフニは、思わずこのようにまくしたてる。

え？朝鮮人の子供、あきめくらにするつもりだ？戦争の…戦争のお金はあるだろ、出せ、さ、出せ」「え？朝鮮人は、私は、わたくしは、何も分からないだ。字も分からないんだ。さ、私にも、勉強させろ、私はあきめくらだ、あきめくらだ あきめくらだ〔中略〕あんた達は、こんな所に座っている。私達は字もよめない。貧乏だ。私は、文字も分からない。ゴマカシてばかりいて、何とか言え、いえ、いえ、いわんか（金民「西粉の抗議」9-10頁）

西粉が発する抗議のことばには、子どもに民族教育を受けさせることを阻む日本当局への怒り、故郷へ爆撃機を送り出す米軍とその後方支援をする日本政府への憤激、自らが教育の機会を得られなかったことに対する悔しさ、生活の苦しさへの不満といった、1950年代当時の朝鮮女性たちを苛むものが見事に詰め込まれている。なお、前述のように金民は「密航」作家である。

濁酒作りへの弾圧に対して抗議する一世女性た

ちの姿も書かれた。以下に引用する裴鉄の詩「老婆のたたかい」(1954年)もその一つである¹⁷⁾。

ひややかな アジアの夜明けに／／どろ靴は
畳におどろこみ／泥棒は 天井を つき破り
／酒に つかわれる 名のつくものは／一升
の あき瓶／からの漬物樽まで／もち去ろう
とした／血に飢えた 狼のような／密造 摘
発隊に／／燃ゆる 怒りの瞳に 涙を光らし
／まばらな きいろい□を 震わせ／——酒
は 作りたくない／くえる 職場を／と、喉
が、張り裂けんばかりに／人間の生きる 権
利を 訴え／食ってかかっている 白毛の老
婆を／おれは 知っている／／夜ごと 悲し
みに 震え／借金しながら／酒を 作ってい
たことを／／ささやかな／生きるための 営
みに／死を求めた／日本の法へ／怒り 燃ゆ
る／老婆の たたかいは／俺たちの 生きる
道だ（□は抜け字、「歯」と推測される）

この「喉が、張り裂けんばかりに／人間の生きる 権利を 訴え／食ってかかっている」福岡の女性の叫びは、東京都教育庁でたどたどしい日本語で懸命に言葉を発する西粉のそれと響きあう。

一方、尹グワンヨン¹⁸⁾の新聞連載小説「어머니 [オモニ]」(1957年、朝鮮語)¹⁹⁾は、生活保護闘争をテーマにした作品である。厚生省は1954年5月の社発382号通達で在日朝鮮人が生活保護の適用対象外であることを明記し、1956年に全国一斉調査を行なって在日朝鮮人被保護世帯のほぼ全てに生活保護の減額、停止、廃止措置を取った²⁰⁾。「オモニ」は、この当時の在日女性たちの克明な記録である。

主人公の「オモニ」(母)は、近所の同胞たちからは「양철 [プリキ]」と呼ばれ、福祉事務所の事務員たちからは「おっかないおばさん」と恐れられる、在日本朝鮮女性同盟(女盟)の分会長である。家庭内では、仕事もせずにぶらぶらしている20代半ばの長男に頭を痛めている。「オモニ」とその周囲の在日女性たちは、自らの生活を直撃す

る生活保護の削減や打ち切り措置に対する市当局への抗議活動に奔走している。だが、結成後もない総連は、日本の行政との相互協議を方針として打ち出していた。このような総連活動家の男性たちと女盟活動家たちとの間の不協和音も、この小説はありのままに描き出している。

ただしこの物語は、同胞たちの意識を祖国統一志向——共和国への「帰国」志向が前面に出るのはその数年後のことである——へ向けさせるといふ、総連方針の正しさを強調して締め括られている。主人公の「オモニ」も最終的には日本政府への抗議活動よりも祖国統一運動の方が重要だと悟るようになり、それによってはじめて長男の鬱屈した心情を理解し和解へと至るのである。

強い個性を持つ女性を描きながらも、「西粉の抗議」の西粉とは異なりこの女性には固有名が与えられていない。1960年代以降に総連コミュニティで顕著になる在日朝鮮女性の「母親化」の兆候が、ここにはみられる。

ところで、在日朝鮮人女性たちの抗議は日本政府当局に向けられたものばかりではなかった。金民の短編「부부싸움 [夫婦喧嘩]」（1953年、朝鮮語）²¹⁾は、在日朝鮮人社会内部のジェンダー問題を扱っている。ここで描かれたのは、朝鮮語を学ぶため夜学に通う妻と、それを快く思わず妻に暴言を吐き暴力を振るう夫の間での諍いである。日本社会で差別に晒されることで溜まった不満により朝鮮的な封建思想を増幅させる朝鮮男性と、朝鮮人家庭という密室でその犠牲となる女性、という構図を浮き彫りにした作品である。

尹グワンヨンもまた「密航」作家である。

3. 総連—朝鮮民主主義人民共和国文学の中の女性たち（1950年代後半～）

1959年12月の共和国への「帰国」開始は在日朝鮮人文学史における画期となった。当時の作家たちの多くは、「帰国」実現により勢力を拡大した総連傘下の文芸団に属した。そこでの文学活動は、

社会主義リアリズムを基礎とする共和国文学政策に沿ったものだったが、そのことは男性作家たちの女性表象にも顕著な影響を及ぼした。夫と対等な立場にある妻、共和国公民となるために朝鮮語識字の習得に励む女性たち、朝鮮学校の女性教師、女性同盟の活動家などが、詩や小説の主題に選ばれるようになったのである²²⁾。

金テギョン「안해 [妻]」（1957年、朝鮮語）²³⁾や金秉斗「아라そ이」（1962年）といった短編小説からは、在日夫婦のあり方の変化が見られる²⁴⁾。

「妻」では、妻の家出をきっかけに、朝鮮学校の男性教師「朴先生」が妻に対する自らの態度を反省するさまが描かれた。女盟活動家であるこの妻は、頼っておいた朝鮮語の文章の添削を夫がしないことから自分の活動が軽んじられていると憤り、それに抗議するため子どもを置いて家を空けるという実行使を行う。

「아라そい」では、夫婦の対立が民団と総連の覇権争いになぞらえて書かれた。日本語講師の金基浩^{キムキホ}はある日、駐韓米軍をめぐって妻の李英淑^{イヨンスク}と議論になる。妻に言い負かされそうになった金基浩は、「女のくせして」と腹を立てる。英淑は総連が運営する既婚女性を主な対象とした成人学校で朝鮮語を習っており、そこで得た知識を夫にぶつけたのだった。基浩は韓国に住む母と軍人の弟に会えるようにという考えから、韓国パスポートを発給する民団に加入していた。怒りに任せて家の外に出た基浩だが、「なぜ朝鮮人が米軍に恥しめを受けねばならないのか」と憤る同胞の老人に出くわして考えを改める。そして家に戻り、自分も朝鮮語を習いに行くつもりだと妻に照れながら伝える、という筋立てである。

外で先進的な考えを学んだ妻が夫を同胞コミュニティに引き入れることで更生させるという筋運びは、1947年に書かれた李殷直「生きてありなば」と重なる。1960年代には家庭内の南北分断が総連の影響を受けた妻によって克服される、というように変形していったのが見て取れる。

1960年代半ばに発表された金石範「화산도 [ファサンド（火山島）]」（1965年～1967年、朝

鮮語)²⁵⁾は、1948年の4・3事件さなかの済州島の全体状況を描くことを試みたもので、後の日本語版『火山島』の原型となった雑誌連載小説である。同時代の同胞社会や韓国社会が描かれることの多かった1960年代の文芸同作家たちの小説の中で異彩を放っているのみならず、女性の表象においても注目すべき作品である。

米軍政庁通訳で元恋人のキジュンとの間の子を妊娠したミョンスンが、米軍および韓国政府側による集団虐殺を奇跡的に生き延び、ゲリラ闘争に再び加わろうとするとところから物語は始まる。ミョンスンは、金石範が1957年に発表した「鴉の死」の主人公である^{チョンキジュン}丁基俊の恋人、^{ヤンスン}亮順に相当する人物である。「鴉の死」の亮順が、米軍側についたキジュンの痛烈な批判者ではあれ、結局はなすすべもなく家族とともに処刑されていく無力な存在として描かれているのに対し、ミョンスンは自ら武器を手にとって不正義に立ち向かう女性である。

金石範がこのような闘う女性像を小説に組み込んだのはなぜか。共和国で進行中だった、1930年代の抗日パルチザン闘争における女性闘士称揚のキャンペーンがその背後にあったのは間違いないだろう。1960年代初めには、女性抗日闘士の自伝である金明花の『不屈のうた：革命の道で』が読書会を通して女性たちを中心に広く読まれ、総連傘下の出版社から翻訳出版もされていた²⁶⁾。金石範自身も共和国の女性教師が著した手記の翻訳を手がけていた²⁷⁾。自らの意思で行動する女性像を生み出す下地が、「ファサンド」執筆時までにはできていたのである。

金石範が連載半ばで総連を離脱したことにより、「ファサンド」は未完に終わった。その約10年後の1976年から文藝春秋発行の文芸誌『文學世界』で連載が始まった日本語版『火山島』（当初のタイトルは津波を意味する「海嘯」）では、闘う女性像は後景に退けられた。その主要な女性登場人物たちは、李芳根、南承之、梁俊午といった男性主人公たちの物語を彩る性的な存在としての役割を与えられることになる。このような金石範作品

の中での女性表象の変遷からは、資本主義体制下と社会主義体制下におけるジェンダー観の差異が、在日作家の作品にも影響を及ぼしていた事実が垣間みられる。同時に、共和国／総連の文芸方針の下で行われたからこそ、すなわち朝鮮語で書かれたからこそ形象し得た女性像が存在していたこともこの事例は示唆している。

4. 母親像の変化

作者のジェンダーや世代を問わず、この期間の在日朝鮮人たちによる作品でもっとも多く描かれた女性像は母親である²⁸⁾。

「解放」後まもない時期に書かれた^{キムウォンギ}金元基「晝亙[親不孝]」（1948年、朝鮮語）²⁹⁾と、その日本語版にあたる「母の像」（1948年）³⁰⁾は、ソウルに住む「尹老婆^{ユン}」を描いた短編である。夫を亡くした尹老婆は、毎日弱った体を引きずるようにして15、6年前に日本に留学に行ったきり帰ってこない息子を毎日ソウル駅に迎えに行く。「解放」後にも日本に留まる作者自身が抱えた母親に対する後ろめたさや迷いを表現した作品とみられる。

この作品にもみられるように、一世たちの多くは南朝鮮／韓国に住む母との生き別れを経験しなければならなかった。朝鮮戦争勃発と南北分断の固定化は、故郷の母親との再会をさらに困難にした³¹⁾。

一方、在日二世たちにとっての母は、慣れない異国で家事と育児と夫の世話を一身に担いながら一日中働く、日本語の不得手な一世女性である。そのような母親を主人公として二世作家が書いた小説は1960年代後半まで見あたらないものの、詩の分野では金鐘植「母」（1953年）³²⁾、金成熙「母」（1957年）³³⁾といった作品によって、母への思いが表現された。なお、金鐘植はこの詩を発表した当時、おそらく日本での政治活動が理由で姫路拘留所に留置されていた。後に韓国へ強制送還され、日本に住む母と永遠に離別した可能性も考えられる。

母親の表象に顕著な変化がみられるようになるのは1960年前後、総連コミュニティにおいて一世や二世の既婚女性たちの「母親化」が起きたときである。その契機となったのは、1961年に共和国で開催された母親大会における金日成の演説「子女教育における母親の任務」だったとみられる。この演説は、社会主義と朝鮮の儒教思想をかけ合わせた女性像を提示したものとして知られる。革命闘士かつ良妻賢母というこの新たな女性のイメージは、時をおかず在日社会に持ちこまれた。同胞女性たちを「オモニ [お母さん]」あるいは「ハルモニ [おばあさん]」と集合的に名指し、神聖化するこのような潮流は、文学作品にもただちに反映された。1950年代初めには、病気を治すために「ミコ」すなわちムードンを呼んで大騒ぎする、「迷信」にとらわれた同胞の「ばあさん」を揶揄するような文章も書かれたが³⁴⁾、女性たちの「母親化」の動きに伴ってそのような論調は全く見られなくなっていった。

この頃には、前述した金民の作品にも変化が生じた。1961年に『朝鮮新報』で連載が始まった「어머니의 역사 [母の歴史]」(1961年、朝鮮語)³⁵⁾は、大阪に住む45歳の女性同盟活動家、姜アジュモニ [おばさん] の半生の語りを写し取った作品である。実際の女性への取材に基づいて書かれたと目される。大阪における民族教育闘争の際には、警官に刃向かって拳銃で殴られた末に留置場に放り込まれ、朝鮮戦争期には韓国に残された家族を救うために一人でヤミ船に乗って玄海灘を往復した豪傑である。行動力の高さにとどまらず、そのような自らの経験を相対化し意味づけることのできる人物として、この女性は描かれた。そのことは、組織から派遣されて姜アジュモニの半生を聞き取りに来たジェハと、「小説化したら10巻にはなるだろう」、「まだ全てを話すのは時期尚早」といって容易に口を開かない姜アジュモニとの間での、経験の所有をめぐる攻防に同作品の前半部が費やされている点にも表れている。

姜アジュモニの語りを聞く朝鮮中高級学校の若い文学教員ジェスを視点人物に設定することに

よって、この作品はこの一世女性の語りを編集を加えることなく書き取ることに成功した。しかしながらこの物語は、そのジェハが姜アジュモニの本質を母性に見出すことで締め括られている。すなわち姜アジュモニが語る固有の経験が、朝鮮の母たちの集合的な物語に置き換えられてしまうのである。この作品が“母”の歴史と名付けられているのは象徴的である。

なお、30代の女性民族学校教師を描いた同作者の「포옹 [抱擁]」(1962年、朝鮮語)³⁶⁾にも在日女性の母親化の傾向がはっきりみられる。

むすびにかえて

本稿では、1945年からの約20年の間に在日朝鮮人男性によって書かれた文学作品、とくに小説から同胞女性の描かれ方の変遷を辿った。

「解放」直後には、日本による植民地支配下では書き得なかった不幸な朝鮮女性たちが表現された。同時に、在日朝鮮女性たちの新たな生きざまも写し取られた。1950年前後からは、日本政府当局を相手に自らの生きづらさを直訴する一世女性たちの姿も描かれた。1955年に総連が結成されると、朝鮮民主主義人民共和国の文芸方針の影響を受け、女性表象に大きな変化が生じた。社会主義的男女平等の実現を前提とした作品が書かれるようになったのである。だがこのことは、在日朝鮮人社会に根付いた儒教的ジェンダー規範を実情に即して批判する回路を絶ってしまうという、皮肉な結果も同時にもたらすことになった。

本稿でみてきたような多彩な女性像は、1960年代後半以降の日本語作品によって形成された弱々しい女性という一面的なイメージとは、大きく乖離している。在日朝鮮人女性を表現するにあたって、日本人読者に向けて日本語で書くことで失われた要素、あるいは加えられた要素があることをこのことは明示している。

それと同時に、朝鮮の儒教規範から逸脱する女性、結婚をして子どもを持つという生き方を選ば

ない女性、異性愛者ではない女性など、同胞コミュニティ内で創作されたがゆえに表現されることなくこぼれ落ちた、トランスジェンダーも含む女性たちの不在も浮かびあがる。

注

- 1) たとえば金石範の1970年代前半の評論活動からは、この頃に「在日朝鮮人文学」という用語が形成され、定着しつつあったことが見て取れる。金石範、大江健三郎、李恢成の鼎談「日本語で書くことについて」（『文学』1970年11月号）、解説「『在日朝鮮人文学』と李恢成」（『新鋭作家叢書 李恢成集』河出書房新社、1972年）、随筆「金史良について——ことばの側面から」（『文学』1972年2月）、「『在日朝鮮人文学』の確立は可能か」（『週刊読書人』1972年2月14日号）等を参照。
- 2) その中で、一世女性たちの生き様を鋭い観察眼をもって写し取り、ユーモアを交えて描いた元秀一の小説『猪飼野物語：済州島からきた女たち』（草風館、1987年）は例外的な作品といえる。
- 3) 朴永泰「金達寿」『朝鮮の女性』『民主朝鮮』1巻2号、1946年5月
- 4) 『解放新聞』や『女盟時報』など、在日朝鮮人発行の新聞では、1946年に発布された朝鮮民主主義人民共和国における男女平等権法令の紹介をはじめとして、いかに共和国では女性の権利が保障されているかを折りにふれて伝えていた。河一秀「解放された北朝鮮の女性たち」（『青年会議』4号、1949年3月）、金平善「婦女謡雑記」（『デンダレ』16号、1956年9月）などの雑誌記事でもしばしば言及された。
- 5) 1934年の大阪府学務部社会課『在阪朝鮮人の生活状態』によると、朝鮮人女性のうち学校教育を全く受けていない者の割合は95.32パーセントにのぼった。
- 6) 森田芳夫『数字が語る在日韓国・朝鮮人の歴史』（明石書店、1996年）53頁第20表「大学・大学院・短期大学生」（1959年5月）によると、これらの高等教育機関に通う女性の割合は全体のわずか8.8パーセントだった。
- 7) 例外的に、韓国系の民団非主流派の文化人や知識人が扱った『文教新聞』、雑誌『白葉』では比較的まとまって文学作品が見られる。ただし、女性が描かれた小説となると以下のようにさらに限られる。金奇龍の短編「春子」（『文教新聞』45号、1948年8月23・30日）は、林という男性が、かつて自分に好意を寄せていた看護師の春子が薬剤師と心中したという知らせを聞くという内容である。金泰永「京子の場合」（『白葉』20号、1961年10月）

は、在日男性である恋人がソウルにある新聞社に就職してしまい、残された民団事務員の京子が日本で苦悩するさまを、同作者の「めざめ」（『白葉』24号、1962年7月）は、韓国系の信用組合職員として働く在日朝鮮女性の恋愛を描いた短編である。総連以外の場合で書かれた作品の場合、身近な恋愛模様を描いたものに偏る傾向がみられる。

- 8) 金元基「姉の結婚」『民主朝鮮』1巻2号、1946年5月
- 9) 李殷直「生きてありなば」『民主朝鮮』2巻8号、1947年2月
- 10) 朴元俊「金嬢のこと」『民主朝鮮』18号、1948年2・3月
- 11) 二世少女たちを描いた作品はこの他にも何編か書かれている。たとえば金達寿「恵順の願い」（『婦人民主新聞』1952年10月12日）は、朝鮮戦争に従軍するため日本にやってきた米兵に石を投げつけるような、強い民族意識を持つ少女の話である。また、金民「試写会」（『朝鮮評論』9月、1954年8月）では、19歳のヨンスクが朝鮮民主主義人民共和国映画の鑑賞を通してナショナリズムを内面化していく過程が描かれた。
- 12) 金希球「猪飼野」『デンダレ』6号、1954年2月
- 13) 方一「わが友に！」『デンダレ』7号、1954年4月
- 14) 金達寿「四斗樽の婆さん」（『新神奈川』1949年3月10日）¹⁵⁾ もまた、民族教育闘争に参加する一世女性を描いた作品である。筆者の母親が抗議活動の最中に日本の警官に蹴られた実話を元に書かれた。
- 15) 在日朝鮮人男性作家の女性表象を論じる上で、金民の存在は欠かせない。『解放新聞』と『朝鮮民報』の記者だった金民は、その創作活動において在日朝鮮女性を記録しようとする志向を明確に持っていた。詳細については、拙稿「金民論：在日朝鮮女性を描いた小説家」（『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』（15）、2018年3月）を参照。
- 16) 金民「西粉の抗議」『文学報』4号、1953年8月。朝鮮語版は『解放新聞』（1954年10月23日～12月30日）に掲載された。
- 17) 裴鉄「老婆のたたかい」『荒波』2号、1954年3月。また、女性の書き手である李斗理による短編「断層」（1955年）でも、濁酒闘争に参加する女性が描かれた。
- 18) 尹グワンヨンは1950年代に日本へ「密航」し、1960年代初めに朝鮮民主主義人民共和国へと「帰国」した。その地でも作家としてしばらく活動を続けたことが確認できる。
- 19) 尹グワンヨン「어머니 [オモニ]」『朝鮮民報』1957年1月1日～2月2日（朝鮮語）

- 20) 金耿昊編『在日朝鮮人生活保護資料』緑蔭書房、2013年
- 21) 金民「부부싸움 [夫婦喧嘩]」『解放新聞』1953年7月23日(朝鮮語)
- 22) たとえば、정화수「안해여 오늘따라 [妻よ今日も]」(『文学芸術』7号、1963年9月)、김학렬「성인 학교 [成人学校]」(同16号、1965年11月)、정화수「한 녀교원 [ある女教員]」(同18号、1966年3月)、강순「어머니의 미소 [母の微笑]」(同20号、1966年7月)、정화흥「모범교원 [模範教員]」(同1967年8月)等(すべて朝鮮語)
- 23) 金テギョン「안해 [妻]」『朝鮮文芸』8号、1957年11月(朝鮮語)
- 24) 金秉斗「あらそい」『統一評論』8号、1962年7月
- 25) 金石範「화산도 [ファサンド(火山島)]」『文学芸術』13号～22号、1965年5月～1967年8月(朝鮮語)
- 26) 金明花(安宇植、朴英逸訳)『不屈のうた: 革命の道で』朝鮮青年社、1961年
- 27) 金寿福(金石範訳)『ある女教師の手記』朝鮮青年社、1962年
- 28) 朝鮮学校で在日二世の子どもたちによって書かれた作文においても、母について書かれたものの多さは際立っている。
- 29) 金元基「불효 [親不孝]」『朝鮮文藝』(朝鮮語版)創刊号、1948年3月(朝鮮語)
- 30) 金元基「母の像」『民主朝鮮』23号、1948年11月
- 31) 幼少期に渡日した呉林俊は、「ふるさとの母に」(『文学報』4号、1953年8月)、「わが愛する母のねがいをこめて」(『統一評論』9号、1962年7月)、「母の歌」(『海と顔』新興書房、1968年5月お

び『詩人会議』7巻8号、1969年8月)などで母親への思いを歌っている。金時鐘「雨と墓と秋と母と一父よ、この静寂はあなたのものだー」(『デングレ』19号、1957年11月)、金潤「어머니 [母]」(『漢陽』79号、1968年9月、朝鮮語)など、故郷の母との再会が絶望的だった韓国からの「密航」者たちにも同様の作品がみられる。

- 32) 金鐘植「母」『デングレ』2号、1953年3月
- 33) 金成熙「母」『青丘』5号、1957年8月
- 34) 無記名「放談欄 アンテナ」『デングレ』2号、1953年3月
- 35) 金民「어머니의 역사 [母の歴史]」『朝鮮新報』1961年1月1日～1961年2月18日(朝鮮語)

＊本稿はJSPS 科研費 20K00533 の助成を受けたものである。

日記収集プロジェクトへのご協力をお願い

在日朝鮮人女性、とくに一世たちの日記、手紙、メモといったエゴドキュメントを収集し、アーカイブ化することを目指しています。朝鮮語で書かれたもの、日本語で書かれたもの、すべて大歓迎です。ごく断片的なものでも構いません。ぜひ情報をお寄せください。二世女性や一世、二世男性の書いたものも募集します。
連絡先：大阪市立大学文学研究科宋恵媛研究室
気付 zainichi.nikki.project@gmail.com

戦後を生きる「オモニ」¹⁾



鄭鎬碩

1 「オモニ」を読む：表象の歴史性と重層性

本稿は、「オモニ」という表現を中心に在日朝鮮人女性表象が有する歴史性及び重層性の一端を明らかにすることを目的とする。

「オモニ」²⁾とは韓国語「어머니」(母／おかあさん)のカタカナ表記である。ただ、その歴史は古く、用例も多様だ。まず、戦前から使われたこの言葉には、朝鮮半島で生活していた日本人の記憶が影を落としている。他方、在日朝鮮人、とりわけ「2世」たちは、1970年代以来、公の場において幼年の記憶や家族史を掘り起こす中で母をめぐるかなりの言説を蓄積してきた。そこでの「オモニ」は、しばしば母国や母国語に対する切ない感情、自らのアイデンティティをめぐる悩みと切り離せない複合的な意味合いを帯びている。また興味深いのは、独自の立場から「オモニ」を論じ、またその言説に関わった日本人の存在である。さらに1990年代以降、「オモニ」という表現は、新聞・雑誌など大衆メディアに登場し始め、いまやある程度「馴染みのある外来語」として消費されるという新たな相貌を呈している。本稿は、このように在日朝鮮人女性を「オモニ」と称し、表象する豊かな言説的実践が存在してきたことに触発されたものである。

さて、「オモニ言説」を読むにあたって注意を払いたいのは表象の歴史性と重層性である。まず、当然ながら「現実のオモニ」、すなわち当事者として

の在日朝鮮人女性の経験や生活実態を考慮せずに「表象としてのオモニ」のみを論じることは不毛であろう。ただ、「表象が現実をどれだけ正確に反映しているか」という真実性への問いは、議論の出発点としては有意義であるにせよ、それだけでは不十分と思われる。「オモニ」が大衆的に認知され、そのステレオタイプ化の問題³⁾もが浮上するにいたった現時点において求められるのは、表象の歴史性、すなわち「オモニ」という記号が持つ軌跡への視点である。朝鮮人女性の支配的な認識枠組みとしての「オモニ」のこれまでの歩み、そしてその現実との具体的関連を問わずに「現実のオモニ」のみを超越的基準とする議論は貧弱なものになりかねない。これまで「オモニ」という言葉を発したのは誰で、どのような立場から「オモニ」に言及したのか、さらに日本人にとって「オモニ」とは何であり、そうしたオモニ論を戦後の文化においてどのように位置づけるかといった問いかけを通して初めて「オモニ」というプリズムの諸側面および、そこに映し出されなかった現実の問題をより批判的に扱うことができるだろう。

さらに、こうして「現実」に還元されない平面において相対的自律性を持つはずの「表象」そのものの歴史を視野に入れた時、特定の記号が発話され、意味を与えられる複数の場があることに気づく。「オモニ」は、少なくとも4つの文脈で用いられてきた。これまでの日韓関係、そして在日朝鮮人が置かれた複雑で微妙な政治的立場が、「オモニ」に幾重もの意味の層を加えたともいえる。

第1は、植民地朝鮮のオモニ⁴⁾をめぐる記憶である。この場合の論点は、あくまでも家事使用人として一方的に指示を受けていたオモニたちと日本人との非対称的権力関係がこの言葉に刻まれていること、そして戦後にも、「植民2世」など⁵⁾在朝日本人の回想により、朝鮮人女性一般を潜在的家事使用人と見なす植民地主義的な認識が無意識的に再生産される点である〔차은정 2016: 90-91, 100〕。

第2は、世代を超えて受け継がれる在日朝鮮人の呼称としての「オモニ」であり、これは、「アボジ」〔父〕、「ウリナラ」〔我が国〕、「チョゴリ」〔朝鮮の民族衣装〕などと同様、母国語から派生したもの、地方化されていく中で、朝鮮・韓国語、日本語のいずれにも収まり切れない性格を帯びた。いわば「二つの国語の歴史と現在との間を浮遊する漂流物のような言葉」〔현선유 2015: 170〕であるが、だからこそ、旧宗主国に残って植民「以来」を生きてきた離散集団ならではの混交的な生活文化を反映しているという積極的意義がある。

第3に、「オモニ」は在日1世女性を捉える代表的表象、おそらく大衆的に知られたほぼ唯一の表象である。2世たちの母に対する発言や記録は、長い間文字化されなかった1世女性の可視化という点で重要な意義を持つ。ただ、その一方で、母性愛に満ち、強靱で犠牲的な母親像のみが強調される定型化の問題性が批判されるようになった今の状況からすれば、1世女性を「伝えつつ隠蔽する」(cover) 表象としての「オモニ」の両犠牲を踏まえ、「平面的な1世像の克服」〔정호석 2020b: 273〕という課題にどう向き合うかが問われている。

第4に、「オモニ」は、在日女性の個人的／集団的アイデンティティを媒介し、彼女らの行為能力(agency)と切り離せない言説資源となってきた。オモニとしての自己理解に基づく集団的实践を組織してきた「オモニ会」(朝鮮学校保護者会)の活動はその代表例である〔홍정은 2009〕。

こうして重層性を内蔵させられた「オモニ」は、それを思い出し(記憶)、呼び(呼称)、描く(表象)、または、それに基づく活動(実践)がなされ

る度に、特定のコンテクストに位置付けなおられ、言及されることで遂行的(performative)、派生的(derivative)効果を発する。だとすれば、必要なのは、「オモニ」をめぐる諸実践——言説に介入し、触発された日本人の活動を含め——が新たな影響関係や反響を生み出す各々の場面への探求である。そこで、それぞれの「オモニ」の使われ方をめぐる解釈の意味論並びに、そのメディア性を問う実践の空間論を踏まえた統合的視点に向けた第一歩として、以下では、「オモニ」という表現が登場し、理解され、「変奏」されたいくつかの場面をとりあげ、在日女性の表象をめぐる文化的メカニズムの一端を明らかにし、今後の課題を考えたい。

2 金嬉老事件とオモニ：「朝鮮人オモニ」と「民衆オモニ」の登場

(1) 「ライフル魔」の朝鮮人母

戦後の日本で「オモニ」という表現が姿を現すようになった背景には、在日朝鮮人社会における世帯交代があった。他方、「2世」の浮上は日本社会ととも一つの「挑戦」であり、とりわけ小松川事件(1955年)、金嬉老事件(1968年)など犯罪事件に対する集中報道により、「在日」は何らかの公的な議論を必要とする「社会問題」として認識されるようになった。

金嬉老事件(＝寸又峽事件、以下「事件」)⁵⁾は、「オモニ」が活字化された形で主流メディアにとりあげられた最初の事例であると思われる。ライフル銃とダイナマイトで武装し、温泉旅館に立て籠もった犯人は、88時間に及ぶ警察との対峙の中で過去に経験した差別を訴え、日本人刑事による「蔑視発言」に対する公開謝罪を求めた。テレビに電話で生出演し、旅館内に記者を呼び入れて会見を行うなどの前代未聞の展開が大々的に報じられる中、金嬉老(以下、「金」)は、旅館の壁に「お母さん、不幸〔不孝の誤記〕を許して下さい」との遺書(＜図1＞)を書いたが、これに着目した警察は、母親の朴得淑^{バクトクスク}を現場に呼び、「自首説得作戦」

を試みた。そこで、「ライフル魔」と呼ばれたこの男の異色の境遇及び、彼を育てた「オモニ」が世間の注目を浴びるようになった。



< 図 1 > 金嬉老と壁に書かれた遺書 [『週刊朝日』
No.2559 (1968 年 3 月 1 日)、2 頁]

この出来事をめぐっては夥しい報道がなされたが、一旦金が逮捕されると、主流メディアでは、テレビという「新しいメディア技術」を用いて視聴者をひきつけ、「民族差別」を口実に犯行の正当化を試みた「狡猾な知能犯」という報道フレームが顕著となった〔本田 1978〕。他方、この事件をきっかけに日本社会を反省的に捉えようとする動きも現れたが、そうした試みにおいて「オモニ」への言及が見られた。『日本読書新聞』の1面特集記事「オモニ、日本に生きる 明治 - 大正 - 昭和史のなかの朝鮮人」及び雑誌『思想の科学』の「強いられた放浪 - 金嬉老の母（おもに）の半生涯」はその代表例である。

また、安保闘争以来、日韓条約反対運動、ベトナム反戦運動などを背景とし、多くの知識人が社会問題に積極的に発言し、社会運動と連携される中、一群の学者、ジャーナリスト、作家らは、緊急声明を出して金に「応答」し、その延長線上で

組織された金嬉老公判対策委員会（以下、「公判委」）は、8年間に及ぶ裁判に関わりながら民族差別と民族責任の公論化を努めた〔鄭 2014: 113-132〕。一つの市民運動として展開されたこの弁護活動の中で、朴得淑オモニの生活史は、単に受動的に裁かれるのではなく、裁判を通してむしろ日本人側の責任を告発する立場に立った朝鮮人が、これまでの差別、抑圧、生活上の困難を明らかにしていくための資料として注目され、朴もまた自ら出廷し、息子の成長背景について詳細に証言した。

その中では、17歳で結婚して渡日し、夫の死亡後、深刻な貧困に苦しむ中、子供たちをリヤカーに乗せてゴミを拾い、魚を売りながら金を育てたオモニの過去が浮き彫りになったが、注目すべきは「オモニ」のフレームとしての効果である。つまり、「オモニ」は、事件の意味を論じるための一つの「迂回路」であったと思われる。

金は旅館に立て籠る前に既に二人を殺害していたため、事件についてのいかなる解釈論も犯行の責任から逃れるための「言い訳」として非難、揶揄されていた。そこで「オモニ」は、目の犯罪ではなく、その背後にある「民族問題」に目を向けさせる一種の「窓」であった。事件へのオルタナティブなアプローチを可能とする枠組みとして、「オモニ」は独特な喚起力を発揮しており、犯罪歴塗れの金とは対照的に一切の悪事との無縁で苦勞を強いられながらも息子に愛を注ぐ母の姿は、ある種の罪悪感を呼び起こす。要するに、これは「母」が刺激する普遍的呵責と「朝鮮」に対する加害者意識を架橋し、日本（人）側の責任を論じるための余地を確保しようとする試みとして、「オモニ」という記号の可能性が全国的規模で模索された戦後初の事例であったといえる。

(2) 才モ二、労働する民衆

他方、公判委に関わりながらも独自の活動を展開した山本リエ（山本伸子）の「オモニ」の捉え方は、民衆を基調としている点で異彩を放つ。9年間も金の老母が経営する食堂を出入りし、丁寧な



<図2> (左)『金嬉老とオモニ、そして今』[山本1982] (表紙の絵は、K・コルヴィッツの「亡き子を抱く母親」)

取材に基づいて書き上げた『金嬉老とオモニ、今』(1982年)(<図2>)には、オモニの仕事から常連客を含む周辺人物の姿まで生々しく描き出され、社会の底辺に生きるオモニの生活世界が浮き彫りになっている。

[...] そして夕方、そろそろ客が混み始める頃には、この200個という大量の〈トンソク〉の仕込みは全部完了するのだ。それにしても何という大変な重労働だろう。[...] 私はとても単純に〈トンソク〉をごちそうになれなくなった。オモニが顔をしかめ、唇をとがらせて〈豚のあし〉の爪をエイ! とばかりもぎとった時の笑顔は愉快だ。顔中が輝いて美しい。だがその背後で、つねに獄中の息子ヒ口のが胸をかすめるのだろう。[...] 200個の〈トンソク〉の仕込みを見てカメラに納めながら、私の知らないもう一つの世界の激しい労働に圧倒された[山本1982: 150-152]。



<図3> (右) 金嬉老の母の豚足仕込みとワラビ採り [山本1982: 147, 171]

働に圧倒された[山本1982: 150-152]。

ここで強調されるのは、「重労働」そのものではなく、強靱な生命力と労働の美しさである。山本は、朝早くから夕方まで続く〈トンソク〉の仕込みの全過程を数ページに渡り細かく描写するが(<図3>)、その「激しい労働に圧倒され」つても、オモニの美しい顔や愉快的笑顔に感動を覚える。またワラビ採りについても、「在日のどん底生活を支える中で」会得した「天然自然の恩恵を十二分に活かす知恵および労働に伴う「充足感」に傍点を打つ[山本1982: 173]。

公判委の知識人による抽象的論考とは鮮明な対照をなす以上のアプローチは、1950年代からの自生的文化運動の伝統を背景としていた。1960年代後半は、「底辺に生まれ、数多くの生活体験をして生き抜いてきた」未組織労働者、とりわけ、「差別の下に生きてきた工員、店員、土工、看護婦、農

民など」が、革新文化団体や知識人と交流しながらも、労働運動や学生運動とは明確に区別される生活者の目線で社会問題を論じ、各種文芸創作活動を並行していた「サークル運動」の時代であり[山本 1982: 34-35]、山本は「新人文学会」を主宰しつつ機関紙『新人文』に民衆と労働に重きを置く文章を発表していた。彼女が金嬉老の問題に関わるようになったのも、主流メディアが金と民衆の関係を対立的に捉えていたことに対する強い不満からだった。

当時、寸又峡の旅館の主な宿泊客は、近くのダム建設、電気設備に携わる移住労働者たちだった。山本は、嘗てそこから遠くない現場で働いていた亡き父を思い出しつつ、旅館内の人々が単なる受動的な「人質」ではないと思い、事件後、全国に散らばった彼らを訪ね、彼らが金の事情をある程度理解していたことを明らかにする。さらに、「底辺」を生きてきた者同士のある種の「同志愛」や「連帯観念」が芽生えていた可能性に触れるに至った[山本 1982: 36]。そして「オモニ」に注目していく。

当時、主流メディアでは、「金 = 加害者」によって監禁された「人質 = 被害者」という報道フレームが多用された。公判委は、「日本人 = 抑圧者」を告発する「朝鮮人 = 被抑圧者」という逆の構図に基づいてそれに対抗したが、山本は、それをさらに「金 = 朝鮮人 = 民衆」にまで拡張させようとした。ところが、浮浪、窃盗、詐欺を繰り返してきた金の過去を「民衆の労働」と見なすことは難しい。そこで彼女は、金の母に主眼を置き、「オモニ = 朝鮮人 = 民衆」の図式を示したと思われる。その際、まだ外国語としての響きを帯びていた「オモニ」は、親しみの少ない朝鮮人の問題を喚起すると同時に、不屈の労働の崇高美と、愛する息子による犯罪の悲劇性とが「光と影」になってその顔に宿る「民衆の母」を鮮烈に印象付ける言葉であった。

「オモニ」は、こうして金嬉老事件をきっかけに新たに「発見」され、在日コミュニティの外側で通用し始めた。公判委および山本の議論からは、

「オモニ」が「民族」並びに「民衆」という解釈の地平を与えられ、戦後の文脈に位置付けられた様子が窺える。

3 「オモニ」という他者と戦後日本：本田靖春の『私たちのオモニ』

金嬉老事件によって劇的に表出された在日の問題は、その後続々と社会へ進出した2世たちによって切実な生活および実存の問題として経験された。1970年代から80年代にかけて彼らが発行を主導した文芸雑誌にはそうした苦悩の面々が色濃く反映されているが、高度経済成長に伴う社会変化、祖国における分断体制の固定化、集住地から離れた核家族としての地域社会への再認識によって先鋭化した自己理解は、「ルーツ」としての1世への関心を促したと思われる。そうした中、1世の渡航、定住、生活についての各種の対談、回想、エッセイ、ルポにおけるオモニへの言及が増え、また1980年代後半になると本格的な聞き取りや社会科学的研究が現れた。

金栄・梁澄子の『海を渡った朝鮮人海女：房総のチャムスを訪ねて』（＜図4＞）（以下『海女』）は、その代表的成果として山川菊栄記念夫人問題研究奨励金を受賞し、注目を浴びた。ただ、金栄がそれをノンフィクション作家の本田靖春に贈ることにより、さらなる媒介の連鎖が始まる。1933年京城で生まれ、中学1年生の時に引揚げた本田は、既に朝鮮（人）に関する二冊の単行本を出していた。だが、『海女』を受け取ることで、金嬉老事件をとりあげた『私戦』（1978年）から10年ぶりに再び在日の問題にとりかかり、『私たちのオモニ』（1992年）を出すことになる。（＜図5＞）

この作品の第一の特徴は人間関係への着目であり、オモニは常に彼女らをめぐる人々の活動や交流の中で捉えられる。この本は、オモニについての書物でありながら、オモニをめぐって繰り広げられてきた様々な働きかけについてのエスノグラフィであり、またオモニをとりあげた書物をめ



<図4> (左)『海を渡った朝鮮人海女：房総のチャムスを訪ねて』[金・梁 1988]



<図5> (右)『私たちのオモニ』[本田 1988]

ぐる交流を綴った、メタ的なテキストである。

この本の冒頭で、本田は『海女』に同封された手紙より、金栄が嘗て彼と交流のあった金宙泰^{キムジュテ}の娘であることを知る。彼は「チャムス〔潜水〕オモニ」たちの話に魅了されると同時に、その本が亡き父の遺志を受け継ぐものであることに感慨を覚え、金栄に会いに行く。そして、彼女と一緒に『海女』に登場した一人のオモニを訪ね、改めてインタビューを行うに至る。その取材記録において本田は、『海女』の時とはまた変わった状況や『海女』が出てからの周りの反応までを含め、オモニの「過去」に、65歳を過ぎた「現在」を重ねる。そのうえで、字が読めない「彼女たちの歴史を掘り起こして、世に問題のありかを問おうとしている」[本田 1992: 51-52] 金栄たちの活動が持つ意味を吟味する。

このように、本田は、オモニに改めて対面することで新たな取り組みを加えつつ、彼女らをめぐる金栄たちの活動そのものを主題化する。その結果、聞き取り対象であったオモニは、在日後続世代との「語る—記録する」関係に留まらず、日本人の本田を含めた三者関係という、拡張された地平を与えられる。読者は、『海女』からの引用、すなわち金栄の言葉による「オモニの過去」に触

れつつ、『海女』のようなオモニをめぐる実践の存在に気づかされ、また今、金栄と共にオモニの前に座っている本田の眼差しを通して「オモニの現在」を知らされる。こうした複眼的な捉え方は、オモニに対する複数の距離感覚を活性化すると同時に、この3人が読者と同じく今を生きている存在であることを自覚させる。

このような叙述技法は、金栄の家族史をめぐるさらに本格化する。本田は、戦前の東京、深川で生まれた母（金孝宣^{キムヒョソン}）の家系から、彼女が密航で来日した金宙泰に出会い、結婚するまでの経緯、そして夫の闘病や雑誌『季刊まだん』（1973～1975年）の刊行をめぐる苦闘を綴りながら、東京大空襲、ゴミ拾い、密酒製造、大村収容所、民族学校、闇市場についての説明を加え、またこの在日家族と自身のこれまでの付き合いにまつわる様々なエピソードや感想を紡ぎ合わせる。その結果として、オモニ金孝宣の人生は、娘と夫、そして本田の三重のまなざしを浴びることになる[本田 1992: 122-123]。

オモニ金孝宣と本田は同じく1933年に生まれた。しかし、「歴史のいたずら」[本田 1992: 67]なのか、朝鮮生まれの本田とは対照的に、日本生まれのオモニは陰しい人生の道を歩んだ。彼女は民

族教育を担う人材として選ばれ教員になったが、「学問の志を置いた男」に出会ったために、後に娘が彼女の人生を綴った文章に付けた副題通り、一生「働き続けて」いた。彼女は、30年間の化粧品訪問販売を含め、お弁当の販売、飲食店やお菓子屋さん、そして夫が原因不明の病気で倒れてからは煙突や鉄道レールの掃除をこなしながら家計を支えた。

生計扶養者としての在日女性の労働そのものは、目新しいとはいえない。ただ注目すべきは「遺憾なく発揮された彼女の才能」に対する評価である。つまり、「仕方なく働」きつづけた母を不憫がる娘や、当時「学問を志すという男性の多く」にとって一般的な「夫婦関係」だったと回想する夫とは異なり、本田は、絶え間なく仕事を見つけ、お金を借りて家を買ひ、食堂をアパートと交換するなどで財産を着実に増やしてきた格別な能力をそれ自体として高く評価する〔本田 1992: 141〕。このように第三者の眼差しが加わることで、オモニの労働は、(娘が見た) 家族のために強いられた犠牲、(父から見た) 当時の在日家庭では珍しくないジェンダー役割に留まらず、個人として生活力及び理財感覚という異なる側面をもって立体化される。

他方、本田は、過去と現在を自由に行き来する特有の闊達な物語の展開を通して、登場人物全員が共有する時間軸の存在を効果的に浮き彫りにする。例えば、金英の家(神奈川県鶴見川)を訪ねた本田は、近くにあった朝鮮人集落が姿を消したことに気付く。そこで回想が始まる。15年前、読売新聞での16年間の記者生活を後にライターとして独立した彼は、自分の「原点」に悩みつつ金宙泰と朝鮮人集落を訪問し、『私の中の朝鮮人』(1973年)を仕上げていた。続いて彼は、金栄が母について書いた原稿を引用しつつ、それを読む現在と、彼女の両親や祖父母が歩んできた凡そ100年の時空を何度も往来しながらオモニの人生を再構成した末に、今の金家が「オリエンタル鍼灸院」となった経緯に触れる。「長い道のり」を迂回してやっと金栄の家の前に立っている現在に戻ったと

思いきや、本田は再び、彼女の兄の結婚披露宴に赴き、「一家三代の歴史」を振り返りながら「深い感慨」を吐露する。そして今度は、金栄に焦点を合わせ、日本生まれの母のことを重んじて「在日2.5世」と自称する彼女が、どのような内面の葛藤から抑圧的ジェンダー秩序に対する批判意識を育て、『海女』に取り組んだのかを描く。そして「未来ちゃん」のオモニになった今の彼女を見つめながら、「1、2世通過してきた苦難の時代」を後にし、「3世、4世の可能性が語られる未来の到来」を予感するのである。

このような、互いに交差しつつ一つの時間軸に織り交ぜられる「オモニ」と「私」をめぐる多様な出来事とエピソードは、B・アンダーソンがナショナルな共同性を胚胎すると捉えた「meanwhile」という近代小説の新しいレトリック、すなわち、連続する仮想の時間軸において「他の出来事が進んでいる間」という感覚を強く喚起する。〔Anderson 2006: 25-26〕すなわち、この作品を読み終えた者は、知らない間に、今この瞬間にも他人と交流を重ねつつ社会の構成員として生きている、「オモニ」という呼び名を受け継ぐ人々の存在を意識するようになり、彼女らと全く同一の時間軸に縛られ、戦後を共に歩んできた自分を、共通の想像の地平に位置づけるよう誘導される。

本田は、対象化され、回顧的感傷性に埋もれがちな「オモニ」を現在進行中の実践の現場に呼び戻し、自分の眼差しと関わりを加えながら、「オモニ」をめぐる想像を日本社会と切り離せないものとして語り直した。そこで再構成されたのは、決して文献の中に留まり、過去に属する「オモニ」ではなく、常に日本人と共に呼吸し、交わりながら生きていく同時代人としての「私たちのオモニ」であったといえる。

4 境界を超える「オモニ」

(1) 夜間中学のオモニ：市民運動の中の1世女性の識字学習

1970年代以来、就職、結婚、子供の教育など「生活人」として課題に直面していた在日2世は、地域社会の現実に向き合いつつ、従来の民族団体を中心とした「本国直結型の運動」とは異なる新たな人権運動の感覚を育て始めた。ただ、日立就職差別裁判（1974年）の勝訴以降に続々と登場した数々の反差別闘争が生活条件の実質的改善という成果につながった背景には、在日たちの訴えに耳を傾け、それを「少数者の人権」および「地域住民の生活権」をめぐる闘いとして受け止め、連帯の輪を広げた日本人市民の積極的な働きかけがあった。1980年代以降広く知られた「文字を学ぶオモニ」という表象も、1世女性の識字活動をめぐる各地の市民運動の中で姿を現わしたものである。

まず、オモニが登場する一本の商業映画をとりあげよう。山田洋次監督は映画《学校》（1993年、松竹）（＜図6＞）で下町の夜間中学校を描いた。主人公の教師が担当した夜間学級には、自閉症で学校をやめた不登校生、「不良少女」、中国人の父と日本人の母の間に生まれ、社会に適應できない青年、脳性麻痺による言語障害を持つ少年、学業の機会を逃した肉体労働者の中年男性、そして焼肉屋を経営する在日1世と一緒に勉強する。



＜図6＞ 映画《学校》（1993）における「オモニ」金氏と教師の黒石 [山田 2000, 53]

「金さん、やってるか——あれ『花』が書けないか。こないだやったばかりだろ」

「アイゴー——覚えても、おぼえても、すぐ忘れてしまう。」

先生、わたしできないよ。頭悪いから、バカだから、できないよ、先生」

「金さんのどこがバカなんだ。その腕ひとつで焼肉屋を繁盛させて、その忙しいなかで三人の子どもを立派に育てて、そんなことがバカにできるか」

「子どもの時、小学校へ行けば、孫のいる歳でこんな苦勞しなくてすんだのに。アイゴー、チュッペッタ [死にそう]」

「今日は疲れてるんだ。少し休め、鉛筆下ろして。な、オモニ [山田 2000, 53]

教師の黒井は、1世女性の「キムさん」を「オモニ」と呼ぶ。また彼女も生徒たちを勇気づけ、時には年長者として先生も叱るなど、学級の「母」として振舞う。そして映画は、高度成長の恩恵から疎外された者たちが共同学習を通じて人間的な信頼と絆を取り戻す姿に焦点を当て、物質的な「幸せ」だけを追ってきた戦後社会を振り返る。このように、「文字を学ぶオモニ」としての在日1世女性性は、1980年代を通して「マイノリティー問題」の位相を与えられ、次第に外国人労働者の人権問題、被差別部落民、沖縄の米軍基地の問題などと並ぶようになっていく。

一方、夜間学校の1世女性の姿がメジャー映画社の創業100周年記念作で大きな存在感として描かれるようになった背景には、1970年代から各地で地道に展開された夜間中学設置運動及び識字学級運動の蓄積があった。1969年、文部省の夜間中学早期廃止勧告への抗議運動が大阪市天王寺夜間中学の設置として結実して以来、1970年代半ばには夜間学校で在日1世女性が圧倒的多数を占め、その需要が高まり、大阪生野識字学校、京都市九条オモニ学校など近畿地方を中心に民間の識字教室が次々と開設された。また関東地域でも川崎市、松戸、川口などに「夜間中学を作る会」が作

られ、運動が波及した〔山根 2017: 208〕。天王寺夜間中学での教師としての体験を盛り込んだ岩井好子の『オモニの歌』（1984 年）は筑摩書房で文庫化され全国的反響を呼び起こし、1990 年代には、夜間学校のオモニたちが日刊紙で紹介され、全国図書館研究大会のテーマとなるなど、オモニの識字活動への社会的認知がさらに進み、また学術研究も登場した。

こうして「文字を学ぶオモニ」が認知されてきた過程は、在日 1 世女性と日本人市民との交流・連帯の軌跡でもあった。「母に学ぶ」というスローガンに明らかなように、識字学級の教師と生徒は「教える―学ぶ」一方的関係ではない。単に読み書きの能力の習得を目指すのではなく、リテラシーからの排除の歴史や社会構造に対する批判的認識に基づき、主体性を回復していく市民運動〔山根 2017: 249〕なのである。だからこそ、そうした「共同学習者」たちの水平的、相互的な交流は卒業後にも地域社会の中で続く。

また同時に、1 世女性の識字活動は多種のメディアによって媒介され、広く波及した。オモニたちの作品展／文集、若者による聞き取り活動／記録集、エッセイの出版、ドキュメンタリー映画の上映会／DVD 化、写真展／写真集など数々のイベントや文芸物が生み出され、他の地域の識字学級との文通や国際交流に至るまで、多彩な実践が呼び起こされつつ、越境的な相貌が加った〔정호석 2020b: 290-291〕。その姿からは、オモニ言説が有する社会的位相の一端が窺える。つまり、それは本質が表象を生み出すか、表象が現実を規定するような断線的プロセスではなかった。「文字を学ぶオモニ」の姿が様々な活動を駆り立てていく中で、そうした表象と市民活動と現実の 1 世女性とが互いに緊密に結ばれた様子は、P・H・コリンズが黒人の母性をめぐる言説について「思想と社会实践が対話的に関わり合い、複合的ネットワークをなした」〔Collins 2014: 177〕と分析した状況に似ている。

なお、ここで、多くの在日 1 世女性が長い間、民族、ジェンダー、階級の諸側面において複合差別

を強いられた存在であることを改めて想起したい。1 世女性たちは、2 世に「オモニ」と呼ばれ、また聞き取りの対象とされるまで、1 世の男性と比べても遥かに長い年月を「見えない人々」として過ごした。「オモニ」とは、自らを記録する手段を奪われた彼女らに初めて与えられた言語カテゴリーでもあったといえよう。またそれは、「徹底した弱者」の名前であるが故に、教育を受け、富をもつ者を含め多様な立場の人々から豊かな反響を引き出せたと考えられる。例えば、「男仕事で指の形が変わるほど働いて」、老齢になってようやく学ぶ時間ができたオモニが、覚えてばかりのカタカナでやっと「オモニボゴシッポ」（オモニ、会いたい）と書き出す姿〔岩井 1989: 11, 53-54〕は、民族や世代、性別やイデオロギーを超えて強力な触発力を放つものであり、こうした側面が、オモニ表象が広く拡散できた一因であると思われる。

以上、駆け足で粗描したが、1 世女性をめぐる識字活動が地域社会に根を下ろし、また多彩に媒介されてきた経緯は、「オモニ」が 1990 年代以降、文化の周辺部と中心部を分ける「境界」を越えて大衆の想像へ進入していく歩みを振り返るうえで欠かせない地点をなす。

（2）「オモニ」の普遍化／大衆化と「オモニなるもの」：姜尚中の「オモニ」

政治学者姜尚中は、活発なメディア活動により大衆的に知られた代表的な「在日知識人」である。彼は、2 世としてのアイデンティティを宣言的に示した自伝『在日』に続き、小説『母～オモニ』（2010 年）で亡き母の物語を綴った。この作品は、読み書きができなかった母が生前残した録音をフィクションとして再構成したもので、国史から排除され母の歩みを息子が文学的に復元したという意義をもつ。ただ、その上で、いくつかの論点に触れたい。

第 1 に、この本が「オモニ」の認知度を大きく高めた点は看過できない。様々な聞き書き記録やライフヒストリー研究が進んだ 2000 年代においても、在日 1 世の物語は主流消費文化からすれば

まだ徹底的な「他者」であった。ところが、NHK《日曜美術館》の司会者を勤め、『悩む力』でミリオンセラー作家となった姜がメジャー出版社から出した『母～オモニ』は、各種メディアで紹介され、特集テレビ・ドキュメンタリーが放映されるなど、「オモニ」という記号の社会的位相を大きく変えた。また、この本は、姜が小熊英二とともに52人の1世への聞き取りを新書に収めた画期的な企画出版『在日一世の記憶』（2008年）とともに、2000年代半ば以降における「在日1世」への大衆的関心の高揚に大きく貢献した〔정호석 2020b: 273-281〕。

第2に、このような「オモニ」の主流文化への進入は、『母～オモニ』に示されたオモニ像とも関係している。姜の母親は差別や抑圧の一方的な犠牲者ではない。伝統的な精神世界を大事にしながらも厳しい環境に立ち向かい、現実を打開していく積極的な姿は、「在日の母」のみならず、戦争と貧困を苦しみながら子供を育ててあげた全ての「母たち」への驚嘆と敬服の念を刺激する。「在日の母」に限定されない、この普遍的な魅力こそ、この本の商業的成功と「オモニ」の大衆的受容を可能にしたと思われる。

第3に、姜尚中は多数のインタビュー・講演会で母に言及したが、「オモニ」の意味は次第に複合化した。2011年の東日本大震災はその大きな転換点であり、その直後に開かれたある講演会⁶⁾では、「母なるもの」が語られた。姜は、今回の震災が科学への信頼、不可知・不可分なるものの排除、歴史の忘却という問題を突きつけたとし、彼の亡き母を、これら「戦後なるもの」の対極に位置付けた。姜の母は土俗的信仰を持ち、伝統儀礼を大切にし、旧暦カレンダーの下で暮らした。その「よくわからないものをうち捨てない。理解できない相手を排斥しない。自分と異なる価値観を否定しない」というような、非科学的で、混沌でわかりにくく、伝統と不可分な生き方は、「前向きのオプティミズム」が折れてしまった今こそ新たに吟味すべき緊要な問いかけとなる。つまり、ここで「オモニ」は、戦後に対する根本的な反省を促す契機

として解釈し直されており、「オモニなるもの」という表現は、一個人の母や在日たちの母に限定されない「オモニ」のさらなる潜在性を予感させる。

以上、「オモニの普遍化／大衆化」というべき流れの大きな一角をなしている姜尚中の作業は、在日コミュニティの外側において、あるいは日本人（人）にとって「オモニ」が持ちうる意味への積極的な探索の産物である。彼自身は在日であり、知識人であるが、彼のテキストは「オモニ」が在日や研究者の言説空間を乗り越えて広く普及していくダイナミックな様子を鮮明に示している。

5 オモニ言説をめぐる3つの問い：豊かさ、新しさ、そして消費される「オモニ」

以上の考察から明らかなのは、「オモニ」が「在日の母」に限定し得ない意味の幅をもって次第に広く流通し、豊かな言説を生み出したことである。「民族問題」を喚起する「朝鮮人オモニ」、権力と拮抗する「労働する民衆オモニ」、他者でありながら同時代人としての「私たちのオモニ」、市民運動の中で地域に根付き、多彩な実践を呼び起こす「文字を学ぶオモニ」、さらに、在日社会の外側における普遍的含意が加えられる中、より広く消費されつつある大衆文化の中の「オモニ」の姿は、決して「忍苦の母」として狭隘化されない。

さて、オモニ言説のこれまでの展開はどのような歴史的意義を持つのか。今後の課題として、3つの論点を挙げておく。

まず、「豊かさ」について。戦後のオモニ言説は、帝国の支配イデオロギーに奉仕するジェンダー化された朝鮮人の表象という負の遺産を背負いつつ、新たな可能性を切り開こうとする努力の産物であった。以上見てきた「オモニ」の軌跡とは、「不遜で危険な不逞鮮人」の烙印が引き続き朝鮮人男性を締め付ける戦後の状況において、女性表象の未発の可能性が発掘されてきた過程にほかならない。こう考えれば、ヤクザを殺害し、ライフルを放つ金嬉老の代わりに彼の母親が注目された場

面は、政治的解放を目標とする暴力闘争が失効し、文化的脱植民地化に向けたジェンダー関係の再編が新たな課題として浮かび上がる瞬間とも読める。また、「犯罪者」、「共産主義者」と深刻に「汚染」された「アボジ」が、民族運動に専念するか、家父長として暴力を振るといった負のイメージを未だに引きずっていることとは対照的に、戦後の「オモニ」は（対内的に）伝統文化及び抵抗的ナショナリズムの受け皿でありながら、（対外的に）脅威を感じさせない他者性[Nandy 1983]として、その潜在力が掘り下げられてきたといえる。

次に、以上見てきた「オモニ」の面々は、「新しさ」との関連で検討の余地を残す。それらは、一見、従順な「女中さん」や「息子を戦場に送り出す皇国の母」などの植民地主義・軍国主義の母性を「乗り越えている」ように見える。しかし、帝國的プロパガンダの母胎として戦略的に活用され、再生産されてきた伝統社会の限定的で抑圧的な母性イメージは、戦後にも温存され、現在の文化にも影を落としている。見方によっては、「オモニ」が徐々に認知されてきた過程は、戦争との関連で日本人より無実で、ケアにおいては至極な封建性を保ち、「おかあさん」よりさらに「母らしい」崇高さを持った「オモニ」に内包された母性の本質化という危険性を抱えたまま進んできた道のりであったともいえる。

戦後日本の女性平和運動が、平和、命の重視、和解を「母の役割 (mothering)」[Ruddick 1989] に基礎づける本質主義の誘惑から決して自由ではなかったことを想起するならば、「被差別朝鮮人」、「被抑圧民衆」、「教育の機会を奪われた弱者」など、オモニの被害者性に格別な重きを置く言説上の傾向は批判の余地を残す。ただ、表象の真実性、すなわち現実との距離を「オモニ」の「新しさ＝解放性」を測るための唯一の超越的基準としてはならず、「オモニ」をめぐる各々の専有 (appropriation) が、女性への抑圧を隠蔽、または正当化する既存の制御的イメージ (controlling images) [Collins 2014] をどのように揺るがし、またどのようなオルタナティブなイメージを開拓したのかをめぐる精緻な

分析と開かれた討論を目指すべきであろう。

最後に、消費される「オモニ」の問題がある。今、ウェブ・ポータルで「オモニ」を検索すると、母の「手の味」を強調する韓国料理店の広告やレシピをはじめ、桂銀淑の「オモニ」や小金沢昇司の「オモニ～母へ」などの歌の動画、朝鮮学校「オモニ会」のニュースレター、小説『母～オモニ』や演劇・映画『焼肉ドラゴン』の感想を綴ったブログ記事など、膨大な情報が並ぶ。在日について知らなくても気軽に消費できる文化コンテンツの増加は、今後ますます進むはずの「オモニ」の大衆化をどう考えるかという問いを突き付けるのである。

少数者の表象は大衆化されるに連れて平面化の道のりを歩む。より多くの人々に「オモニ」を紹介しようとする試みは、必然的に「オモニ」を理解可能な文脈に位置づけ、理解可能な形で示す作業を伴う。だとすれば、求められるのは、他者表象の消費をめぐる両義性を踏まえた議論であろう。今や、新たなコンテクストにおいて裾野を広げ、さらに豊かに生起していくはずの「オモニ」の新しさを捉えうる感受性が問われている。引用される度にその都度異なる顔として現れ、アイデンティティの政治をめぐる既知の経路を裏切り、時には話し手／書き手の意図に反する「新しさ」を帯びて到来するオモニへの批評は、大衆消費文化の生産的可能性を見据えたものでなければならない。

注

- 1) 本稿は、国際高麗学会主催の公開シンポジウム《女が書く、女を書く - 文学の中の在日朝鮮人女性》(2021年5月30日)におけるパネル発表「戦後を生きる『オモニ』 - 在日朝鮮人の母性表象の一面」に基づいたものであり、既に出版された韓国語論考[정호석 2020a]の一部を要約、加筆したものである。本稿では割愛した母性と植民地化をめぐる先行研究及び小田実、森崎和江、岡部伊都子については上記の文献を参照されたい。なお、シンポジウムで質疑を受けた森崎和江のオモニ論については、別途の論文[정호석 2021]で詳論した。
- 2) 以下、文脈に応じて引用符を略す。また「在日朝鮮人」も、文脈に応じて「在日」と略記する。

- 3) 例えば、梁仁實 [2003: 38-40] は、戦後の日本映画におけるチマ・チョゴリ姿のオモニの表象を西洋のオリエンタリストのまなざしを内面化した日本人の「東洋の母」のイメージとして批判的に検討し、김부자 [2007: 142-144] は、1世女性を描いたドキュメンタリー《HARUKO》において「普遍的なオモニ物語」が被植民化の歴史及びジェンダー的特質を隠蔽したと指摘した。
- 4) 「オモニ」は戦前の在朝日本人家庭における朝鮮人家事使用人を指す言葉だった。当時、日本人家庭で家事や育児を助ける「手伝い」の朝鮮人女性を雇うことは珍しくなく、彼女らは「女中さん」、あるいは未婚の場合は「キジベ」や「オネヤ〔姉〕」、既婚の場合は「オモニ」と呼ばれた〔森崎 1995: 65; 차은정 2016: 96, 99〕。
- 5) 1968年2月20日、在日朝鮮人2世の金嬉老（当時39歳）は、静岡県清水市（現・静岡市清水区）のクラブで暴力団員2人を射殺し、翌日南アルプス南端の寸又峡温泉街（現・川根本町）の「ふじみや旅館」で旅館経営者家族や宿泊客ら計13人を「人質」にとり、立てこもった。88時間に及ぶ対峙の末に逮捕された金は、1975年無期懲役を確定され、服役中の1999年に韓国に強制送還された。この事件が生み出した社会的反応については、〔鄭 2014〕が詳しい。
- 6) 「慶應 MCC 講演『夕学五十講』「母（オモニ）なるものから見た東北アジア」（2011年4月14日）

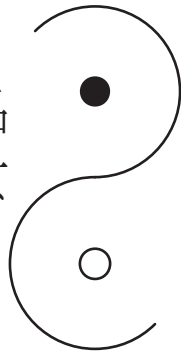
参考文献

- 岩井好子（1989）『オモニの歌 48歳の夜間中学生』（ちくま文庫）筑摩書房。
- 姜尚中（2010）『母～オモニ』集英社。
- 金栄・梁澄子（1988）『海を渡った朝鮮人海女：房総のチャムスを訪ねて』新宿書房。
- 鄭鎬碩（2014）『「金嬉老事件」のエコグラフィー：メディア、暴力、シティズンシップ』東京大学大学院情報学環博士論文。
- 本田靖春（1992）『私たちのオモニ』文藝春秋。
- 森崎和江（1995）『二つのことば 二つの心 ある植民

- 二世の戦後』筑摩書房。
- 山田洋次（2000）『学校が教えてくれたこと』PHP研究所。
- 山根実紀（2017）『オモニがうたう竹田の子守唄 在日朝鮮人女性の学びとポスト植民地問題』インパクト出版会。
- 山本リエ（1982）『金嬉老とオモニ、そして今』創樹社。
- 梁仁實（2003）「戦後日本映画における「在日」女性像」『立命館産業社会論集』Vol.39、No.2、pp.35-56。
- Anderson, B. (2006). *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. London: Verso.
- Collins, P. H. (2014). *Black Feminist Thought Knowledge, Consciousness, and the Politics of Empowerment*. Second Edition. New York: Routledge.
- Nandy, A. (1983). *The Intimate Enemy: Loss and Recovery of Self Under Colonialism*. New York: Oxford University Press.
- Ruddick, S (1989). *Maternal Thinking: Towards a Politics of Peace*. Boston: Beacon Press.
- 김부자（2007）「HARUKO: 재일여성, 디아스포라, 젠더」『황해문화』Vol57, pp.117-147.
- 정호석（2020a）「전후（戦後）를 사는 ‘오모니’: 재일한인 모성표상의 재보화」한영혜・김인수・정호석『경계와 재현 - 재일한인의 국적, 사회 조사, 문화 표상』한울아카데미, pp.195-266.
- _____（2020b）「도래하는 ‘자이니치 1 세’」한영혜・김인수・정호석『경계와 재현 - 재일한인의 국적, 사회 조사, 문화 표상』한울아카데미, pp.267-293.
- _____（2021）「‘오모니’를 만나는 여행 — 모리사키 가즈에의 여행기 읽기」『人文論叢』Vol 78, No 3, 서울대학교 인문학연구원, pp.283-321.
- 차은정（2016）『식민지의 기억과 타자의 정치학: 식민지조선에서 태어난 일본인들의 탈향, 망향, 귀향의 서사』선인。
- 홍정은（2009）「총련계 재일조선인여성의 민족정치학과 ‘어머니’ 정체성: 일본 오사카부 이주 여성들의 구술사를 중심으로」이화여자대학교 대학원 석사학위논문。
- 현선윤（2015）『어머니와 자전기』푸른사상。

特集

金史良の日本語作品 に描かれた朝鮮人女性



高橋梓

1. はじめに

本稿では、植民地期に日本の雑誌に多くの作品を発表し、「日本語作家」として知られている朝鮮人作家・金史良（本名・金時昌、1914-1950？）の作品において、朝鮮人女性をめぐる描かれ方がどのように変化したかについて考察する。

金史良は、1931年に平壤高等普通学校の「同盟休校事件」の首謀者として諭旨退学処分になった後に渡日し、旧制佐賀高等学校（1933-1936年）と東京帝国大学文学部独逸文学科（1936-1939年）で学びながら、日本語による創作を始めた。金史良が本格的に日本の雑誌に作品を発表するようになったのは、大学を卒業した年の1939年に文芸同人雑誌『文藝首都』の同人になって以降である。同誌に発表した小説「光の中に」（『文藝首都』1939年10月）が、第10回（1939年度下半期）芥川賞候補作として『文藝春秋』（1940年3月）に転載されると、日本文壇において注目を浴びるようになった〔安宇植 1983〕。その後金史良は、1941年12月9日に治安維持法思想犯予防拘禁条項によって鎌倉警察署に拘禁され〔張紋碩 2020: 95-96〕、翌年1月に釈放された直後に平壤に戻った。また、解放後は平壤で北朝鮮芸術総連盟などに参加しながら小説・戯曲などを発表した。朝鮮戦争が始まると従軍作家として人民軍と共に南下し、1950年9月の人民軍撤退の際に離脱し消息を絶った〔布袋敏博 2001〕。

このように、金史良が日本で創作していたのは1939年から1942年初頭にかけての約3年間にすぎなかったが、金史良はその短い期間に多くの作品を日本の雑誌に発表し、それらの作品を収録した作品集も二冊刊行された（『光の中に』小山書店、1940年12月；『故郷』甲鳥書林、1942年4月）。その中でも、日本社会における朝鮮人の葛藤について描かれた「光の中に」は、金史良の代表作として知られている。一方で、金史良は朝鮮人移住労働者の集住地や朝鮮人女性に光を当てた作品も多く発表していたが、これらの作品はこれまであまり注目されてこなかった。

金史良を含む朝鮮人作家の日本語作品については、近年読み直しが進められている。植民地期の日本語創作については、作家たち自身の「自己批判」¹⁾を経て、朝鮮文学の「暗黒期」の産物として長い間タブー視されてきた。その後、韓国では1988年に「越北作家」の作品が「解禁」される中で、植民地期の朝鮮人作家の作品集も刊行されるようになったが、それらの作品は「抵抗」「協力」という二項対立的な枠組みで区分されていた〔召翫（金哲）2006、金哲 2015: 171-199〕。一方で、近年では植民地期の朝鮮文学をめぐる研究が進む中で、朝鮮人作家の日本語作品から「日本文学」「国民文学」とのズレが読み取られるようになった。たとえば、윤대석（尹大石）〔2006〕は、植民地期のいわゆる「親日文学」と評価されてきた文学作品は、帝国日本の「国民文学」をそのまま反復するのではなく、「国民文学」を植民地朝鮮の文脈で

「再構成」し、そこには「ほとんど同一だが完全には同一でない差異の主体」[Homi K. Bhabha 2005: 148] が形成されたとした。林鍾国 [1966] (日本語版は林鍾国 [1976]) が個々の作家の「親日」文化機構への関わりを詳細に明らかにし、朝鮮人作家の日本語作品から帝国日本の軍国主義的なファシズムの論理を読み取ろうとしたのに対し、尹大石は金史良を含む 1940 年代前半期の朝鮮人作家の作品に見られる同化や協力をめぐる表現を問い直したといえる。

しかし、朝鮮人女性を描いた金史良作品が論じられることが少なかったことに見られるように、朝鮮人作家の日本語作品に見られる同化や協力をめぐる表現については、主に朝鮮人男性の問題として議論されてきたといえる。ここで、金史良の代表作である「光の中に」(『文藝首都』1939 年 10 月)について見てみたい。「光の中に」は、周りから「みなみ」と呼ばれている朝鮮人留学生の「南(ナン/みなみ)」と、朝鮮人の母親の存在を隠している少年「山田春雄」が、交流をとおしてそれぞれの朝鮮人としてのアイデンティティを実感していく過程が描かれている。また、『文藝首都』の同人や芥川賞の選考委員は、「光の中に」を「民族の感情」が描かれているとして高く評価した[高橋梓 2016: 108-109]。

朝鮮人女性の描写に注目すると、「光の中に」では南と春雄の「民族の感情」をめぐる描写において、春雄の母「山田貞順」が重要な役割をしていることが明らかになる。貞順は夫の「半兵衛」から日常的に暴力を受けており、彼女が初めて登場するのも夫の暴力を受けて入院することになった場面であった。この事件をきっかけに南は春雄の母親が朝鮮人であることを知り、春雄が朝鮮人の母親の存在を隠すことと自分が日本式の「みなみ」と呼ばれていることを重ね合わせるようになる。また、「父のもの」に対する無条件的な献身と「母のもの」に対する盲目的な背拒(p. 14)が相剋していた春雄も、結末部では南に対し「南先生」という朝鮮の名前で呼びかけているように、母・貞順の入院をきっかけに「母のもの」を徐々に肯定

的にとらえるようになっていった。

糸井梓 [2005] は、貞順が当時日本で遊郭の役割をしていた「朝鮮料理屋」²⁾ で働いていたことに注目し、貞順をめぐる描写からは民族差別の他に朝鮮人女性(遊興業の女性)として受けた差別を読み取ることができるという重要な指摘をしている。たとえば、南は貞順の見舞いに行った際に春雄とともに朝鮮に帰ることを提案するが、貞順は「でもあの人、妾を自由な身にしてくれました」(p. 21)とその提案を拒絶する。糸井は、貞順が半兵衛と別れようとしないうちに、彼女が半兵衛と結婚することによって遊興業の女性として受けてきた差別からは抜け出すことができたためであると分析している。しかし、「あの半兵衛に向って彼女が激しい憎悪をもつてゐることを期待し、そして同じ郷国から出て来た者として義憤の悦びに酔ひたかつた」(p. 22)と考えて貞順に朝鮮に戻ることを提案した南は、彼女からの拒絶に「見事に肩すかしを喰はされた」(p. 22)と感じたと描かれている。このように、貞順が朝鮮人女性として受けてきた差別は、ここでは民族の問題として語られることになる。糸井は、混血児・春雄の問題が「光の中に」のテーマになったことで、読者には貞順が抱えた問題が見えにくくなり、在日朝鮮人女性の問題は影に隠れてしまったとしている。

「光の中に」では朝鮮人女性の問題が描かれながらも、「民族の感情」をめぐる問題の影に隠れてしまったといえるが、その後金史良が朝鮮人女性に光を当てた作品を多く発表するようになったことは注目すべきである。1941 年前後になると、金史良は「コブタンネ」(『光の中に』小山書店、1940 年 12 月)、「月女」(『週刊朝日』1941 年 5 月 18 日)、「嫁」(『新潮』1941 年 11 月)など、朝鮮人女性を題名にした作品を次々と発表した。これらの作品は、妓生や家事労働者(女中)、家族に売られて農村に嫁入りした女性など、さまざまな朝鮮人女性の経験が描かれている点で特徴的である。

また 1940 年には、金史良は随筆「朝鮮の女」(『新興婦人』1940 年 4 月)を発表していた[야나가와

ヨスケ (柳川陽介) 2019]。この随筆において金史良は、女性を幼いうちに結婚させて嫁ぎ先の家庭内の労働力として使う「早婚」の習慣が残る朝鮮では、新教育を受けた女性は結婚相手を見つけれず、また早婚した人びとも伝統的な考え方から離婚ができず自由恋愛が困難であるとしながら、これを「封建制度の犠牲」としている。

これらの朝鮮人女性をめぐる作品や随筆は、金史良が朝鮮人女性の問題について意識しながら創作を行っていたことをあらわしているといえる。そこで、本稿では金史良の日本語作品における朝鮮人女性の描かれ方がどのように変化したかについて、「光の中に」と同様に朝鮮人の「民族」をめぐる葛藤が描かれた作品と、1941年前後に発表された朝鮮人女性を題名にした作品（「コブタンネ」「月女」「嫁」）を取り上げながら考察する。

2. 「標準語」の揺れをあらわすものとしての朝鮮人女性—「方言」をめぐる描写を中心に

金史良が日本で創作を行っていた時期（1939～1942年）の日本語作品に登場する朝鮮人女性について整理すると、以下の通りである（＜表＞金史良の日本語作品（1939-1942年）に登場する朝鮮人女性）。

上述したように、金史良は朝鮮人女性に光を当てた作品を1941年前後に発表するようになったが、1939～1940年に発表された作品の中にも女性の名前が示されたもの（「天馬」の「文素玉」、「箕子林」の「タンシル」、「郷愁」の「伽倻」）もあった。しかし、1941年以前に発表された作品では、朝鮮人女性は誰かの家族（母・妻・娘・姉・妹）として描かれることが多かった。また、職業（女中、巫女等）が示された女性もいたが、それぞれの人物の特徴の詳細について描かれることは少なかった。

そこで、本節では「光の中に」と同様に主人公／語り手らの「民族」をめぐる葛藤について描か

れた作品（「草深し」『文藝』1940年7月、「光冥」『文學界』1941年2月）を取り上げ、これらの作品における朝鮮人女性の描写について考察する。

これらの作品に登場する朝鮮人女性は、主人公／語り手の「標準語」に対し、「方言」を用いる人物として描かれている点で共通する。そこで、朝鮮人女性の「方言」をめぐる描写を見る上で、金史良が李光洙の「無明」（『文章』1939年1月、日本語訳は『モダン日本朝鮮版』1939年11月。以下、「金史良訳」と示す）を日本語に翻訳する際に、特定の人物の台詞に「方言」を用いたことについて注目したい。

「朝鮮近代文学の祖」として知られる李光洙は、1937年6月に自身が設立した「修養同友会」の会員らと共に、治安維持法違反容疑によって逮捕・投獄された（修養同友会事件）。脊椎カリエスの再発によって病監に入れられた李光洙は、1938年夏に釈放され、病床で自身の病監での経験をもとに「無明」を執筆した。1938年11月に、李光洙は同友会の会員らと共に思想転向表明の「申合書」を作成し、裁判所に提出した〔波田野節子 2015: 160-176〕。このような背景から、「無明」は作家自身の経験にもとづいて書かれた「転向小説」として評価されてきた。

「無明」には作家自身と思われる「私」が、病監の他の受刑者のやり取りをひたすら観察する様子が描かれる。黄鎬徳〔2007〕が明らかにしたように、「無明」では他の受刑者（印章偽造の「尹」、放火犯「閔」、詐欺師「鄭」）の排泄（便秘・下痢）が描かれるのに対し、「私」ともう一人の受刑者である新聞記者「康」の排泄の描写が省略されているという差異がみられる。黄鎬徳は「無明」をとおして、「私」が排泄する受刑者を観察し、否定的なものとして嫌悪することで自らの文明を再確認するという、植民地朝鮮の知識人の転向のプロセスを読み取った。

ここで注目したいのは、金史良訳「無明」では、排泄する受刑者の台詞に「方言」が用いられていることである。たとえば、受刑者「尹」が登場した際の台詞は、「これを見なせえよ。こんなに体ぢ

<表> 金史良の日本語作品（1939-1942 年）に登場する朝鮮人女性³⁾

作品	舞台	語り手／主人公	朝鮮人女性
「土城廊」『堤防』1936 年 10 月；「土城廊」『文藝首都』1940 年 2 月 ⁴⁾	【朝鮮】「土城廊」（平壤・大同江に面する貧民地帯）	「元山」（土幕民）	主人公の友人「先達」の妻、「徳一老人」の妻
「光の中に」『文藝首都』1939 年 10 月	【日本】東京・押上	「南」（東京帝国大学に通う留学生）	「春雄」の母「山田貞順」、自動車運転手助手「李君」の母
「天馬」『文藝春秋』1940 年 6 月	【朝鮮】京城	「玄龍」（京城に住んでいる「親日作家」）	「玄龍」と交流がある詩人「文素玉」
「箕子林」『文藝首都』1940 年 6 月	【朝鮮】朝鮮の「北方の田舎」にある貧民窟	「箕初試」（貧民窟に住んでいる老人）	主人公の妻、主人公の娘「タンシル」、近所に住む乞食の妻
「草深し」『文藝』1940 年 7 月	【朝鮮】主人公の故郷である山村	「朴仁植」（日本の大学で医学を学んでいる留学生）	主人公の中学校時代の恩師「鼻かみ先生」の妻
「無窮一家」『改造』1940 年 9 月	【日本】東京	「崔東成」（日本で生まれ育ち、自動車運転手の仕事をしている）	主人公の母、主人公の友人「姜明善」の妻、飯場の老婆
「コブタンネ」『光の中に』小山書店、1940 年 12 月	【朝鮮】朝鮮のある都市	「私」（かつて広い庭と大きな倉がある家に住んでいたが、今は平凡な家に住んでいる）	「私」の家の貸部屋に住んでいた一家の娘「コブタンネ」
「光冥」『文學界』1941 年 2 月	【日本】東京	「私」（周りから「先生」と呼ばれている朝鮮人知識人）	「私」の姉、清水一家の朝鮮人の女中「とよ」、作家志望の「文君」の母
「月女」『週刊朝日』1941 年 5 月 18 日	【朝鮮】平壤	「私」（中学生）	「私」の隣の家の娘で後に妓生になった「月女」
「郷愁」『文藝春秋』1941 年 7 月	【中国】北京	「李絃」（「東京 A 大学美学研究室」に在籍する朝鮮人留学生）	夫と共に独立運動を行って中国に亡命し、現在は北京で中国人にアヘンを売って暮らしている「李絃」の姉「伽椰」
「山の神々」『文藝首都』1941 年 7 月；「山の神々」『文化朝鮮』1941 年 9 月；「神々の宴」『日本の風俗』1941 年 10 月；「山の神々」『故郷』甲鳥書林、1942 年 4 月 ⁵⁾	【朝鮮】「西朝鮮の山奥」にある温泉	「私」（作家自身と考えられる人物）	温泉場に住んでいる「巫女」
「天使」『婦人朝日』1941 年 8 月	【朝鮮】友人の故郷	「亮」（大学を卒業した人物）	主人公の友人「洪君」の妹、庵舎守の老婆
「鼻」『知性』1941 年 10 月	【朝鮮】平壤	「姜大均」（N ゴム工場の監督）	主人公の妻
「嫁」『新潮』1941 年 11 月	【朝鮮】山奥	「コブシリ」（銀童一家の嫁）	主人公「コブシリ」、姑
「ムルオリ島」『国民文学』1942 年 1 月	【朝鮮】大同江	「娘」（幼い頃に叔母が住む碧只島に訪れたことがあった）	碧只島に住んでいた「彌勒」の妻「スウニ」と、彼女の友人「七星女」「ボングネ」
「乞食の墓」『文化朝鮮』1942 年 7 月	【朝鮮】平壤から東北に四里離れた場に位置する長水院	「僕」（作家自身と考えられる人物）	伯母

うがはれてゐやすよ。近頃少しはよくなつたちう
のがこんな工合でやす」(金史良訳、p. 291。下線
は引用者による、以下同様)となっており、「～せ
えよ」「～ゐやすよ」「～ちう」「～でやす」などの
標準語とは区別された表現が用いられている。李
光洙の朝鮮語の原作と比べてみると、語り手と
「尹」の台詞の言葉遣いは区別して表現されてい
なかったため、ここで金史良が意識的に「方言」を
用いながら日本語に翻訳したことが明らかになる。
また、これらの「方言」は、他の排泄する受
刑者(閔、鄭)の台詞にも共通して見られる。よっ
て、金史良訳「無明」における「方言」は単に登
場人物の出身地の訛りをあらわすものではなく、
排泄と同様に「私」と他の受刑者との差異をあら
わすものとして作用し、李光洙の原作の「転向小
説」としての性格をより強調することになったと
いえる[다카하시 아즈사(高橋梓) 2020: 30-35]。

それでは、本節で取り上げる金史良作品の朝鮮
人女性の台詞における「方言」使用は、どのよう
に解釈すればいいだろうか。まず、朝鮮の山村を
舞台にした「草深し」(『文藝』1940年7月)の朝
鮮人女性の描写について見ていきたい。

「草深し」は、植民地朝鮮における言語状況(日
本語(「国語」)、朝鮮語)について描かれた作品で
ある[鄭百秀 2006: 85-129]。この作品は、東京で
医学を学ぶ主人公「朴仁植」が、山村の衛生状況
を調査するために自分の故郷に戻ってきた場面か
ら始まる。村の会堂で仁植は、植民地朝鮮の生活
改善運動の一つだった「色衣奨励運動」の演説を
行う郡守の叔父と、叔父を手伝う中学校時代の恩
師「鼻かみ先生」を目撃する。そこでは、叔父は
日本語(「国語」)を理解できない山村の人びとの
前で日本語(「国語」)で演説を行い、それを「鼻
かみ先生」が朝鮮語に通訳していた。叔父が村人
の前で演説を日本語(「国語」)で行ったことや、朝
鮮語の教師だった「鼻かみ先生」が生活改善運動
の宣伝の通訳を行っていることは、植民地朝鮮に
おいて日本語が「国語」として持つことになった
権力や、排除されつつある朝鮮語の位置を示して
いる。

このような植民地朝鮮における日本語(「国語」)
と朝鮮語の位置があらわれている「草深し」にお
いて、朝鮮人女性の台詞に見られる「方言」はど
のような意味を持つだろうか。「草深し」に登場す
る朝鮮人女性は、「鼻かみ先生」の妻である。「色
衣奨励運動」を実践する「鼻かみ先生」は、妻の
白い服を墨で塗ってしまう。そのことに憤った妻
は「鼻かみ先生」を家から追出そうとするが、仁
植はその様子をたまたま目撃することになる。騒
ぎの様子を見に来た近所の人びとに向けて、彼女
は次のように自分の心情を吐露する。

「え、皆の衆聞いて下せえ。あのおいぼれがわ
たしのたつた一つの白い裳^{ちま}にまで墨を付けや
がつたんですよ。この糞爺奴、白い絹裳^{ちま}一つ
でも拵へてくれたといふのけ?それともお金
でも残して持つて来たといふのけ?毎晩手前
の癖にお酒が何だよ。え、宴会だと?明日の
米がないといふ暮しに一体宴会が何だよ!わ
たしの白い裳^{ちま}をどうしてくれるんだよ。どう
してくれるんだよ。郡庁の者だつてみな自分
のうちの着物にだけは上手くやつてゐるでね
えか…」

「もう止めなせえ、止めなせえ」と人々がなだ
めらしかつたが、今度は婦の思ひ切つたア
イゴーアイゴーといふ哭声が聞えて来た。(p.
47)

「草深し」では、生活改善運動である「色衣奨励
運動」に協力する叔父や「鼻かみ先生」の朝鮮語
による発話は「標準語」で表現されている。一方
で、「鼻かみ先生」と同じ家族である妻の台詞は、
「～せえ」「～いふのけ」「～でねえか」などの「標
準語」とは区別された「方言」で表現されている。
引用部分に見られるように、「鼻かみ先生」の家の
近所に住む村人の台詞にも「方言」が用いられて
いることから、この作品において「標準語」と「方
言」は、日本語(「国語」)能力の有無をあらわす
ものであるといえる。また、このような「方言」
は、帝国日本の「国民」を意識する叔父と「鼻か

み先生」にとっては、否定すべきものであったといえる。

一方で、よく知られているように、叔父と「鼻かみ先生」の日本語（「国語」）による発話は不自然な日本語によって表現される。

「朝鮮人が^{びん}貧乏になつたのは白い着物を着用しながらである。^{げえ}経済的にも^{がん}時間的にも不経済なのである。即ち白い着物は早く汚れるから金が要り、洗ふのに時間が^{がん}がかるのである」(p. 38)

「前の郡守さんの時の五分の一もぬない話でしゅよ、はあ」(p. 51)
「火田民なら他の郡がいいでしゅよ。それで仁植さんも H 郡の両斧山へ出掛ける話でしゅよ」(p. 51)

作品の冒頭で仁植の叔父が日本語（「国語」）で行った「色衣奨励運動」の演説には、朝鮮語の発音の特徴が残った不自然な日本語が挿入されている（「^{びん}貧乏」「^{げえ}経済的」「^{がん}時間」等）。また、叔父を手伝っている「鼻かみ先生」の日本語（「国語」）の台詞にも、不自然な日本語が用いられている（「でしゅよ」）。このように、叔父と「鼻かみ先生」の日本語（「国語」）の台詞に挿入された不自然な日本語は、二人の日本語（「国語」）が完全なものではないことをあらわすと同時に、彼らの帝国日本の「国民」としての「模倣」が差異を含むものであることをあらわしているといえる〔윤대석（尹大石）2001：58-66〕。

さらに、「鼻かみ先生」の妻の台詞に「方言」が用いられていたことを併せて考えると、叔父と「鼻かみ先生」の台詞の不自然な日本語も「方言」のように見えてくる。そのため、「草深し」における朝鮮人女性の「方言」は、叔父と「鼻かみ先生」の不自然な日本語と同様に、結局は朝鮮語や朝鮮的なものから完全に自由になることはできないという朝鮮人の「国民化」が含む差異をあらわすものであるといえる。

また、日本を舞台にした「光冥」（『文學界』1941年2月）にも、「標準語」を使う語り手「私」に対し、「方言」を使う朝鮮人女性（清水一家の女中の「とよ」、「文君」の母）が登場する。

この作品の語り手「私」は、姉夫婦の家や「筆耕苦学生」の「文君」の家の近所で一人暮らしをしている朝鮮人男性である。「私」の詳細については明らかにされないが、冒頭で「どこにおいても朝鮮の人をそれとなく見分けつける」(p. 4) 習慣があると描写されることから、朝鮮人のコミュニティの外で日本人と関わりを持つ職業に就いていると考えられる。また、「私」は姪の「恵」が近所の子どもたちから朝鮮人だといっていじめられていることや、日本人女性と朝鮮人男性が「内鮮結婚」した清水一家で働く朝鮮人の女中「とよ」が一家から虐げられているという噂に心を痛めている。「とよ」が清水の家から逃げ出したことをきっかけに、「私」は清水の家を押しかけ、一家における「とよ」の待遇について訴える。しかし、「私」はむしろ「内鮮結婚」した清水一家の抱える問題に直面することになる。清水一家の日本人の妻は、朝鮮人の夫がなかなか就職できなかったことから、家族を彼女の日本籍に入れて「清水」と名乗ることにしたが、それ以降夫は彼女に対して卑屈になったと語った⁶⁾。また、清水一家の娘たちは、父親が朝鮮人ということからいじめられてきたため、「朝鮮人に対して顔を反けようとする」(p. 26) ようになったという。そこで清水一家の妻は、朝鮮人の女中を雇い、娘たちに「い、お姉さまとして慕はせ」(p. 26) 朝鮮的なものを肯定してもらおうとしたが、彼女の期待に反して夫と娘たちは「とよ」につらくあたるようになったのだという。

このように、「光冥」では朝鮮人女中「とよ」の存在が清水一家の「内鮮結婚」をめぐる問題を浮き彫りにしている。このような「とよ」の特徴についてより深く接近するために、「私」が「とよ」と初めて出会った場面を見てみたい。以下に引用するのは、「私」が家に帰ってこない姪の恵を探す中で、恵が庭で洗濯をしている「文君」の年老いた母親の側にいるのを見つける場面である。そこ

には清水一家の女中「とよ」もあり、「私」は「とよ」に一家での待遇について聞き出していく。

「だが一体どういふ時に」と、私は再び娘の方に向いて云つた。「君をいぢめるのかしら、例へば？」

「餓鬼奴等はいつもわてを豚といふていぢめるだ。そして仕事が少しでもうまく行かぬえ時あ、わてのせいにするだもの」

「それから」と促しながら、ふと私は彼女の黝んだ唇がひん歪み、凹んだ眼ぶちの中に頑固さうな暗い影がとざしてゐるのを見た。

「それから…此頃は又わてが泥棒すると云ふだ」

「妾のとこさ嫁は、一緒に工場にでも行けるやうになつたらちうでがすけどなあ」

「それよりも早くけりをつけて、旅費でも貰つて君は帰つた方がいいでせう」

だが娘は顔色をかへ、慌てたやうに首を振つてみせた。

(「光冥」 p. 14)

三人は共に朝鮮人移住者であるためこれらの会話は朝鮮語で行われていると考えられるが、語り手「私」の台詞には「標準語」が使われているのに対し、「とよ」と「文君」の母の台詞には「方言」が用いられている。これは、これらの人物が共に朝鮮人移住者でありながらも、それぞれ異なる背景を持つことをあらわしているといえる。上述したように、「私」は朝鮮人のコミュニティの外で働いていると考えられるため、日本社会において朝鮮人として受ける差別に敏感に反応しているといえる。一方で、「方言」を使う「とよ」や「文君」の母は、会社や学校など日本人の組織に属していないため、朝鮮人であることを隠そうとはしない。「文君」の母は、外で白い服（朝鮮の民族衣裳）を着て洗濯をするなど、一目で朝鮮人であるとわかる行動をしており、それを見た「私」は「洗濯位は家の中でしてもいいの」と思つた。内地の中では殊にそれは好ましい風景ではないからである」

(p. 12) と考えていた。このことをふまえると、「光冥」での朝鮮人女性の「方言」は、朝鮮の民族的な特徴をあらわすものであると考えられる。

「光冥」では、「方言」を使う朝鮮人女中「とよ」の存在をとおして、清水一家の「内鮮結婚」や、「私」をはじめとする日本に暮らす朝鮮人が朝鮮的なものを否定的にとらえていることをめぐる問題が示されることになる。清水一家の人びとは、「とよ」の家出をきっかけに彼女への態度を改めようと決心し、また「私」は日本社会において朝鮮的なものが否定的にとらえられていることについて疑問を投げかけるようになる。このような「光冥」における朝鮮人女中「とよ」の存在は、「光の中に」において「民族の感情」をめぐる問題を浮き彫りにした「貞順」のような役割をしているといえる⁷⁾。

金史良が日本語に訳した李光洙の「無明」では、語り手の「標準語」(文明)に対し、「方言」は否定的なものとして存在していた。一方で、「草深し」と「光冥」における朝鮮人女性の「方言」は、作品における「標準語」(日本語(「国語」)、「内鮮結婚」)の揺れをそれぞれあらわすものであったといえる⁸⁾。

しかし、大切にしていた服を失った「鼻かみ先生」の妻の嘆きや、「私」から朝鮮に帰ったほうが良いと言われると「顔色をかへ、慌てたやうに首を振つてみせた」(p. 14) 女中「とよ」の当惑など、これらの作品においても朝鮮人女性自身の問題は見えにくくなっているといえる。そこで、朝鮮人女性をめぐる描写が、朝鮮人女性に光を当てた金史良作品ではどのように変化するかについて、次の節で見ていきたいと思う。

3. 朝鮮人女性のさまざまな生—朝鮮人女性が題名の作品を中心に

ここでは、朝鮮人女性が題名になった「コブタンネ」(『光の中に』小山書店、1940年12月)、「月女」(『週刊朝日』1941年5月18日)、「嫁」(『新

潮』1941年11月)における朝鮮人女性の描かれ方について分析する。

これまでの研究では、上記の作品は朝鮮の土俗的なものを描いたものとして評価されてきた。卍형덕(郭炯徳)[2009]は、1941年以降の金史良作品には故郷／郷土をテーマにしたものが増え、それらの作品のテーマは金史良が1942年に平壤に戻ってから発表した「国策文学」と「亡命文学」にみられる「ユートピア」のテーマへとつながっていったとした。実際に、本節で分析する作品には、前節で扱った作品で見られたような朝鮮人の「民族」をめぐる葛藤については直接的には描かれていない。さらに、発表媒体に注目すると、「月女」は『週刊朝日』の「半島作家新人集」特集に、「嫁」は『新潮』の「地方派小説」特集に掲載されたため、当時の日本の読者もこれらの作品を朝鮮の土俗的な特徴が描かれたものとして読んだと考えられる。

しかし、これらの作品を朝鮮人女性に光を当てた作品として注目すると、植民地下の朝鮮人女性をめぐる問題を描いたものとして新たに評価できるのではないかと考える。そこで、まず朝鮮の都市に住む主人公／語り手の視線をとおして朝鮮人女性の成長が描かれている「コブタンネ」(『光の中に』小山書店、1940年12月)と「月女」(『週刊朝日』1941年5月18日)について分析する。

「コブタンネ」では、「私」の家の部屋を間借りしていた一家の娘で、コブタンネと呼ばれる朝鮮人女性の成長が、語り手「私」の視線をとおして描かれている。コブタンネの一家は大変貧しく、彼女の父は「支械稼ぎ」(運び屋)として働き、母は不良品の靴下の修繕を行って生計を立てていた。「私」より2～3才年上のコブタンネは、幼い頃は「私」と一緒に遊んでいたが、成長すると靴下工場の女工として働くことになる。

「私」は、外で働き始めたコブタンネからさまざまな相談を受けるようになる。まず、靴下工場の女工になったコブタンネは、文字を読めなかったため、工場の職工から受け取った恋文の内容を「私」に尋ねる。その後、コブタンネと職工は恋愛

関係になり、そのことが発覚すると彼女は工場を解雇されてしまう。今度は、コブタンネはある日本人の家で女中として働くことになるが、その家の中学生の息子が「いちめたりへんなことをしたりする」(p. 213)ため、その中学生を叱りつける日本語を教えてほしいと「私」のところにやって来た。しかし、コブタンネは「私」が教えた「畜生」という日本語を間違えて「ツクソ」(朝鮮語の死ぬぞという意味)と言ってしまい、日本人の家から追い出されてしまう。その後、コブタンネ一家もどこかに引っ越していき、「私」とコブタンネの付き合いも終わることになる。

このように、この作品には「私」の視線をとおしてコブタンネがさまざまな仕事を行ってきたことや、そこで経験した出来事が描かれている。コブタンネが家の外で働くことになったことは、同時代の朝鮮人女性の経験と重なり合う。植民地朝鮮における土地調査事業や産米増殖計画などの政策によって、土地を持たない小作農や貧農が増えると、小作料などの借金を重ねた多くの農民が村を離れ、働き口を求めて都市に流出した[樋口雄一 1998: 95-158]。その中で、前近代まで「閨房」に閉じ込められていた朝鮮人女性も、家計を助けるために都市で新興職業女性(バスガール、デパートガール等)、妓生、女給、女工、食母、乳母などさまざまな職業に就くことになった[徐智瑛 2016]。コブタンネが靴下工場の職工と恋愛関係になったことは、同時代の朝鮮人女性が都市で消費や自由恋愛の主体になったことをあらわしているといえる。しかし、上記の職業は朝鮮の近代化の中で生み出されたものではあったが、労働条件が悪く低賃金であったため、女性たちの経済基盤は脆弱なものであった[徐智瑛 2016: 215-230]。さらに、コブタンネが日本人の家で女中をした際に、日本人の息子から「へんなこと」をされたように、外に出た朝鮮人女性の身体は危険にさらされていた。

さらに、コブタンネが今後もさまざまな仕事を転々としながら暮らしていくことについては、結末部分に挿入された「現在」の場面において暗示

される。14～15年後、「私」の一家もかつてほど裕福ではなくなり、以前より小さな家で暮らしている。ある日の夕方、「私」が書斎で幼少期について回想していると、30歳近くになったコブタンネが子どもを連れて貸部屋を探しに訪ねてきた。

私ははつと驚いてつい硝子窓を開け庭を覗いてみた。果してそこには昔とそれ程物腰や恰好の変つてゐないコブタンネが立つてゐる。もう三十近くなつてゐるのだらうか、背中には赤ちやんが背負はれ、彼女の^{チマ}裳裾には昔の私の年位な男の子がまつはりついてゐた。(中略)

何一つ変つてゐないのはコブタンネ丈だつた。そして彼女が貧乏してゐることも。——(p. 215)

この結末部分に挿入された場面では、生活環境が変わった「私」とは对象的に、コブタンネの「変つてゐない」姿が浮き彫りになっている。同時に、書斎で本を読んでいる「私」と、仕事を転々としながら生活するコブタンネの対照的なあり方も、14～15年前から「変つてゐない」ものであるといえる。このような描写は、コブタンネや同時代の朝鮮人女性の困窮した暮らしが、今後も変わらずに続いていくことを示しているといえる。

また、「月女」(『週刊朝日』1941年5月18日)では、語り手「僕」の視線をとおして、隣の家の娘「月女」が妓生として成功して引退するまでについて描かれている。まず、作品の冒頭では、月女の外見について以下のように描かれている。

人々は彼女を毒の蛇だともいつた。目がきらきらして、口元が心持ち尖り、頭がきりりつと角張つてゐて、それにどことなく絢爛な眩しさがあつた。誰でも一目見た瞬間に、立竦み幻惑を覚えるやうになる。そして彼女に近付いた者は悉くまゐつてしまふ(p. 34)

このような美貌の持ち主として描かれた月女

は、「ほんとは妓生にならなくてもいいやうな境遇に育つた」(p. 34)にもかかわらず、「貪欲な母が彼女を妓生学校へ入れた」(p. 34)と説明された。このことは、当時妓生が比較的高収入の職業であつたことをあらわしている。

前近代とは違い、妓生は朝鮮人女性の一つの職業になっていた。前近代の朝鮮では、妓生は官婢として宮中で歌舞などを担当していたが、朝鮮の近代化にともない官妓制度が廃止されると、妓生は日本の芸者の運営方式による「妓生組合」によって管理されるようになった(1908年「妓生取締令」)。当時妓生の収入は新聞記者や教員などエリート男性の月収の水準であり、中には「妓生組合」の組織を離れて「名唱妓生」として大衆的な歌手になった者もいた[徐智瑛 2016: 234]。一方で、料理店で接待の仕事を行いながら生計を立てていた妓生にとって、その収入は客からの人気に左右されており、人気がない妓生の場合、生計のために自分の身を売る私娼になるということもあつたという[徐智瑛 2016: 232-236]。

妓生学校に通った月女は、「僕」が中学校に進学した頃には妓生として座敷に上がっていた。彼女は人気が高く、毎日のように客からの手紙が届いていた。この時期の月女をめぐるのは、「尹医師」との自由恋愛を楽しむ様子が描かれる。一方で、月女が「僕」に対して客の手紙の返事の代筆を「綺麗な字の美文」(p. 34)で書くように頼むという描写は、妓生という職業が客からの人気が重要な意味を持つことをあらわしているといえる。その後、3～4年するうちに月女は「二三十萬円の金持」(p. 34)になり、妓生として成功を収めることになる。

しかし、作品の後半にかけて月女をめぐる描写は少しずつ変化していく。作品の中盤で、月女は恋愛関係にあつた尹医師との喧嘩の末、平壤の大同江に身を投げようとする。ここで「僕」は恋人の尹医師のことで嘆く月女を見て、「昔のやうにその毒気に生彩がなく、むしろいたいたしげだ」(p. 35)と、彼女の弱い部分を感じるようになる。

さらに、作品の結末部分においても、月女の弱い部分が「僕」の視線をとおして示される。その

後、月女は40歳の弁護士の妾になり、花柳界から引退することになる。その時、「僕」は月女を妾にした弁護士や尹医師が彼女の財産を目当てに接近したという噂を聞くと、「だんだん年も取り腹も大きくなると、やはり一介の心弱い女に過ぎなかつたのだらうかと、ひとしほ哀れに思はれる」(p. 35)と考える。

また、作品の最後は月女の外見をめぐる描写によって締めくくられるが、冒頭部における月女的美しさをめぐる描写とは大きく異なるものとなっている。

「ねえ、中学生さん、大部にきびがふえたわね」といつて、齒並を出して笑つた。以前それは真白だつたが、虫齒が出来たとみえ大部金ではめてゐた。僕はだんだん身体も心も身装も立派になつて行つたが、それに反して今度は彼女の方が次第に瘦せしなびて行つた。(p. 35)

このように、「月女」では「僕」が「身体も心も身装も立派に」成長していくのに対し、「絢爛な眩しさ」を持っていた月女が「瘦せしなびて」いく変化が作品をとおして描かれている。作品の前半で月女が毒蛇のような美貌を持っていた頃には男性が大勢寄ってきたが、数年後に月女が美貌が変化すると彼女の周りには財産目当ての男性しか見られなくなった。また、作品の後半にかけて、恋人との喧嘩の末に自殺しようとするなど、月女の弱い部分が目立つようになっていった。このような月女をめぐる描写の変化は、男性の人気に左右される妓生の不安定な生をあらわしているといえる。

このように、「コブタンネ」と「月女」からは、植民地期に家の外に出て働く朝鮮人女性の生について描かれている点で共通している。一方で、「嫁」(『新潮』1941年11月)は、ある山奥の農村の一家に嫁入りした女性を主人公としているため、上の二つの作品とは性格が異なるもののように見える。

17歳の少女「コブシリ」は、2年前に山奥に住む「銀童」一家に50円で買われて、一家の嫁になった。彼女は、日傭いの30代の男「得甫」に性的な嫌がらせをされそうになり、困り果てている。また、得甫に好意を持つ姑はコブシリに嫉妬し、日々つらくあたっている。さらに、早婚した夫の銀童はまだ12歳で幼いため、コブシリは誰にも頼ることができず、一人で自分の置かれた境遇について悩んでいる。

このように、「嫁」は朝鮮の前近代の農村を描いた作品であるように見える。しかし、コブシリが銀童一家の嫁になった経緯からは、貧困を背景に村を離れていった植民地朝鮮の農村出身女性の経験を読み取ることができる。

ここで、作品の中でコブシリが自分の故郷に思いを馳せている場面を見てみたい。彼女は、夫の銀童と親しい少女「オングナニ」からホオズキをもらった際に、かつて故郷で友達と民謡を歌ったり水遊びをしたりしていたことを思い出すが、「今もそれも遠い昔の伝説のやうになつてしまつた」(p. 145)と考える。なぜなら、コブシリの家族や村の女性たちも、彼女と同じように村を離れていったからである。

両親は弟や妹を連れて満洲へ移つて行き、部落の娘達もそれぞれちりぢりになつてゐる。都へ洋服男に連れて行かれたソブンネ、邑内の崔主事のところで奉公に行つたザヨムスンイ、オクブンイ、どこかへ売られて行つたツブンネ、ボクシリ……かう一人一人のことを懷ふと、それでも食ふに困らないところへ嫁入りしただけでも、自分はまだまだ仕合せのやうな気がする。(p. 145)

植民地朝鮮の農家の多くを占めた貧農の女性たちは、家や嫁ぎ先で家事労働を行ったり、家の外では家事使用人(一般家庭の女中)、接客女性(旅館や飲食店の女中、女給、芸娼妓)、女工になったりしたという[高麗博物館女性史研究会 2021: 72-73]。さらに、農村には「前借金」によって紡績女

工を募集する斡旋業者が回っており、貧困から抜け出すために家族が娘を業者に売ることもあった。中には、「光の中に」にも登場した日本の朝鮮料理店に売られていく女性もいたという〔樋口雄一 2018:12〕。故郷をめぐるコブシリの回想は、植民地朝鮮の農村出身女性の危うい生のあり方をあらわしているといえる。

また、ある日の夜、コブシリは得甫に襲われそうになる恐怖の中、両親の夢を見る。

その中又とろとろと眠気が全身に伝はつて来て、それと共に様々な夢像が後から後からとなく現はれた。姑に棒で頭を打たれた。生みのお母さんが彼女を抱き込んで泣いた。その母が父さんと共に連れ立つて満洲へ行くのだと、荷物を背負ひ又は頭にのせて遠い路を出掛けて行つた。彼女も泣きながら田畦の路を急いでついて行つた。高粱畑の中から得甫がむつくりと現はれ出て、彼女の手を掴まへようとした。それにはつとなつて目を醒ましてみると、皎々と月光だけがいやが上に冴えてゐる。(pp. 147-148)

夢の中で彼女は両親と一緒に姑と得甫から逃れようとするが、得甫に捕まえられたところで目が覚めてしまう。彼女が両親の夢を見たことは、現在彼女が置かれている状況から抜け出したいという希望をあらわしているといえるが、この夢の中に以前の回想の描写に見られたような彼女の故郷は登場しない。このような夢をめぐる描写は、彼女や農村出身の朝鮮人女性のよりどころとしての故郷はすでになく、逃げ出すことが困難な状況をあらわしているといえる。

4. おわりに

本稿では、金史良の日本語作品において朝鮮人女性がどのように描かれていたかについて考察してきた。金史良の日本語作品では、朝鮮人女性は

朝鮮人男性の家族として描かれることが多く、朝鮮人女性の問題は作品の中で見えにくいものとなっていた。また、主人公／語り手の「標準語」に対し、「方言」を使う者として朝鮮人女性が描かれた作品では、朝鮮人女性は「標準語」(日本語(「国語」)、「内鮮結婚」)の揺れをあらわすものとして存在していた。一方で、朝鮮人女性に光を当てた作品(「コブタンネ」「月女」「嫁」)には、さまざまな境遇に置かれた女性が登場したが、植民地期の朝鮮人女性のあやうい生をめぐる問題が描かれている点で共通していたといえる。

金史良作品において朝鮮人女性をめぐる問題が描かれるようになったことは、金史良の問題関心の生成とつなぎ合わせることができる。上述したように、金史良は日本語作品を多く残したことから「日本語作家」として知られているが、同時期に朝鮮語の文芸誌や新聞に長編小説1編、短編小説2編、評論6編、随筆3編、紀行文2編を発表していた。その中には、朝鮮語と日本語でほぼ同じ内容について書かれた「二言語著作」(短編小説2編、随筆3編、紀行文1編)も存在する。それらの著作の間に見られる微妙な差異を分析すると、金史良が創作の試行錯誤を行いながら徐々に朝鮮人の間に形成された階層や、朝鮮人移住労働者の集住地など、「国民」化の問題から逸脱した存在に注目するようになっていったことを垣間見ることができる〔高橋梓 2019〕。金史良が朝鮮人女性の生をめぐる問題を描くようになったことは、このような金史良の問題関心の生成をとおして生じた変化であると考えられる。

一方で、金史良作品における朝鮮人女性をめぐる描写についてより深く考察するには、以下の点についても併せて考える必要があるだろう。第一に、朝鮮語で創作された金史良作品に登場する朝鮮人女性についてである。金史良が1940年2月から1941年1月にかけて朝鮮の雑誌『朝光』に連載した長篇小説「落照」には、さまざまな特徴を持つ朝鮮人女性が登場する。この作品には、植民地期に男爵の爵位を与えられた尹成孝と、彼の正妻・第二夫人・第三夫人とその子どもたちの人間模様

について描かれているが、妓生出身の女性や、新教育を受けた女性、思想家を夢見る女性など、さまざまな朝鮮人女性が登場する点で特徴的である。しかし、これらの女性は自殺したり、行方不明になるなど、それぞれ悲劇的な結末を迎えることになる。このような点は、金史良の日本語作品における朝鮮人女性の描かれ方とは大きく異なっている。創作言語によって朝鮮人女性の描かれ方が異なることについても、併せて考える必要があるだろう。

また、金史良が朝鮮に戻ってから、植民地朝鮮の日本語と朝鮮語の媒体に発表した作品にも朝鮮人女性が登場する。しかし、「太白山脈」（『国民文学』1943年2-10月、日本語）と「海の歌（바다의 노래）」（『毎日新報』1943年12月14日-1944年10月4日、朝鮮語）に登場する朝鮮人女性を見ると、金史良が日本で創作した多くの作品と同様に、朝鮮人女性は朝鮮人男性の家族として描かれており、朝鮮人女性の問題には光が当てられなくなっていた。金史良が朝鮮に戻ってから発表した作品における朝鮮人女性をめぐる描写の変化についてはどのように考えるべきだろうか。

これらの作品も含め、金史良作品における朝鮮人女性をめぐる描写、そして同時代の他の朝鮮人作家の日本語作品における朝鮮人女性をめぐる描写について体系的に考察することは、今後の課題としたい。

※本研究はJSPS 科研費 21J00821 の助成を受けたものである。

※本稿は、国際高麗学会日本支部第25回学術大会公開シンポジウム「女が書く、女を書く—文学の中の在日朝鮮人女性—」（2021年5月30日）における発表（「金史良の日本語作品に描かれた朝鮮人女性」）をもとに執筆した。

※金史良の日本語随筆「朝鮮の女」（『新興婦人』1940年4月）の存在についてご教示いただいた柳川陽介先生（東京外国語大学非常勤講師）に深く感謝申し上げる。

注

- 1) 「文学者自己批判座談会」『人民芸術』1946年10月。この座談会には、金南天・李泰俊・韓雪野・李箕永・金史良・李源朝・韓暁・林和ら文学者が参加した。作家の発言内容など、この座談会の詳細については〔布袋敏博 2001: 140-141〕を参照。
- 2) 「朝鮮料理屋」（朝鮮料理店）については、産業「慰安所」と共に近年研究が進められている。1920年代に日本への朝鮮人労働者の渡航が増えると、日本各地に朝鮮人酌婦をおく「朝鮮料理屋」（朝鮮料理店）ができていった。ここで働く女性たちの多くは困窮した農村出身で、人身売買によって送り込まれたとされている。1938年に国家総動員法が敷かれると、朝鮮人労働者が炭鉱や鉱山などに強制動員されたが、企業側は朝鮮人労働者の逃亡を防ぐために「慰安所」を設けた（産業「慰安所」）。中には、朝鮮料理店を産業「慰安所」に作り変えたものもあり、相互の関連性が指摘されている。朝鮮料理店や産業「慰安所」については、樋口雄一〔2018〕、高麗博物館朝鮮女性史研究会〔2021〕などを参照。
- 3) この表は、作品の初出を参照しながら作成した。ただし、以下の作品は大村益夫・布袋敏博〔2001〕の影印本を参照した。「天使」『婦人朝日』1941年8月；「山の神々」『文化朝鮮』1941年9月；「神々の宴」『日本の風俗』1941年10月；「鼻」『知性』1941年10月。
- 4) 「土城廊」は、東京帝国大学独逸文学科の学生の同人誌『堤防』（1936年10月）に掲載された後、改定されて『文藝首都』（1940年2月）に掲載された。これらの二作品を比較してみると、多くの異同を確認できる。二作品の異同については、任展慧〔1973〕、곽형덕（郭炯徳）〔2008〕、高橋梓〔2020〕などを参照。
- 5) 「山の神々」の改作過程については、任展慧〔1975〕、布袋敏博〔1996〕、郭炯徳〔2017〕などを参照。
- 6) 「内鮮結婚」については李正善〔2018〕を参照。李によると、当時の通婚家族の法的身分を定める「共通法」にもとづき、異なる地域に属した日本国民同士の婚姻・養子縁組が結ばれた場合は、地域間での家（戸籍）の変更が行われたという。日本人女性が朝鮮人男性と結婚する場合は夫の朝鮮戸籍に入籍し、朝鮮人女性が日本人男性と結婚する場合は夫の内地戸籍に入籍することになっていたが、夫が妻の家に入籍する婚姻制度もあった〔李正善 2018: 44-45〕。よって、「光冥」の清水一家は、夫が妻の内地戸籍に入籍したと考えられる。
- 7) 一方で、「光の中に」では朝鮮人男性の「民族」めぐる葛藤が描かれたのに対し、「光冥」では「民族」をめぐる女性の葛藤（清水一家の日本人妻、朝鮮

人の父を持つ清水一家の娘たち)が描かれている点で大きく異なっている。金史良作品において「民族」をめぐる女性の葛藤が描かれたことがどのような意味を持つかについては、今後「光の中に」と併せて考察したいと思う。

- 8) また、金史良作品の中には「方言」を用いていた女性が「標準語」を用いるようになるという変化が描かれたものも見られる。たとえば、焼畑農業を行う火田民になった一家の困窮した暮らしを描いた「箕子林」(『文藝首都』1940年6月)には、「密淫売」で主人公一家の家計を助け、後に地主の妾になった「タンシル」が登場する。彼女は「方言」を使う階層に属し、自身も「方言」を用いていたが、地主の妾になった後の描写では「標準語」を用いるようになる。作品の発表時期は異なるが、このような女性登場人物の変化は「ムルオリ島」(『国民文学』1942年1月)においても確認することができる。このような特徴は、朝鮮人男性の「標準語」(国語)が植民地/帝国における「国民」主体を意味したこととは大きく異なる。金史良作品における朝鮮人女性の「標準語」がどのような意味を持ったかについて考察することについては、今後の課題としたい。

参考文献：

日本語

- ・安宇植 (1983)『評伝 金史良』草風館、1983年
- ・糸井梓 (2005)「金史良の「光の中に」論—重層する差異」『青山語文』第35号
- ・李正善 (2018)「『内鮮結婚』の子どもたち—内地人と朝鮮人の狭間で」『歴史評論』第815号、歴史科学協議会
- ・任展慧 (1973)「解題」『金史良全集Ⅰ』河出書房新社
- ・任展慧 (1975)「金史良「山の神々」完成までのプロセス」『海峡』第2号、朝鮮問題研究会
- ・林鍾国 (1976)、大村益夫訳『親日文学論』高麗書林
- ・大村益夫・布袋敏博編 (2001)『近代朝鮮文学日本語作品集 (1939-1945) 創作篇4』緑蔭書房
- ・金史良 (1939)「光の中に」『文藝首都』第7巻第10号
- ・金史良 (1940)「草深し」『文藝』第8巻第7号
- ・金史良 (1940)「コブタンネ」金史良『光の中に』小山書店
- ・金史良 (1940)「朝鮮の女」『新興婦人』第6巻第5号
- ・金史良 (1941)「光冥」『文学界』第8巻第2号
- ・金史良 (1941)「月女」『週刊朝日』第39巻第22号
- ・金史良 (1941)「嫁」『新潮』第38巻第11号
- ・金哲 (2015)、田島哲夫訳『抵抗と絶望—植民地朝鮮の記憶を問う』大月書店、pp. 171-199.
- ・郭炯徳 (2009)「『大東亜戦争』前後の金史良文学：「外地文学」から「地方文学」への変容」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第54巻第3号、早稲田大学大学院文学研究科
- ・高麗博物館朝鮮女性史研究会 (2021)『朝鮮料理店・産業「慰安所」と朝鮮の女性たち』社会評論社
- ・徐智瑛 (2016)、姜信子・高橋梓訳『京城のモダンガール—消費・労働・女性から見た植民地近代』みすず書房
- ・高橋梓 (2016)「金史良の日本語創作が生成された批評空間—植民地出身作家の交流の場としての『文芸首都』」『JunCture 超域的日本文化研究』第7号、名古屋大学大学院文学研究科附属「アジアの中の日本文化」研究センター、pp. 108-109.
- ・高橋梓 (2019)「金史良の二言語文学研究—植民地期の朝鮮語/日本語による創作を中心に」東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士論文
- ・高橋梓 (2020)「金史良の日本語作品が生成された場所としての『文藝首都』—「土城廊」の改作過程を中心に」小平麻衣子編『『文藝首都』—公器としての同人誌』翰林書房
- ・張紋碩 (2020)、柳川陽介訳「金史良とドイツ文学」『言語社会』第14号、一橋大学大学院言語社会研究科、pp. 95-96.
- ・鄭百秀 (2007)『コロニアリズムの超克—韓国近代文化における脱植民地化への道程』草風館、pp. 85-129.
- ・波田野節子 (2015)『李光洙—韓国近代文学の祖と「親日」の烙印』中公新書、pp. 160-176.
- ・樋口雄一 (1998)『戦時下朝鮮の農民生活誌 1939～1945』社会評論社、pp. 95-158.
- ・樋口雄一 (2018)「日本国内の朝鮮料理店と産業慰安所」『季刊戦争責任研究』第90号、日本の戦争責任資料センター
- ・黄鎬徳 (2007)「便秘と下痢、転向の生政治—『無明』の李光洙、植民地監獄の穴たち」『思想』第994号、岩波書店
- ・布袋敏博 (2001)「解放後の金史良覚書」『青丘学術論集』第19集、韓国文化研究振興財団、pp. 204-208.
- ・Homi K. Bhabha (2005)、本橋哲也・正木恒夫・外岡尚美・阪元留美訳『文化の場所—ポストコロニアリズムの位相』法政大学出版局、p. 148.

韓国語

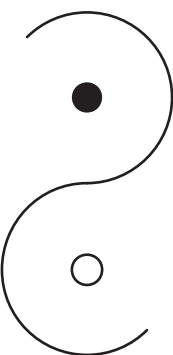
- ・곽형덕 (郭炯徳) (2008)「김사량의 <토성랑 (土城廊)> 판본 비교 연구」『현대문학의 연구』Vol35, 한국문학연구학회
- ・곽형덕 (郭炯徳) (2017)『김사량과 일제 말 식민지

- 문학』 소명출판, pp. 289-306.
- 김철 (金哲) (2006) 「두 개의 거울: 민족 담론의 자화상 그리기 - 장혁주와 김사량을 중심으로」 『상허학보』 Vol17, 상허학회
 - 다카하시 아즈사 (高橋梓) (2020) 「김사량의 번역과 일본어 창작에 나타난 ‘방언’에 관한 고찰」 『동방학지』 Vol191, 연세대학교 국학연구원, pp. 30-35.
 - 야나가와 요스케 (柳川陽介) (2019) 「김사량의 일본어 수필 「조선의 여자 (朝鮮の女)」」 『구보학보』 Vol23, 구보학회
 - 윤대석 (尹大石) (2001) 「식민지인의 두 가지 모방양식: 『문예』 지 「조선문학특집」을 중심으로」 『한국학보』 Vol104, 일지사, pp. 58-66.
 - 윤대석 (尹大石) (2006) 『식민지 국민문학론』 역락, p. 21.
 - 임종국 (林鍾國) (1966) 『親日文學論』 平和出版社
 - 호테이 도시히로 (布袋敏博) (1996) 「일제말기 일본어 소설 연구」 서울大學校大學院國語國文學科現代文學專攻碩士論文

特集

日本文学にあらわれた 「不逞鮮人」と朝鮮人女性

—中西伊之助「不逞鮮人」と田宮虎彦「朝鮮ダリヤ」を手がかりに—



原佑介

キーワード

日本近代文学, 関東大震災, 「不逞鮮人」, 中西伊之助, 田宮虎彦

1. 「不逞鮮人」再考——関東大震災時朝鮮人虐殺事件 100 周年を見据えて

2023 年が近づいてきた。関東大震災直後に日本人たちが同時多発的に引き起こした朝鮮人無差別虐殺事件から、いよいよ 100 年が経とうとしている。2010 年（韓国併合 100 周年）や 2019 年（三一独立運動 100 周年）、2020 年（朝鮮戦争開戦 70 周年）などにつづいて、日本の朝鮮植民地支配の歴史についてあらためて深く考えるべき節目の年が目前に迫っている。

ただそれは、過去の重要な出来事をふりかえるきっかけというより、現代性を強くおびた深刻な課題だというべきだろう。1923 年の朝鮮人ジェノサイドは、近代日本の社会と民衆の歴史においてきわめて重い意味をもつ。ところが、いまそれが、年月の経過による自然風化というより、積極的な否定論によって、全然なかったことにされようとしている。

その旗振り役の一人が、一見柔和で遠回しの、しかし断固とした否定論をかかげて譲らない小池百合子東京都知事である。よく知られているとおり、2017 年に小池は、関東大震災で「犠牲になられた全ての方々に哀悼の意を表した」と述べ、天災の

被害と人為的虐殺の被害の差異をぼかすことによって虐殺の事実自体をもみ消そうとする挙に出た。虐殺の有無については「様々な見方がある」などと明言を避け、「両論併記」の理屈を盾にして事実上の否定に踏みきった[『朝日新聞』2017 年 9 月 2 日]。そこで弄されているのは、特定の死者を特別視しない、差別しない、という白々しい「平等」のレトリックである。「Black Lives Matter」という反レイシズムの叫びを無効化しようとする「All Lives Matter」という白人至上主義の屁理屈と同質の詭弁にはかならない¹⁾。このような詐術的なレイシズムが公の場で堂々と開陳されるほど、現在の日本では、平等や差別を語る言葉の重みが失われている。

「ある日本人がいて、自分は朝鮮人に対してなんら差別をしなかった、と言う。このような人は、多いのである。この人のこの表現が、実はその日本人の「優越感」を支える。ここでは、平等も、差別も、同じ歴史を持つゆえに、同義語と化するのだ」——朝鮮植民者三世だった詩人の村松武司（1924-1993）は、自身もその一部であったところの植民者の歴史について語るなかでそう述べた。「創氏改名」をはじめとする同化政策の「平等」が実際は差別以外のなにものでもなかったように、「一つの言葉が二つの意味を持ち、二つの言葉が一つの意味を持つ」のが植民地というものなのだ、と村松は喝破した[村松 1972: 259-260]。これを受けて、磯貝治良はこう指摘する。平等と差別は、本来ならば真向から対立すべきものであるはずなの

に、「植民地侵略というおなじ歴史的土壌のうえにそれらが在ることによって、同義語と化してしまう。人間にとって称揚さるべきものと、否定さるべきものとの境界までもとり払い、うばい去ってしまう歴史——それが植民地支配であり、植民者の時間であった」[磯貝 1992: 80]。

小池の虐殺否定論は、直接的な否定を狡猾に避け、穏和に「平等」を語るふりをしながら、実際には陰険に差別と排除を焚きつけている。「平等」の論理を悪用して——ある種の人質にして——差別を不可視化したうえで煽動するという二重に陰湿な否定論は、まさに「一つの言葉が二つの意味を持ち、二つの言葉が一つの意味を持つ」「植民者の時間」の延長線上にある。そして重大なことに、虐殺の否定は、虐殺そのものとまったく同じように、官民一体となって推し進められている。

前置きが長くなったが、本稿では、このような現状を念頭に置いて、日本文学にあらわれた「不逞鮮人」という言葉にあらためて着目してみたい。この差別用語が喚起する集合的イメージは、1923年のジェノサイドをめぐる現代の「記憶の政治」の場に、「犯人は不逞朝鮮人、朝鮮人コリアンだったのです」、「不逞在日朝鮮人たちによって身内を殺され、家を焼かれ、財物を奪われ、女子供を強姦された多くの日本人たち」といったかたちで、しばしば影のようにあらわれる²⁾。この言葉はまさに「ジェノサイドの残響」であり、あの虐殺を引き起こした暴力がいまだに存在することをはっきりと示す証拠である[加藤 2014: 6]。

本稿では、日本人の植民地主義的な朝鮮人観を批判した二編の小説、中西伊之助(1887-1958)の「不逞鮮人」(1922)と田宮虎彦(1911-1988)の「朝鮮ダリヤ」(1951)を取りあげる。作者の文学史的な位置や作品の発表時期にはさほど相関性はないが、「不逞鮮人」表象をテーマにした例外的な小説だという点で、対比に値する。さまざまな検討が可能だろうが、国際高麗学会日本支部第25回学術大会(オンライン、2021年5月30日)のシンポジウムのテーマ「女が書く、女を書く——文学の中の在日朝鮮人女性」に合わせて、二つの作

品のなかで、日本人たちから「不逞鮮人」と表象される朝鮮人男性とその対となる脇役の朝鮮人女性、そして両者の関係がどのように描かれているか、について考える。立てられる問いは、朝鮮人女性がどのように描かれたか、というより、むしろどのように描かれなかったか、というものになるだろう。

2. 日本近代文学と三・一運動、そして「不逞鮮人」

そもそも「不逞鮮人」という言葉は、植民地支配に抗議し民族独立を希求する朝鮮人を非道徳的で異常な「野蛮人」として一方的に非人間化する言葉であった。帝国日本の植民地主義を凝縮したような横暴な差別用語であり、日本語におけるいわゆるヘイトスピーチの原形のひとつだといえる。言葉としての直接的な起源は三・一運動にあり、植民地権力が使いはじめたとされる[松田 2009: 323-325]。それがおもに新聞報道をつうじて宗主国にも伝播し、一気に浸透していった[金富子 2014: 3-5]。こうして、犯罪や陰謀、テロリズムと結びついた負のイメージは、日本人のあいだで朝鮮人全般にたいする観念的な恐怖心と憎悪を増幅させ、1923年のジェノサイドの下地になる。

近代日本の精神史において三・一運動とは、「対等の文化を持つ〈他者〉として認められること」がたえてなかった「朝鮮の民衆が、日本には同化されぬみずからの〈他者性〉にもとづいて独立のため立ちあが」った衝撃的な事件であった。植民地支配への抗議というかたちで「朝鮮という〈他者〉が顕在化することによって、近代日本は西洋という〈他者〉以外、もうひとつの内なる〈他者〉との対決を一九一九年以後強いられることとなる」のである[渡邊 2003: v - vi]。ところが、結果的に宗主国臣民たちは、この帝国内部の「他者」との「対決」を徹底的に忌避した。そのことは、日本近代文学史に植民地朝鮮と真摯に向き合った作品がほとんどみあたらないだけでなく、戦後に

入ってさえこのような傾向に大きな変化はみられなかった、という事実を顧みれば否定すべくもない〔鶴見 1967: 189〕。つまるところ「不逞鮮人」表象とは、「内なる〈他者〉」と向き合うという困難な課題を回避するため、その「他者」はそもそも向き合うに値しない異常者なのだと一括的に処断することによって問題そのものを消し去ってしまうおうとする支配者側の自己正当化の言説装置であった。

1920年代は、このような言説装置をつうじて、日本人たちの朝鮮人にたいする憎悪と侮蔑意識、そしてそれらを当然視する集団的な思考停止が植民地帝国そのものの不可分の一部と化していく時代でもあった。中西の「不逞鮮人」と田宮の「朝鮮ダリヤ」は、そんな時代の不穏な空気を的確にとらえている。それにしても、二つの作品は、なぜ日本人読者を居心地悪くさせる「不逞鮮人」という言葉を前面に押し出したのだろうか（とくに、あえてこれをタイトルに採用した中西の挑発的な戦略には、言説の拡大再生産に加担しかねない危うい面がある）。それは、抑圧と同化によって眼前から消し去ろうとしている「内なる〈他者〉」——植民地朝鮮と対峙することをなんとしても避けたいという帝国日本の隠された怯えの感情を、かれらが察知していたからだと思われる。

まず、中西伊之助の「不逞鮮人」について簡単にみておこう。この作品は、1910年代前半に平壤で新聞記者として生活し、筆禍事件を起こして投獄されたこともある作者の実体験をもとにした植民地小説で、関東大震災の前年である1922年に発表された。作品内の時代は作品発表年と同じ「現代」、場所は朝鮮北西部のとある辺境、という設定になっている。物語の大筋は、日本人たちのあいだで「不逞鮮人」と呼ばれている朝鮮人が実際のところどんな感じなのか自分の目でたしかめたいと思い立った一人の日本人青年が、「排日鮮人団の首魁であると目されている」人物にはるばる会いに行き、その人物の家で恐怖と幻想にみちた一晚をすごす、というものである。張りつめた雰囲気の中かで少しずつ対話が進み、家の主人が独立運

動家になったのは「京城」で三・一運動に参加していた当時20歳の愛娘が鎮圧隊に虐殺されたためだ、ということがあきらかになる。結末は、日本人たちに恐れられ忌み嫌われているその朝鮮人は普通の人間で、悪魔化された集団としての「不逞鮮人」イメージは日本人たちの倒錯した被害妄想と差別意識がつくり出した虚像にすぎない、というものである。作品全体が1923年のジェノサイドをあたかも予言するかのような切迫した危機意識にみちており、なによりも発表のタイミングそのものに重要な意義がある。1919年から1923年への道筋を見通していた中西の鋭い歴史眼が発揮された傑作だといってよい〔黒川 1996: 332-333〕。

一方の田宮虎彦「朝鮮ダリヤ」は、1951年に発表された戦後文学である。こちらは、中西の「不逞鮮人」とちがひ、植民地支配の終焉後に往時をふりかえって反省する、という体裁をとる。よく知られているとおり、この作品が発表された朝鮮戦争期の日本では、在日朝鮮人にたいする一般的イメージが政治的にいっそうゆがめられていた。法的にも、帝国期の異民族支配機構を温存した入管法制が構築され、在日朝鮮人の地位は大きく揺らいでいた〔梁英聖 2020: 169-187〕。その一方で、文学界では朝鮮への関心が比較的高まっており、「朝鮮ダリヤ」と同じ1951年に堀田善衛「広場の孤独」（芥川賞受賞）が、その翌年には金達寿「玄海灘」や張赫宙「嗚呼朝鮮」などが発表された。宮本百合子「播州平野」（1947）などをはじめとして、日本の戦後文学には、その黎明期から、朝鮮植民地支配の歴史を反省しようとする注目すべき動きが少数ながらあったが、田宮の「朝鮮ダリヤ」はこのような試みのひとつだといえる〔渡邊 2003: 130-151〕³⁾。

中西の「不逞鮮人」に比べても知名度がさらに下がり、先行研究もほとんどないマイナーな作品であるため、こちらの内容はやや詳しく紹介しておかなければならない⁴⁾。物語のおもな舞台は、語り手である「私」が中学生だったころの神戸である。語り手には作者自身が投影されているので、時代は1920年代なかごろと思われる（田宮は1924

年から5年間、神戸第一中学校に在籍した)。物語は、語り手が、目下の朝鮮戦争を意識しつつ、中学時代のクラスメイトだった呉炳均という朝鮮人のことを回想するという構成になっている。

呉炳均は、語り手より数歳年上だったが同級で、極貧生活のなかで苦学しながらも抜群の成績を収める優等生であった。級友たちと容易に打ち解けない固さ、極端なまでの勤勉さ、そして成績順位や教師たちの評価への執着など、帝国への過剰同一化に駆られる「模範的な被支配者」として、ひとまずは造形されている（在日朝鮮人作家の李恢成が樺太での天皇制ファシズム体験をふりかえって「強いられた境遇での奴隷の真面目さ」と形容したように、このような朝鮮人青少年像は、在日朝鮮人文学の重要なテーマのひとつでもあった[李恢成 1978: 131]）。物語は、呉炳均ら当時の在日朝鮮人が、従順な「二等臣民」たる「半島同胞」か、さもなくば身の程知らずにも帝国に盾突く「不逞鮮人」か、という表裏一体の両極的な被植民者像のなかにおしこめられている状況をたくみに浮かび上がらせていく。

ところで、呉炳均には淑春という妹がいた。兄妹が母親と暮らすあばら家を訪ねた際にたまたま淑春をみかけた語り手は、淡い恋心をいだき、貧困と汚穢のなかでつましく咲く朝鮮ダリヤの花を彼女と重ね合わせる。その後、母親の死によって兄妹の生活はいっそう困窮し、過酷な肉体労働を余儀なくされた呉炳均の学業は破綻しかかる。同情する主人公は、ひたすらな善意から、知り合いの会社社長に呉炳均兄妹を家庭教師・女中として雇ってやってくれるように談判し、おかげで社長宅に住みこみで入れるようになった二人は、どん底の生活から抜け出す。ところがどういうわけか、兄妹はその家をわずかひと月ほどで出てしまう。呼び出しを食らった語り手は、神経質な女主人にねちねち叱られる。

呉淑春が悪い女であるとか、兄妹が家に来たから刑事がうるさく来て仕方がないなどといったいろいろなことをきんきんひびく声で

なぜつけられたのだが、その中で、私は、
「不逞鮮人じゃないの」

といった女主人の言葉を忘れることが出来ない。しかし、具体的にどういうことを呉炳均兄妹がしたかということは、女主人のヒステリーじみた声からは、私にはわからなかった[田宮 1972: 252]。

この女主人の物言いは、「不逞鮮人」イメージが当時の日本人のあいだでもはや説明を要しないほど広く共有されていたことを示唆する。窮地を救ってくれた語り手にへつらうようなそぶりをみせていた呉炳均は、今度は手のひらを返したように態度を硬化させるが、しばらくして、なぜか中学校を除名になって忽然と姿を消してしまう。あれだけ教師たちの覚えめでたかった呉炳均がなぜ学校を去ることになったのか、もやもやした疑問が語り手の胸に残る。田宮は、語り手と呉炳均のぎこちない関係を丁寧に描写することをつうじて、たとえ中学生であったとしても、日本人が、「不逞鮮人」の烙印を押されて社会から排除される脅威につねにさらされている朝鮮人と通じ合うことは構造的に至難だという現実を浮き彫りにしている。

10年後、すなわち1930年代、語り手は偶然再会した中学時代の友人から、呉炳均が「ちょっとしたもん」——「不逞鮮人」になっているということを聞いて衝撃を受ける。呉炳均のことを「権威には阿諛追従する狡智な朝鮮人」だとばかり思っていた主人公は、かれが「逞しい反日分子」に変貌していたことにおどろくとともに、ある種の敬意をい込む[田宮 1972: 255-256]。

そこからさらに月日が流れ、戦後、語り手は、これも偶然に、呉炳均が「不逞鮮人」になった理由を知るようになる。かれが「ラジカルな反日思想」をもつようになったのは、語り手が斡旋した例の社長宅で淑春が主人に強姦されたからであり、彼女はその後娼妓になって病死してしまった、ということであった。愕然とする語り手が、呉炳均兄妹の母親の葬儀の日、「黄いろいうらぶれた朝鮮ダ

リヤの花のそばにじっと立ちつくして泣いていた呉淑春の、あの白い上衣チョグリと白い下袴トンチマを着た悲しげな姿」を回想するところで、物語は終わる〔ルビ原文。田宮 1972: 262〕。いかにも田宮虎彦らしい物悲しいリリズムをもって、「戦前の日本人の朝鮮人認識の歪みを、深い反省と悲しみをこめて告発した作品」であった〔渡邊 2003: 148〕。

このような「朝鮮ダリヤ」の世界観の土台として、田宮が朝鮮植民地支配の歴史をどのように認識していたのかがよくわかる「日韓の中」という短文がある。1988年4月の自死の直前に発表されたものだが、奇しくも、これがかれの事実上の絶筆となった〔山崎 1991: 344〕。折しも長い「昭和」が幕を閉じようとしている時期だったが、田宮は植民地支配の加害にたいする認識がどんどん薄れてきている日本の現状に危機感を示しつつ、つぎのように述べている。「日本人は朝鮮をもともとからの自分の土地であるかのように考えていたようであった。だから、太平洋戦争が終わって、戦争の反省が行われるようになった時でも、明治初めから日露戦争後にかけて、日本が朝鮮に対して行った侵略についての反省は全くといっていいほどしなかった。日本人の反省は、山海関から河北省に侵入した攻撃を反省するにとどまったに過ぎない。日本人は満州までも自分のものと考えていたのである」〔田宮 1988: 1〕。

このように田宮は、戦争と植民地支配にたいする反省の内容を明確に区別する。戦争における直接的な暴力とは別次元の、植民地支配が被植民者たちにふるう継続的でしばしば不可視的な、いわば日常化・恒常化した制度的・政治的・経済的・社会的・文化的・精神的その他もろもろの暴力の問題にたいするきちんとした認識と反省が必要だと訴えかけているのである。「朝鮮ダリヤ」は、呉炳均兄妹が受けていたこのような植民地主義の暴力を描き出そうとした作品であった。

3. 沈黙する「朝鮮ダリヤの花」

中西伊之助の「不逞鮮人」と田宮虎彦の「朝鮮ダリヤ」は、朝鮮人女性表象という観点に着目すると、共通点がいくつか浮かび上がってくる。まず、物語を動かす主要なファクターである「犠牲者」の役を若い女性に割り当て、可憐な蝶や花のイメージと重ね合わせて表象している点が挙げられる。「朝鮮ダリヤ」は題名からしてそうだが、中西の「不逞鮮人」でも、男性同士の対話のなかで間接的にのみ登場する独立運動家の娘の姿かたちは、日本人男性の想像をつうじて一度だけ具体的にあらわれる。「純白の羽根と漆黒の長い尾をもった、あげはの蝶のような美しい女が、大きい群衆の濤の中にきりきりと舞って、ぱっと紅の血に染って倒れてしまった。冬の夜に冴えた月光のように輝く刃を振り翳した灰褐色の人間が、つむじ風のごとくその上をくるくると廻ると、顔一ぱいに剝いた大きい眼と、横笛をくわえたように見える裂けた口でげらげらと小気味よさそうに嘲笑いをして、また呻りを立てながらどこかへ飛び散ろうとする」〔中西 1996: 54-55〕。

中西の小説では、三・一運動のさなかに虐殺された娘は当時「女学生」だったという設定になっている。このこと自体は、三・一運動を歴史的に理解するうえで非常に重要な点を探りあてており、注目に値する。三・一運動にかかわって検挙された朝鮮人の大多数は男性だったが、それでもなかには少数の女性もいた。このうち、男性の職業や身分はかなり多種多様だったのに対し、女性の約半数は普通教育以上を受けた層だったという〔全炯奎 2019: 389-393〕。このことであらわれているとおり、学生や教師など近代教育を受けた女性たちの積極的な参与は、三・一運動の大きな歴史的特徴のひとつであった。近代朝鮮の女性運動史や学生運動史の側面からみると、三・一運動は女性、とりわけ「女学生」が「歴史の主体」として前面に躍り出た史上初の画期となった。旧い身分のちがいを越えたひとつの主体的集団として本格

的に範疇化しつつあった「新女性」たちは、その後も活発に植民地朝鮮の諸現実に関わりかけ、女性運動は社会運動や独立運動と連動しつつ急速に発展していく〔김정인 2019: 17〕。

これに関連して権ボドゥレは、中西の「不逞鮮人」発表の翌年に『東亜日報』に連載された李熙喆の小説「泣血鳥」(1923)の記述——「学校へ行こうと自分の家から出かけるときも、門を出ようかどうしようか迷うほどの、そういう朝鮮の女の心理からすれば、鐘路交差点で手をあげて万歳を叫ぶときの興奮は如何ばかりか」——を踏まえ、つぎのように指摘する。「三・一運動をつうじた女性の変貌はおどろくべきものであった。もともと公的・社会的な存在だった男性とちがって長きにわたり家庭内の存在だった女性は、三・一運動をつうじてはじめて社会的な基盤を得る」〔권보드레 2019: 408-409〕。このように、小説「不逞鮮人」で作者からある種の引き立て役を割りふられた「排日鮮人団の首魁」の娘は、歴史的に特異な先駆者の一人だったわけだが、作品にはその女性の経験や心のふるえ——「鐘路交差点で手をあげて万歳を叫ぶときの興奮は如何ばかりか」——に想像力を働かせようとした痕跡はみられない（これにたいして、小説「不逞鮮人」発表から半世紀もの時を経てのことだが、植民地期の朝鮮の女たちを主人公にした角圭子の長編小説「朝鮮の女」(1972)が、三・一運動に参加して高揚感を爆発させる朝鮮人女性たちの姿を活写したことは特筆に値する。この小説では、三・一運動を悲壮な闘争の場としてだけでなく、ある種祝祭的な人間解放の場としてもとらえようとする視角が生きている。ここに、「戦後」という経験が日本文学にもたらした朝鮮認識の飛躍を認めることができる〔角 1972〕）。

「犠牲」になる朝鮮の娘たちの従属性・受動性は、彼女たちが男性主人公たちに向かって一言も言葉（セリフ）を発しない、というところに、作者たちの意図をこえて象徴的にあらわれているようにみえる。「朝鮮ダリヤ」では、語り手と淑春の最初の出会いはつぎのように叙述される。

家の中には、その半裸の老女〔呉炳均の母親〕のほかに、ちょうど私と同じ年頃だと思われる少女がいた。最初、私が声をかけた時、先ず私に気づいたのは、その少女の方であった。そして、少女は朝鮮語で何か叫ぶようにいった。澄んだきれいな声であった。夕方の薄明りの中で、その少女の着ている朝鮮服の赤い上衣と黒い下袴とが、私の眼にうつった時、私は、それが呉炳均の妹だとすぐわかったように思う。朝鮮女特有の瓜実顔で、呉炳均の顎の出っぱった四角い顔からは想像されないほど、かほそい頼りない感じであった。

私が母親と話している間、妹は、母親のかげにかくれるようにしていた。母親のわかりにくい言葉に、私が幾度か聞きかえしている間、私は、その妹が母親にかわって何とか答えてくれないかと、助けをもとめるような気持ちで妹の顔を覗きこむようにしたが、妹は、最初朝鮮語で母親に叫んだ時のほかは、私には、ひとことも口をきこうとしなかった〔ルビ原文。田宮 1972: 247-248〕。

このように、朝鮮語を解さない語り手は、日本語を口にしようとしめない淑春とともに交流する機会をもたない。物語全体を見渡しても、呉炳均はややくせのある日本語を駆使してそれなりに日本人社会に関与する一方、淑春のほうは、日本人男性の目線で構築された作品世界においてはただ孤立しているようにみえる。語り手や兄と短い会話をするのが間接的に示される場面があるものの、その声がセリフとして表記されることはない。

呉炳均兄妹の母親の葬儀に出かけた語り手が淑春と再会する場面でも、やはり両者は意思疎通を果たさず、日本人の耳に兄妹の朝鮮語が届くこともない。

私が呉炳均の家に出かけてゆくと、一年前とそのまま同じように咲いている朝鮮ダリヤの花のかげで、今日の葬式のために着たのであろう真白い上衣と下袴を着た呉淑春がぼん

やり立っていた。私が近づくのも気づかぬようにたたずんでいるのであったが、近づいてみると、呉淑春は真赤になきはらした瞳から、とめどなしに涙をながし、かすかにしゃくりあげていた。そして、家の中から、押しころしたような低い声で妹を叱る呉炳均の声が聞えた。そのたびに、呉淑春は涙をぬぐっている。私は、呉炳均の怒鳴っている朝鮮語の言葉の意味はわからぬままに、それが、

「泣くな」

と叱っているように思えた〔ルビ原文。田宮 1972: 249〕。

このような女性の寡黙さの表象は、中西の「不逞鮮人」にも共通している。作品世界のなかで独立運動家の娘の声が一度も発せられないことが本人の性格のみに起因するものではなかったことは、女性教育にたいする家父長の保守性というかたちで間接的に示される。あくまでも朝鮮の伝統を堅守したうえで民族の独立を求める父親は、娘が三・一運動に参加して死んでしまったのは近代教育のせいで、彼女を女学校に入れたことを後悔している、と日本人青年に打ち明ける。そうして、「女は学問してはいけません」「女は昔の朝鮮の女がいい」「私の娘は、昔の朝鮮の女なら、それは死ななかった」などくりかえし強調し、女性が教育をつうじてみずからの言葉をもつことにははっきりと反対する〔傍点原文。中西 1996: 50-51〕⁵⁾。

ところで、実際に三・一運動で投獄された経験をもつ朝鮮人女性が、獄中で日本の官憲から浴びせられて憤慨したという暴言について証言している。「おまえがいわゆる朝鮮の女か？ おまえらごときが生意気になんで政治なんかにかかわるんだ？ 朝鮮の女は政治にかかわるのはまだ早い。おまえらはせいぜい家庭でも改良して、子どもでも育てていろ」〔『東亜日報』1920 年 4 月 20 日〕⁶⁾。抑圧的な女性観において、このような日本の植民地権力の言説と作中の独立運動家の考え方にはあきらかに相通ずる部分がある。

李南錦によれば、朝鮮で伝統的に女性の美德と

された「三従之道」の観念は、植民地権力の政治的意図と実質的に合致していた。「女性が学校に通い始めたのは、それまで家から自由に外出できず閉じこめられていた朝鮮の女性たちを外に呼び出した革命的な〈事件〉であったが、それが植民地朝鮮では、日本の帝国主義の同化政策に利用される一方で、朝鮮民族主義の言説からも〈民族の妻〉〈民族の母〉を作る道具として利用される結果になる。植民地朝鮮の女性たちは伝統や因習からの差別だけでなく、近代教育における民族や性による差別にも耐えなければならなかったし、支配国日本の他者として、また自国の男性たちの他者として排除・抑圧される辛い状況に置かれていたのである」〔李南錦 2006: 42〕。中西と田宮の作品は、このように朝鮮人女性が多重的に「他者」にされていた現実を図らずも映し出しているようにみえる。

さらに、両作品とも、朝鮮人男性が「不逞鮮人」になる理由として、かれらにとって保護と訓育の対象である若い女性を無残に奪われる事件を伏線にしている。忍従のうちに「犠牲」になった「民族の娘」のためにその「庇護者」たる朝鮮の男がいよいよ立ち上がり、それに「良心的な」日本の男が一定の理解を示す、という話の筋になっているわけである。これは、帝国の加害性と植民地の被害性を強調するある種の植民地主義批判を意図していることだろうが、朝鮮人女性がかうむっていた重層的な抑圧の構造を結果的にみえにくくしている。そこには、誇りやたくましさを神聖視する民族主義をめぐる男性植民者と男性被植民者のホモソーシャルな関係が透けてみえる。

女性表象をめぐる議論から逸れてしまうが、さらに付け足すとすれば、このような物語の組み立て方は、植民地独立運動を外発的な動機にもとづくものとみなし、そのぶんだけ朝鮮人の主体性や自律性を軽視する「他律性史観」の一種だといえなくもない。なぜならそれは、朝鮮人は家族をはじめとする大切な人を奪われるような極端な悲劇さえなければ唯々諸々と隷属状態に甘んじる受動的な人びとなのだ、という見方を内包しているか

らである。

しかし、実際の多くの独立運動は、そのような受け身のものではなかった。むしろ独立運動家たちは、朝鮮の共同体の内部、あるいはときに帝国日本の学問体制のなかで、植民地支配の不義に抗う知性や勇気や行動力をみずから養う過程を経て、主体的にその道を選びとったのであった。たとえば、植民地朝鮮の独立運動家を間近でみた日本人に、磯谷季次（1907-1998）がいる。磯谷は、咸興で工場労働者として朝鮮人たちと一緒に働いたなかで、朝鮮人の家に下宿し、朝鮮人共産主義者たちと親しく交わるようになり、かれらをつうじて朝鮮の言語や文化を全身で学んだ。そして、やがてかれらとともに労働運動にかかわって逮捕され、1932年から10年もの長きにわたって植民地監獄につながれた。植民者でありながら被植民者たちとともに植民地体制と闘ったきわめて例外的な経験の持ち主であり、「不逞鮮人」と呼ばれた朝鮮人たちの真実をかれ以上に知る日本人はいないといっても過言ではない。磯谷の回顧録をみると、朝鮮人たちが独立運動家になるに至るには、自発的な教育と学習によって人生と社会のビジョンを共同的に獲得していく経験が大きかったことがよくわかる。少なくとも磯谷がみた「不逞鮮人」たちの独立運動は、音楽や歌や笑顔に彩られ、じつに明るく充実感にみちた側面が大きく、中西や田宮が表象したような悲愴なイメージのみではすべてを語ることはできない〔磯谷 1984: 64-76〕（この点に限るなら、三・一運動の祝祭としての側面をつかみとった上述の角圭子「朝鮮の女」は、同じ戦後文学でありながら、田宮の「朝鮮ダリヤ」よりはるかにすぐれている）。また、日本人にたいして生涯誇りをもって「不逞鮮人」と自称しつづけた独立運動家の金顕杓（1913-1974）も、自分を独立運動にいざなったのは朝鮮の若者たち自身による「読書会」だった、と証言している〔金顕杓 1978: 15〕。日本の文学者が、このような朝鮮人たちの独立運動の内発的な論理と実践の過程を見落とさずに作品のなかに組みこむことは、磯谷のような稀有な生き方を選んだ者でなければ至難のわざだっ

たにちがいない。中西や田宮もまた、当然ながら社会性や共同性を強くおびていた植民地独立運動を、あたかも私情にもとづく私的な営みであるかのように矮小化する発想があったように思われる。

こうして、多くの死角を内包しながらも、中西伊之助と田宮虎彦は、1920年代の日本人たちのゆがんだ朝鮮人観を内在的に告発した。一方、当時の朝鮮人たちのあいだでは、日本人たちにとっては嫌悪と蔑視の対象でしかない「不逞鮮人」が、むしろ「国士」や「志士」のような真逆の意味をおびる可能性がひらかれていた〔李昇燁 2005: 134-135〕。中西の「不逞鮮人」は、帝国と植民地のあいだで起こっていたこのようなイメージの反転を見事に形象化した作品であった〔ヘイグ 2011: 93〕。

とはいえ、このような価値の転覆は、「不逞鮮人」表象そのものに埋めこまれている男性中心主義を揺さぶるものとはならなかった。この点は、朝鮮人男性文学者が示した「不逞鮮人」表象をみると、より明確に浮かび上がってくる。一例を挙げれば、田宮の「朝鮮ダリヤ」と同時期に発表された金達寿の長編小説「玄海灘」に、「不逞鮮人」言説にかんする印象的な記述がある。金達寿は、「皇民化教育」全盛の1943年の「京城」でひそかに民族教育を受ける朝鮮人男子中学生が書いた作文というかたちで、帝国側の「不逞鮮人」表象を逆手にとってそれを反転させ、むしろ知性と武勇にみちた逞しい闘士としてとらえなおしてみせた。「ぼくは日本語のなかで、一つだけ好きなことばがある。それはいわゆる“不逞鮮人”ということばだ。ぼくはこの言葉を歓迎する！　そうして“不逞鮮人”そのものを歓迎し、これはかつ尊敬する！　なぜならばこの“不逞鮮人”こそは、ぼくの日ごろもとめてやまないものであり、ここにこそ、わが民族の心の故郷があるからである」〔金達寿 2006: 345〕。しかしながら、ここで逆説的に称揚されているのはあくまでも男性本位の民族主義とヒロイズムであって、それ以上ではないようにみえる。

三・一運動以後の1920年代は、朝鮮の内外で

もっとも多様かつはげしい抗日運動がくりひろげられた時期であった〔松田 2009: 239〕。その流れのなかで、1923 年 9 月、「不逞鮮人」のレットルを貼られた多数の朝鮮人が無差別に虐殺されたわけだが、被害者のなかには、残虐に殺戮された女性も多数ふくまれていた〔西村 2018: 164-165〕⁷⁾。彼女たちはいったい何者であるがゆえに殺されなければならなかったのか。帝国の「不逞鮮人」言説はもちろんのこと、中西の小説のような対抗言説にも、そしてその対抗言説をさらにスライドさせた金達寿の植民地小説の記述にも、これらの無残な死を説明するコードはない。

4. 文学が「他者」を書くということ

中西伊之助の「不逞鮮人」や田宮虎彦の「朝鮮ダリヤ」は、日本人男性が朝鮮人の男性や女性を描いた文学作品であった。とりわけ朝鮮人女性を描くうえで、中西や田宮は、植民地主義や性差別のフィルターが重なり合う他者認識の困難さに直面していたわけだが、それゆえにこれらの作品は、文学が「他者」を描くことをめぐるさまざまな問いを惹起せずにはおかない。すなわち、そもそも日本近代文学が被植民者や女性などの「他者」を書くとはどういうことか、それは果たして可能なのか、もし不可能であるならそれはなぜか、といった問いである。最後に、日本近代文学にあらわれた朝鮮人像というテーマを先駆的に追究した高崎隆治の研究を手がかりにして、こうした問題について考えてみたい。

日本文学を植民地主義批判の観点からとらえなおす総合的な研究が戦後日本であらわれたのは、ようやく 1980 年代はじめのことであった。金達寿ら在日朝鮮人が発行する『季刊三千里』誌上で、日本人研究者の高崎隆治と磯貝治良がそれぞれ連載を担当し、日本文学にあらわれた朝鮮および朝鮮人というテーマをはじめて俯瞰的に検討した⁸⁾。

日本の文学者たちの朝鮮にたいする無理解・無関心を慨嘆する高崎は、旅行者であろうが植民地

在住者であろうが、支配国の人間が「被支配者としての他民族の内面を探りあてることが至難中の至難である」と断言し、つぎのように述べる。「にもかかわらず、湯浅〔克衛〕らが好んで用いた方法、つまり作家が、他民族の人間をフィクションの主人公に仕立て、自己の独断によってその人物を動かし言葉をしゃべらせることは、まさに神を畏れぬ者の仕わざとしか言いようがない。文学者は、しょせん植民地の定住者であろうとなかろうと、植民地における日本人を描くか、日本人の目をとおして観察した他民族の生きざまをとらえる以外にないのだ。みずからを他民族に仕立てることは中途半端な国籍不明の、いってみれば他民族の皮をかぶったにせ者の創出でしかありえないのである」〔高崎 1982: 25-26〕。

このように高崎は、植民者が被植民者を書くことの不可能性、もっといえば危険性や暴力性に警鐘を鳴らした。植民地朝鮮にかかわる日本のテキスト群を研究史上はじめて範疇化・網羅化するという非常な労作の作品年表を作成した高崎の実感的な言葉であるだけに、この批判は重い〔高崎 1982: 122-132〕。しかしながら、やはりこの意見は、結果的に文学の可能性を狭めてしまう極論であるように思われる。

高崎の論理を突きつめると、では女が男を書くことはどうか、朝鮮人が日本人を書くことは、若者が老人を書くことは、あるいは現代人が過去の人間を書くことはどうなのか、といった際限のない問いにも、必然的にことごとく不可と答えざるをえなくなる。他者認識の障壁は無数に存在するのであって、植民地主義やレイシズムのみを特権化する一方で性差や年齢差、貧富の格差、あるいは思想信条や時代の差異などは許容する、というわけにはいかないだろう。「他者」が自己以外のすべての人間（動植物はもちろんのこと、星や風といった自然、あるいは地球外生命体さえも文学は擬人化して描くことがあるのだから、人間に限定するのはかならずしも妥当ではない）を指すものである以上、日本人男性にとって朝鮮人や女性だけが「他者」なのではない。ある日本人男性にとっ

て、別のある日本人男性はもちろん「他者」である。そうすると、結局のところ文学に卡ろうじて許されるのは（金達寿や金石範、李恢成ら多くの在日朝鮮人文学者が批判した）あの「日本的な」自然主義文学、私小説だけだ、という話になってしまう。

そもそも、「他者」を描くリスクを犯すことは文学の存立条件そのもののなのであり、その意味では、危険でも暴力的でもない文学というものはほとんどありえない。この前提からすれば、たとえば日本人が朝鮮人を描くことは不可で、朝鮮人が日本人を書くことや貧しい人が富める人を書くこと、女が男を書くことは可、というような諸々の判断は、必然的に恣意的にならざるをえない。川村湊のつぎのような日本近代文学批判は、高崎のいう「神を畏れぬ者の仕わざ」に、むしろ文学の可能性を見出そうとするものである。「小説家が自分以外の人間の内面に潜り込み、その人間に成り替わって“自分”を語り始めるというのが、小説とはいわずとも、物語を作りだす原初の根にあるものと思うのだが、日本の近代文学は朝鮮人、中国人といったアジアの隣人に対しては、そうした創作的な想像力がきわめて鈍感にしか働かなかったように思える」[川村 2015: 8]。

高崎は、朝鮮人にたいして「創作的な想像力」を働かせた日本近代文学の数少ない作品をことごとく惨憺たるものだったと断じたわけだが、果たしてそうだろうか。結論を出す前に、たとえば夭折の反戦詩人・檳村浩（1912-1938）の詩「間島バルチザンの歌」（1932）を慎重に分析する作業などが、日本近代文学研究には残されているだろう。

「満洲国」が樹立された 1932 年 3 月に発表され、即座に発禁処分を受けたこの詩は、前年の満洲事変をきっかけに書かれたのだが、当時檳村は高知県に暮らす十代の青年であった。1930 年に間島で起こった朝鮮人による大規模な武装蜂起にかんする断片的な報道に刺激を受け、詩想を深めたという [山崎 1984: 450-453]。詩は、咸鏡道の寒村に生まれ、幼少期に起きた三・一運動のなかで家族を虐殺されたのち間島に落ちのび、そこで抗日バル

チザンに成長した名もなき朝鮮人青年が歌う、という体裁をとる。朝鮮の風土や文化の描写があまりにもたくみなせいで、金達寿など朝鮮人もふくむ多くの読者が作者を朝鮮人と誤解していたという。

日本人の書き手が、朝鮮人、それも共産主義者の抗日運動家——帝国側からすればもっとも忌むべき「共匪」の「不逞鮮人」——の心を語るといふ試みは、当時の状況からすれば、想像することさえ困難だったにちがいない⁹⁾。この野心的な、あるいは無謀な試みにたいする評価はさまざまだが、たとえば、朝鮮植民者二世で、戦後日本における反植民地主義文学の旗手の一人だった小林勝（1927-1971）は、これを高く評価した。小林勝は、中野重治の「雨の降る品川駅」（1929）が朝鮮人「同志」たちを「他者」としてとらえたのにたいし、檳村が植民地帝国の周辺部で闘う抗日バルチザンの心そのものに迫ろうとしたこと自体にこの詩の根本的意義を見出した。当時の政治的・文学的な型にはまっている部分があることは否めないものの、プロレタリア反戦文学がほとんど壊滅し、満洲や朝鮮の独立運動家たちが「匪賊」「馬賊」と貶められていた時代に「真向から、独立闘争の戦士の心をうたいあげるといことがどれほど大したことだったか、日本の詩人の中にもそういう詩人がいたことを私は評価したい。このことを日本人にも朝鮮人にも、今日ひろく知ってほしいと思うのである」[小林 1964: 51]。

ちなみに、この詩は、1930 年代の間島の朝鮮人たちのあいだで朝鮮語に翻訳されてひそかに愛唱されていたという [戸田 2011: 59-72]。帝国日本の大陸侵略が着々と進んでいた時代に、高知にいる日本人青年が「創作的な想像力」を精一杯駆使して書いた詩が、間島の朝鮮人たちの心にまで届いていたのであった。このささやかな事実は、被植民者たちと向き合うことをひたすら避け、その必要性を認めずしなかった日本近代文学の歴史において、けっして軽いものではない。

「間島バルチザンの歌」は日本人男性が朝鮮人男性を主人公にした作品だが、日本人男性が朝鮮人

女性を主人公にしたケースもある。中西伊之助が、「不逞鮮人」について、関東大震災の数カ月前に公刊した長編小説「汝等の背後より」（1923）は、そんないっそう「無謀な」例である。朝鮮人独立運動家たちの姿を描いたこの植民地小説は、女性を主人公にしている点が際立った特色を成しているが、文学作品としての完成度は高いとはいえない。恋愛ドラマに重点が傾き、植民地問題を深く掘り下げることには成功しているとはいいがたく、とりわけ肝心の女性表象にかなり難があるとの批判がある [박현석 2017: 5-8]。しかしながら、三一運動をつうじて顕現した「内なる〈他者〉」に日本人たちがおののき、その存在を直視するかそれとも抹殺するか、という決定的な岐路に立っていた時期に、朝鮮人女性革命家を主人公として選んだという点ひとつとっても、やはりこの作品にも無視できない重みがある。妊娠中の身で「不逞C人團」に加わって満洲と朝鮮の国境地帯を突破し、武装闘争を勇猛にくりひろげる権朱英には、実在の朝鮮人女性独立運動家・安敬信（1888- ?）の伝説的イメージが投影されている [中西 1923: 13、呉香淑 2008: 68-72]。

最後に、「京城」で中学時代をすごした経験をもつ中島敦の「巡査の居る風景——一九二三年の一つのスケッチ」（1929）に一言だけふれておきたい。副題のごとく、1923年の冬の「京城」を舞台にしたこの植民地小説も、植民者二世だった作者が趙教英という朝鮮人巡査を主人公にした「神を畏れぬ者の仕わざ」の産物である。しかしながら中島は、植民者と被植民者の双方がそれぞれにゆがめられてしまう植民地のさまざまな断面を、非凡な観察眼で洞観している。かれが造形した「淫売婦」の金東蓮は、日本近代文学が描きえたあらゆる朝鮮人女性のなかで、もっとも重い存在感を放つ一人ではないかと思う [中島 1993: 336-339]。

物語が進むなかで、商用で日本に渡ったまま行方不明になった東蓮の夫はじつは関東大震災時に虐殺されたということが暗示される。そのことを悟った東蓮は、「おどおどと逃げまどって居る夫の血に塗れて火に照らし出された顔」を想像し、身

悶えながら泣き伏す。怒りと悲しみのあまりついに狂乱におちいった東蓮が、凍てついた植民地の路上を駆けまわりながら叫ぶ呪いの言葉は、帝国日本全体のおそるべき犯罪を暴こうとするかのような鬼気にみちている。「みんな知ってるかい？地震の時のことを」と、寝衣一枚の姿で髪をふり乱し、眼を血走らせた東蓮は、道行く人びとに向かってこう絶叫するのであった。

——それでね、奴等はみんなで、それを隠して居るんだよ。ほんとに奴等は。

金東蓮を文学的に創造したのは、わずか19歳程度の日本人で、男性で、しかも植民者であった。しかしだからといって、正義を求めて帝国の犯罪者たちを告発したこの朝鮮人女性の言葉のうちに真実がないとはいえない。

「奴等」とは誰であったか。いま誰であるのか。1923年の植民地で金東蓮が放った憤怒の叫びは、実際の虐殺者やその協力者、支持者、保護者、使喚者、煽動者、隠蔽者、傍観者たちだけに浴びせられて歴史のなかに埋もれたものではなかった。その声は100年の時を超えて、澄まし顔で2023年をやりすごそうとしている東京都知事に現代の否定論者たちを、そして今なお植民地主義の歴史を克服できずにいる私たちをも痛烈に刺し貫いているのである。

注

- 1) Vergil2010「朝鮮人虐殺被害者への追悼文を送らない小池都知事の詭弁は白人至上主義者の「オール・ライブズ・マター」と同じ」(<https://vergil.hateblo.jp/entry/2021/09/07/123728>)を参照した(2022年3月21日閲覧)。
- 2) 東京都総務局「東京都オリンピック憲章にうたわれる人権尊重の理念の実現を目指す条例第12条第1項の規定に基づく表現活動の概要等の公表について」2020年8月3日(<https://www.metro.tokyo.lg.jp/tosei/hodohappyo/press/2020/08/03/12.html>)参照(2022年3月21日閲覧)。
- 3) ただ、ほかの多くの戦後作家と同様、田宮虎彦は朝鮮問題に集中的・持続的に力を傾注したわけではなく、結果的にはその後のかれの文学活動が「朝

鮮ダリヤ」を受けた発展をとげることはなかった。なお、「朝鮮ダリヤ」に先んじて発表された「異母兄弟」(1949)というすぐれた作品に、少しでも植民地朝鮮があらわれることを付言しておく。

- 4) 田宮虎彦「朝鮮ダリヤ」を主題にした研究としては、韓国の研究者による論文が多少あるが(〔柳相熙 2009〕、〔黄益九 2013〕)、日本の研究者によるものは皆無である。このような日韓の関心の落差にも、日本の文学研究が構造的にかかえている朝鮮軽視の傾向があらわれているようにみえる。
- 5) 小説「不逞鮮人」は、1947年に加筆修正のうえ再発表された。戦後の思潮に合わせてタイトルが「北鮮の一夜」に変更され、本文は「鮮人」などの語が修正されたほか、大量の伏字箇所も大幅に復元ないし加筆された。しかし、1922年の初出版と同じく、こちらの版でも、三・一運動で殺される娘はついに一言もみずからの言葉を発することはなかった〔黄善英 2003: 68-70〕。
- 6) 〔소현숙 2019: 402〕を参照した。
- 7) 香川県出身の行商たち9人が朝鮮人と誤認されて殺された「福田村事件」では、幼児数名のほか、妊婦も虐殺された。この場合被害者は朝鮮人ではなかったが、この事件にみられるとおり、「摂政宮殿下には玄米を召し上がられている際、不逞鮮人のために国家はどうなることか」と憂う宗主国臣民たちは、「不逞鮮人」を殺す際に、男女の区別などしなかったのである。かれらにとって、女性であろうが幼児であろうが、朝鮮人はすべて「不逞鮮人」であった〔千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員会編 1983: 150〕。
- 8) 『季刊三千里』における高崎隆治と磯貝治良の連載は、のちにそれぞれ『文学のなかの朝鮮人像』(1982)、『戦後日本文学のなかの朝鮮韓国』(1992)としてまとめられた。この二冊は、朴春日『近代日本文学における朝鮮像』(1969)とともに、日本のポストコロニアル批評の先駆的研究としての地位を占めている。
- 9) なお、横村浩の「間島バルチザンの歌」と同じ時期に、谷譲次(本名・長谷川海太郎)が戯曲「安重根」(1931)を発表している。こちらも、詳細な研究が待たれる作品である。

参考文献

日本語

- 李昇燁 (2005) 「三・一運動期における朝鮮在住日本人社会の対応と動向」『人文学報』92号、京都大学人文科学研究所、pp. 134-135.
- 李南錦 (2006) 「植民地朝鮮の「新女性」と母性イデオロギーへの闘い——羅蕙錫の小説「瓊姫」と彼女

- の言説分析を通して」『ジェンダー研究』9号、お茶の水女子大学ジェンダー研究センター、p. 42.
- 磯貝治良 (1992) 『戦後日本文学のなかの朝鮮韓国』大和書房、p.80.
- 磯谷季次 (1984) 『わが青春の朝鮮』影書房、pp. 64-76.
- 呉香淑 (2008) 『朝鮮近代史を駆けぬけた女性たち 32人』梨の木舎、pp. 68-72.
- 加藤直樹 (2014) 『九月、東京の路上で』ころから、p. 6.
- 川村湊 (2015) 『川村湊自選集』4巻、作品社、p. 8.
- 金達寿 (2006) 「玄海灘」磯貝治良ほか編『〈在日〉文学全集』1巻、勉誠出版、pp. 165-412.
- 金顕杓 (1978) 『ある抗日運動家の軌跡——“不逞鮮人”の証言』龍溪書舎、p. 15.
- 金富子 (2014) 「関東大震災時の「レイピスト神話」と朝鮮人虐殺」『大原社会問題研究所雑誌』669巻、法政大学大原社会問題研究所、pp. 3-5.
- 黒川創 (1996) 「解説 旗のない文学」黒川創編『〈外地〉の日本語文学選』3巻、新宿書房、pp. 332-333.
- 小林勝 (1964) 「日本文学に現われた朝鮮の顔貌(1)」『コリア評論』44号、コリア評論社、p. 51.
- 角圭子 (1972) 『朝鮮の女』サイマル出版会
- 高崎隆治 (1982) 『文学のなかの朝鮮人像』青弓社、p. 25-26.
- 田宮虎彦 (1972) 「朝鮮ダリヤ」『新潮日本文学』36巻、新潮社、p. 239-262.
- 田宮虎彦 (1988) 「日韓の中」『彷彿月刊』30号、弘隆社、p. 1.
- 千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員会編 (1983) 『いわれなく殺された人びと』青木書店、p. 150.
- 鶴見俊輔 (1967) 「朝鮮人の登場する小説」桑原武夫編『文学理論の研究』岩波書店、p. 189.
- 中西伊之助 (1923) 『汝等の背後より』改造社、p. 13.
- 中西伊之助 (1996) 「不逞鮮人」黒川創編『〈外地〉の日本語文学選』3巻、新宿書房、pp. 27-73.
- 西崎雅夫編 (2018) 『証言集 関東大震災の直後 朝鮮人と日本人』ちくま文庫、pp. 164-165.
- 黄益九 (2013) 「植民地支配の〈記憶〉の再認識不可避性——田宮虎彦「朝鮮ダリヤ」における〈記憶〉の間隙」『日本學報』94집、한국일본학회、pp. 111-129.
- 黄善英 (2003) 「揺動と不動——中西伊之助の「不逞鮮人」と「北鮮の一夜」」『比較文学・文化論集』20号、東京大学比較文学・文化研究会、pp. 68-70.
- ヘイグ、アンドレ (2011) 「中西伊之助と大正期日本の「不逞鮮人」へのまなざし」『立命館言語文化研究』22巻3号、立命館大学国際言語文化研究所、p. 93.
- 松田利彦 (2009) 『日本の朝鮮植民地支配と警察』校倉書房、pp. 323-325.

村松武司 (1972) 『朝鮮植民者』 三省堂、pp.259-260.
 山崎小糸 (1984) 「榎村浩の生涯とその時代」 岡本正光
 ほか編 『榎村浩全集』 平凡堂書店、pp. 450-453.
 山崎行雄 (1991) 『田宮虎彦論』 オリジン出版センター、
 p. 344.
 梁英聖 (2020) 『レイシズムとは何か』 ちくま新書、pp.
 169-187.
 李恢成 (1978) 『沈黙と海』 角川文庫、p. 131.
 渡邊一民 (2003) 『〈他者〉としての朝鮮』 岩波書店、
 pp. v - vi .
 『朝日新聞』 2017 年 9 月 2 日 .

韓国語

권보드래 (2019) 『3 월 1 일의 밤』 돌베개、pp. 408-409.

김정인 (2019) 「3·1 운동과 그 이후, 여성의 현실 참여」
 『인문과학연구』 28 집, 덕성여자대학교 인문과학
 연구소, p. 17.
 박현석 (2017) 「웁긴이의 말」 나카니시 이노스케 지음,
 박현석 옮김 『불령선인 & 너희들의 등 뒤에서』 현
 인, pp.5-8.
 소현숙 (2019) 「3·1 운동과 정치 주체로서의 ‘여성」
 『한국학논총』 51 호, 국민대학교 한국학연구소,
 pp. 389-393.
 유상희 (2009) 「田宮虎彦의 『조선달리아』 고찰」 『일본
 어문학』 41 집, 한국일본어문학회、pp.221-241.
 『東亜日報』 1920 년 4 월 20 일 .

投稿論文

1970-80 年代日本の市民運動史における映画『江戸時代の朝鮮通信使』と上映運動

山口祐香（九州大学）

1. はじめに

近世の日本と朝鮮半島を往来した外交・文化使節団である朝鮮通信使（以下、通信使）に関しては、日韓共に既に膨大な歴史研究の成果が挙げられてきた。特に、2017 年日韓の市民団体主導で UNESCO「世界の記憶」に選定されたことで、研究史を網羅的に整理した横山〔2020〕や、通信使を歴史的資源とした日韓の自治体や民間団体による国際交流事業に関する仲尾・町田編〔2017〕、한일문화교류기금편〔2018〕、한태문〔2018〕、山口〔2019〕などの論考が発表されている。一方、1970 年代から 80 年代にかけ、当時一般にはほとんど知られていなかった通信使の歴史的意義を積極的に発信した在日朝鮮人歴史家の活動については、嶋村〔2007〕、심규선〔2017〕、上野〔2018〕など、ジャーナリストによる取材成果を中心にまとめられてきた。例えば、通信使の紀行文を翻訳した姜在彦の『海游録—朝鮮通信使の日本紀行』（平凡社、1974 年）や、『季刊三千里』に寄稿した通信使の連載をまとめた李進熙の『李朝の通信使：江戸時代の日本と朝鮮』（講談社、1976 年）などは、豊臣秀吉の朝鮮出兵後の戦後処理と近世日朝の善隣友好関係構築に貢献した存在としての通信使像を打ち出した。とりわけ、映像作家の辛基秀（1931-2002）が監修しドキュメンタリー映画『江戸時代の朝鮮通信使』（1979 年）は、日本において通信使の存在を全国区にしたエポックメイキング的作

品として知られ、全国各地で上映運動が行われた。張舜順は、彼らの研究活動とアイデンティティを紐づけ、自らや若い世代の在日朝鮮人たちが民族の誇りや尊厳を回復するために、近世の友好的な日朝交流史を象徴する「通信使」に着目したと述べている〔張舜順 2005: 440〕。しかしながら、通信使研究における在日朝鮮人たちの関与を跡付ける学術研究は、張の他に、朴都瑛〔2012〕、山口〔2019, 2021〕以外ほぼ見受けられない。本論で後述するように、決して娯楽的な商業映画ではない『江戸時代の朝鮮通信使』が当時大きな社会的関心をひきつけた現象は、本編の内容に加え、制作者の意図や観客の反応も含めた多角的かつ構造的な分析から意義づけることが出来よう。

そこで本稿では、新聞・雑誌等の資料や関係者の証言を参照しつつ、戦後日本国内における市民運動と映画の相関から、映画『江戸時代の朝鮮通信使』の制作と自主上映運動が行われた同時代史に焦点を当ててみたい。そして、政治運動や反差別運動を中心とする従来の運動史記述に留まらない、在日朝鮮人による多角的な活動の一端を明らかにすると共に、その映画の受け手となった戦後日本人の韓国・朝鮮に対するまなざしや市民社会の新たな側面を浮かび上がらせることを目指す。

2. 先行研究の概観

(1) 戦後日本の市民運動史と映画

20 世紀前半において、映画は最大の大衆娯楽であった。日本では国策映画が中心だった戦時期を経て、1950 年代から 60 年代にかけ大手映画会社や独立プロダクションによる盛んな制作が再開した〔四方田 2014: 37〕。この戦後の日本映画全盛期には、たとえば労働組合文化運動の中で「労働映画」が盛んに作られ、全国の職域に組織された映画サークルが上映会の実施や会員間の交流をはかる様々な活動を展開した〔鈴木 2017〕。これらの「労働映画」は、様々な労働者の職場生活や労働運動を収めた記録映画や、反戦・平和・民主主義の啓蒙を目的とする劇映画・教育映画など、内容も多岐に渡るものとなった〔鈴木 2017: 28〕。

1960 年代末になると、世界的な社会運動の高揚に呼応した大学紛争や安保闘争、ベトナム反戦運動等が全国で展開した。この頃、映画はテレビの普及に伴い産業的には衰退し始めていた一方で、個人の内面や世界に対するまなざしを表現できるメディアとしてカウンター・カルチャーの一翼を担い、政治集会等でも社会的題材を扱った非商業ドキュメンタリー映画などが盛んに上映された〔田中 2017: 91〕。特に、三里塚闘争を取り上げた小川紳介や、水俣病被害者を取材した土本典昭らのドキュメンタリー映画は同時期を代表する作品である。更に、1970 年代に入ると、若者たちを中心に家庭用の 8 ミリフィルムや 16 ミリフィルムによる自主映画の制作がブームとなり、一般の映画館の興行では観ることができなかった作品を自主的に上映する動きも活性化した〔田中 2019: 196〕。

社会運動における映画は、見る者の感情を掻き立てる映像や音声によって、闘う当事者の姿や現場の有様を遠く離れた場所にいる人々に臨場感を持って体験させ、支援者を増やし、具体的な活動や連帯を生み出すメディアとしての力を発揮する〔畑 2011: 392-393〕。長野県松本市における小川プロの『三里塚シリーズ』の自主上映運動を研究し

た相川陽一は、自主上映という行為について、作り手が新たな映画の制作費や生計を得る手段の一つであると同時に、大手制作会社や配給会社による映画の制作や配給のあり方へのオルタナティブを示す映像メディア実践の一環として位置付けた〔相川 2021: 51〕。松本市のケースにおける自主上映者は、映画の愛好者であり、地域や観客の文化性や創造性を涵養しようとすると共に、同時代の社会矛盾への憤りから異議申し立て運動に共感し、政治集会で主義主張のみの伝達や動員のための手段ではなく、映画を通じて何らかの 이슈や運動への共感を他者と共有しようとして葛藤する主体的な存在であったと言える〔相川 2021: 52〕。

更に、自主上映会に人々が集まり、映画を鑑賞する行為や空間そのものが、社会問題や権力に対峙する市民運動を喚起し、下支えする 1 つのネットワークとなり得る。藤木秀朗は、市民による自主上映会を「メディア、関心、人々が複雑につながり合うネットワークが形成されたり、拡張されたり、深められたり、他の場へと接続されたり、あるいは切断されたりする」空間として捉えた〔藤木 2019: 448〕。更にそうした上映会の場には、権力に対してある程度批判的な距離をとっている人々が多く集い、彼らは困難な現状や関心事もとに感情や情動を共有し合いしつつ、他の市民への呼びかけや政府・企業への異議申し立てを行うこともある〔藤木 2019: 449〕。その上で藤木は、社会運動を 6 つの側面—①情報収集、②ネットワーク化、③知識の共有と蓄積、④要望・要求の発露、⑤被害者支援、⑥これらすべての活動を円滑に進めるための計画と運営—to 分類し、特に映画の自主上映は②・③・④、および全ての側面をつなげるネットワークの促進に寄与する運動の一環と捉えることで、デモを中心的なモデルとする従来の社会運動論をより多角的な視野から捉え直そうとしている〔藤木 2019: 463-464〕。

さて、再び市民運動史の文脈に戻る。1970 年代以降の日本社会では、高度経済成長がもたらした社会の歪みを受け、それまでとは異なる問題意識に立脚した市民運動が展開した。「新しい社会運

動」と言われるこの潮流は、従来の政治闘争や労働運動とは異なり、平和運動や環境保全、人権問題などを取り上げ、国家権力に対抗する地域や個人と連帯する新たな運動を生み出した〔坂本編 2017: 43〕。その中では、差別に苦しむ日本国内のマイノリティや、政治的弾圧や日本企業の海外進出によって虐げられているアジア諸国の人々など、これまで関心を持たなかった他者との出会いや学びを通じて自身の生き方を問い直し、連帯しようとする市民運動も起こった〔安藤 2013: 181-187〕。とりわけ、「日韓連帯・狭山・三里塚」のスローガンにあるように、1970年代から80年代の日本の市民運動にとって、朝鮮半島は重要な存在として位置づけられた〔李美淑 2018: 2〕。「金大中事件」（1973年）や「文世光事件」（1974年）などが相次ぎ日韓関係が悪化すると共に、軍事独裁政権下にある隣国の不安定な社会状況が日本の市民に印象付けられたが〔磯崎 2015: 35〕、限られた現地からの報道の中、民主化勢力の抵抗運動は当時の日本に伝えられ、知識人や市民グループを中心に韓国の民衆に共鳴する日韓連帯運動が活発化していく。

加えて1970年代に入った在日朝鮮人社会も、日本で生まれ育った2世以降の世代が全体の75%を超える〔姜在彦 1976: 33〕。そこで、「高度経済成長期に人格形成を果たした戦後世代が、就職、結婚、子育てなど、生活者として地域社会の現実に向き合い始める中で、差別社会への新たな異議申し立ての主体」〔水野・文京洙 2015: 175-176〕となり、日本人市民と共闘を見せていく。たとえば、1970年の「日立就職差別事件」は、在日朝鮮人青年たちによる民族差別の告発や、日本人と同等の権利を求める運動が始まる契機となった上、「日本人としての加害者性を自覚し始め」た多くの市民が主要な支援者となった〔水野・文京洙 2015: 177〕。映画『江戸時代の朝鮮通信使』の制作と自主上映運動には、こうした戦後日本社会における朝鮮半島をめぐる市民運動側の関心と、社会派ドキュメンタリー映画の隆盛という同時代史的背景が存在したと言えよう。

(2) 戦後在日朝鮮人映画史と辛基秀

同時に、1970年代は在日朝鮮人の映画史においても転換期となった。従来の研究では、著名な監督や作品の分析、あるいはそれぞれの作品中における在日朝鮮人の表象に関する分析に力点が置かれ、在日朝鮮人による戦後映画史全体の把握は不十分な状態であった。そうした問題意識に立脚し、ドキュメンタリー映画を中心とする戦後在日朝鮮人映画を網羅的に整理した論考〔이승진 2019: 297-298〕によると、戦後直後の在日朝鮮人による映画はニュース映画や記録映画から出発したものの、技術・人的資源・資金・コンテンツなどの制作環境の乏しさから主体的な作品作りが難しく、また日本映画から向けられる眼差しも、戦前の価値観を引き継ぎ、在日朝鮮人を「弱者」「暴力的」「劣等」「理解できない他者」として見るものであった。ところが、朝鮮戦争や日韓国交正常化を経た1960年代以降は、教育映画、自主映画組織、テレビなどの多様なメディアで、植民地や在日朝鮮人に関わる問題も盛んに取り上げられるようになる。例えば、映画監督の大島渚は、『忘れられた皇軍』（1963年）、『青春の碑』（1964年）、『ユンボギの日記』（1965年）など、韓国・朝鮮の現状を真正面から捉えたドキュメンタリーを発表し大きな話題となった〔門間 2005: 76〕。

更に、1960年代後半以後は在日朝鮮人2世の定住化傾向が進み、日本社会内での主体性確立を求めるようになった潮流が、彼らを素材にした映画にもそのまま反映された。この頃の映画に登場する在日朝鮮人の登場人物は日本社会の社会的葛藤と不条理さを告発する役割へと変化していく〔金寶賢・咸忠範 2021: 389-390〕。また前述の通り、1960年代から70年代にかけての世界的な社会運動の高揚は、芸術文化の領域にも大きな影響をもたらし、多様な実践が試みられた〔四方田・平沢編 2010〕。一例として、辛基秀も拠点とした大阪における在日2世の映画監督・康浩郎の映画運動が挙げられる。当時学生運動が盛んな日本大学の映画研究会で集団制作に携わった康浩郎は、記録

映画作家協会会員などを経て、1968年に「大阪自主映画センター」を立ち上げた。同センターは、100名近い在阪の映画人や学生、労働者などによる集団制作と上映会を通じた革新的な映画運動を志し、70年安保と万博の開催を直前に控えた大阪において、『1968 大阪の夏 反戦の貌』（1968年）や『むちうたれる者—ドキュメント輪禍』（1969年）など、闘争の渦中にある人々の様相をリアルタイムで捉えた作品を発表した〔康浩郎 2019: 10-11〕。

そして、1970年代から80年代にかけて映画産業の斜陽化に伴い、個人による自主制作映画などを始めとする小規模映画の市場が本格的に開拓され、ジャンルの細分化が進んだことは、在日朝鮮人監督たちの映画が日本国内において少しずつ可視化されていく端緒となった。先述の이승진은、この時期におけるドキュメンタリー映画制作の先駆者として辛基秀を位置づけ、通信使の映画や1980年の映画『解放の日まで—在日朝鮮人の足跡』（1980年）など、多様な証言や写真資料を用いて在日朝鮮人を主人公とする歴史ドキュメンタリーの映画的文法を確立したとして評価している〔이승진 2019: 309〕。ただしこの이승진의論考を始めとする先行研究では、辛基秀のフィルモグラフィや作品の内容、及び上映運動に関する分析は行われていない。たとえば先述の康浩郎に比べ、辛基秀の作品は、通信使や在日朝鮮人運動史など歴史的題材を取り上げ、広範な資料収集や歴史学者らの協力に基づき構成した「歴史ドキュメンタリー」である点で特徴づけられる。そこで本稿は、映画『江戸時代の朝鮮通信使』の企画・脚本を務めた辛基秀の来歴にも焦点を当て、作品の構想が立ち上がっていく過程を明らかにすることで、戦後在日朝鮮人映画史の一端を掘り下げる試みに貢献したい。

3. 映画『江戸時代の朝鮮通信使』の制作

(1) 辛基秀と映画

辛基秀は独立運動家の父と紡績工場の女工であった母の間に生まれ、京都の嵯峨野で少年期を過ごした。1948年に神戸大学入学後は、教養部自治会委員長として全日本学生自治総連合（以下、全学連）の運動に参加し、後に在日本朝鮮人総連合会（以下、朝鮮総連）に在籍して祖国統一に向けた組織運動に従事するなど、長らく運動家としての経歴を重ねて来た。特に、学生時代から「自己主張の手段として」〔小林靖彦編 1988: 123〕映画に親しみ、総連脱退後は飲食店や土木建設会社などを経営する傍ら、1974年に自宅のある堺市に設立した「映像文化協会」を足掛かりにアマチュア映像作家としての道を歩み始めた。なお、辛基秀は総連時代に在日朝鮮人文学芸術家同盟（文芸同）大阪事務局に所属し、在日朝鮮人の暮らしや労働運動、帰国運動などに関わる記録映画の制作に従事した。1960年代には大阪の労映事務局での映画自主上映や、大阪勤労者演劇協会（労演）機関誌に映画評論を寄稿するなどの活動を行っており、これらの経歴を通じて多くの映画関係者と知り合い、映画技法の手ほどきを受けたと言われる。

中でも辛基秀は、ドキュメンタリー映画の制作に強いこだわりを見せた。たとえば、あるインタビューの中で「評論家・花田清輝、今村太平の著作を読み、これからは活字文化から視聴覚文化に映るのだと考えていた」〔良知会編 1997: 181〕と振り返っている。また、「朝鮮の文化が漢籍など活字を重視し絵画などを軽視する風潮に反発も感じていた。だから、差別や闘いを取り上げるうえで、映像の表現が大事だと思っていた」〔良知会編 1997: 181〕と述べるように、社会的マイノリティの営みや運動を記録・表現するメディアとしての映像に可能性を見出していたと考えられる。加えて、その交友関係もドキュメンタリー映画の制作に影響を及ぼした。学生運動の経験を持つ辛基秀は、同じく全学連運動に携わった経歴を持つ土本

典昭とも親交をもっていた他、京都大学在学中に全学連の京都府学連委員長も務めたことのある大島渚とも家族ぐるみで付き合いがあった。とりわけ、大島の『忘れられた皇軍』は、朝鮮半島出身の傷病軍人と戦後補償の問題を描き、植民地支配の記憶が薄らぎつつあった日本の視聴者に大きな衝撃を与えると共に、総連で金日成礼賛の映画を作らされることに疑念を抱き始めていた当時の辛基秀に強い印象を与えたという。実際、後に知人の作家たちに対する出版妨害や検閲が行われるようになった状況に反発し、辛基秀は総連の脱退を決めた。当時を振り返って「あの時期、何をやってたのか、むなしいですね。海の向こうの動向ばかり気にして、同じ民族が日本で対立していた。日本にいるのはほんの腰掛という気分だね。今は違う。骨を埋めるつもりだから、違う人生カリキュラムをたてなければ…」[朝日新聞 1989]と述べているが、総連脱退後の辛基秀の映画活動は、日本に定住する朝鮮人としての生き方に重きを置いた脱組織運動を模索する中での実践として位置づけられると言えよう。

ここで改めて辛基秀のフィルモグラフィーを見てみる。総連脱退後の辛基秀が制作に携わったものとして現在判明している作品は以下の通りである。なお、『海女のリャンさん』に関しては辛基秀の没後に日本人監督によって発表されたものだが、辛基秀が1966年から2年間かけて撮影した在日朝鮮人海女の未公開映像を基に制作されているため、関連作品として記載している。

このように1980年代以降の辛基秀作品は、「民衆の記憶のかけらを整理して組み上げ」「在日史を映像にまとめ」た[門間 2005: 78]ものと言える。朝鮮人の民衆史や労働運動は辛基秀個人の出自にも深く関連したテーマであり、散逸した1世に関する資料の地道な収集と証言者探しを長年行ってきた専門分野と言える。在日史を体系的に映像化することは、映画『解放の日まで』に寄せ「在日朝鮮人とはなにか、ということを振り返ることは、多彩な昭和史の別の側面を語るものであり、日本の近・現代史のかくれた部分を照らし出すものである。…このフィルムが、在日朝鮮人の現在、過去の歴史に負の暗いイメージを抱きがちな二世、三世に勇気を与えるものと確信する」[辛理華 2005: 43]と書いたように、社会的に肯定的な評価を与えられてこなかった在日朝鮮人の歴史を主体的に描き、台頭してきた2世以降の若い世代に向けて発信する意図が込められていた。

ただし、このフィルモグラフィーでは、近現代史をテーマとする他の作品に比べ、近世史を舞台とする通信使の映画は些か異質に見える。辛基秀は学生時代に通信使の歴史を初めて知り、1970年に大阪・梅田の阪急百貨店で姜在彦の助言を受けながら通信使の絵巻を初めて買い求めたことを皮切りに、本格的な史料収集と研究を開始したと言われる[上野 2018: 16]。このように通信使に関心をもった背景として、自身の2人の娘が学校で受けたいじめについて回想しつつ、戦後日本人の朝鮮観と歴史教育についての疑問を挙げている。

表1 【辛基秀の映像作品】

作品名	制作年	時間	主な制作スタッフ
隣人愛	不明	不明	不明
身世打令 ※未公開	不明	不明	不明
江戸時代の朝鮮通信使	1979	50分	監督・脚本：滝沢林三、撮影：高岩仁、製作・脚本：辛基秀
解放の日まで 在日朝鮮人の足跡	1980	201分	原案・構成：辛基秀、撮影：高岩仁、指導：朴慶植
이름·나마え 朴秋子さんの本名宣言	1983	50分	監督・脚本：滝沢林三、撮影：高岩仁、製作：辛基秀
戦争の傷痕 高槻地下秘密軍事工場	1984	35分	監督：辛基秀、脚本：宇津木秀甫、撮影：高岩仁
海女のリャンさん	2004	90分	監督・脚本：原村政樹、映像資料提供：辛基秀

【出所】青丘文化ホール [2004]、安井・田中編 [2015: 38, 42]、神戸映画資料館ウェブサイトを基に筆者作成。

いまの三世の子供たちが学校あるいは日常生活で受ける差別は、いったい、いつごろからそうなったのかということを考えているうちに、それは明治の終わりごろだということがわかってきた。じゃ、それ以前にはどういう朝鮮観、朝鮮人像があったのかと考えていくと、江戸時代という問題におつかったわけです。…無視されてきた江戸時代を、どうしたら再現できるだろうかと考えたんです。[小林靖彦編 1988: 122]

すなわち、辛基秀にとっての通信使とは、知られざる日朝関係史を掘り起こし、近代に由来する在日朝鮮人差別の現実を変革する目的と地続きの題材であった。そして立ち上がってきたのが江戸時代の通信使の「再現」という課題であった。

(2) 制作過程と本編

映画『江戸時代の朝鮮通信使』は50分のカラーフィルムとして完成した。企画立案は辛基秀が担当し、監督の滝沢林三、撮影の高岩仁、撮影助手の清水良雄らが参加した。脚本は辛基秀と滝沢の共同で作成されたが、その際の考証については近世日朝関係史の当時代表的な専門家であった中村栄孝に直接指導を受けた他、姜在彦と朝鮮絵画史専門家の吉田宏志が協力者として紹介されている¹⁾。

また、「歴史ドキュメンタリー・フィルム」というサブタイトルがつけられているが、その理由について辛基秀は、京都在住の実業家である鄭詔文が購入した「朝鮮人大行列図巻」を見たエピソードを挙げ、「絵巻屏風絵のカラフルな映像的内容に触発され、世に知られない日陰の歴史を明らかにするのに、ドキュメンタリーフィルムが最適だと考えたから」[辛基秀 1980: 174]と述べており、本編でも随所に絵巻のカットを使用している。また、映画の公開にあたっては以下のように製作意図を語っている。

江戸時代二百六十余年間、朝鮮と日本の関係は、世界の歴史でもまれな平等互恵、善隣友好

の絆で結ばれていました。…しかし、ゆがめられた史観によってこのけんらん豪華な朝鮮通信使の歴史的意義と一行によってうながされた華やかな文化交流の事実是一般には知られていません。

…私たちは、朝鮮通信使の史実にライトをあて、動く映像によって歴史を身近なものとして実感的にとらえかえす“歴史ドキュメンタリーフィルム”「朝鮮通信使」を企画しました。[社会タイムス 1980年8月31日]

ちなみに、先述の今村太平は「絵巻物や草双紙の形式は、物語的であろうとした原始絵画形式の非常に根強い遺物だと見ることができる」[今村 1938: 135]と述べ、現代映画芸術の観点から、原始絵画や絵巻物の持つストーリー性を再評価している。また、花田清輝も絵巻物について「映画というものは、もともと非常に絵巻物に通じるものがある」[花田・武井 1967: 135]と述べている。彼等の著作を通じ映画論を学んだ辛基秀にとっても、通信使の書かれた色鮮やかな絵巻は、近世日朝の友好関係と豊かな文化交流の足跡というストーリーを構成する上で創作意欲を掻き立てると同時に、明るい交流の歴史を視覚的に提示することで、新しい日朝関係の見方を表現する意図があったと考えられる。

本編は、対馬藩の宗家菩提寺である万松院と宗家文書のカットと、「宗家はなぜこれほど多くの朝鮮の文書を所蔵することが出来たのか」というナレーションから始まる。通信使の概要と対馬宗家や江戸幕府の朝鮮外交についての説明、通信使が立ち寄った各町々の史跡や関連資料の紹介が続く、当時の日本人のもてなしや歓待の様子、文化交流の様子などが語られる。

登場場所としては、対馬市から始まり、鞆の浦(広島県福山市)、牛窓町の本蓮寺(岡山県)、大阪城、淀川、宿泊所となった東西本願寺(京都市)、琵琶湖の浜街道・彦根市の宗安寺・高月町の芳洲書院と芳洲神社(いずれも滋賀県)、揖斐川、大垣市(岐阜県)、津市(三重県)、名古屋市、大井川、

清見寺（静岡県）、箱根山と続き、江戸へ入る。この構成に関して監督の滝沢は、膨大かつ長期間におよぶ史実を鑑賞に堪えうる短時間の映像にまとめる困難があったとして、「江戸時代全体を一つの時間単位としてとらえ、年代を無視して素材を対馬から江戸までの道順に並べ、ただ一回の旅の記録という形でまとめることにした」と振り返っている〔上野 2018: 27〕。

更に映画では、通信使を外交使節および大規模な文化使節と定義すると共に、日本各地に現在も残る通信使往来の足跡について、郷土史家や地元住民らの保存活動やインタビューも交えつつ紹介している。例えば、牛窓町・本蓮寺の祭りとして残る唐子踊りについて、従来は神功皇后由来の「架空の物語」に結び付けられていたものの、装束や踊りは通信使一行の童子と似ており、住職が「これは通信使の残した踊りであり、遊びの中で模した踊りが今日まで残っている」と語る。また、岐阜県大垣町の大祭に用いられる「朝鮮山車」が、江戸時代当時の商人が通信使行列を見物し祭りに取り入れられたものと紹介しているが、明治維新後は「朝鮮王を祭ることは臣道に背く」として廃止されたものの、百年近く地元民が守り続けてきたものと説明する。更に、津市の唐人行列について、「この唐人行列も、通信使を朝貢使とする偏見にさらされてきたが、通信使行列を南蛮風にすることで今日まで残してきた」というナレーションが入る。その他にも、通信使の接待に細心の注意を払う各藩の担当者、「対馬にいて、朝鮮と日本の間を取り持っていらしかった」雨森芳洲、日本のみかんを喜んで頬張る通信使一行、通信使を見物しようとあふれかえった江戸の民衆など、個人レベルでの友好交流を示すエピソードを繰り返し織り込んでいる。

一方、カメラマンの菅智鉉は撮影時について、当初は朝鮮へのマイナスイメージが強く、寺などの撮影許可を得るのが難しかったと振り返った上で、「映画を作ることを意味を熱心に説明するうち、かつて朝鮮と交流があった対馬の町役場の理解も得られ、全面的に協力してもらえるように

なっていった」〔上野 2018: 24〕と述べる。辛基秀自身も「残念なことに、残されたそれぞれの、孤立し、正当な扱いをうけていない」「朝鮮通信使を朝貢使扱いする思想は、村々の古老たちにしみ通っている」〔映像文化協会編 1979: 225-227〕と強調したように、ロケハンで訪れた現地での遺構や資料、および証言の残存状況は決して良好ではなかった。その上で辛基秀は「各地に残る歴史的資料にライトをあてるためには、所蔵者の合意を得ねばならず、一つ一つを繋いでいく作業は、『明治百年』の思想による傷を癒すような、あたかも現代における『通信使』の役割を背負ったようであり、それは、歴史のもつダイナミズムの回復作業には当然の仕事かも知れない」として映画の制作過程を位置付けている〔映像文化協会編 1979: 227〕。

このように、映画の中で取り上げられる通信使像は、従来の鎖国認識を否定した「明るい近世」像を基盤に、江戸時代を主軸とする「近世」と明治時代以降を念頭に置いた「近代」の対比構造の中で、友好的な日朝交流の事実を表すものとして取り上げられた。以前より総連内で親交のあった姜在彦や李進熙による通信使関連の著作も発表され始めた時期であり、近世と近代の日朝関係を比較しながら日本人の「ゆがんだ朝鮮観」を批判する方向性は、この時期の在日朝鮮人歴史家たちに共通するものであると言える。後に辛基秀、豊臣秀吉の朝鮮出兵を主題にした続編映画の構想に言及しているが〔土方 1987: 135〕、朝鮮出兵と植民地支配という日朝関係の否定的な側面を象徴する二つの出来事に挟まれた時期である点でも、江戸時代の通信使往来は希少かつ肯定的な事例として取り上げる必要があった。そして、現実の在日朝鮮人を取り巻く否定的な社会構造の根源を近代に求め、それ以前に展開されていた日朝交流の時代と、以後から現在に続く両国関係や歴史認識の歪み、そして従来の一国史的な歴史記述の偏重を批判するものでもあった。映画は「友好の歩みは暗闇のなかに追いやられていったのである」というナレーションで締めくくられている。

4. 上映運動の展開

(1) 自主上映会の拡大

1979年2月の映画完成後、翌月から上映運動が始まり、映画と歴史研究者による講演会をセットにして行われた。この形式は映画と学術講演会を組み合わせることで教育的効果を狙ったものであった〔映像文化協会編 1979: 222〕。講演会には、映画に関与した中村栄孝、姜在彦、吉田宏志の他、李進熙、日本史研究者の泉澄一、松島栄一、上田正昭、金達寿、李元植らが登壇している〔辛基秀 1980: 174-178〕。また、発刊された機関誌には、財団法人朝鮮奨学会理事長や東京韓国学園校長、朝鮮大学校歴史地理学部副部長を始め、映画監督の亀井文夫、土本典昭、岡本愛彦、野田真吉が批評と推薦文を寄せた〔辛基秀 1980: 174-178〕。

一般公開の初回は3月3日大阪の教師集団主催の「朝鮮を正しく教えるための映画とシンポジウム」で400人が参加し、22日に大阪市・御堂筋朝日生命ホールで一般公開された際には600人以上が参加者した。また、朝日新聞社説が「高松塚が古代の日朝交渉史のあかしであるとするなら、これは近世の日朝関係を見直すきっかけとなる映画だと思う」〔朝日新聞 1979年3月26日〕と取り上げたことが反響を後押しした。更に映画は、1979年度キネマ旬報文化映画ベスト・テン第4位、1980年度毎日映画コンクール第2位を受賞した。また、自治体主催の上映会²⁾の他、地方新聞社、教育委員会、大学、民族組織、市民団体など多彩な担い手によって実施され、1979年8月にはソウルでもテレビ放送された。場所によっては、実際に通信使ゆかりの場所が会場となったり（牛窓町本蓮寺）、未公開の郷土史料の展示と組み合わせられたりするなど（枚方市）、会場ごとの特徴を活かしたバリエーションが見られた。

映画と集会をセットにした上映運動の形式は先に小川プロなども行った手法だが、通信使の映画の場合は、フィルムを販売することで広範な上映会の実施と資金調達を可能にした³⁾。辛基秀が「教

育の現場だけでなく、労働の現場や市民の間でもフィルムは着実に一人歩きをはじめた」〔映像文化協会編 1979: 231〕と言うように、フィルムを貸借・購入することで個々の上映会を展開することが出来る⁴⁾。特に、大阪市、東大阪市、大阪府の各教育委員会が続いて購入したように、映画を見た教師からの要望が大きかった〔辛基秀 1980: 176〕。在日朝鮮人が多い関西地域の学校では児童・学生に向けた民族教育の実施が課題であり、映画は日朝交流の肯定的な側面を分かりやすく説明する教材として教育効果が見込まれた。実際、雑誌『視聴覚教育』において、新出の視聴覚教材一覧中で、『江戸時代の朝鮮通信使』が挙げられており、「徳川幕府の鎖国令のもとで、国家的レベルで交流の行われた朝鮮通信使の第行列が、庶民の熱狂的興味と関心の中ですすめられた様子を描きながら、文化交流の数々を目前に見て感無量である」〔日本映画教育協会編 1979: 132〕と紹介文が寄せられているなど、同映画は教材として一定の評価を得ていたことが分かる。

(2) 映画への反応

では、映画は人々にどのように受け止められたか。1970年代以降の日本社会では、「新しい社会運動」に連なる多様な市民運動が登場する中で、韓国の民主化運動や在日朝鮮人の反差別運動との連帯を志向し、学習や交流を通じて朝鮮半島への理解を模索する実践が各地で見られた。その中で、金達寿や鄭詔文らの『日本の中の朝鮮文化』（1969年）、「ベトナムに平和を！市民連合（ベ平連）」元メンバーの飯沼二郎・鶴見俊輔による『朝鮮人』（1969年）、金達寿・姜在彦・李進熙らの『季刊三千里』（1974年）など、韓国・朝鮮関連の話題を扱う日本語雑誌の創刊も相次ぎ、多くの読者を獲得した。

たとえば、辛基秀と親交のあった飛田雄一氏は、京都で創刊された『日本の中の朝鮮文化』を挙げ、「良かった時代の日朝関係」史を通じて日本人の朝鮮蔑視的な歴史観を覆そうとする試みが通信使の映画上映運動を後押しする下地となったと語

る⁵⁾。神戸ベ平連で活動した飛田氏は、神戸青年学生センターの主事を務める中で、言語・歴史の学習や在日朝鮮人との出会いを通じ「自らの歪んだ朝鮮（観）を点検し、正しい朝鮮（人）観を持つことを目的に、1971年から日本人の朝鮮研究グループ「むくげの会」を主宰し[『季刊三千里』1975年8月：131]、同会が通信使の映画フィルムの最初の購入者となった⁶⁾。また、1970年代後半に大阪市内で辛基秀の「朝鮮映画史」の連続講座に参加し、後に通信使のスタディツアーの企画などを共にすることになる上西法子氏は、当時について「金大中氏拉致、朴大統領暗殺、光州事件と打ち続く、在日の人々に限らず、どう行動すれば互いにつながりあうことができるのか、日本人の側ももどかしい思いで機会と場を求めている時期でした」と振り返る[上西 2003: 68]。更に、編集者の川瀬俊治氏は、在日朝鮮人が多く住む地域に生まれ育った経験から在日朝鮮人や被差別部落の問題に関心を持ち、朝鮮に対するマイナスイメージの払拭を意図して、1979年に当時記者として勤めていた奈良新聞社で市民向け上映会を主催し、上田正昭を講師として招いた⁷⁾。上映会に関わった人々は少なからずこうした同時代の雰囲気や問題意識を共有していたと考えられる。

これに対して映画『江戸時代の朝鮮通信使』は、「明るい近世」の善隣友好関係と民衆交流を肯定的に際立たせた点で時流に合致したと言える。戦後の日本映画に描かれてきた朝鮮人は、被抑圧者としての悲劇性や、貧困や犯罪などの暗いイメージ、本名を隠してひっそりと生きているというステレオタイプが大半であった[門間 2010: 156]。1970年代から80年代にかけ韓国・朝鮮に関する映像メディアの表象は多様化が進むが、あくまで主題は韓国人被爆者の戦後補償や強制連行、在日朝鮮人のアイデンティティや差別問題など、深刻で政治的なテーマが中心であった[丁智恵 2016: 33]。そうした同時代の映像作品と比べ、近世の交流史を取り上げたものは映画『江戸時代の朝鮮通信使』が唯一である。ゆえに、観た者の反応としては、韓国・朝鮮をめぐる時事問題への印象を念頭に置き

つつ、「明るさ」への驚きや従来のイメージが覆された衝撃を語る言説が非常に多くみられた。たとえば、日本教職員組合機関誌の『教育評論』第378号に掲載された評論には、以下のような記述がある。

試写会でこの映画を見終わったときの感じは一種いいあらわせないものだった。

感想を求められた学者、作家、評論家、そして映画関係者などがそれぞれまず第一にこのような「史的事実」にさらされてきたものへの怒りと悲しみともつかぬものを表し、さまざまにその感動を語ったが、しかし皆ほっとしたような、喜びに似た安堵感をみせたのが印象的だった。…思えば、われわれ日本人が日本と朝鮮の交流と考えるとき必ずつきまとうあの重苦しい、恥ずかしい、暗さが、どっとつき崩され、全く新しい歴史をみる思いがそうさせるのであろう。

…くりかえすが、それは、あの秀吉の朝鮮侵略、そして幕末からの征韓論、やがての日韓併合、関東大震災と朝鮮人の大虐殺、強制連行、さらに戦後の朝鮮戦争への加担や在日朝鮮人のさまざまな差別、金大中事件など思い出したくないような関係ばかりと思っていたものにとって、この映画をみての喜びは当時の日本人のそれに通じるものであるかもしれない。[若林 1979: 74]

また、当時関西で刊行されていた左派系の政治新聞である『社会タイムス』でも特集記事を組み、従来とは全く異なる視点の歴史として通信使像の登場を評価している。

朝鮮と日本の関係を想い浮かべると心が暗くなる。秀吉の朝鮮侵略、明治とともにはじまった「征韓論」、「日韓関係」、関東大震災と朝鮮人大虐殺、朝鮮侵略戦争への加担、在日朝鮮人への差別、金大中事件と、息つく間もない日本支配層の排外主義の事実がまさに幾重にも石積み

されている。

ところが、秀吉の二度にわたる大規模な朝鮮侵略の傷痕も消えやらぬ徳川家康の時代からあの鎖国の約二百余年間、日本と朝鮮は深い友好・交流の歴史をもっていたのである。

この歴史ドキュメンタリーフィルムは、何よりもこうした史的事実を各地に残されている絵巻や踊り、詩文などを通じて、支配階級はもとより民衆にいたるまで、尊敬と親しさをこめて熱烈に歓迎された朝鮮通信使一行をよみがえらせた。それは日本と朝鮮の「暗

い歴史」しか知らない者にとっては目をみはるような友好と交流が躍動しているのである。[『社会タイムス』3月4日]

更に、日本人の朝鮮観や歴史教育を批判的に問い直す現代の問題として受け止める言説も見られた。たとえば、先述の『教育評論』では、映画のラストシーンを引用しつつ、「今日のわれわれが置かれた位置、そして責任・責務の重さが迫ってくる。これほどのが『広辞苑』『広辞林』といった辞書にさえのっていない今日の日本人として、である」と述べている[若林 1979: 75]。また、『歴史評論』では朝鮮史研究に関する特集を組み、映画を視聴した朝鮮史研究者の森川展昭の研究ノートに掲載した⁸⁾。森川は映画について「先の豊臣時代、後の明治・大正・昭和時代の日朝両国の不幸な関係に反省を促す願いが込められている」とした上で、以下のように述べている。

三使以下一行は衣装をととのえ、「清道旗」を先頭に、江戸の城下に行く。これを観覧するものは物珍しげに行列を見入り、これに応えて楽員は力をこめて雅楽を奏する。信使のクライマックスがここにある。この歓迎の絵を見ると、今我々が江戸の町民になって、使節を観覧しているような心地さえる。我々が、ああこんなにも、はばかりことなく、華麗に日朝友好を謳歌した時代があったのかと思うほどの一大パノラマである。[森川 1979: 75]

上記の記述は、人々が通信使を歓待し交流が繰り広げられたとする江戸時代の様子と比べ、日朝友好を謳歌することが「はばかりる」現在の日本社会の問題点を指摘する。また、上田正昭が『朝日ジャーナル』に寄稿した論説も「すでにしてあった善隣友好のきずなを断ち切ったものはだれか。現実に存在した友好の日朝関係史をゆがめ、朝鮮史像や朝鮮観を歪曲したものはなにか。ENDマークのないこの映画が静かに、そしてあざやかに語りかける」[上田 1979: 98]と締めくくっており、これらの言説からは、内在する差別意識や植民地支配の忘却といった歴史をめぐる「われわれ」「日本人」の態度に対する自己批判が提起されていると言えよう。

他方、映画に対する在日朝鮮人たちの実践もいくつも見られる。各地の上映会場には一般市民に加え、在日本大韓民国居留民団（民団）と総連の幹部、朝鮮大学校や韓国学園の教員などの在日朝鮮人たちも出席していたと言われる。当時早稲田大学の学生として早稲田大韓国文化研究会（韓文研）に所属していた鄭雅英氏は、1980年の韓文研主催で学内上映会実施のために映画フィルム貸出と講演を辛基秀に依頼した経験を以下のように振り返る。

韓国で朴正熙大統領が暗殺され、翌80年の光州事件に続く過程で韓国社会は騒然としていて、東京・関西圏の大学にあった韓文研と、その集合体の在日韓国学生同盟（韓学同）は民団系ながら韓国の学生運動にいたく刺激を受け、本国民主化や軍政退陣を叫び韓国大使館や領事館へのデモにいそしんでいました。歴史に詳しいわけでもない私たちが「朝鮮通信使」に着目したのは、韓国軍事政権とそれを支援する日本の保守政権による当時批判された「日韓癒着」への対抗軸を考えると、前近代から実は日朝間での平和的な民衆交流があった、というのは良い題材だと思ったからです。⁹⁾

上記は、韓国の民主化運動と連帯する在日朝鮮

人青年たちにより、通信使の歴史が既存の党派や政治性を超える市民的共感の醸成と越境的な連帯を呼びかける一環として上映会が開催された一端を示す事例である。

また、1982年1月24日には、大阪市西区の竹林寺で在日朝鮮人青年10名により、大阪で客死した通信使随員2名の慰霊祭が執り行われ、併せて映画の上映会と講演会が実施されたことが確認できる。自主勉強会を開きながら歴史資料の調査を行った彼らはその動機について、在日2世としての不安定な精神的葛藤に陥っていた中で、異国で死んだ先祖の霊を供養することで民族意識を取り戻すきっかけがさぐれるのではないかと考えたためと述べた上で、「2世として民族的自覚を取り戻す場であるとともに、3世、4世に交流史、教えられなかった母国の歴史を知らせ、韓国人として生きていくきっかけにしてもらえれば」「韓日友好の願いを数多くの日本人にも伝えたい」と慰霊祭の意義を位置づけている[朝日新聞1982年1月15日]。この場合の通信使の映画上映会は、アイデンティティの不安に直面した若い在日朝鮮人たちにとって、日朝関係史の知識を学ぶ場であったと同時に、同じ境遇を分かち合う同胞との精神的連帯/ネットワークを構築し、また日本人との接点を模索する機会となったと考えられる。

最後に、上映運動がもたらしたもう一つの果として、各地で通信使関連の新しい史料発見や見直しに繋がったことを挙げておきたい。4月3日の名古屋市で開かれた上映会には、津市の唐人踊保存会の会長らが出席し、「これまでわからなかった唐子踊りの歴史的背景がはっきりした」として、通信使の歴史と関連づける説明を載せたパンフレット作成へが行われた[辛基秀1980:177]。7月に京都市内で行われた上映会には、鄭詔文が登壇者の上田正昭と来場していた雨森芳洲の子孫を引き合わせ、握手するという出来事があった[鄭貴斗2019:220]¹⁰⁾。また、1980年3月に対馬の厳原歴史資料館で映画を見た地元実業家の庄野晃三朗氏は「まざまざと見せつけられたこの映画を見て、かすかな憤りと興奮を覚えた。対馬には、この行列

の際立って残っているものに何があるか。よしこの行列を再現してみようと思った。」[庄野2004:41-42]と振り返り、1980年8月に厳原町の港まつりの出し物として初の通信使再現行列が行われた。当日は辛基秀も現地を訪れ、大盛況となった祭りの様子を見学しており、「映画『江戸時代の朝鮮通信使』がとりもつ縁となって、対馬で、朝鮮通信使行列が港まつり最大のイベントとして市民の手でつくり出されたことの意義は大きい」[社会タイムス1980年8月31日]と述べている。更に、当時対馬市庁で勤務していた写真家の仁位孝雄氏は、映画に知人が多く出演していたことに驚き、長崎市内で行政職員向けの上映会を自ら開いた上、辛基秀と親交を持ったことが通信使を題材とする写真活動のライフワークを始める契機となった¹¹⁾。映画により通信使の一般的な知名度が高まったことは、本編にも登場したゆかりの各市町村が脚光を浴びることで、日韓連帯や在日朝鮮人に関わる市民運動に必ずしも携わっていない他の人々の意識も刺激し、足もとの郷土史を通じて朝鮮半島の歴史的関係を捉え直す次の活動へと促す効果をもたらしたのである。

5. おわりに

本稿は、映画『江戸時代の朝鮮通信使』の制作と上映運動について分析を試みた。その結果、未だ学術研究の少ない在日朝鮮人映像作家である辛基秀の人物像やフィルモグラフィーを取り上げつつ、日韓連帯を始めとする同時代の市民運動との関連を整理し、同映画とその上映運動を、戦後日本の市民運動史・戦後在日朝鮮人の運動史・および映画史の架橋から意義づけることが出来た点で、一定の学術的貢献が果たせたと考える。

一方、映画史における辛基秀の位置づけや上映運動に関しては未だ研究の余地が大きい。例えば本稿では、総連時代や1980年代以後の彼の映像制作活動や作品に関する分析などは扱っていない。加えて、戦後日本の市民運動史や日韓連帯運動と

いう分析軸を用いた一方で、映画『江戸時代の朝鮮通信使』をめぐる在日朝鮮人の民族組織（民団・総連）側の認識や関与、同時期の日朝連帯運動との関連、更に各地での個別の上映会の実態などについては資料の不足から言及が出来なかった。戦後在日朝鮮人史の多角的な研究を進める上でも、以上は今後の課題としたい。

注

- 1) 発表された映画のクレジットには李進熙の名前が表記されていなかったが、『季刊三千里』での李進熙の連載と映画の内容が似ているという指摘が一部関係者内で起こった〔上野 2018: 313〕。
- 2) 開催場所としては、大阪市、京都市、奈良市、東京都、岐阜市、広島市、西宮市、尼崎市、名古屋市、静岡市、豊橋市、岡崎市、清水市、沖縄市、牛窓町、彦根市、対馬市、下関市、仙台市などが挙げられる。
- 3) 筆者による安田喜雄氏へのインタビュー。
- 4) 1979 年映像文化協会では、映画『江戸時代の朝鮮通信使』の 16 ミリフィルムの販売を 28 万円、貸出を一回 2 万円で行っている。
- 5) 筆者による飛田雄一氏へのインタビュー。
- 6) 同上。
- 7) 発表された映画のクレジットには李進熙の名前が表記されていなかったが、『季刊三千里』での李進熙の連載と映画の内容が似ているという指摘が一部関係者内で起こった〔上野 2018: 313〕。
- 8) この特集では他に、糟谷憲一「なぜ朝鮮通信使は廃止されたか—朝鮮史料を中心に」、荒野泰典「朝鮮通信使の終末—申維翰『海游録』によせて」、森川展昭「『江戸時代の朝鮮通信使』（歴史ドキュメンタリーフィルム）」の 3 本が収録されている。
- 9) 筆者による鄭雅英氏へのメールインタビュー。
- 10) この出来事を受け、かつて対馬藩藩儒として対朝鮮外交を担った雨森芳洲と通信使の歴史を顕彰する施設として「東アジア交流ハウス雨森芳洲庵」が出身地の滋賀県長浜市高月町に 1984 年設立された。
- 11) 筆者による仁位孝雄氏へのインタビュー。

参考資料

【書籍・論文】

相川陽一「地方都市における自主上映者の肖像—長野県松本市における映画上映運動の個人資料を手がかりにして」大野光明・小杉亮子・松井隆志編『社会運動史研究 3 メディアがひらく運動史』新曜社、pp.51-71.

今村太平（1938）『映画藝術の形式』大林書店．

李美淑（2018）『「日韓連帯運動」の時代 1970-80 年代のトランスナショナルな公共圏とメディア』東京大学出版会．

上野敏彦（2018）『辛基秀と朝鮮通信使の時代』明石書店．

映像文化協会編（1979）『江戸時代の朝鮮通信使』毎日新聞社．

上田正昭（1979）「ゆがめられた日朝関係を問い直す映画『江戸時代の朝鮮通信使』を見て」『朝日ジャーナル』第 21 巻第 15 号、pp.96-98.

上西法子（2003）「シリーズⅢ：市民の多元的歴史運動「朝鮮通信使」「解放の日」までの映像作家 辛基秀さんの後ろ姿」市民セクター政策機構編『社会運動』第 274 号、pp.66-69.

金寶賢・咸忠範（2021）「北朝鮮と日本の映画交流・関係史研究（1945～1972）」『日本論叢』第 78 巻第 2 号、pp.353-397.

康浩郎（2019）『映画監督康浩郎のシネマと「声」』enginebooks.

小林靖彦編（1988）『在日コリアン・パワー』双葉社．
坂本治也編（2017）『市民社会論 理論と実証の最前線』法律文化社．

佐々木悦也（2017）「雨森芳洲関係資料の伝来と芳洲の思想を受け継いだ長浜市の取り組み」NPO 法人緑地連朝鮮通信使関係地域史研究部会編『朝鮮通信使地域史研究 * 活動報告—』、pp.30-31.

嶋村初吉（2007）『海峡を結んだ通信使 対馬発 松原一征「誠信の交わり」の記』梓書院。

庄野晃三朗（2004）「対馬の祭り行事—李朝通信使行列はこうして成った—」嶋村初吉編『対馬新考—日韓交流「宝の島」を開く』梓書院、pp.41-42.

辛基秀（1968）「対照的な南北の演劇事情」『大阪演劇』第 226 号、p.13.

—（1980）「『江戸時代の朝鮮通信使』の上映運動」『季刊三千里』第 21 号、pp.174-178.

辛理華（2005）「父の足跡」安田喜雄・田中範子編前掲書、p.43.

鈴木不二一（2017）「1950 年代の労働映画と労働組合文化運動」『大原社会問題研究所雑誌』No.707・708、pp.20-43.

田中晋平（2017）「1970 年代後半の関西における自主上映について」『藝術』第 40 号、pp.87-97.

—（2019）「＜グループ無国籍＞の自主上映と 1970 年代の新開地」板倉史明編『神戸と映画 映画館と観客の記憶』第 7 章、神戸新聞総合出版センター、pp.196-215.

張舜順（2005）「通信使研究の現況と課題」日韓歴史共同研究委員会編『日韓歴史共同研究報告書第 2 分科編』、pp.439-463.

丁智恵 (2016) 「ドキュメンタリー『密航』(1980)と日韓現代史表象の「転換期」」『情報学研究』91 巻、pp.31-45.

鄭貴斗 (2019) 「高麗美術館に託された共生の魂」高麗美術館編『共生と民際の歴史学 上田史学を継承する』雄山閣、pp.186-236.

仲尾宏・町田一仁編 (2017) 『ユネスコ貴世界記憶遺産と朝鮮通信使』明石書店.

畑あゆみ (2011) 「『運動のメディア』を超えてー 1970 年前後の社会運動と自主記録映画」藤木秀朗編『日本映画史叢書⑭観客へのアプローチ』森話社、pp.386-411.

朴都瑛 (2021) 「朝鮮通信使の研究に関する史学史的考察」『大阪学院大学国際学論集』第 24 巻 1・2 号、pp.1-13.

花田清輝・武井昭夫 (1967) 『運動族の意見 映画問答』三一書房.

土方鉄 (1987) 『話しあいませんかー反差別の生き方について』解放出版社.

藤木秀朗 (2019) 『映画観客とは何者か メディアと社会主体の近現代史』名古屋大学出版会.

水野直樹・文京洙 (2015) 『在日朝鮮人 歴史と現在』岩波新書.

森川展昭 (1979) 「＜研究ノート＞『江戸時代の朝鮮通信使』歴史ドキュメンタリーフィルムー」『歴史評論』第 355 号、p.75.

門間貴志 (2005) 「映画史の中の在日朝鮮人」安田喜雄・田中範子編『日本に生きるということー境界からの視線』山形国際ドキュメンタリー映画祭東京事務局、pp.76-80.

— (2010) 「朝鮮人と中国人のステレオタイプはいかに形成されたか」黒澤清・四方田犬彦・吉見俊哉・李鳳宇編『日本映画は生きている第 4 巻 スクリーンのなかの他者』岩波書店、pp.141-162.

山口祐香 (2019) 「朝鮮通信使関連文化事業における越境する市民公共圏ー「世界の記憶」登録推進事業をめぐる対立と協働」『グローバル・ガバナンス』グローバル・ガバナンス学会、pp.113-129.

(2021) 「朝鮮通信使」をめぐる戦後日本市民社会の歴史実践：在日朝鮮人歴史家・辛基秀 (1931-

2002) の活動を中心に」九州大学地球社会統合科学府提出博士論文、pp.1-157.

横山恭子 (2020) 「朝鮮通信使をめぐる研究動向」『歴史学研究』第 966 号、pp.19-27.

四方田犬彦・平沢剛編 (2010) 『1968 年文化論』毎日新聞社.

四方田犬彦 (2014) 『日本映画史 110 年』集英社新書.

良知会編 (1997) 『100 人の在日コリアン』三五館.

若林啓介 (1979) 「日朝友好『江戸時代の朝鮮通信使』」『教育評論』第 378 号、pp.74-75.

심규선 (2017) 『심규선 기자가 전하는 조선통신사, 한국 속 오늘』도서출판월인.

이승진 (2019) 「전후 제일조선인 영화의 계보와 현황 - 다큐멘터리 영화를 중심으로」『일본학』48 号、동국대학교일본학연구소、pp.297-324.

한일문화교류기금편 (2018) 『조선통신사기록물의 'UNESCO 세계기록문화유산' 등재』경인문화사

한태문 (2018) 「유네스코 세계기록유산 '조선통신사 기록물'의 등재 과정과현황」『향토부산』제 36 호、부산광역시사편찬위원회、pp.53-97.

【新聞・雑誌】

『朝日新聞』
『季刊三千里』
『社会タイムス』
『視聴覚教育』

【インタビュー】

飛田雄一氏 (2018 年 2 月 27 日、神戸学生青年センター)
仁位孝雄氏 (2018 年 7 月 17 日、長崎市内の自宅)
鄭雅英氏 (2019 年 6 月 11 日、E メール)
安田喜雄氏 (2020 年 3 月 23 日、神戸映画資料館)
川瀬俊治氏 (2020 年 7 月 23 日、奈良市内)

【ウェブサイト】

株式会社桜映画社「海女のリャンさん」<http://sakuraeiga.com/products/403/> (最終閲覧日 2022 年 1 月 28 日)。
神戸映画資料館「青丘文庫研究会 映像を通して視る！「朝鮮人強制連行」」<http://kobe-eiga.net/program/2019/04/4648/> (最終閲覧日 2022 年 1 月 30 日)

投稿論文

1930年代における阿部知二の朝鮮認識と文学的抵抗——「冬の宿」をめぐって

廣瀬陽一（大阪公立大学客員研究員）

本論は、共産主義運動が崩壊した1930年代に、阿部知二が日本の帝国主義戦争と植民地支配への抵抗をどう模索したかを、長編小説『冬の宿』（1936）に登場する朝鮮人医師の高を通じて考察したものである。

高は〈内地〉で病院に勤めながら、朝鮮人労働者の病人を献身的に世話していたが、ある冬の夜に病院が火事になった直後に行方をくらましてしまう。その後、彼は、主人公で話者の〈私〉に手紙を送り、恩人の誘いを断れずに放火に加担したこと、報酬と後ろ盾を得たことなどを告白した上で、自分のためにも同胞に尽くすためにも金が必要だ、朝鮮民族はユダヤ人になるべきだという決意を披歴する。この決意が意味するものを物語に即して考察し、それが、日本による植民地支配という絶望的な状況の中で朝鮮民族が生き延びる道を見出そうとする希望の所産であることを示した。そして彼の決意の背景に、朝鮮人を独立した民族と捉える阿部の、〈皇民化政策〉に対する批判的な認識が潜んでいることを明らかにした。

その上で、報酬と後ろ盾を得た高が同胞に尽くす道を選ぶ可能性がどれほどあるかを、小説が書かれた1936年という時代状況に照らし合わせて検討した。37年の日中戦争勃発後に朝鮮人の転向者が急増したことを踏まえ、36年は朝鮮人が日本の支配からの解放を希望できる最後の時期だったこと、阿部も小説発表時には高に、希望を抱いて同胞に尽くす道を選ぶことを期待できた状況だったことを示した。これらの考察を通じて、共産主

義運動の崩壊後の、自由主義文学者の抵抗と朝鮮認識の一類型を明らかにした。

キーワード：阿部知二、「冬の宿」、ヒューマニズム、転向、朝鮮認識

This paper discusses how Tomoji Abe sought to resist Japan's imperialist war and colonial rule in the 1930s after the collapse of the communist movement through the Korean doctor Ko in 'Fuyu no Yado' ("Winter Lodging").

While working at a hospital in the Mainland, Ko devotes himself to caring for the sick Korean laborers but disappears one winter night right after the hospital caught on fire. Later, he sends a letter to the protagonist and speaker, "I," in which he confesses that he was involved in the arson as he could not refuse his benefactor's invitation and expresses his resolve that he needs money for himself and his people and that the Korean people should become like the Jews.

We then examined how likely it was that Ko, with his reward and backing, would choose to serve his people during 1936, the year in which the novel was written. Abe was shown to be in a similar situation where he hoped to choose a path of service to his people. Through these discussions, we revealed a type of resistance and Korean awareness by liberal literary scholars after the collapse of the communist movement.

Keyword: Abe Tomoji, 'Fuyu no Yado' (Winter Lodging),
Humanism, Tenko, Korean awareness

1. はじめに

阿部知二「冬の宿」(『文学界』1936年1-10月)は、地方の高校を卒業して上京し伯父宅に寄宿して大学に通う「私」が、様々な事情からそこを出て郊外の貧民街の中に霧島嘉門の一家が営む下宿をたまたま見つけて移り住み、大学生活最後の秋から春——卒業論文の執筆から就職活動までの時期——を過ごす中で起こる出来事を描いた長編小説である。

霧島嘉門は「瀬戸内海に向つて北に山を負つた地方の旧家」の長男で、少年の頃から遊蕩に耽る生活を送った。その様子を心配した親戚の勧めで、没落した旧家の娘のまつ子と結婚したが大恐慌で財産を失い、「内閣調査局」の守衛を務めつつ「R駅」近くの「貧民窟」で下宿を営むようになった。まつ子は二人の子供を育てるために編み物を習って家計を支えたが、教会に行くようになってから非常に熱心なクリスチャンとなり、ついには嘉門を改宗させるにいたった。嘉門は没落の原因が自分にあることの負い目から表面上はまつ子に従うが、彼女の目の届かないところでは禁欲とは縁遠い生活が続ける。しかしまつ子は、時に嘉門から暴力を振るわれながらも離婚しようとせず、キリスト教を信奉する。

こんな夫婦が営む下宿で暮らしはじめたある日、「私」の前に下宿していた医学士の増居が朝鮮人青年の高を連れて下宿を訪ねてきた。「増居が病院で指導してゐる朝鮮からきた医師で、いま朝鮮人の労働者の病人を献身的に世話してゐる感心な青年であつたが、さうした境遇のためにいま煩雑な関係がその身边に起つてゐるので、しばらく、——ほんのしばらくこここのところ、どこか独りの処にゐたいと増居に頼んだのでここに連れてきたのだ」。

彼は怜悯な顔をしてゐた。眼窩のあたりがまったく扁平なことで、顔色が深く沈殿した黄色の光沢をたたへてゐることとをのければ、その容貌や表情のどこにも朝鮮半島の人と思はせるやうなところはなかつた。言葉の歯切れもよく、ときどき英語や独逸語の単語をまぜたひどく気の利いたものだつた。これも、濁音が半濁音に、——ピがピになつたりするのでなければ、少しの隙もない、東京のインテリゲンツィア青年であつた。ただその様子にはどことなく落着きのないところがあるやうな気がした。

「私」の目にこのように映った高は、モルヒネ中毒者の収容所に向向いて医療活動を行うなど奉仕活動に精勤する好青年として描かれる。だがある大雪の夜に「深川区の、東亜人道協会経営の朝鮮人労働者の為の病院」から出火した際、様子を見に行つたまま行方が分からなくなってしまう。その後、故郷に帰つた「私」に高から手紙が届く。恩人に誘われて病院への放火に加担したこと、自分は従犯なので罪は軽いだらうこと、犯行に加つたことで相当な報酬を得たが獄を出たのもっといい報酬の約束があり、数年後には相当な親方になっているかもしれないことなどを告白した上で、次のように語った。「僕はいろいろと考へましたが、何をするにも、——自己のためにも、同胞の為につくすにも金です。僕はユダヤ人のごとくならうと思ふ決心を、数年来抱きはじめてのです。これが、僕のみでなく、僕の同胞の行くべき一つの道、いや大きな一つの道だと私は考へるのです」。

阿部のすべての文学作品の中で朝鮮人が主要な登場人物として出てくるのはこの小説だけである。しかし当時の阿部が朝鮮人と交友していたことを裏づける資料はなく、朝鮮を訪れた記録もない。このことは高が当時の阿部が〈朝鮮〉に抱いていたイメージを形象化した人物だったことを示しているが、放火犯という設定は「鮮人」や「朝鮮半島の人」らしくない「東京のインテリゲンツィ

ア青年」という表現とともに、特にコリアンから阿部の差別的な朝鮮人観の表出と読まれる可能性が高いことは容易に推測できる。実際、1999年に翰林新書の日本現代文学代表作選13として『겨울집』(冬の宿)の題名で韓国語訳が出版された際、許南薫(立命館アジア太平洋大学講師?)は、「この朝鮮人医師高とその周辺の人物に対する描写からは、当時の日本人の一般的な朝鮮人観を確認することができる。つまり、先入観にとらわれて屈折した目で見える朝鮮人像、心のどこかに警戒心もしくは猜疑心を持って眺める朝鮮人像がこの作品の随所に見られる」[許南薫 2002: 42]と批判した。だが彼は同じ論考で、下関から東京に向かう列車の中で、高が朝鮮半島を、列車の廊下のように他人が往来して安住できない場所だと語る場面を取りあげ、「当時の日本人の一般的な認識とは違う冷徹な知識人の見解と、植民地朝鮮に対する温かい理解者のまなざしも見られる」[許南薫 2002: 43]とも評価した。他の在日朝鮮人も総じて高の造形に否定的ではない。たとえば金達寿は汽車の場面について、「私も何度か朝鮮を往復した列車でこの高と同じような体験をしたものだった」[金達寿 1975: 2]と共感を示した。金鶴泳は高を金史良「光の中に」の南と重ねて読み、両者の根底の姿勢は異なっていると断った上で、「民族的ニヒリズムに陥っているふうな高の行き方は、読んでいてやりきれないものであるけれども、しかしそれは国を喪ったあの希望のない暗い時代においては、それなりにひとつの必然性をともなった行き方であったのかも知れぬ」[金鶴泳 1975: 6]と、高に理解を示した。朴春日も同様に列車の場面や「私」への手紙を取りあげ、ここに見られる「諦念ないし崩壊」を、阿部は高のものとしてだけとらえず、「いわばすでに開始された戦争と弾圧のながい氷河期、その「冬の宿」にうごめく人間の欲望や対立が、「悪因縁などといふものをはるかに突破した何物かで、身をしばりつけあひながら、深海の淵に沈んでゆく」霧島一家「や、傍観者的な位置にいる「私」のそれと重くかわりあった次元でとらえている」と評した[朴春日 1985: 229]。彼

らのこのような発言から、阿部が高を、(在日)コリアンが共感できる存在として造形したことが窺える。それはそのまま当時の阿部の朝鮮認識の水準を示す評価である。

他方、日本人の論者は「冬の宿」をどのように評価したのか。主な同時代評は単行本『冬の宿』巻末に収録されているが、それを見ると、キリスト教に対照的な態度を示す嘉門とまつ子の夫婦関係を聖と俗、肉と霊という対比でとらえたり、彼らを眺める「私」の視点や態度に焦点を当てた論評[江間道助 1937、伊藤整 1937、長谷川巳之吉 発表年不明、など]のほか、「内心夙に反逆性を失った階級精神や、付焼刃の能動性を以て粧はぬ点、正直な作品の代表」として、この小説をプロレタリア文学の系譜に置いた森山啓の論評[森山啓 1936, 1941: 19]が目につく。しかし高への言及は皆無で、わずかに伊藤整が「嘉門と最もよく較べられるべきは高であろう」[伊藤整 1937, 1941: 14]と述べている程度である。

その後、「冬の宿」を取り上げた論考はほとんど書かれなかったが、1974年に『阿部知二全集』に収録されたのを機に、改めて論評や学術論文が発表されるようになった。同時代評に見られた霧島夫妻に焦点を当てた論考だけでなく、高に焦点を当てた日本文学者や文学研究者の論考が書かれるようになったのはこの時からである。たとえば野間宏は次のように述べ、小説の構造の中で高が充分な役割を果たしている点を高く評価した。

朝鮮人にたいする差別意識は現在も依然として、日本に強く残っているが、朝鮮人を作中の主要人物の一人として登場させるなどということは、まったく危険なことだったにちがいないのである。そしてここに登場する高は、権力側からも、また朝鮮人の側からも、一見すれば、あやしげなものと思われかねない人間として描かれている。しかし元クリスチャンの高はクリスチャンのまつ子に対立する存在として、重さをもっており、まつ子には到底とらえることのできない屈折したものを備

えている人間として置かれているのである。
[野間 1974: 394]

水上勲は、豊島与志雄の、この小説で「作者が本当に意図したのは〔中略〕大きな一つの間人像を作り上げることだつたらうと思はれる」という指摘[豊島 1936: 7]を敷衍して次のように述べた。

高という人間はここでは最も小悪魔風な存在であるが——かつてクリスチャンであったことから巧みにまつ子に取り入り、奉仕作業に従事しているとみせかけながら保険金目当てに放火事件を起す一味に加わって失踪する——、彼も民族差別に鋭敏に反応する傷つきやすい人物であり、そこに冷酷なニヒリスト風の風貌はまったく見られない。失踪後も「私」に手紙を寄せて、その朝鮮人としての内面の苦しみを吐露する率直な人間である。[水上 1995: 108-109]

こうして高や霧島夫婦などの登場人物は、「それぞれの危機を背後に背負っていながら、デカダンスにのめりこんでいくことなく（あるいはデカダンスにのめりこんでいても）、ある人間らしさが与えられている」[水上 1995: 108-109]。このように野間と水上は共通して、朝鮮人をカッコ付きの「日本人」でなく描くのが困難だった時代に、高を、朝鮮人に固有の民族的痛みや苦しみを抱え込んだ人物として、阿部が描きだした点を評価した。

竹松良明は、これらとは異なる観点から高を捉えた。彼は、「『冬の宿』は明らかに、昭和九年二月のナルプ〔日本プロレタリア作家同盟〕解散の事実を真っ直ぐに胸で受けとめて書かれた作品である」[竹松 2006: 15]と指摘し、次のように述べた。

高が被侵略国である朝鮮の知識階級青年であるその出自は、どう見てもマルキシズムを取りこむための恰好の受皿としての配慮を印象させる。高が外国人である事実は、『北京』（昭

13・4、第一書房）で中国共産党の渦に巻き込まれていく王子明を大きな比重で描ききった例とほぼ同様の深慮であろう。その高の告白において、クリスチャンの現在意識の苦しみとそれ故の背教のプロセスと、一方続いて起こるマルキシズム離脱の疚しさが引き金となった犯罪心理とを、殊更相似形の匂いで並列するに至って作者はここまで猶予してきたマルキシズム仮託構造の一部を自ら開陳せずにはいられなかったように思われる。[竹松 2006: 17-18]

高は子どもの頃はクリスチャンだったが、箸の上げ下げにも罪の意識を感じるのが苦しくなってやがて棄教した。しかし罪の意識を感じる状態は残り、それに伴って『罪』を憎み戦いを挑まねばならないと考えるようになった。また彼は「思想運動の横」まで行ったが同胞からの粘り強い勧誘を受けいれず、霧島の下宿に身を隠した。このようなキリスト教からの離脱と共産主義運動への投身の拒否から、こんな悪い自分をもっと世間に暴きださねばならないという潜在意識が働き、放火にいたった。この二重の棄教の並行関係をナルプ解散の事実を視野に入れて描いたというのが、竹松の読解である。

これに対して渡邊一民は、論拠は示していないものの、「むしろ高の存在自体、マルキシズムにたいするきわめてアイロニカルな批判になっているとわたしは思う」と主張し、「阿部知二は『冬の宿』発表に先立ち、一九三五年夏には北京に旅立ち、その旅から生れたのが三八年の小説『北京』なのだが、植民地ないし半植民地にたいする阿部のこの時期における関心は、日本の問題を日本と切り離しえない関係にある外部から、あらためて見なおそうとする意図から出たものではないかと、私は考えている」と論じた[渡邊 2003: 52]。このように『全集』刊行後に日本人が書いた論考では高は、「冬の宿」が発表された1936年という時代の状況に対する阿部の文学的抵抗と結びつけて考察されている。

高に、何らかの形でマルクス主義に対する阿部の姿勢が盛り込まれていることは確かである。だが共産主義（文学）運動との関係を重視するなら、ユダヤ人ようになるのが朝鮮民族の進むべき大きな道だという高の決意にもっと注目すべきではないか。それは絶望的な状況でもなお高が希望を抱いていることの証左だからだ。日本人の転向者が共産党やマルクス主義思想を放棄したあとに天皇制に希望を見出して何の抵抗もなく帰順したばかりか、天皇を盟主とする「大東亜共栄圏」の建設に積極的に参加した歴史を念頭に置くと、両者の差は決定的である。しかしそのように解釈してもなお、渡邊が「高をとおして一個の朝鮮人像をつくりあげるには、その思想問題から拝金主義まで、あまりにも曖昧な、謎めいたものが」「賦与されすぎている」と戸惑いつつ記した〔渡邊 2003: 52〕ように、高が利己的な俗物なのか同胞に奉仕する志を秘めた人物なのかは見極めがたい。

そこで本論ではまず、物語の中で高の言動が果たす役割を位置づけ、「自分のためにも同胞のためにも金が必要だ、朝鮮民族はユダヤ人ようになるべきだ」という彼の決意に込められたものを明らかにする。その上で「冬の宿」を 1936 年という時代の中に置き、その後の高が歩みうる可能性を検討する。これにより、共産主義（文学）運動が壊滅した時代に阿部が高を通じて模索した文学的抵抗の有り様を提示したい。

2. 「ユダヤ人のように」が意味するもの——阿部の朝鮮認識

「冬の宿」の物語に高が登場するのは、「私」が嘉門一家が営む下宿に引っ越し、キリスト教を軸とする嘉門とまつ子の関係が描かれたのちである。高は、増居に下宿先を探してもらった理由を次のように語った。「某私立医学校を出てその病院に勤めてゐる傍ら、同郷の先輩の社会事業家が深川に建ててゐる鮮人労働者のための施療病院に奉仕的にかよつてゐる。ことに、その分院のやうに

なつてゐる洲崎のはづれの埋立地にあるモヒ患者の収容所には一週に二度も通つて、何十人の廃人に注射してやる」が、行くと共に悪寒をそそる。青年会の寄宿舍では心を休める雰囲気がない上に友達が多くて勉強できる環境にない、だから「夜の憩ひ場としてこんな温かさうな家庭に泊めてもらひたかつた」と。また、自分が今のような仕事をしているのも、子どもの頃に教会に通っていたからかもしれないとも語った。この告白に心を動かしたのはまつ子で、彼を教会に誘った。高は、自分は今ではもうクリスチャンとは言えないと断ったが、実際には大抵の日曜日には教会に通った。しかし高とまつ子とではキリスト教の意味はまったく違っていた。まつ子にとってキリスト教は、自分自身が崩壊するのを防いでくれる精神的な支柱にはかならない。クリスチャンとしての生活を厳格に守ることが、彼女を彼女たらしめている宗教的要因と言つていい。これに対して高は子どもの頃にクリスチャンだったことは確かだが、箸の上げ下げのような些事にも善悪の反省をしてしまうのが苦しく、やがてキリスト教から離れてしまった。だが罪を感じる意識は残った。そのため高は《罪》を憎み戦いを挑まねばならないと考えようになった。それを彼は、「人間は善くならうとばかりしてゐて、それに失敗して悪くなる、といふ考へ方は間違ひで、善くならうといふ本能と等量に、悪くならうといふ本能がある」と説明している。これに従えば、高の奉仕活動は、善行を積もうというキリスト教的な動機から生じた行為ではなく、「善くならうといふ本能」と「悪くならうといふ本能」が、天秤のように釣り合っている状態が作り出している行為ということになる。このような高の内的状態を、比喩的によくあらわしているのが、「朝鮮海峡を渡つて下関」に着き、東京に向かう急行列車の中で先輩に語ったことを「私」に説明した、彼の次の言葉である。

「僕はその時、先輩にかういつたのさ。——僕たちはいま汽車の通路に坐つてゐる。落ちつかうとすると誰かが踏み越えてやつてくる。

ところが、この通路がつまり朝鮮半島だ。大陸と太平洋とのあひだに細長く突き出した通路、これが朝鮮半島だ。その半島で、僕たちの祖先は、何千年の間、これと同じ目に逢つた。落ちつかうとするひまなどない。漢民族が通つてきた。蒙古人が北から劫掠こふりやくしながら通つてきた。満州族がやつてくる……という風に、北と南を通りぬけるために、ここを廊下にする。ロシア人まで廊下にしようとする。朝鮮の歴史は、要するにその廊下さ、通路さ。そんなところに住まなければならぬとあれば安眠も何もできるものぢやない。あの夜行列車の中の僕と同じだ。」

朝鮮半島を中国大陆と日本列島との間にかかった橋ないし通路と見るのは、朝鮮半島を朝鮮人という固有の歴史を持った民族が日々の生を営む歴史的空間としてではなく、無人の荒野のごとき地理的空間としてしか見ないことである。この場面は、外部から絶え間なく侵略され、政治的なものであれ、思想的なものであれ、宗教的なものであれ、確固とした一つの〈場〉を持ちえず、二つ以上の立場の間で絶えず揺れ動かざるを得ないものとしての〈朝鮮〉を形象化するものとして、高が造形されたことを如実に示している。

では「悪くならうとする本能」に該当するのは何か。朝鮮人の同胞からの「思想運動」への勧誘から逃れることである。行為に対する罪の意識だけが残っている高にとって、「悪くならうとする本能」は、非合法の「思想運動」に投身することではなく、同胞の勧誘を断ることから生じるものなのだ。彼は「私」への手紙の中で次のように説明している。

一つの危険から逃げると、こんどは第二の危険への警戒心がゆるむといふのは、人間の心理の弱点です。二本の線路の中央に立つてゐるとします。右方から列車がきます。それをやつと逃げました。と思ふ瞬間に左方からも一つの列車が走つてくると、前の警戒の緊張

が解けたばつかりの処とて、今度は前ほど一生懸命に逃げず、引つ掛かつてしまふことがあります。僕が思想運動から逃げてほッとした瞬間にきた次の誘惑には抵抗力が弱くなつてゐたのです。

いま一つは、僕の懺悔的なクリスチャン的な性癖のいたすところですよ。思想の仲間から逃げて、僕は何となしに恥ぢ悲しんでゐました。すると、この悪い奴である《我》^きは、何かもつと悪いことをして天下に恥を曝さなければいけないやうな潜在意識が動いたのです。

このような内的心理を経た彼は、恩人に誘われて断り切れずに放火に加担し、行方をくらませる。新聞には当初、漏電による出火が原因と報道されたため、「私」は行方が分からなくなった高を探し、まつ子と一日あちこち探すが見つからず、諦めて帰宅する。しかしその後、保険金目当ての放火らしいことが新聞に載る。それと前後して嘉門が、「私」とまつ子が二人で高を探し回ったことを情事と勘違いして「私」に激怒して殴り、「私」はその場で下宿を出る決心をし、サナトリウムで静養している恋人の庵原はま江を見舞って郷里に戻った。高からの手紙が届いたのはその翌日だった。高は、放火した一味に自分がいたことを告白し、そこにいたった内的過程を自己分析的に述べた上で、次のように語った。

僕はいろいろと考へましたが、何をするにも、——自己のためにも、同胞の為につくすにも金です。僕はユダヤ人のごとくならうと思ふ決心を、数年来抱きはじめてたのです。これが、僕のみでなく、僕の同胞の行くべき一つの道、いや大きな一つの道だと私は考へるのです。

僕たちが、ユダヤ人のごとくなる、——滑稽だ、と君はいひませう。僕も初めはさう考へました。隠者王国^{ヘーミット・キングダム}といはれた朝鮮の人が、そんなことになれるか？ と。しかし考へて下さい。われわれの土地は痩せ人口は乏しい

のです。われわれの資力はただ一人々々の肉体と精神の力です。かくて、道は、ユダヤ人のごとく、世界の強盛な民族の間に浸潤して、あのやうな力を持つことです。我々に、あのやうな力があるか、彼等の如き経済家、或は大科学者、或は大芸術家になれるか、と君は言ひますか。しかし考へて下さい。ユダヤ人があのやうになつたのはヨーロッパの歴史に於て、中世紀以降に属することですよ。古代から何百年、彼等は、ただ弱いだけで、商業民族としては、フォエニシヤ人はいふまでもなく、エジプト人、ギリシヤ人にも劣り、科学に於ても何一つフォエニシヤ、エジプト、ギリシヤに比べるべきものは持つてゐなかつた。芸術だつて同じことです。神のことばかり考える、それこそ隠者王国だつたのです。それが数世紀の後に、世界の政治経済と科学と芸術の世界にああいふ風になつたのです、僕がバイブルを読んだことはこんな智慧となつて芽を出しました。

この手紙を最後に高は物語から完全に姿を消してしまう。手紙を読んだ数日後、「私」は就職のために東京に戻って新たに下宿を借りたが、まもなく従妹からはま江の死を伝えられる。他方、嘉門の一家は生活が逼迫し、二人の子供を親族に引き取ってもらって、東京でも有名な貧民窟の「R・町」に引越していった。

このように物語の全編を通じて高は、非常に癖の強い霧島夫婦と比べても際立って異彩を放っている。そう見える要因の一つは彼の本心と思えるものがどこにも顔をのぞかせておらず、矛盾する言動ばかりが目につく点にある。金が欲しいから放火に加担したが、自分のためにも同胞に尽くすためにも金が必要だと考えるにいたつたという手紙の一節はその典型である。また彼はまつ子などの前ではクリスチャン的な振る舞いを見せるが、「私」が腹を割って話そうと誘った際には、自分は宗教であろうが慈善的な施療事業であろうが「唯物的」に利用する心積もりだと打ち明ける。「僕が

今してゐることは、そんな観念の遊戯より、いま眼の先でモルヒネが切れて苦悶してゐるやつにグッと注射するといふことです。そしてわづかの月給を貰ふだけです」。そして高は〈内地〉に来て以降、官憲に監視され続けていることへの恐怖と不安があることを語るが、そこから「私」が窺い知つたように、高の言動の矛盾——キリスト教であれ思想運動であれ一つの確固とした立場に身を置くことを断固として回避する態度——の根底に、この恐怖と不安が潜んでいることは疑いない。それは朝鮮半島は列車の「廊下」のようなものであり、自分たち朝鮮民族はその「廊下」で一時も安眠できない状況に置かれているのだという高の認識と逆説的に一致している。しかし先述のように彼はその立場を、いわば〈民族の運命〉として、諦念を持って受け入れているのではない。彼は世界の強盛な国家や民族に押しつぶされずに朝鮮民族が生きのびる方途を探る試みを放棄していない。この点で高は、没落の一途をたどる霧島一家や、時代状況の悪化に抗う術を自ら探究しないまま巻き込まれていくことが予想される「私」とは違っている。ここに高が異彩を放っているもう一つの要因がある。ではこのような人物を造形してわざわざ登場させた阿部の意図はどこにあったのか。この疑問を考える上でヒントとなるのが、高に対して（在日）コリアンと日本人の論者が示した共感である。

高は保険金目当ての放火に加担した。それは通常であればいかなる情状酌量の余地もない利己的な犯罪である。しかし（在日）コリアンと日本人の論者はいずれも、高に共感を示しこそすれ犯罪者として糾弾する様子は見せなかった。先に見たように、（在日）コリアンには高の境遇や寂漠とした内面世界は決して他人事に見えなかった。他方、日本人の論者が示した共感には、朝鮮に対する植民地支配や（在日）コリアンへの差別に対する贖罪意識が作用していると推測される。特に小松川事件（1958年）や金嬉老事件（1968年）以降、日本人の論者は高の犯罪を、それらの事件と無関係には読解できなかったように思われる。阿部はも

ちろんこれらの事件と無関係に高を造形したが、やはり植民地支配に対して負い目を感じていたことは疑いない。朝鮮民族はユダヤ人のようになるべきだという高の発言の根底には明らかに、〈皇民化政策〉に反して朝鮮民族は〈潜在的な日本人〉ではなく日本人とは別の独立した民族だと捉える阿部の認識が横たわっているからである。とはいえ高は民族国家の樹立を志向する道には進まない。彼は、強国が朝鮮民族に掛けている様々な制約や国土の狭さと貧弱さがそれを許さないと説明しているが、朝鮮の独立をわずかでもほのめかす記述を挿入する危険性は阿部も当然よく承知していただろう。このような制約の中で阿部は、〈皇民化政策〉と正面から衝突することなく、朝鮮人の民族的主体性を尊重する日本人の態度を、高という朝鮮人の口を借りて披瀝したのだ。この意味で高は、共産主義（文学）運動が崩壊した時期に、それでもなお時代状況に流されず希望の道筋を模索した阿部の文学的抵抗を形象化した人物だったと言える。

では高が「僕のみでなく、僕の同胞の行くべき一つの道、いや大きな一つの道」だと考えた、「ユダヤ人のごとく、世界の強盛な民族の間に浸潤して、あのやうな力を持つこと」という希望は、その後の現実の中でどのように可能性を持ち得るのか。また後ろ盾と金を得た高が、手紙に記した、同胞のために尽くす可能性はどれほどあると考えられるだろうか。次節ではこの問題を、阿部の文学的抵抗への模索と関連づけて考察したい。

3. 1936年という分岐点——転向の時代における抵抗の模索

1931年の満州事変を期に、日本は急速に軍国主義体制を整備するとともに、治安維持法を振りかざして左翼運動を徹底的に弾圧した。しかし左翼運動の崩壊の引き金を引いたのは暴力的な弾圧よりコミンテルンへの無批判的な追従を疑問視した党指導者だった。1933年6月に佐野学と鍋山貞親

が獄中から発表した転向宣言がそれである。これを皮切りに日本の共産主義運動は急速に崩壊し、党や共産主義思想を放棄する転向者が続出、1934年2月にはナルプが解体した。それから程なく村山知義や中野重治など転向した共産主義文学者が転向を扱った文学作品を発表、転向文学として話題を呼ぶとともに、転向文学をめぐる論争が勃発した。その後も共産主義的な外郭団体や研究グループなどを狙い撃ちにした弾圧は続き、1936年10月のコム・アカデミー事件では講座派の学者の大半が検挙され、日本資本主義論争が中断に追い込まれた。こうして党を中心とする共産主義運動は完全な機能不全に陥ったが、官憲の弾圧はそこで終わらなかった。1937年7月に盧溝橋事件が起こって日中戦争が勃発すると、11月に中井正一など『世界文化』グループが、12月には山川均をはじめ400名余りもの労農派グループが検挙される人民戦線事件が起こった。こうして自由主義者や社会民主主義者など、それまで共産主義者が「階級敵」と攻撃してきた様々な思想グループへの弾圧が本格化しはじめた。

朝鮮人もこの動きと無関係ではいられず、1933年以降、〈内地〉と植民地朝鮮の両方で転向を促す政策が形成されていった。これに関して論者は別の論考で述べたことがある〔廣瀬 2021: 153〕が、それを踏まえてあらためて詳しく記述したい。まず〈内地〉では、1933年は「有力黨員ニシテ転向ヲ声明シ過去を生産スルモノ続出スルニ不拘、鮮人黨員ニシテ転向ヲ声明スル者未ダ一名モナク（共青員ニ一名アリ）」〔内務省警保局編 1972a: 1477〕という状況だったが、1934年は治安維持法違反の刑余者と受刑中の朝鮮人120名中96名が当局から転向・準転向〔内務省警保局編 1972b: 1503〕と、1935年は同年中に釈放された刑余者と受刑中の朝鮮人103名中88名が転向・準転向〔内務省警保局編 1972c: 1512〕と認められた。植民地朝鮮では治安以上法違反受刑者のうち、1934年は828名中404名が転向・準転向と、1935年は701名中379名が転向・準転向と認められた〔朝鮮総督府高等法院検事局思想部 1939; 洪宗郁 2011: 50〕。数字だ

けを見ると順調に見えるが、転向の動機を比較するとそうとは言いきれない。1936年末段階での同期を比較すると、日本人の場合、「近親愛其ノ他家庭関係」が41.5%と最も多く、「国民的自覚」(23.2%)、「信仰上」(12.5%)と続く。これに対して朝鮮人の場合、「拘禁ニ依ル後悔、自新」が34.4%と最も多く、「近親愛其ノ他家庭関係」(34.1%)、「訓諭教誨ノ結果」(18.7%。この項目は日本人の調査にはない)と続く。日本人の転向の動機に、「拘禁ニ依ル後悔」から転向した日本人が7.3%しかいなかったことを考えると、水野直樹が指摘したように、「拘置所や刑務所における処遇・転向強要がいかに苛酷だったかを推測させるに足る。「国民的自覚」や「主義理論ノ清算」を行なわない朝鮮人思想犯に対しては、「拘禁」によって苦痛を与えることによって転向させるという政策がとられていたといつてよい」[水野 1999: 43]。本多秋五は「転向文学論」で、最悪の場合には死にいたる可能性を覚悟せねばならないほどの外的強制を転向の最大の原因に挙げた[本多 1954: 251]。しかし実際に外的強制によって転向させられたのは、朝鮮人の方が遥かに多かったのだ。1936年11月に〈内地〉で思想犯保護観察法が施行されると、翌12月、これに準拠した朝鮮思想犯保護観察令が植民地朝鮮に施行された。こうして非転向者に対しては転向へと積極的に誘導し、準転向者・転向者には逆転向に向かわせない制度が整備されていた。

しかしそれでもなお、天皇制に帰依する理由を持たないがゆえに朝鮮人の転向者は緩やかにしか増えなかった。この状況が一変するのは、1937年7月の盧溝橋事件に端を発する日中戦争の緒戦で日本軍が続けざまに勝利を収めて以降である。特に武漢作戦における武漢三鎮の陥落(1938年10月)は、中国に期待していた多くの朝鮮人知識人や活動家を絶望させた。「一九三八年末の調査によれば、在監思想犯一二九八名中、転向者は合わせて七七六名であったが、そのうち日中戦争の勃発後に転向を明らかにした者が四二七名であり、一年という短い期間に転向者が急速に増えたことを

物語っている」[洪宗郁 2011: 57]。

こうして「冬の宿」が発表された1936年は、2・26事件が起こったのち、日本が急速に軍国主義化していくのと同時に、共産主義(文学)運動が崩壊し、〈内地〉と植民地朝鮮の両方で転向制度が整備され、様々な手段で転向者が作り出されていった時代だった。しかも絶妙なことに、日中戦争が起これば中国が日本を撃退して朝鮮の独立を助けてくれると、朝鮮人が希望を持てる最後の時期だった。それは、自分のためにも同胞に尽くすためにも金が必要だという高が、今までとは別の形であれ今後も同胞に奉仕するか、すべてに絶望してもっぱら私利私欲のために活動するようになるか、その分岐点に立っていたことを意味している。少なくとも「冬の宿」を発表時に読んだ朝鮮人には、高が前者の道を歩んでくれることを期待して彼を眺めることが可能だった。では阿部自身はどうだったのか。

阿部がどれほど朝鮮人の転向について知りうる立場にあったかは不明であり、まして「冬の宿」の発表から1-2年後に朝鮮人の知識人や活動家が転向し、積極的であれ消極的であれ、日本の帝国主義戦争と植民地支配に加担する〈親日派〉が急増する未来を予見できたとは思えない。しかし阿部は高に最後の一线を超える寸前で踏みとどまることを期待していたと推測される。それを窺わせるのが、「冬の宿」連載中に『文学界』に発表された、〈ヒューマニズムの現代的意義〉をテーマとした、いわゆるリレー評論の次の主張である。

明治以後の「近代文学」を一瞥して見るとき、何んと、どの作家もどの作家も、ペシミスティクなものばかりではないか。我々は、空気の中に住むものが空気を感じないやうに、そのことに不感になつてゐるが、若し世界文学的な観点に立つて見たならば、その事実は寧ろ驚愕すべきものがあらう。[中略]このペシズムは、人生に徹した究極の、深刻苛辣なものであらうか。否、それは現代の世相の「デカダンス」が、浮薄なものであることと同様

の現象、明かにヒューマニズム以前の^レものであり、つまり封建社会伝来の性格を多量に含んでゐるものである。

私は、現代の文学にヒューマニズムの要望があるとすれば、以上の様な状態で必然に生れたものだ、と考へるのだが、さて、ここにもう一つ私を考へさせたことがある。「死の文学」〔中略〕と袂別しようといふ横光〔利一〕氏にはかつて多少ともかかるブルースト的文学の中心的恒星の色彩はなかつたか。現代文学の展開をヒューマニズムと考へる三木〔清〕氏は、史的唯物論の思想家でなかつたか。〔中略〕それであるとすれば、ここに時間的前後の食ひ違ひがある。〔中略〕これは二氏の問題ではない。現代日本そのものが、かうした食ひ違ひだらけであるといふ事実の証左である。二氏は最も誠実に現代日本の事態に照準を合はせた時、西洋流で行けば前後に食ひ違ふ思考の道筋をとられる事になつたのだ。ここで自分のことをいふのはひどい僭越かも知れぬが、私も今迄強く、ヒューマニズムの否定としてあらはれた西洋の戦後の主知的アンティ・ヒューマニズムに影響されてきてゐる。それが今ヒューマニズムを考へることになつてきてゐる。かうしたことは何を示すか。——現代のヒューマニズムは、この現代日本の食ひ違ひ状態の正視の上に立たなければならぬこと。（逆にいへば、かく食ひ違ひだらけの妙な状態だからこそ、ヒューマニズムが現代に於て必要だ、ともいへる。）次に、現代に於てヒューマニズムを考へるといふことは、常にアンティ・ヒューマニズムの深刻な対立の相に於てでなければ無意味だ、といふこと——この二つが現代ヒューマニズムの性格だ。〔阿部 1936: 166-167〕

このリレー評論が連載された 1936 年後半、日本の文壇論壇ではヒューマニズム論が活況を呈していた。その背景にあったのは、同年 2 月に起こった 2・26 事件に象徴される、いわゆる天皇制ファ

シズムの暴力的進出に対する強い危機感である〔水上 1995: 249-250〕。阿部もこの時代状況を受けて、自分は「今迄強く、ヒューマニズムの否定としてあらはれた西洋の戦後の主知的アンティ・ヒューマニズムに影響されてきてゐる」だが、「今ヒューマニズムを考へることになつてきてゐる」と述べたと思われる。阿部のこの転換は、国内的にはプロレタリア文学運動の崩壊に、国外的には 1935 年 4 月に開催された、ヴァレリーが司会を務めた知的協力国際会議に対応するものである。

日本国内でプロレタリア文学が隆盛を誇っていた時期、阿部は「主知的文学論」で、「最初に吾々の対作品状態に起るものは感覚であり」、「最後に来るものは思想である」、その中間に存在するものが「感情性に関するもの」だと規定した〔阿部 1929: 6〕上で、次のように主張した。

主知は単なる社会、功利的にのみ使役せられない。又、それは、エモーションを排しない。文学内に於けるエモーションの存在を信じ、且つその拡張をも希望する。何となれば、それは、エモーションを克服する「方法」を將に把握せんとしてゐるから。従来、無限性と神秘性とをその資性と考へられたところのエモーションの深淵を、「主知的方法」によつて探求することが、真の主知的方法ではなからうか。〔阿部 1929: 7〕

ここで阿部が言う「主知的方法」とは、神秘やロマンス「に秩序を与へる精神」を基礎づける「方法」である〔阿部 1930: 62〕が、彼がこのように主張した際に念頭に置いていたのがプロレタリア文学である。彼の考えでは、「ボルシェビズムの文学論と主知的文学論とは決して無関係ではない。少くとも、素材を重視する一点に於ては一致する」〔阿部 1929: 4〕。しかしプロレタリア文学は「身辺的蝸牛殻たる「趣味」に代ふるに「観念」又は「社会思想」を以てしたもの」にすぎない〔阿部 1931: 36〕。プロレタリア文学は、形式的には近代的社会科学の方法論で武装しているが、内容は前近代

的なセンチメンタリズムを引きずっていると言うのだ。プロレタリア文学に対する彼のこの視座は、その後も一貫している。それは共産主義（文学）運動が崩壊したのちに彼が次のように述べていたことから明かだ。「プロレタリア文学が、あのやうにも全文壇に浸潤したこと自体に、わが国の文士が、階級的にいつて、また生活感情的にいつて、特権的なブルジョア文学などしてゐるものは始めから一人もなく、ブルジョア文学とプロレタリア文学と、僅かに分つことの出来るものは、その文学的趣味の差であり、マルキシズムを信奉するかしないか、だけであつた」[阿部 1936: 10]。こうして日本国内で共産主義（文学）運動が壊滅して大量転向現象が起こっていた時期、ヨーロッパでは知的協力国際会議が開かれ、阿部はそこでヒューマニズムの問題がどのように討議されたかに関心を寄せた[阿部 発表年不明, 1974]。そして阿部はこの会議を受け、人民戦線の形成を模索した。竹松良明によれば、阿部はのちに次のように語ったという——天皇制ファシズムが社会を覆う時代状況に抵抗するには「何らかの大きな力を内蔵した広範な組織、着実に結びあつて社会の各方面に根をはった団結的行動、——つまり広大な人民戦線の力というものがないならば、効果をおさめることは困難または不可能であると考えられた。[中略]——このような私の考え方が敗北主義的であつたとするならば、私は甘んじてその責めを受けよう」[竹松 1993: 118]。しかし言うまでもなく、人民戦線の構築は遅すぎる試みではあつたが、敗北主義的な考え方ではなかつた。いずれにせよ、このような国内外の時代状況の中で阿部は、「エモーションを克服する「方法」」を探究していた「アンティ・ヒューマニズム」の態度を転換させ、「ヒューマニズムを考へることになつ」たのである。

これを念頭に置いて、先に引用したリレー評論の内容を読むと、それが「冬の宿」の登場人物の中でも特に高によく妥当することがわかる。読者には高の本心を窺い知ることができず、彼の矛盾する言動に幻惑される。それは金のために病院に放火しながら、同胞に尽くすためには金がいると

いう告白において頂点を迎える。高のこの、矛盾したように思える行動の根底にあるヒューマニズムを見定めるには、「現代日本の食ひ違ひ状態」と対峙する必要がある。それは〈内地〉に渡つて以来、高が抱いている、官憲に監視されているという恐怖や不安、「思想運動」への勧誘から逃れた瞬間、こんな悪い奴である《我》に対し、もっと悪いことをして天下に恥を暴露せねばならないという潜在意識——それらを生みだしたものが何であるかを「正視」することである。言うまでもなく日本の植民地支配である。その根底にあるアンティ・ヒューマニズムとの深刻な対立の相においてヒューマニズムを考へることの必要性が語られるかぎりにおいて、高は〈民族の運命〉を甘受するだけの存在ではなく、世界の強盛な国家や民族に押しつぶされずに朝鮮民族が生き延びる方途を探る試みを放棄していない、絶望の中に希望を抱いた人物として造形されている。ここに、共産主義（文学）運動が壊滅した後になお可能性を模索する、阿部の文学的抵抗の有り様を見出すことができる。

4. おわりに

共産主義（文学）運動の壊滅の過程で転向した多くの日本文学者は、意識的であれ無意識的であれ、あるいは積極的であれ消極的であれ、日本の帝国主義戦争と植民地支配を正当化する文学作品を発表した。しかも日本人の左翼的な知識人は長らく、朝鮮や朝鮮人にほとんど関心を持っていなかつた。たとえば日本人の共産黨員や党の同調者は、1955年に朝鮮総連が結成されると同時に在日朝鮮人が党を離脱するまで、一貫して彼らの民族的闘争に固有の価値を認めなかつた。自由主義者の多くも朝鮮や朝鮮人への意識は希薄だった。この点に関して、晩年の鶴見俊輔にインタビューした小熊英二は次のように述べている。「敗戦後の日本で、これは政治勢力としても知識人のレベルでもそうですけれど、何だかんだ言っても朝鮮人

の問題を問題化していたのは、共産党とその周辺だったということは歴史的に事実だと思うんですね。〔中略〕しかし丸山〔眞男〕さんとか鶴見さんとか、共産党と距離を置いている人たちからは、ほとんどその問題が出てこなかった」〔鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二 2004: pp.331-332〕。このような絶望的な状況で、なお文学的抵抗を試みた一人が阿部だったことは、まったく知られていないわけではなかった。たとえば中野重治は阿部の追悼文で次のように書いている。「多分阿部には、日本文学の人々が、プロレタリア文学運動方面は無論のこと、より大きく連繋して、より大きな正面の敵に向う陣形をととのえるべきだろうという考えがあつたらしかつた」〔中野 1973: 108-109〕。

しかし阿部の文学的抵抗は日本の戦時体制に対する人民戦線的な陣営の形成の模索のみならず、朝鮮に対する植民地支配への批判にまで及んでいた。敗戦後に自由主義者の視野から消えてしまっていた朝鮮問題に対する阿部の視野を延長していけば、彼の考えていた人民戦線的な陣営の中に朝鮮人など植民地の人々を含めることも可能だったと思われる。ここに窺える、阿部のヒューマニズムこそ、「冬の宿」を、1936年という時代状況の中で書かれた小説として読解したときに浮かび上がってくる文学的抵抗の意義にはかならない。

※ 「冬の宿」の文章は『冬の宿』（1941年2月、27刷、第一書房。初刷は1936年12月）より引用した。×印のルビは、単行本では伏字だったが、『阿部知二全集2』（1974年6月、筑摩書房）でおこされた箇所である。

※ 引用文中の〔 〕内は論者による補足、傍点は原文ママ。

※ 本論は한국일본연구단체 제 10 회 (한국일본학회 제 102 회) 국제학술대회 (ZOOM オンライン) での発表「1930 년대에 있어서 자유주의자의 문학적 저항과 조선인식——아베 도모지 (阿部知二) 「겨울집 (冬の宿)」를 둘러싸고」に基づく。論文化にあたり日本学術振興会特別研究員奨励費 (課題番号 19J00562) を活用した。

参考文献：

日本語

- ・阿部知二 (1929) 「主知的文学論」『詩と詩論』厚生閣書店、p.4, 6-7.
- ・—— (1930) 「文明と文学及其の方法論」『新潮』新潮社、p.62.
- ・—— (1931) 「新文学の精神」『詩と詩論』厚生閣書店、p.41.
- ・—— (1936) 「日本の小説家」『文芸』改造社、p.10.
- ・—— (1936) 「ヒューマニズムと文学」『文学界』文芸春秋社、pp.166-167.
- ・—— (発表年不明) 「現代に於けるヒューマニズムの位置」初出未詳。阿部知二 (1974) 『阿部知二全集 10』筑摩書房、所収。
- ・—— (1936) 『冬の宿』第一書房。本論で用いたのは 1941 年 2 月発行、27 刷。
- ・—— (1974) 『阿部知二全集 2』筑摩書房
- ・伊藤整 (1937.1.25) 「阿部知二氏の『冬の宿』」『新愛知』。阿部知二 (1936, 1941) 『冬の宿』巻末に収録された同時代評より引用。p.14.
- ・江間道助 (1937) 「阿部知二論」『早稲田文学』。阿部知二 (1936, 1941) 『冬の宿』所収。
- ・金達寿 (1975) 「阿部さんと私」『阿部知二全集 9』月報 8、河出書房新社、p.2.
- ・金鶴泳 (1975) 「「高」と「南」」『阿部知二全集 5』月報 10、河出書房新社、p.6.
- ・竹松良明 (1993) 『道は晴れてあり』神戸新聞総合文化センター、p.118.
- ・—— (2006) 『阿部知二論——〈主知〉の興亡』双文社出版
- ・朝鮮総督府高等法院検事局思想部 (1939) 「治安維持時報違反受刑者転向状態別累年比較」『思想彙報』朝鮮総督府高等法院検事局思想部。洪宗郁 (2011) より引用。
- ・鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二 (2004) 『戦争が遺したもの——鶴見俊輔に戦後世代が聞く』新曜社、pp.331-332.
- ・豊島与志雄 (1936.12.21) 「人間の像を彫む」『東京朝日新聞』東京朝日新聞社、朝刊
- ・内務省警保局編 (1972a) 『復刻版 社会運動の状況 五 昭和八年』三一書房
- ・—— (1972b) 『復刻版 社会運動の状況 六 昭和九年』三一書房
- ・—— (1972c) 『復刻版 社会運動の状況 七 昭和十年』三一書房
- ・中野重治 (1973) 「同時代の一人として」『新日本文学』新日本文学会、pp.108-109.
- ・野間宏 (1974) 「解説」『阿部知二全集 2』河出書房新社、p.394.
- ・朴春日 (1985) 『増補 近代日本文学における朝鮮像』

未来社。初版の刊行は1969年。

- ・長谷川巳之吉（発表年不明）「『冬の宿』に扱はれた問題」。阿部知二（1936, 1941）『冬の宿』所収。
- ・廣瀬陽一（2021）『中野重治と朝鮮問題——連帯の神話を超えて』青弓社、p.153.
- ・許南薫（2002）「韓国語訳『冬の宿』の翻訳について」『阿部知二研究 城からの手紙』、阿部知二研究会
- ・洪宗郁（2011）『植民地朝鮮の転向者たち——帝国／植民地の統合と亀裂』有志舎
- ・本多秋五（1954）「転向文学論」『岩波講座文学 5』岩波書店、p.251.
- ・水上勲（1995）『阿部知二研究』双文社出版。初出は

『昭和文学研究』1983年。

- ・水野直樹（1999）『植民地期朝鮮・台湾における治安維持法に関する研究』平成8-10年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書
- ・森山啓（1936）「作家の性格」『新潮』。阿部知二（1936, 1941）『冬の宿』所収、p.19.
- ・渡邊一民（2003）『〈他者〉としての朝鮮 文学的考察』岩波書店、p.52.

韓国語

- ・아베 도모지（1999）『겨울집』이원희 옮김, 서울・소화

研究ノート

八尾の朝鮮人の生活とできごと—1945 年以前を中心として

鄭栄鎮（大阪公立大学）

1. はじめに

本稿は、大阪府東部の八尾市にフォーカスして、1945 年以前、朝鮮人¹⁾がどのような暮らしを送っていたのかを新聞記事をもとに明らかにしていくものである。

八尾市は大阪市ならびに東大阪市に隣接する 26 万 5,269 人²⁾の人口を有する都市である。うち外国籍人口は 7,893 人³⁾であり、国籍・出身地別では「韓国」2,719 人、「ベトナム」2,167 人、「中国」2,078 人と続く⁴⁾。人口に占める外国籍者の比率は 2.98%である。

八尾市は 1948 年に八尾町、龍華町⁵⁾、久宝寺村、大正村、西郡村の合併により市制が施行され、のち南高安村や高安村、志紀町などとの合併を経て現在の市域が確定している。合併当時の人口は 6 万 4,431 人⁶⁾である。合併時に近い時期の外国籍人口をみると、八尾市発行の広報誌「八尾市時報」に掲載された「外国人国籍別人員」に 1950 年 10 月 30 日現在で外国籍 1,836 人とある。国籍・出身地別では、「韓国人」978 人、「朝鮮人」813 人、「台湾人」21 人、「中国人」14 人と続く。同年の八尾市人口 66,694 人⁷⁾の比率では 2.75%となる。

さらに 1950 年以前、あるいは合併以前の旧八尾町、旧龍華町などの現八尾市エリア⁸⁾の朝鮮人人口を調べると、たとえば、『大阪府統計書』には大阪府下の在住朝鮮人の総数と朝鮮の出身地別の統計があるが、府下市町村別での朝鮮人の統計はな

い⁹⁾。国勢調査も同様である。筆者の調査の限りでは旧八尾町などの資料は現存しておらず、1945 年以前の現八尾市エリアの朝鮮人人口を把握することはできない。もっとも、1950 年の数値から想像すれば、現八尾市エリアにおける在日朝鮮人あるいは外国籍者の多住傾向は、近年に形成されたものでないことはたしかである。

よく知られているが、日本における最大の在日朝鮮人の居住地は大阪市であり、特に生野区に集住している。生野区は 1943 年に東成区から分区しており、そこへの朝鮮人の集住経緯は杉原 [1998] が明らかにしているとおりに 1920 年代からのものであり、それが現在にも至っている。

近年、生野区のかつて猪飼野の地名が付されていた界隈は「コリアタウン」として観光地化している。食などの「コリア」の文化が立ち並び、朝鮮人のまち、あるいはコリア文化が集積するまちとしてきわめてわかりやすくあらわされている¹⁰⁾。しかし、それがゆえに「コリアタウン」のみが在日朝鮮人の暮らしや文化を代表する場所であり、かつ、そこに暮らす在日朝鮮人が在日朝鮮人全般として代表されるとの危惧を筆者は抱いている。

しかし、大阪では生野区のみならず、隣接する東大阪市やその東隣であり本稿がフォーカスする八尾市にも在日朝鮮人の集住地がある。本稿はその現八尾市エリアでの主に 1945 年以前の朝鮮人の暮らしを掘り起こすことで、そこにも朝鮮人が集住していたことを明らかにし、在日朝鮮人に対

する視野を拡大し多様化することを企んでいる。したがって、本稿は現八尾市エリアでの朝鮮人の暮らしの諸相を記述するものであり、そこへの在日朝鮮人の集住の経緯を明らかにするものではない。

さらにいえば、近年、日本では外国人が増加傾向にある一方で韓国籍、朝鮮籍を保有する者の減少傾向がある。筆者は八尾市において学校教員と接する機会が多いが、在日朝鮮人が八尾市における最多数の外国人だと説明すると、ほぼ驚かれることとなる。日本語の課題など、より「外国人」として「わかりやすい」ニューカマーに実践の対象は向かっており、それらの問題がないと思われがちな在日朝鮮人は忘れ去られようとしていると強く感じる。しかし、これはけっして八尾市だけの問題ではなく、韓国籍、朝鮮籍保有者が減少傾向にある日本社会全体の問題でもある。

つまり、在日朝鮮人が生野区という「コリアタウン」として有名な箇所以外にも 1945 年以前から集住していたこと、そしてその地での暮らしを語り継ぐことの必要性を筆者は問題意識として有している。それは、「外国人」の集住地の外にも多数の「外国人」の暮らしがあり、日本における「外国人」への視野を広げることであると筆者は考えている¹¹⁾。

以上の問題意識から、本稿では主に 1945 年以前の八尾市にフォーカスして、在日朝鮮人の暮らしについて新聞記事を用いて記述していく。

2. 八尾で朝鮮人はどう描かれてきたか

まずは、これまで八尾市で在日朝鮮人がどう描かれてきたのかをみていこう。

八尾市が発行する『八尾市史』は 1958 年にはじめて発行されて以降、2021 年まで 3 回にわたって改訂版、新版が発行されている。これに在日朝鮮人がはじめて登場したのは 2019 年発行の『新版八尾市史 民俗編』である。「民俗の個性」と題した第 3 章に「第 9 節 外国人市民の民俗」があり、こ

こで八尾市における在日朝鮮人の来歴が「チェサ」「巫俗」「チュソク・盆」といった項目などとともに記されている。ただし、タイトルのとおり在日朝鮮人の現在の生活文化がその内容の主題である¹²⁾ [市史編纂委員会・市史編集委員会 2019: 290-307]。

先述のとおり、市史は 10 年程度で再編集され改訂あるいは新版が発行されているが、2019 年にやっと在日朝鮮人が初登場している。つまり、この年になってはじめて在日朝鮮人が市の歴史に位置づけられたといえる。

これに遡る 1994 年に八尾市教育委員会が発行した『国際理解教育・在日外国人教育実践資料集 (第 11 集)』ともに生きる社会をめざして八尾に残る朝鮮人の足跡¹³⁾がある。これは八尾市内の学校園での活用を期した教材として作成されたものである。この資料集では八尾に残る朝鮮半島由来の古代遺跡のみならず、「いまにつながる八尾と朝鮮」と題した箇所では在日朝鮮人が扱われている。現八尾市エリアに現存する大正飛行場¹³⁾の 1939 年の滑走路拡張工事に従事した朝鮮人労働者の聞き取りや、現在の JR 八尾駅近辺にあったといわれる朝鮮人集落「西・東の朝鮮街」で生活していた朝鮮人など、1945 年以前からの現八尾市エリアに暮らす日朝鮮人の聞き取りなどが掲載されている [八尾市教育委員会 1994: 39-72]。

八尾市立学校の校史をみると、「もともと本校には外国人生徒がたくさんいたが、24 年 (引用注・昭和) に民族学校から生徒を受入れたこともあって (略) 外国人生徒を対象に、朝鮮語学級が開設された」 [八尾市立竜華中学校 30 周年記念誌発行委員会 1977: 13] や、「竹淵には朝鮮の人達が多いです。昭和 12 年八尾飛行場建設にさいして土工として祖国から連れてこられたり、また求職のため大阪へ来た人がそのまま定着しています」 [八尾市立竹淵小学校 八尾市立竹淵小学校 P.T.A 1979: 17] などある。

また、「韓国・朝鮮の人びとは、大和川の南側、大正橋を渡った東寄りに多く住み、飛行場拡張工事や農作業、大和川の砂利取りなどの仕事に従事

し（略）飛行場拡張工事では8割が韓国・朝鮮人労働者であり（略）重労働を強制されしかも賃金は安く（略）日本人であれば1円60銭のところ、韓国・朝鮮人だと1円～1円50銭」[八尾市立大正小学校教職員・八尾市立大正小学校PTA 1987: 22-23] ともある。

管見の限りだが、八尾市と在日朝鮮人の歴史を追うと、教育委員会発行資料や市立小中学校発行の校史に掲載されていることが多い。校史等での在日朝鮮人の存在は、1970年代中旬以降に市内小中学校にて在日朝鮮人教育の実践が展開されていったことが一因として考えられる。これらの実践は、1981年に教職員組合やトッカビ子ども会¹⁴⁾により、同市の在日朝鮮人児童生徒を対象とした「八尾市に住む在日韓国・朝鮮人児童・生徒のためのサマースクール」の開催や、朝鮮文化を学ぶ教育課程外活動である「民族クラブ」の各校での設置へと至っている。このような在日朝鮮人を対象とした教育実践の積み上げによって、教育委員会や市立小中学校で在日朝鮮人の子どもの存在の意識づけがはかられ、在日朝鮮人の歴史が教材化されていったと推察できる。

校史等の以外をみよう。大西[2012]は太平洋戦争時・以前に八尾に軍事目的で建設された道路や建築物を「戦争遺跡」とのべ、それらの建設等に従事した朝鮮人にふれている。大正飛行場の水路の付け替え、排水溝、地下道、滑走路などの重労働のほとんどが朝鮮人徴用工によって担われたといい[大西 2012: 43]、また、現八尾市エリア東部に現存する掩体壕の豪本体の築造には、朝鮮人徴用工¹⁵⁾などが資材運搬やコンクリート打設の重労働を担った説があるという[大西 2012: 141]。大西の研究は現八尾市エリアでの朝鮮人の「貢献」にふれてはいるが、その研究の主目的は戦争遺跡であり、きわめて少ない扱いとなっているのは致し方ない。

八尾市の朝鮮人、外国人を扱った先行研究は数少ないが、鄭[2020]がある。八尾市における先述のトッカビ子ども会を中心とした在日朝鮮人の社会運動についてその要因等を分析しており、そ

こでは八尾市における在日朝鮮人コミュニティの形成の変遷についても扱っている。1945年以前の在日朝鮮人の諸相を記しているが、その主題は社会運動であり、在日朝鮮人の暮らしを記述しようとする本稿の射程とは異なる。

以上、従前の八尾市での在日朝鮮人を題材とした資料や先行研究等は朝鮮の植民地支配解放の1945年以降が主であり、かつ、その暮らしの諸相がみえづらい。本稿は、主に1945年以前の現八尾市エリアでの在日朝鮮人の暮らしを扱うことで、現八尾市エリアであらわされてきた在日朝鮮人の存在をより多様化することを企んでいる。

3. 方法

本稿で主に取り上げるのは『大阪朝日新聞』地域面と社会面である。他紙と比較して検索および閲覧が容易であったことから限定した。したがって、同紙以外で報道された朝鮮人を扱えておらず、本稿の限界でもある。

本稿が用いた朝日新聞「聞蔵Ⅱビジュアル」では1879年1月から1945年4月までの縮刷版がデジタル化されて収録されており、その間の地域面等を一面ずつ閲覧して現八尾市エリアの朝鮮人関係の記事を収集した。ただし、その間でも欠号や未収録となっていた時期もあった。

同紙の先述の期間内において、名前や属性の記載から朝鮮人と確定できる記事は合計81あった。これらすべての紹介は紙幅からも不可能なので、筆者が朝鮮人の生活を垣間みるのに適当と考えた「労働」「教育」「事件事故」「慈善行為・表彰」「団体」で区分けをし、それらの一部を紹介していく。ただし、たとえば「慈善行為・表彰」の内容であっても内容によっては別区分としたものもあり、いずれも厳密な区分ではない。「事件事故」では不法行為・犯罪などの記事を扱うが、これをもって朝鮮人に犯罪者が多いということではないのは強く留意したい。また、紙面では当時の朝鮮人の呼称が「朝鮮人」「鮮人」「半島人」「半島同胞」と変遷

している。これらの呼称について現在では差別表現とされるものもあるがそのまま掲載した¹⁶⁾。記事内容は紙面のままとし、フルネームで登場する朝鮮人の名前は一部を○で伏せた。文字が判読できなかった箇所は■としている。仮名遣いは原文のままとし、漢字は現在使用されている常用漢字に、数字は原文では漢数字であるが、読みやすさを考慮してすべてアラビア数字に変更した。

4. 新聞記事に描かれた八尾の朝鮮人

では、ここからは『大阪朝日新聞』に掲載された朝鮮人関係の記事をみていくが、その前に、現八尾市にエリアにどの程度の数の朝鮮人が居住していたのかがうかがえる記事等をみてみたい。

「八尾管内有権者数」(1927年12月25日号)。八尾署管内の衆議院議員選挙有権者数を示した記事である。「衆議院議員選挙有権者数は7658名、盲人有権者11名、鮮人有権者14名と決定した」とある¹⁷⁾。

1925年の普通選挙法成立により25才以上の成人男子に参政権が付与されたが、一方では選挙人名簿への登載は同一市町村の一年以上の居住が要件であった¹⁸⁾ [松田1995: 36-38]。したがって、ここに登場する14名は八尾署管内の市町村に一年以上居住していたことになる。

ついで、1928年11月1日号「八尾署が講話 朝鮮出身者に」。「大阪府中河内郡八尾署では31日午後6時から同町中村座に管内の朝鮮出身者680名を集め御大典心得につき高柳所長が講話した」。

八尾署管内のみで朝鮮出身者が680名いたとあり¹⁹⁾、参加への一定の強制力はあったと思われるが、子どもや女性など管内すべての朝鮮人が参加したとも考えづらい。それ以上の朝鮮人が八尾署管内にいたと考えてよいだろう。蛇足であるが、この講話は日本語で行われたのであろうか。もしそうだったとすれば、この場にいた朝鮮人のどれほどがその内容を理解したのであろうか。

そこからさらに10年以上経た1940年12月24

日号「龍華町竹淵 非常な発展 米配給好成績」は旧龍華町を扱ったものである。「中河内郡龍華町竹淵は大阪住吉区平野に隣りした新発展地で人口は激増、中でも半島同胞の移住が目だち戸数200、人口1200名にも上っている」とある。

記事以外では、大阪府特別高等課による「朝鮮人ニ関スル統計表」での「在住朝鮮人部落密集地方調(昭和8年末調)」がある。ここには、「中河内郡竜華町安中473・474」に朝鮮人の戸数が82あり、「自由業」男8、女0、「各種職工」男31、女46、「自由労働者」男32、女2、「無職」男0、女0の男計73、女計50の総計123が居住しているとある[大阪府警察部特別高等課1982(1933)]。

先述のとおり、現八尾市エリアでの1945年以前の朝鮮人人口を正確につかむことは難しい。しかし、上記の記事などからは、けっして少数ではない朝鮮人がこの地で暮らしていたことが推察できる。

以上、多数の朝鮮人が現八尾市エリアに暮らしていたことを推察したうえで、ここからは先の区分に沿い、新聞に掲載された朝鮮人の暮らしをみていきたい。

労働

1930年5月4日号「できるだけ本社で使ふ 攝津製油が解雇職工へ」。龍華町所在の同社が事業不振のため休業し、解雇手当の支給に対して朝鮮人職工が不服とした争議の記事である。

「内地人職工には日給の5日乃至3日分、朝鮮人職工にはすべて日給の3日分の解雇手当を支給することを発表したが朝鮮人職工姜○○他32名はこれを不満として立命館大学生成○○氏に依頼して休業中に手当支給方を会社に交渉し(略)」とある。

この争議は、1930年5月7日号では「攝津製油争議 円満解決す 5日八尾内鮮共愛会役員が仲裁に入り3日の解雇手当を5日分に増額すること及び工場操業に際して優先的に採用することにして円満解決した、なお同会社では仲裁の労を執った共愛会の事業に対し基金とし金一封を贈った」と

ある。紙面から判断すれば一応の解決をみたと思われるが、争議のもととなった日本人と朝鮮人との解雇手当の差がどうして生じたのかは記事からは不明である。もっとも、そのような差別的取扱いがこの当時では当然であったとも推察できる。内鮮共愛会については「団体」で紹介する。

1932年7月31日号「工場主宅を襲撃す 争議団員が」。「久宝寺村の製綿業〇〇治三郎方に同家工場員金〇〇ほか10数名が押しかけ（略）金〇〇（筆者注・先の金〇〇と同一人物）、金〇〇ほか2名を留置し」たとする記事である。

「原因は同工場は（略）賃銀制度から請負制度としたところ原料に対する仕上品の納入が不可能となったので工場主は請負製品30本につき8貫500匁から9貫500匁の量目でなければならぬと要求し金〇〇は不服で欠勤するので解雇したところ全職工は全国労働組合八尾支部に入会し罷業中、29日夜金の無条件復職を迫つてこの拳に出た」という労働争議を扱った記事である。この件について追加の記事はなく、解決したかどうかは定かでない。以上、2件ではあるが、朝鮮人が争議という手段によって生活を守ろうとしていたことが理解できる。

争議以外の労働では、「引つづいて雇入れを陳情朝鮮人労働者」（1932年3月27日号）がある。

「府が失業者救済事業として着手した奈良街道大阪、奈良間の産業道路工事中平野と中河内郡龍華町間は今月末いよいよ完成する予定となつたが従来この工事のため市内は勿論中河内郡八尾署管内から230名の朝鮮人の工事に従事していた」という。そして、この道路がさらに延長される第二次工事が行われることとなったが、「八尾署管内の230名は第一次工事終了とともに解雇されるらしいといふので26日朝鮮人代表者数名が八尾署を訪ひ、全工事完了まで是非使つてもらふように府へ陳情方を斡旋してもらひたいと願ひ出た」。同記事からは、朝鮮人のみが解雇されることになったと読める。どうして朝鮮人のみそのような扱いになったかにはふれていない。

ついで自営をみると、「久宝寺村の火事」（1937

年12月8日号）があり、「久宝寺村久宝寺セルロイド加工业李〇〇方から出火、平屋建の同家を全焼」という内容である。紙面からこの工場の規模は見当がつかないが、自営業を営んでいた朝鮮人がいたことは理解できる。

朝鮮半島での記事になるが、1937年8月28日の朝鮮日報には在日朝鮮人の名刺広告がある。この広告上での現八尾市エリアの朝鮮人をみると、「各種製綿工場」「米穀商」「朝鮮料理」「菓種商」「ファスナー業・古物商」「眼鏡レンズ製造業」などがある〔外村大ほか2015〕。商工業を営むには一定の資本を蓄積・保有していることが必要であり、それは短期の居住では不可能である。つまり、これらの名刺広告からは1930年代後半には現八尾市エリアにおいて朝鮮人の長期にわたる居住傾向があったことがわかり、先の久宝寺の自営業の記事からも、同様の傾向が推察できる。

教育

大阪府警特別高等課「朝鮮人ニ関スル統計表」における「朝鮮人学齢児童調（昭和8年12月調）」によると、現八尾市エリアを含む大阪府中河内郡には、「満6才以上14才」が計1,040人であり、うち、「就学セルモノ」が325人、「未就学者」は715人となっている。

1930年6月24日号には「朝鮮人学童が倍にふえた 成績もよい方 中河内の調べ」との記事がある。

「中河内郡八尾署が管内各町村小学校における朝鮮人の就学状態■にその成績を調査した結果によると、昨年度は児童数25名であつたが、本年度は殆ど倍加して47名となった」という。現八尾市エリアでは「龍華小学校の27名を筆頭に（略）八尾町6（略）大正村3、曙川村1である、出席率は非常に良好で大部分は皆勤者である、また學業の成績も概して良好」とされている。さらに、「別に龍華町の内鮮共愛會で開いている夜学通学のものは35名（略）この外八尾中学に1名、八尾高女2名通学」とある。

八尾市立龍華小学校（当時は龍華尋常高等小学

校)に1941年に赴任した教師の述懐によると、「当時は朝鮮名の子どもが3分の1程いて出席をとる時、姓を呼ぶのに四苦八苦、子どもに教えてもらい、早くおぼえてなくてはと懸命でした」[八尾市立龍華小学校創立百周年記念事業実行委員会2008:53]とある。現八尾市エリアに朝鮮人の子ども－おそらく二世－が1945年以前より多数生活していたことがうかがえる。

前述の記事に「倍加」とあるが、朝鮮人の子どもが増加することで当局もその就学については対応を迫られていたようである。1937年1月10日号「半島人子弟の教育に新施設 枚岡村などで計画」には、「大阪府下の半島人数は郡部では泉南とともに中河内が最も多く八尾署管内に約6,000、額田署管内に約3,000、いづれも龍華町、八尾町の紡織、化学工業関係の工場、枚岡村の製鉄工場などに大量的に雇傭されてをり、これら半島人子弟の義務教育については当局でも苦慮を重ねていた」とある。そして、現八尾市エリアに隣接する現在の東大阪市の一部地域にあたる旧枚岡村で「同村小学校に入学中の約130名の半島人学童の実情に鑑み村費で特別教育実施を考慮中」であり、現八尾市エリアでは「八尾署でも龍華町安中在の半島人会館を利用、内地人教師による未就学年齢児童の特別教育開始の計画を樹て近く府庁宛稟請するはず」とある。

一方、時を経た1941年5月25日号では「鍊成に静と動の構へ 龍華国民学校だより 中河内郡龍華町の龍華国民学校では先生と学童が一体となって鍊成道へ邁進している、朝礼のときは一同まず遙拝、校内奉安殿に対し「臣誰々誓って皇道を扶翼し奉る」と誓詞を口ずさみ、入室の誓を貼り出した教室へ秩序正しく入り、教壇中央に日の丸の旗、右に皇国の道、左に鍊成の誓を大書した「教えの額」に敬礼「くもりなく朝日の旗に天てらす神のみいづをあふげ国民」と明治天皇の御[■]を高らかに奉誦したのち授業に移る(略)」とある。この記事の限りでは朝鮮人の子どもの存在はみえないが、先の龍華小学校元教員の述懐からは同小学校に多数の朝鮮人児童が在籍していたことはた

しかである。朝鮮人の子どもの教育に当局が何らかの対応を取っていたのはたしかであろうが、一方では、月日を経るにつれいわゆる皇民化教育が進展していたのも記事からは理解できる。

事件事故

「鮮人の迷子」(1928年4月15日号)。「さる12日午後5時ごろ大軌沿線¹⁹⁾八尾停留所附近に花模様のモスリンの着物を着た5つになる鮮人の女の子の迷子を発見」とする記事である。この子どもを「鮮人」と判断したのは、見た目なのか言葉なのかは記事からは判断がつかない。

「七人組西瓜泥」(1930年8月8日号)。「中河内郡南高安村大字教興寺(略の西瓜畑に7人組の西瓜泥棒が入り込んだのを番人が発見(略)朝鮮生れ金〇〇(28)1人だけを捕へた」。ほかの6人が朝鮮人であったかは不明である。しかし、捕まった者が「朝鮮生れ」とはしっかり記載されている。

「苦しい世帯の100人を泣かす1円掛けの頼母子講を2人がかりで横領費消」(1933年4月20日号)。「中河内郡八尾町大字西郷高〇〇(45年)同郡龍華町大字安中、黄〇〇(35年)の両名は(略)『百人禊』と称する頼母子講をつくり100名の講員から毎月1円ずつ2回の掛金を集めていた」が、高〇〇と黄〇〇が「騙取費消していることが判明、八尾署で取調中」とされるものである。「被害者は何れもその日暮らしの労働者が多く無理な中から掛金していたので家族連れで毎日同署へ泣きついて」。

頼母子講のトラブルについては、1970年代以降に大阪市生野区で育った筆者も幼少時から親の会話で幾度となく聞いた記憶がある。そのようなトラブルが1945年以前も以後もかわらずあったのが記事から理解できるが、これは在日朝鮮人が金融機関から融資を受けることができなかったがゆえのトラブルであったといえる²⁰⁾。ただし、頼母子講自体は日本人の間でも行われており、朝鮮人の間のみで行われていたわけではない。上述のような理由などから、よりトラブルも多発したとも考えられるだろう。

「井戸に墜死」(1933年8月22日号)。「21日午前10時南河内郡志紀村字老原趙〇〇の妻姜〇〇が長女〇〇(1年)をつれて関西本線志紀駅の附近で野菜取り中草原で遊んでいた〇〇(筆者注・長女)の姿が見えないので大騒ぎして捜したところ深さ15尺の野井戸の中で溺死していた」。

「大騒ぎして」とあるが、朝鮮人の話題に限らず、この頃の新聞記事には主観的な記述が多々みられる。子を見失って「大騒ぎ」するのは当然だと思えるが、朝鮮人が「大騒ぎ」したことが記事では強調されているようにも感じられ、それが朝鮮人への偏見を助長する効果をもたらしかねないとも思える。

「病死した妻の死体を床下へ その足で職を探しに歩く 中河内郡の怪事件の謎解く」(1931年2月9日号)。「7日夕刻、中河内郡北高安村大字神立(略)の古土蔵の床下から同家雇人趙〇〇(30)の妻かめこと李〇〇(31)の死体を発見したが同日正午ごろ趙が外出した(略)8日午前5時ごろ同家に立戻ったので取調べたところ、李はかねがね子宮癌を病み5日夜から俄に病勢が悪化し、6日未明に死亡したので死体の処置に困り床下を掘って埋め、自分はどこかへ職にありつくつもりで7日正午ごろ漂然同家を出たものであるといい、(略)現場で検視した結果大体病死とわかった」とある。

「かねがね子宮癌を病み」と「どこか職にありつくつもりで(略)家を出た」ということから、病にあっても治療代をまかなうことができずにおり、葬儀費用に事欠く状況であったとも推測できる。

「芋畑から嬰兒の死体 夫婦取調らる(1934年9月4日)。「龍華町字安中大同電力営業所南側芋畑の中から(略)嬰兒死体を発掘するとともに龍華町安中人夫妻〇〇(35年)妻鄭〇〇(25年)の両名を取調駐だが最近同人らがさる6月嬰兒を殺し前期の場所に埋めたとの噂が立った(略)取調べに対し両名は殺したのでなく死んだのだと申立てている」とある。

これが殺人であったか否かの後追いの記事はな

く、どのように嬰兒が亡くなったかは不明であるが、先の記事と同様に病にあったのかもしれない。また、これは死体を埋めたという記事であるが、死亡届を出さないままに埋めていたのかもしれない、あるいは、そのような届を出すことさえ理解していなかったのかもしれない。ただ、この「埋めた」という行為は、朝鮮では主流であった土葬ではなかったのかとも考えられる。

慈善行為・表彰

「感心な朝鮮人 八尾署で表彰」(1932年4月2日号)。この当時、「八尾署管内の内鮮協和会では300余名の会員をもち、また同署管内居住の朝鮮同胞の数は1,500名に上」っていたという。

「同会総務揚〇〇(31年)および同郡大正村大字太田李〇〇(35年)両氏はかねてから内鮮融和に■力し、李さんの如きは(略)1,000余円の貯金をし、同胞のために絶えず面倒をみてやっているが労働の余力で夜学校に通いついに卒業し、内地語も完全に話せるようになった、八尾署では2日の神武天皇祭に右両名に対し表彰状を贈りその篤行を讃え」と。

「字穴太セルロイド加工業金〇〇氏の妻金〇〇さん(27)は昭和13年10月から廃物利用節約をして貯金をはじめ17日1銭貨ばかりで1,500枚を国防献金にと八尾署に寄託」(1941年2月18日号)。

「床しい献金」(1945年2月16日号)。「海軍特別志願兵としてこのほど入団した龍華町長田〇〇君ほか35名の半島同胞は入団の途車中で全員所持金を出■い584円を国防献金にと(略)大阪海軍人事部に寄託した」。

「慈善行為・表彰」の3件は、いずれも日本社会への同化をうかがわせる。最初の1件では、「内地語の完全に話せるようになった」とあるが、朝鮮人の日本語習得の努力がたたえられるとともに、その努力が暗に期待されている。さらに、その表彰が「神武天皇祭」で行われていることは、朝鮮人の日本社会への同化が天皇制のもとで期待されていたのも理解できる。

後2件では、朝鮮人が日本の国防へと駆り出さ

れている姿が明確に理解できる。朝鮮人が積極的に日本の国防を担おうとしていたことも考えられるが、日本人と朝鮮人という強固な権力関係のなかでは、その発想自体が社会環境との相互作用によって培われてしまったものであったであろう。さらには、日本名を名乗っていても半島同胞と記されていることから、日本名を名乗っていても日本人、朝鮮人という各々の区分は明確であったことも読み取れる。

団体

1945 年以前、現八尾市エリアに「内鮮共愛会」という団体があり、記事に頻出している。先の大府警察部特別高等課調査における「在留朝鮮人団体調（昭和 8 年 12 月末現在）」には「内鮮協愛会八尾本部」とあるが、おそらく同一団体であろう。同調査によると同会は「融和親睦系」かつ「朝鮮人ヲ主トスル団体」とされるもので、「中心人物」は「大平犬三」、「員数」505 のうち「朝鮮人」500、「内地人」5 となっている。

この内鮮共愛会の最初の記事は 1928 年 11 月 11 日号である。「八尾町が（略）高齢者に対し御下賜の養老杯■に酒肴料の奉授式を行い（略）聖壽無窮を祈り奉つた。催物は小阪町の小学児童千余名の旗行列を皮切りに（略）八尾署管内内鮮共愛会などの旗行列が引も切らず」というものであり、「融和親睦系」とされるのも納得できる内容である。

ついで、1930 年 4 月 8 日号には「内鮮共愛会総会」と題された記事がある。「中河内郡龍華町に本部のある内鮮共愛会では（略）春季総会を開き余興に教育映画などがあるが、同会は会員 160 余名で衛生思想の普及、職業紹介などにつとめる外夜学を開き会員の子弟の教養にも当たっていて非常に好成績を挙げている」とある。

1930 年 6 月 28 日号には「内鮮共愛会支部を設置 大正村太田に」とあり、「事業の発達につれて漸次会員が増加し、殊に大正村太田方面には 50 余名の会員が出来たので、大正村太田支部を設置することに決し」とある。同会は、現在の東大阪市

にあたる長瀬村にも支部を設置しており、1932 年 9 月 18 日号には「橋場八尾署長、山本長瀬村長を始め地元有力者、同会会員ら多数が出席し盛会だった」とする発会式の様子がある。

同年 11 月 15 日号には「かねて建築中の会館を落成した」とあり、同 11 月 17 日号では「工費 2,000 円を投じて新築中だった開館が竣工したので第 3 回総会をかねて 16 日午後 1 時から落成式を挙行了た」とある。

これらの記事からは同会が親睦、職業紹介や夜学を主催し、さらには自前の施設をも有していたことがわかるが、その手がかりを伝えるのはこれらの記事のみであり、先の『八尾市史』などにはもちろんふれられていない。資料の散逸などで難しい状況はあるが、その歴史の掘り起こしが課題である。

以上から時を経て 1940 年 7 月 13 日には協和会結成の記事がある。「八尾署管内の半島人 6,000 人で協和会八尾支部を結成、8 月中旬発会式を挙行、衛生思想の普及、風俗の改善、精神作興につとめる」というものである。

同 9 月 3 日号には「協和会八尾支部会員 1,100 名は一日龍華、八尾両町の各神社で皇軍武運長久を祈願した」、同 11 月 15 日号には「協和会八尾支部員が銃後の奉仕」と題した記事がある。

これは「協和会八尾支部所属の半島出身者は自発的に 16 日の工場公休日に出征勇士遺家族の手伝いをしたいと八尾署山本治安主任に申出た、16 日会員各戸から一人ずつ合計 1,000 人が出動、遺家族の稲刈入れの応援や洗濯、使ひ走りのお手伝ひに真心こめて勤労奉仕する」とある。記事のとおりにはたして本当に「自発的」であったのかは不明である。

同様の記事は以降にもある。1942 年 3 月 5 日号「真心の献金つづく」と題した記事では「協和会八尾支部では新嘉坡陥落記念の献金貯蓄をはじめていたが 1,914 円 45 銭となつたので（略）八尾署を通じ寄託した」。

1943 年 2 月 12 日号「八尾協和会の金属供出」では「八尾署管内の協和会員は佳節の 11 日朝八尾署

で記念式挙行後、金属回収を申合せ、それぞれ各戸から真鍮製食器を一つも残らず供出、さつそく献納した」とある。協和会が発足した1940年代以降の朝鮮人を扱った記事はほぼ上記のような献金や奉仕のものである。

協和会は戦時下の在日朝鮮人の統制・抑圧・皇民化を推進した組織であり、朝鮮人の動向の監視、渡航・帰国管理、在住調査などを担当し、朝鮮人の皇民化の実施機関でもあったとされる〔国際高麗学会日本支部『在日コリアン辞典』編集委員会、2010: 119〕。協和会と朝鮮人のかかわりを扱ったこの記事からは、朝鮮人が統制され戦時体制に組み込まれていった様子がくっきりと読み取れる。

5. おわりに

以上、本稿は現八尾市エリアにおける主に1945年以前の朝鮮人の暮らしについて、新聞記事をもとに記述してきた。

繰り返しになるが、八尾市は外国籍者が集住している。1945年以前から多数の朝鮮人が暮らしていたことが推察できるが、その当時の現八尾市エリアにおける朝鮮人人口は不明である。しかし、数値こそ不明ではあるが、本稿によって1945年以前の大阪市生野区以外の大阪における在日朝鮮人集住地での朝鮮人の暮らしの一端を明らかにできたと考えている。それは、在日朝鮮人という存在への多様な視野を広げることであり、八尾市のみならず日本において多数の朝鮮人が暮らしてきたことと現在も暮らし続けていること、そして、その存在が日本に根付いていることを明らかにすることでもある。あわせて、先行研究等でみたおりの現八尾市エリアであらわされてきた従来の在日朝鮮人像について、その多様化に本稿が一定の貢献ができたとも考えている。

しかし一方では、本稿が用いた新聞記事は限定されており、掘り起こせなかった朝鮮人の暮らしもまだまだある。さらには、本稿が扱ったのは1945年以前であり、1945年以降についてはふれていな

い。つまり、現八尾市エリアにおける朝鮮人の暮らしの諸相の掘り起こしは緒に就いたばかりであり、今後に残された課題でもある。

*本稿は、JSPS 科研費「外国人の「権利獲得・擁護」モデルの「多文化共生」創出にむけた研究」（課題番号 20K02137）（研究代表者・鄭榮鎮）ならびに「都市「社会問題空間」の付置構造とその変容に関する研究」（課題番号 20H01579）（研究代表者・島和博）による成果の一部である。

注

- 1) 本稿では、植民地であった朝鮮出身者の総称をさして、「朝鮮人」あるいは「在日朝鮮人」と表記する。ただし、引用では原文のまま表記する。
- 2) 八尾市ホームページ「令和2年度住民基本台帳人口」による2020年12月末現在数値。<https://www.city.yao.osaka.jp/0000051697.html> (2021年8月19日アクセス)
- 3) 八尾市情報公開コーナー資料「国籍別人員調査表」による2021年1月1日現在数値。
- 4) 同上資料。なお、「朝鮮」は130人である。
- 5) 「龍華」は「龍華」と「竜華」の表記が資料によって異なっているが、いずれも原文のまま記載した。
- 6) 八尾市ホームページ「人口の推移（昭和23年～）」による1948年3月31日現在数値。
<https://www.city.yao.osaka.jp/0000036734.html> (2021年8月19日アクセス)
- 7) 同ホームページによる1950年3月31日現在の数値から比率を算出した。
- 8) 本文のとおり現在の八尾市は1948年に2町3村が合併して発足し、その後幾度の合併を経ている。本稿では現在の八尾市域成立以前のそれら旧町村地域を「現八尾市エリア」と記す。
- 9) 大阪府総務部統計課『大阪府統計書』国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1450750> (2021年8月19日アクセス)
- 10) ただし、「コリアタウン」としてわかりやすくあらわされているものの、これが在日朝鮮人の歴史とつながるかは別問題である。近年の韓流ブームとの関連で「コリアタウン」としてよりわかりやすくあらわされていると考えられるが、本稿の射程を超えるためふれない。
- 11) 八尾市では、1979年に市職員採用試験受験資格における国籍制限、いわゆる国籍条項が撤廃されており、大阪府下では最初の撤廃である。1980年代以降、日本各地で同様の撤廃が行われていったが、

朴一は八尾市での撤廃を、「やがて燎原の火のように広がる地方公務員の国籍条項撤廃運動の先駆けとなった」[朴一 1999: 51]と指摘している。このような先駆的な在日朝鮮人の運動の歴史が八尾市にあったことも広く知られておらず、継承する必要があるが、別稿としたい。

- 12) 在日朝鮮人だけでなく、八尾市に多く暮らす中国、ベトナム系住民の各生活文化が記されている。
- 13) 現在の八尾空港。阪神飛行場ともいわれる。
- 14) トッカビ子ども会は在日朝鮮人が中心となった組織である。それについては、鄭[2018]を参照されたい。
- 15) 引用元のとおり「徴用工」と記した。
- 16) たとえば「半島同胞」は、1941年の日米開戦後の戦時動員体制が進行するなかで、紙面上でその呼称が増加しつつあると読み取れる。したがって、当時の社会情勢と朝鮮人へのまなごしを理解する材料としてそのまま掲載する。
- 16) 参考までに記すと、1928年10月7日号には「代議士選挙の鮮人有権者数 府下で4,700余人 府議より1300名増加」とあり、もっとも多いのは「東成区の1,202名、港区の703名、東淀川区の516名」とある。1930年2月4日号には「朝鮮人有権者8,300余人」とある。大阪府特高課が大阪府居住朝鮮人有権者の調査を終えたという記事で、「府下在住の朝鮮人は男女合して6万7,972人うち、有権者は8,397人である、各区別では第一区879人、第二区907人、第三区1,056人、第四区4,381人、第五区541人、第六区636人」となっている。このうち、現八尾市エリアは第五区にあたる。
- 17) 普通選挙法ではそれまでの納税要件が撤廃されるものであったが、「公私ノ救助ヲ受ケ又ハ扶助ヲ受クル者」などが欠格要件として加わった[松田 1995: 36-38]。なお、厳密には寄留届を提出して居住1年以上といえる。
- 18) 1910年の韓国併合以降、日本に渡航した朝鮮人の居住台帳、移動（寄留）登録、居住人口把握など基本的な台帳の作成は警察が行っていた[国際高麗学会日本支部『在日コリアン辞典』編集委員会、2010: 322]。
- 19) 現近鉄大阪線。
- 20) 『在日コリアン辞典』によれば、頼母子は金融を目的とするものと親睦を目的とするものとがあるとされ、朝鮮時代から相互扶助の方法として定着し

ており、今日の韓国でも残っているとされる。また、在日朝鮮人の間では金融機関からの融資を受けることができなかったこともあって、とくに女性を中心となって戦後もさかんに行われていたとされる。そして、「子」が掛け金を払わず行方をくまますことや、あるいは集金した掛け金を分配しないまま「親」が逃亡するなどのトラブルのもとになったともされる[国際高麗学会日本支部『在日コリアン辞典』編集委員会、2010: 265]。

参考文献

- 大阪府特別高等課（1933）「朝鮮人ニ関スル統計表」、朴慶植編[1982]『在日朝鮮人の生活状態（解放前）朝鮮問題資料叢書 第3巻』所収、三一書房
- 大西進（2012）『日常の中の戦争遺跡』アットワークス
- 市史編集委員会・市史編集委員会（2019）『新版 八尾市史 民俗編』八尾市
- 杉原達（1998）『越境する民』新幹社
- 鄭栄鎮（2018）『在日朝鮮人アイデンティティの変容と揺らぎ「民族」の想像／創造』法律文化社
- 鄭栄鎮（2020）「在日朝鮮人コミュニティとその社会運動についての考察－大阪府八尾市の事例から－」『白山人類学』、pp.173-196
- 外村大、韓載香、羅京洙編（2015）『資料 メディアの中の在日朝鮮人 在日朝鮮人資料叢書 11』緑蔭書房
- 朴一（1999）『〈在日〉という生き方 差異と平等のジレンマ』講談社
- 松田利彦（1995）『戦前期の在日朝鮮人と参政権』明石書店
- 八尾市教育委員会（1994）『1993年度（平成5年度）国際理解教育・在日外国人教育実践資料集（第11集）ともに生きる社会をめざして 八尾に残る朝鮮人の足跡』
- 八尾市立大正小学校教職員・八尾市立大正小学校PTA（1987）『たいしょう－語りつぐ大正校区の戦争－』
- 八尾市立竹濶小学校 八尾市立竹濶小学校PTA（1979）『三十年のあゆみ 昭和24年10月31日創立』
- 八尾市立龍華小学校創立百周年記念事業実行委員会（2008）『創立百周年記念誌「龍華」』
- 国際高麗学会日本支部『在日コリアン辞典』編集委員会（2010）『在日コリアン辞典』明石書店
- 八尾市立竜華中学校30周年記念誌発行委員会（1977）『竜中30年史』

研究ノート

在日コリアンにおける「民族舞踊」の継承とその意義

—朝鮮学校の民族舞踊部指導者へのインタビューから—

徐希寧（立命館大学大学院国際関係研究科博士後期課程）

1. はじめに

大韓民国では、古代から朝鮮半島で受け継がれてきた舞踊を「伝統舞踊」とし、1962年に公布された「文化財保護法」¹⁾では、「伝統舞踊」を含む「伝統的な公演・芸術（演劇、音楽、舞踊など）」を無形の文化的遺産として位置づけている。この法には、「文化財を保存して民族文化を継承し、これを活用することで国民の文化的向上を図るとともに、人類文化の発展に寄与することを目的とする」²⁾と書かれている。公布された頃から「伝統舞踊」を継承する人材の育成にも国家的に取り組み、韓国では、舞踊学科を設置している大学も多くある³⁾。

一方、朝鮮民主主義人民共和国における「民族舞踊」は、古代から朝鮮半島に伝わる「伝統舞踊」と植民地時代に朝鮮と日本で活躍した代表的な朝鮮舞踊家・崔承喜（チェ・スンヒ / 최승희 / 1911～？ / 以下、崔）⁴⁾によって構築された舞踊⁵⁾を合わせたものである。

筆者は、大韓民国出身の「伝統舞踊家」で、2000年に留学生として来日して以来、日本統治下での朝鮮における民族の「伝統舞踊」の近代的形成や変容について、当時の朝鮮舞踊家の活動を通して研究してきた。また、崔が構築した「民族舞踊」が「民族的一体性（エスニック・アイデンティティ）」の形成・発展にいかなる役割を果たしているかを崔に焦点を合わせて検討した⁶⁾。それ以降、在日

コリアン⁷⁾における「民族舞踊」・「朝鮮舞踊」⁸⁾と民族教育との関わりについての研究をはじめ、そこから崔の舞踊が「朝鮮学校」の民族舞踊部の指導の中で多く取り入れられていることが明らかになった。

「朝鮮学校」では、「民族舞踊」を課外活動として位置づけ、全国の多くの学校で1950年代頃の開校当時から現在まで、指導が続けられている。「民族舞踊」には、音楽や言語など、様々な要素が含まれている。そのため、「民族舞踊」を身に付けることが、民族教育の中で重要視されてきたと考えられる。そのことを考察するために、崔の「民族舞踊」に関する研究をもとにしながら、A地域に位置するA朝鮮学校における民族舞踊部のフィールドワーク⁹⁾や学内外の発表会・競演大会などの活動を踏まえ、この舞踊部で取り入れられている崔の『朝鮮民族舞踊基本』動作や作品の分析、指導者へのインタビュー¹⁰⁾を行った。本稿では、「民族舞踊」に付随する音楽や楽器演奏、衣装、動作、歌謡の中に表現されている文学的・歴史的内容などの民族文化として受け継がれてきた要素の特徴にも触れながら、朝鮮半島をルーツとする在日コリアンが、民族教育の一環としての「民族舞踊」をどのように継承しているのかを考察してみたい。

2. 「民族教育」と「民族舞踊」に対する先行研究の検討

日本における民族教育の歴史的な形成と発展過

程に関しては、小沢有作 [1973]、金徳龍 [2004] の研究、民族教育の教育過程と朝鮮学校の学校生活に関しては、朴尚得 [1980]、朴三石 [1997、2012] の研究、朝鮮学校の言語教育を通じたアイデンティティの形成に関しては、ソニアリヤン [2005] の研究、朝鮮学校の「チマ・チョゴリ制服」を着用する当事者の認識と主体性に注目した韓東賢 [2006] の研究、グローバル時代の制度的な観点から朝鮮学校の制度的分離と学内の集団主義を生存戦略としてアイデンティティ・ポリティックスに注目した宋基燦 [2012] の研究などがある。

呉永鎬 [2019] は朝鮮学校を民族教育の一形態とし、植民地支配による人間形成の矛盾を教育方法を通して改善し、解決に向けて立ち向かおうとする在日朝鮮人が自発的に行っている教育機関であると指摘している。金徳龍 [2004] は、敗戦直後の困難な状況にあって、植民地期に余儀なくされた「非朝鮮人化」を克服する必要性がコミュニティ内で提起され、在日朝鮮人各自の力を発揮しながら民族学校を作り、維持してきたと指摘している。

一方、朝鮮学校教員の勤務条件や給料などはかなり劣悪だと言われている [板垣ほか 2009；宋基燦 2018]。また、宋基燦 [2018] は、「朝鮮学校」の教員は、朝鮮大学校を卒業した若い教員とベテラン教員に二分されているが、教員コミュニティは確固たるものであり、集団主義倫理の崇高な模範であるとしている。板垣 [2018] は、「地域社会」としての朝鮮学校、「朝鮮学校としての地域社会」という観点から、日本の地理的な空間に建つ A 朝鮮学校が地域社会の中でもつ重要性を指摘している。

日本における「民族舞踊」に関しては、金恩漢 [2003] が、崔の北朝鮮での舞踊活動 (1946～1967) を中心に、当時の崔の舞踊は、文化的、社会的、歴史的な現実によって形成されたもので、民族的技法と外来的技法を結合する新しい芸術的伝統を産み出すことで社会文化界に影響を与えるものとなったと考察している。朴貞順 [2015] は、民族舞踊教育の重要性は朝鮮学校での民族舞踊として

知られており、崔承喜が 1946 年から平壤舞踊研究所を構え、朝鮮民族舞踊を舞台芸術化し、共和国での朝鮮舞踊の基礎を作った功績が、今も在日コリアンら (2 世以降) に受け継がれていると考察している。また、朴貞順 [2000] は、崔の朝鮮舞踊基本動作と自らが分類した基本動作との比較を通して、民族舞踊教育上で、舞踊動作の継承が日本社会の影響を受けて朝鮮舞踊の動作と変質してきていることを指摘している。宋基燦 [2020] は、在日コリアンの「民族舞踊」の視点から朝鮮学校の朝鮮舞踊の教育現場における人類学的研究を通して、身体化されていく「民族アイデンティティ」を、卒業後に韓国舞台に移った芸術活動的「帰還ディアスポラ」に対するインタビューから考察している。

大韓民国では、朝鮮民主主義人民共和国における崔をはじめとする「民族舞踊」についての研究が多数みられ、国立国楽院は、2018 年から朝鮮半島における文化芸術の相互理解を深める目的で、『韓民族芸術』として分野別に集めて編纂・刊行している。朝鮮民主主義人民共和国でも、崔が構築した『朝鮮民族舞踊基本』『朝鮮児童舞踊基本』『舞踊劇台本集』などを分析した研究、「民族舞踊」には、崔の新舞踊が大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国の「民族的芸術的な出発点を共有する同質的な要因になる」として考察したもの、崔以来の固有の踊りを生かしながら抗日闘争と主体思想に基づいた革命性や浪漫性などを作り出した作品を説明した国立国楽院編纂 [2020] の研究などがある。

このように、「民族舞踊」に対する研究は、日本・大韓民国・朝鮮民主主義人民共和国において先行研究が存在するが、戦後日本における崔の「民族舞踊」を基盤とした「民族アイデンティティ」¹¹⁾ という側面からの舞踊の動作や構造、類型、呼吸などについての分析や、在日コリアン自らの文化・舞踊を通してのアイデンティティについての議論、民族教育における「民族舞踊」に関する実証的研究などは、重要であると考えられるもののその研究は未だ見られない。

本稿は、在日コリアンが日本社会で民族教育の

一環としての「民族舞踊」をどのように継承しているのかを A 朝鮮学校民族舞踊部指導者のインタビューを用いて論じていく。

3. 戦後の民族教育における「民族舞踊」の継承

(1) 「民族舞踊」と崔承喜の『朝鮮民族舞踊基本動作』

「民族舞踊」とは、特定の国や地域において一つの文化的伝承として演行される伝統舞踊を指す用語である。「民族舞踊」の概念は、1940年代のアメリカ舞踊学者ラメラによると、特定の民族あるいは種族の典型的な舞踊表現や大衆的な舞踊表現の中で成長した土着的な芸術であると定義できる¹²⁾。「民族舞踊」は、ある社会構造の中で伝統的に作用してきた文化的特有性と芸術的様式性を保存している舞踊形式である¹³⁾。

「朝鮮舞踊」は、原始宗教的側面から始まり、神殿・寺院において祭政一致の行事として歌って踊ったことが起源だと言われている¹⁴⁾。その後、民俗舞踊と宮廷舞踊が融合し、1920年代からの「朝鮮舞踊」は、舞台舞踊化されている。この時期から「民族舞踊」は、大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国、中国の朝鮮族、中央アジアの高麗人、在日コリアンなどが独自性を持ちながら継承・発展させてきたと考えられる。特に、在日コリアンにとっての「民族舞踊」・「朝鮮舞踊」は、崔が朝鮮民族としての意識を持って朝鮮舞踊と西洋舞踊の融合を試みたものであり、この「民族舞踊」が今日の大韓民国や朝鮮民主主義人民共和国、そして在日コリアン社会や教育実践での継承に大きな足跡を残している。その例が、『朝鮮民族舞踊基本』¹⁵⁾である。崔は、1958年に「民族舞踊」を継承・体系化し、民族的型式に社会主義的内容の舞踊を融合し、その特徴的な動作は民族舞踊の技法が中心であり、民族伝統楽器、リズムや音楽、衣装も「チマ・チョゴリ（朝鮮の伝統着物）」「ポソン（伝統靴下）」など、大韓民国の舞踊基本動作と共通点が多い。また、1973年には、革命舞踊作品を創り

出すための基本訓練を中心に革命理論をもとにした舞踊作品を創り出し、人民を革命化、階級化した。その特徴は、バレエ、中国舞踊、技巧的、ピアノ伴奏と杖鼓、旋律音楽などが取り入れたことである。1980年に金正一委員長長の指示により、崔の弟子たちが朝鮮的な動作と民族的な動作を時代に合わせて科学的に整理した『朝鮮民族舞踊基本動作』では、主体性を守る「チュチュ（主体）」芸術として、民族意識を維持し、舞踊の基礎はそのまま継承している。1996年には、在日コリアン舞踊家たちが、現代性強調と技巧化の追求への批判から崔の舞踊を復元し、主体思想を徹底していく一方で、再び民族文化遺産の発展と復旧のための活動がはじまる。その特徴は、民族的技法に回帰し、1958、1973年の基本技法から伝統楽器を改良した弦鳴楽器、杖鼓、旋律音楽、レオタード、半スカート、バレエシューズなどの衣装を取り入れ、崔の舞踊基本をもとに全12動作にまとめられている¹⁶⁾。

崔承喜[1958]は、『朝鮮民族舞踊基本』の発刊において、「ここに発表する舞踊基本は私が30余年間舞踊生活をしながら、『ウリ（우리 我が）』舞踊から失われたものである」と述べている。崔の『朝鮮民族舞踊基本動作』の特徴と変遷過程は、まず、基本動作の構成を体系的に分類しており、動作の完成度が高く、芸術的型式も整っていて、伴奏曲や「チャンダン（장단 リズム）」の楽譜も添えられている。また「立舞（입춤/립춤 リプチュム）」においては、朝鮮舞踊の基本中の基本である動作が多様に組み込まれて、立舞の基本動作は歩く動作から始まり、小さな動作から大きな動きへ、緩やかな動作から幅の大きな速い動作へ、テンポも動きも徐々にハードな動きへと構成されている。さらに、基本動作は21種類の朝鮮独特の小道具を用いた踊りの基本動作が、その基本動作や持ち方、使い方に至るまで細かく解説されており、多様な踊りを伝統的な生活習慣に基づきながら、誰もが踊れて普及できるように図が付されて解説されている¹⁷⁾。

朴貞順[2015:152]は、崔の基本動作は、「現

在に至るまで時代と人々の生活感情、情や舞踊様式の変化により改編され継承されてきた」とし、また基本動作は、「時代背景や舞踊作品の要求性から現代的な要素が補充されているが、1980 年以降に崔の舞踊を復元し、原作を生かす努力と研究、整理保存が行われた」と述べている¹⁸⁾。

その『朝鮮民族舞踊基本』の構成を見ると、基本動作においては、大きく二つに区分される。一つは立舞、もう一つは舞具の基本動作であり、基本動作には、伝統的な舞踊技法に基づいた伝統舞踊の様式の核心として立舞の基本から小道具の基本動作に至るまで系統的な動作と舞踊訓練のルールを持って構成されている。まず、立舞の基本動作は、再び下位概念に分けられるが、身体の各部位別の動作である「予備動作」と朝鮮舞踊の「基本動作」で、立舞は、バレエの基本動作のような概念で身をこなす(身法)トレーニングである。予備動作はクラシックバレエのバーレッスン、基本動作はセンターレッスンに当たり、正しい姿勢を立てるという意味で立舞と解釈され、素手で踊る基本であり(身体訓練の技法)、また、小道具の基本動作は、舞具(小道具)を持って踊る基本動作である。従って、その訓練体系は「舞踊語彙」¹⁹⁾である伝統的な動作技法を体系的に習得できるように構成されており、朝鮮民族の伝統的な舞踊—芸術的技量と力量を強化させていると考えられる。

(2) A 朝鮮学校における「民族舞踊」の教育実践

A 朝鮮学校での民族舞踊部は、学校設立当初から課外活動として行われてきた。『解放新聞』²⁰⁾には、1954 年度入学式で舞踊部が式を盛り上げていく様子を伝える記事が掲載されている²¹⁾。A 朝鮮学校では民族衣装を制服にし、生徒は通学時には、日本の公立学校のような制服を着用している²²⁾。また、校内での日常会話は朝鮮語を使用しており、特に校内の掲示物のほとんどは、生徒たちの手書きのスローガンで、全て朝鮮語で書かれている。放課後の小組活動²³⁾では、特に民族の文化である芸術—舞踊、楽器演奏、歌唱などに、力を入れてお

り、民族舞踊部²⁴⁾の部員は、民族衣装を着て練習し、指導者は朝鮮語で教えている。「民族舞踊」を通して、徹底的に民族教育を実践し、「ウリハッキョ(우리학교 私たちの学校)」として民族教育実践の場となっている。

A 朝鮮学校の民族舞踊部は、活動の成果を発表するために、様々なイベントに参加し、舞踊を披露し続けている。その主な発表の場は、発表会と在日朝鮮学生中央芸術競演大会である。その中では、崔が植民地時代に構築した作品や朝鮮半島で継承されてきた作品を「既成舞踊」とし、民族舞踊部指導者が崔の作品をもとに創作した作品は「創作舞踊」とされている。

「舞踊発表会」では、A 朝鮮学校の初級部、中級部、高級部の民族舞踊部が集まり(A 地域所在の初級民族舞踊部の賛助出演もあり)、日頃の活動の成果を披露する。筆者は、この「A 朝鮮学校舞踊発表会」に行き、午前中のリハーサルから本番の公演まで参観した²⁵⁾。この発表会は、「民族的アイデンティティ」を育成し、自らのルーツを確認するとともに自負心を持つという趣旨をもとに行われているものであり、その最後に部員たちは「私たちは民族舞踊を愛し」、「民族舞踊がなければ自分たちのアイデンティティの確立はない」「日本社会の中で生き残るために民族舞踊はなくてはならない」「民族舞踊は自分たちの民族意識を維持するために絶対に必要である」と語っていた。

A 朝鮮学校も参加した全国「在日朝鮮学生中央芸術競演大会」は、2019 年度に第 52 回目となり、日本国内の朝鮮学校約 100 校が参加して、部門に分かれて「民族舞踊芸術」を競演する。舞踊部門では、1 日目は基本動作、独部、2 日目は重舞・郡舞が披露され、競演作品の約 30～50%が崔の作品である²⁶⁾。また、1989 年度から 2019 年度までの優秀作品の中には崔の既成作品が多数見られ²⁷⁾、既成舞踊としては、主に『牙拍舞』²⁸⁾『社堂の舞』²⁹⁾『舞姫』³⁰⁾『バラの舞』³¹⁾『チェバンウルの舞』³²⁾などの作品が披露された。創作舞踊としては、『パクピョンの舞』³³⁾『挨拶にみんなの想いを込めて』³⁴⁾『農作の喜び』³⁵⁾『ペレンイの舞』³⁶⁾

『松の木のように強く』³⁷⁾などの作品が披露された。創作作品の衣装や動作は、崔の基本動作や作品をもとにアレンジされ、『ペレンイ舞』は、崔が1937年に初演した『草笠童』から、『チェガン舞』は、1936年に初演した『巫女の舞』からだと推察される。この競演会の中でも長年に渡り継承されていることが証明できる。上演回数の多い崔の作品は、『チェンガンの舞』³⁸⁾、『剣の舞』³⁹⁾、『巫女の舞』⁴⁰⁾、『チャンゴの舞』⁴¹⁾、『草笠童』⁴²⁾などである。

以上のように、崔の代表作である『チェンガン舞』『巫女舞』『チャンゴの舞』『草笠童』などは、民族教育の一環として、現在まで継承され、多くの朝鮮学校が参加する大会やイベントで多く演じられている。特に崔の作品は、皇民化政策期に民族独立の士気と意識を目覚めさせる役割を果たすとともに、発表会や競演大会の演目には民族性が込められている作品が多数みられる。民族舞踊部の活動は様々な場で競い合うことによって、さらにスキルアップをし、連帯感や「民族一体性」を感じられると言える。

また、卒業生の中には、在日同胞舞踊家として大韓民国に移り、崔の「民族舞踊」を中心とした芸術活動を行っている舞踊家もいる。彼女らは、大韓民国市民社会で様々なイベントに出演し、市民から好評を得ている。同じルーツを持つ在外同胞の意義から広く受け入れられていることだと考えられる。

(3) 「民族舞踊」指導者へのインタビューの分析・考察

a. インタビュー調査の概要

本調査は、A朝鮮学校民族舞踊部でのフィールドワークや発表会・競演大会からの映像を踏まえ、指導者4名へのインタビューから分析・考察する。インタビューの方式としては、半構造化面接法を採用し、指導者の自由な発話を心がけた。また、インタビューは朝鮮語で進め、インタビューの際に了解を得たうえで、レコーディングを行い、その内容の記録を作成し、分析に用いた。対象指導者は全員女性であり、指導者の名は、アルファベッ

トで表示し、指導歴は5年ごとに区切っている。その指導歴および背景は、＜表1＞の通りである。

＜表1＞ 舞踊指導者の経歴および背景

	指導歴	年齢層	世代	舞踊入門年齢
B指導者	1～5年	20歳代	4世	8歳
C指導者	6～10年	40歳代	3世	10歳
D指導者	6～10年	40歳代	3世	10歳
E指導者	1～5年	40歳代	3世	10歳

D指導者は、A朝鮮学を退職しているが、個人舞踊教室で指導している。E指導者も朝鮮学校を退職しているが、A地域におけるコミュニティ活動は続けている⁴³⁾。このことは校内だけでなく、指導者間の舞踊活動の拡大にもつながっていると考えられる。4名の指導者は、民族名を名乗り、BとC指導者は、学内では「チマ・チョゴリ」を着ており、舞踊部の指導時には、独自の舞踊部のユニフォームを着ている。また、C、D、Eの指導者は、舞踊入門期から「民族舞踊」を通して活動を継続している。

b. インタビューの分析・考察

【民族教育への崔の舞踊の取り入れ方】

私は初級部で創作作品を中心に指導していたが、その創作作品の振付は、指導者が創作する場合が多い。なぜなら、民族性と自負心を育成するからである（E指導者）。

植民地時代から戦後、祖国から受け継がれた崔承喜の基本動作は、高級部の部員（4、5世）が踊るのには難易度が高い。部員が習得しやすくするため、崔の基本動作を工夫して再編成し、指導している。毎年、発表会や競演大会で披露している作品は、既成作品と創作作品に分類され、特に競演大会での既成作品は最高の作品として評価されることが多く、テクニックが優れていると思う。一方、創作作

品は、各地朝鮮学校の指導者が振付をするケースが多い（B指導者）。

「崔承喜先生の100周年記念」に制作された基本動作は難易度が高いので、部員が習得しやすい動作にして教える。指導時は、言葉よりも身体で感じながら、民族的情緒を表現するようにしている。崔の名作である『牧童家の娘』は、民族意識、朝鮮民族の感情、情緒、特性、民俗生活の「チュム（춤 踊り）」なので好んで指導する。部員も民族意識を感じている。また、振付には、朝鮮半島の統一や平和の願いを込めて情熱を注ぎながら取り組む（D指導者）。

朝鮮学校での民族舞踊は、従来の崔承喜の民族舞踊より洗練されている。技術だけではなく、心で表現しながら民族情緒を踊らなければならないと指導している。祖国の踊りには動作線や拍子などの優れた作品がたくさんある。創作作品の振付は本当に難しい。部員が受け入れる水準がそれぞれ違う。従来は朝鮮の伝統舞踊に近いが、指導者が簡単に振付けられることが多い。動作が難しいと消化できない部員もいる。発表会では創作作品が多いが、競演大会では、崔承喜の既成舞踊作品の方を演じられることが多いようだ（C指導者）。

指導者は、崔の「民族舞踊」の基本動作のテクニックが高難度のため、難易度を下げ、部員が習得しやすくなるよう、作品の振付を工夫し、民族意識を高めていくことを意識して指導している。また、振付が若干違っていても、その基本の動きには共通点が多く、崔の基本動作や作品をもとにしている。高級部（高等部）で取り上げている崔の「民族舞踊」は、作品の構成も工夫して全体的な動きを活かすようにしている。

「伝統舞踊」「韓国舞踊」の基本法則においては、「天」「地」「人」という3つの思想から表現されているのが基本手法（法則）である。このような手

法から見れば、指導者が振付した作品には、曲線美のある動きが多い。これは、バレエや現代舞踊などの西洋的な直線的な動きとは違い、「伝統舞踊」の特徴である。この特徴は、「天」として腕の動き、「地」として足の動き、「人」として呼吸の動きを表現している。「天」「地」「人」の3要素が「舞体：動き」でつながることによって、曲線美が生まれることになる。その中には、崔の踊りに近づくように、呼吸の深さや足動作を重要視として見られる。

一方、前述の通り、韓国では、崔の「民族舞踊」は「新舞踊」として位置づけられ、「伝統舞踊」を基盤として創りあげている「創作舞踊」の様相が見られる反面、「伝統舞踊」の技法の中の「地」としての足の動きは弱いと感じられる。

また、「民族舞踊」は、舞体や心まで表現して民族性と自負心を育成しているものとの考え⁴⁴⁾から、指導者は、「民族舞踊」自体が持つ民族的情緒や感情を受け継ごうとしている。そのことは、部員の「民族的一体性」形成・構築に繋がることと考えられる。指導者は、崔の「民族舞踊」を大いに評価し、その舞踊を取り込んで朝鮮半島の統一や平和の願いを込めて情熱を注ぎながら指導し、自らのアイデンティティの維持・継承に生かしている。

【指導者にとっての「民族舞踊」の意義と課題】

「民族舞踊」や音楽を継承することは大事である。それが「朝鮮人（조선사람）としての空間」。その踊り場の一つが朝鮮学校であり、私のアイデンティティを維持できる場である。朝鮮学校で民族舞踊が継承され、発展していくことが大事（B指導者）。

朝鮮学校で「ウリ」の言葉で話したり、朝鮮舞踊を踊ったりすることは、朝鮮人として生きている証拠。骨と肉で感じながら、我が言葉と舞踊を続けていこうという気持ちで踊り続けている。私たちの言葉と文化、特に踊り

は、心から表現しながら、朝鮮舞踊の優秀性を誇り、自負心をより確固たるものにするための武器となる。朝鮮舞踊は、民族の魂だと部員自らも言っている。代々と受け継がねばならないと思う（C指導者）。

日本の学校との交流の中で、その学校の子供たちに朝鮮舞踊を教え（朝鮮舞踊を知らない人が多かった）、文化祭で日本の子供たちが朝鮮舞踊を披露したことがあり、保護者からの評価もとても良かった。同胞社会や日本の方々の前で朝鮮舞踊を披露し、その素晴らしさを広めていく活動は、地域交流としての沢山の役割を果たし、朝鮮舞踊を通して民族の心を守り育ていけると思う。一方で、日本と朝鮮＝北朝鮮の関係の中で、メディアや政治からの影響を多大に受け、日本の学校に進学したり、日本国籍を取得したりして、朝鮮学校に入学・進学する子供たちが減る現象が見られ、将来的な朝鮮学校の存在が危ぶまれている。そのため、子供たちの民族的意識が薄れ、民族的アイデンティティの継承について不安に思っている（D指導者）。

指導者は、自らの舞踊部に愛着心を持ち、「朝鮮人としての空間」、その踊りの場こそが民族の自覚を芽生え、生きることの意味があると語っている。反面、朝鮮学校が日本社会で認められていない現状の中で指導者は使命感を持ちながら日本社会とのつながりを持つことを望んでいる。朝鮮学校への入学者⁴⁵⁾や民族舞踊部員が減少する中で、少しでも部員の身に「民族舞踊」を取り入れ、表現したいと思っていることが伝わってきた。このことは、指導者にとっての「民族舞踊」の意義であると考えられる。

一方、今回インタビューした指導者は、3世が中心で、民族舞踊部員は、4、5世であり、2、3世と比べて、日常生活の中で日本社会に影響を受け、民族文化に触れる機会が薄れていると考えられる⁴⁶⁾。在日コリアンの中には「民族性を身につけ

る（民族教育）」ため、インターナショナルスクールに行っている子どもいる。その中で、大韓民国の「伝統舞踊」や「K-POP」などが取り入れられ、指導者はニューカマーも多く、大韓民国からの支援を受けている。このように、在日コリアンにとっての「民族舞踊」や民族文化への意識は多様化している。

【民族舞踊の継承と指導者たちが受けた「民族舞踊」の教育】

学生の時は何も考えずに踊っていたが、今考えると指導をしてくださった先生方に思いがあり、作品を踊る過程で自然にその思いを表現することを感じていたのだと思う。「ウリハッキョ」のクラブ活動だったので教育を受けているという感覚はなかった。でも「ウリ舞踊（우리무용 我が舞踊）」を通して民族的情緒や感情を強く抱いて来たのだと思う。日本で生まれ育っても民族の誇りを持って進んで行けるように指導してくださったのだと思う。また、「ウリ学校」「ウリ友達」周りのすべてを大切にする気持ちも育てくださった（D指導者）。

私自身は日本の小学校に3年間通っていたが、親が朝鮮学校の出身であったため、親の勧めで朝鮮学校に転学し、4年生からクラブ活動の一環として朝鮮舞踊を始めた。当時、舞踊研究所は少なかった。初めて触れる民族の「チャンダン」、華やかな衣装に感動したのを鮮明に覚えている。習得する「ウリマル（우리말 我たちのことば）」勉強と踊りを人の倍、努力して練習を重ねた。そして数々の栄光の舞台で誇らしく舞った経験が今も力になっている。ウリマルもとても重要だが、ウリ朝鮮舞踊は本当に自分の心を表現する手段であり、後輩養成に力を注ぎたく、朝鮮大学校に入学し、朝鮮舞踊部の小組活動で崔承喜の基本舞踊や舞踊作品も習った。その時の指導者

は、在日で有名な朴貞順先生だ。私は、中学、高校、大学、朝青、そして「オモニ（어머니 母親）」になった今も舞い、指導にも熱が入る。朝鮮舞踊を通し、民族の情緒、自負心、魂を学び、自分自身の心と身体で芸術的に表現する創造的能力を身につけた。もちろん、芸術的感覺や忍耐力、団結力も（C 指導者）。

指導者が受け継いだ民族教育での舞踊は、「ウリハッキョ」「ウリ舞踊」という民族の情緒や感情を潜めている。指導者にとっての「民族舞踊」は、民族意識を維持し、民族性を表現する手段となっており、「民族舞踊」を通して民族文化継承の担い手となることを認識している。また、民族教育実践の中で、民族舞踊部という「踊り場」を確保し、民族性をさらに掘り下げ、認め合うような実践の場は指導者にとって、なくてはならないものだと考えられる。

舞踊は、自らが望んで取り組むことによって、より一層民族意識や連帯感を高めていくことから、2世から学んだ「民族舞踊」を通して自らのルーツを愛し、それを維持する気持ち強く芽生えさせ、舞踊の表現を通して民族の情緒や自負心を継承すると考えられる。

【指導者にとっての民族舞踊教育の継承へ】

朝鮮舞踊を踊る楽しさと喜びを感じるということには、ヌキム（느낌 フィーリング）、ウリムヨン（우리무용 我が舞踊）を体で表現する形だけにとらわれず、練習を重ね、思った事を思ったように表現できる心と体の一致が大切ではないかと思う。そのためには日々の努力、意識、練習が大切。若い世代が今も朝鮮舞踊を踊っていること自体が本当に素晴らしいと思うので、自分たちが舞踊を通して感じた想いや感情をストレートに伝えていけたらと思う。民族舞踊は、どんな事も動作して表現できる。学生たちは、学生生活も作品として表現する。また動作から動作への線、カ

ラク（가락 チャンダ）、マツとモツ（맛과 멋 味と趣）、全てに「ウリ民族性（우리 민족성）」が深く滲んでいることこそ素晴らしいと思う（D 指導者）。

世代交代しても習い続けてきたことは、そのまま受け継がれている。受け継ぐことにより舞踊教育の意義と役割の重要性は、益々高まっていると私は思う。日本で生まれ育った3世の私。祖国と民族を愛し、新しい時代の要求に答えながらも、この場所で民族の芸術の素晴らしさと、民族の情緒、そして誇りを持っている私達の生き様を朝鮮舞踊により表現し伝えて行ければと、心からそう思う（C 指導者）。

指導者は、2世指導者から教えられた「民族を愛する心」「民族の情緒」「民族の誇り」「民族芸術の素晴らしさ」などが育つように、ウリ舞踊を新しい時代の要求に応じて変化させながらも、次世代に伝えようとしている。その内容は、「民族舞踊」に限らず、生活すべてに関わっており、そこから民族意識を深めている。そのことは、「民族舞踊」の芸術性を高めることとなり、「民族舞踊」の発展につながると考えられる。そして、日本社会の中で差別や偏見を受けながらも、在日コリアンにとって「民族舞踊」は、アイデンティティ構築に大きな影響を与え、指導者にとっても「民族舞踊」は民族意識を維持し、民族性を表現する手段となっている。朴貞順は『朝鮮新報』で、「舞踊教育は、祖国と民族の発展に寄与し、日本をはじめ国際社会でも活躍できる知徳体を兼備した有能な人材、真の朝鮮人を育てるための役割を担っている」と述べ、また、「在日コリアンの「民族舞踊」に対する愛着心は祖国に住む同胞よりも強いとし、自らのアイデンティティを唯一肯定できるものは「民族舞踊」だとし、民族教育における「民族舞踊」教育の重要性を提言」⁴⁷⁾している。

「民族舞踊」の教育実践の中でのアイデンティティ構築は、A 朝鮮学校教育目標にも掲げられて

いる。「日本社会において様々な差別を受けながらも、民族教育の中の特に舞踊教育を通して、自分が生きるという民族の自覚を感じている」と語った指導者もいた。

B 指導者、C 指導者のインタビューからは、マイノリティであるという視点で、自分たちの民族性や民族意識を前面に出した指導をしていることが読み取れる。指導者は自らが継承した「民族舞踊」の指導を通して、民族意識を高め、次世代への「民族舞踊」の継承についての使命感を持っていることが読み取れる。「民族舞踊」の持つ力が彼女らの舞踊指導の中での自負心を維持し、先人・同胞たちが培ってきた民族文化を継承・発展させていくことに繋がっていることと考えられる。

D 指導者のインタビューからは、民族性を持ちながらも、日本社会の中でそれらが受け入れられることによって、さらに民族意識を深められることに繋がるということを示唆している。B 指導者、C 指導者は、自分たちが継承してきたものに使命感を持って次世代への指導を行っている。D 指導者は、長年の指導歴から、教育現場をもとに地域へと拠点を広げ、自らの枠を超えて「マイノリティ文化」である「民族舞踊」を発展させていることが伺える。このことは、指導者が継承してきた「民族舞踊」が、日本社会で多文化教育を進める中で一つの道標となる可能性があると言えよう。

A 朝鮮中高級学校舞踊発表会のパンフレットには、「異国での風当たりが強い中、学生達は民族と朝鮮舞踊を愛する心を養い、練習に励んでまいりました。舞踊を思いきり踊れる環境を作って下さった皆様への感謝の気持ちを胸に、これからも一生懸命活動してまいります」と掲げている。「踊りは居場所、スキルを高める指導工夫、踊りに対する愛着心」(B 指導者)と、「できるだけ崔の作品を取り入れ呼吸からその奥深さまで指導する」(D 指導者)ということは、舞踊に対する指導者の強い愛着心を次世代へ継承しようとする気持ちにつながっていると考えられる。その舞踊に対する愛着心は、「空間」「場」「骨と肉」「踊りこそ生きること」などの指導者の語りに潜んでいる。民族

文化の中でも舞踊は身体に身につけるものであり、一度身に付けた動作は自分の身体に染み込む。そのために、インタビューを行った指導者のように幼少期から身体に舞踊を取り入れることこそが大切であり、それが「舞踊の魂」まで「血と骨」という民族性に繋がっていくに違いない。

D 指導者が語った日本の学校との交流からは、その文化祭で「朝鮮舞踊」を知らない人が多かったという日本社会での無関心の影響が残存していると考えられる。「民族舞踊」が日本社会の中で受け入れられ、認められることこそが、次世代の「民族舞踊」の継承につながるものと考えられるが、現在の日本社会ではそのような状況だとは言えない。

A 朝鮮中高級学校舞踊発表会で「どんなことがあっても、『朝鮮舞踊』が私自身のアイデンティティであり、これが日本で生きる力になる」と部員は熱く誓った。指導者は、マイノリティとしての立場に置かれながら、自分たちのルーツである文化を堂々と日本社会で表現し、自らが民族教育を通して「民族舞踊」・「民族文化」継承の担い手となっていると考えられる。

4. 結び

本稿では、在日コリアンが民族教育実践の中で「民族舞踊」をどのように継承しているのかについて、A 朝鮮学校舞踊指導者のインタビューを通して論じてきた。その中では、崔の『朝鮮民族舞踊基本』動作や作品が多く取り入れられ、民族性や民族文化の継承に影響を与えていることが分かった。また、朝鮮学校での「民族舞踊」教育実践が、指導者の「空間＝居場所」となり、「民族舞踊」を通して培われた民族の自覚が日本社会で自分自身を守りながら、生きていく土台を作ってきたことを確認することができた。

舞踊は、民族文化継承の中で人々の生活を通して次世代へと受け継がれるものである。指導者にとっての「民族舞踊」の継承・維持の礎となって

いるものは、朝鮮学校における民族舞踊部の活動であり、指導者自らの民族性を「必死」に守りながら高揚させる場となっている。このような意味において、「民族舞踊」は、朝鮮半島からの古来の文化を受け継ぎながらも、在日コリアンが独自で創り上げてきた民族文化であるとも言えよう。その「民族舞踊」は、自らのルーツを意識し、民族文化の正統性を守りながらも継承していく重要なツールとなっていることが確認された。

本稿では、A 朝鮮学校での調査にとどまったため、在日コリアンにとっての「民族舞踊」全体像を論じるまでには至らなかった。そのため、今後の課題としては、在日コリアンにとっての「民族舞踊」と「民族アイデンティティ」の関わりについて、さらに考察するために、トランスナショナルの視点も踏まえながら、調査対象地域を拡げ、幅広い世代へのフィールドワークや舞踊関係者へのインタビューが必要だと考えている。

注

- 1) 「文化財保護法」(1962 年 1 月 10 日公布) 総則第 2 条第 2 項。
- 2) 注 1) 第 2 条第 1 項。
- 3) 各地大学内での設置の数は、舞踊学科、舞踊科、体育学科、社会体育学科などでおよそ 100 校に指定されている。
- 4) 崔の没年については、金恩漢 (2003) では、1911 ~ 1975 となっており、韓国での研究では、1911 ~ 1969 となっているが、先行研究では異見が見られる。
- 5) 韓国では、近代西洋舞踊と朝鮮半島の民族舞踊と融合させた崔承喜の舞踊は、「新舞踊」と分類されている。
- 6) 徐希寧 (2020)。
- 7) 本稿では、朝鮮半島をルーツとする在日韓国・朝鮮人を一括して在日コリアンとする。
- 8) 民族舞踊指導者は「民族舞踊」を「朝鮮舞踊」ということが多く、「民族舞踊」と「朝鮮舞踊」は同じ概念だと言う。
- 9) 2019 年 9 月 ~ 2020 年 2 月に実施。
- 10) 2021 年 3 月 ~ 8 月にオンラインで実施。
- 11) 在日朝鮮人のアイデンティティをめぐる「民族」「祖国」「帰国」「定住」の諸概念の分析を通して、在日朝鮮人にとっての「民族性」が変容・脱構築されたのかを在日朝鮮人のアイデンティティの在り

様を考察したもの (鄭栄鎮 2018)、一枚岩の民族的アイデンティティは解体されていく必要があるとしても、日本社会における在日韓国・朝鮮人に対する差別と排除のシステムが残存している以上、解体すべきものに衣摺せざるをえないというアイデンティティのジレンマを抱えていると述べたもの (金泰泳 2005) などがある。

- 12) La Meri (1977: 1)。
- 13) 許榮一 (1999: 21)。
- 14) 『東亜日報』1927 年 8 月 10 日、11 日、12 日、13 日、16 日、17 日「朝鮮舞踊の振興論」解説: 金東煥。
- 15) 崔承喜 (1958)。
- 16) 金恩漢 (2003: 165) を参照。
- 17) 基本動作の構成は、立舞 (リブチュム)、プチュチュム (扇の舞)、タルチュム (仮面舞)、スゴンチュム (手巾の舞)、ソゴチュム (小鼓の舞)、カルチュム (剣舞)、ブクチュム (太鼓の舞)、サンモチュム (象毛の舞)、チャンゴチュム (杖鼓の舞) などがある (崔承喜 1958: 朴貞順 2015: 154 再引用)。
- 18) 『朝鮮民族舞踊基本』は、1958 年に発刊、1960 年と 1962 年に映像制作され、1987 年、1996 年、2005 年、2011 年に渡り、2012 年には、「崔承喜誕生 100 周年記念」として、在日文学芸術家同盟中央本舞踊部により『朝鮮民族舞踊基本』動作を修正補完し、映像制作された (国立国楽院編纂 2018) を参照。
- 19) 石井の舞踊詩の影響 (モダンダンスの理念のもとに、既存の日本古典舞踊を西洋式から脱し、詩的に追求したもの)。
- 20) 1954 年 4 月 13 日付。
- 21) 舞踊部は 1957 年学校文化祭を準備する過程で発足したとされている (『学校沿革史』: 132: 板垣 2018: 30 再引用)。
- 22) 1999 年朝鮮学校「チマ・チョゴリ」登校廃止決定 (1987 年大韓航空被爆事件を契機に朝鮮学校女子生徒に対する暴行や 1994 年「チマ・チョゴリ」切り裂き事件、1998 年、2006 年にも北韓の動向による暴行事件、戯弄事件など)。
- 23) 韓国統一部北韓事典では、小組活動を「特定の科目を中心に放課後に教員の指導を受けながら予習復習や実験実習などを行う一種の部活動」としている。
- 24) 筆者の参与観察から見れば、週 5 回ほど実施され予備動作の練習時間の中で約 1 時間 30 分から 2 時間までは基本動作の習得し、その後 2 時間程度崔の基本動作と作品、創作作品など週 5 回練習している。
- 25) 2019 年 12 月 00 日 A 朝鮮学校舞踊発表会。

- 26) 既成作品が競演される割合は、毎年異なる。
- 27) 代表作は、『チャンゴ舞』、『剣舞』、『パラの舞』、『ソゴ舞』、『剣舞』、『プチェチュム』、『仮面舞』、『スゴン舞』であり、崔の『朝鮮民族舞踊基本』に舞譜解説がある。
- 28) 舞妓が牙拍を持って踊る、高麗・朝鮮時代に時代に踊った宮廷舞踊、朝鮮民主主義人民共和国では伝統古典民俗舞踊と分類されている（初演時期は不詳）。
- 29) 朝鮮王朝時代、全国を旅しながら披露する大道芸人を指して寺堂（サダン）と呼び、この踊りは、即興で踊られていたサダンたちの踊りを朝鮮民主主義人民共和国の按舞家が芸術化した作品（初演時期は1940年）。
- 30) 若き舞姫が美しく、楽しく、力強く踊る作品（初演時期は、1930年代の後半から40年代前半頃）
- 31) 仏教儀式舞踊から派生した優雅な踊りで、バラの深い音色が特徴である作品（初演時期は1940年代前半頃）。
- 32) 昔巫女たちは、神を世俗の人々に伝えたそうで、巫女たちの力強い姿勢を踊りで表現する作品（原作巫女の舞：初演時期は1936年）。
- 33) 「パクピョン」（박편）を巧みに使いながら、軽快に踊る作品。
- 34) A 朝鮮学校のオリジナルソング『コマプスムニダ』の歌声にのせて『アンニョン、コマウォヨ』、『挨拶の大切さ』を踊る作品。
- 35) 収穫の季節、農民たちの喜びとこれからの豊作を願う気持ちを描いた作品。
- 36) 軽快な音楽に合わせ、帽子を回して踊る作品。
- 37) どんな困難が立ちかはかろうと、松の木のように強く生きてゆく次世代の姿勢を描いた作品。
- 38) 朝鮮民主主義人民共和国の代表的な伝統民俗舞踊作品。衣装と小道具は崔が創作した原作『巫女の舞』と同様に見られるが、この舞を再現した作品で、鈴を持って音色を楽しみながら軽快に踊る作品。
- 39) 打楽器伴奏で勇壮な踊り。朝鮮の剣舞は新羅時代の勇将の英雄的行為を讃えるために創り上げた踊りであったが、のちに技生により女性的な踊りに創作された作品（初演時期は1934年）。
- 40) 巫女は済州島というシンパン。巫女の舞に使用される鈴は心霊を呼ぶ道具であり、その澄んだ音は天に届く神秘的音とされている。優雅でしなやかな動作だけではなく、鈴を奏でる躍動的で粋な動作が込められている作品（初演時期は1936年）。
- 41) 打楽器の一つである杖鼓を斜めに肩に担ぎ、様々なチャンダン（拍子）によって変化させて踊る作品（初演時期は1942年）。
- 42) 崔が朝鮮民族の情緒を盛り込んで創作した作品。

- モチーフとなる少年花婿は、伝統時代に家門の血統を受け継ぐことを子たる道理としてきた朝鮮に広く盛行した結婚風俗作品（初演時期は1937年）。
- 43) 在日本朝鮮文学芸術家同盟 K 支部舞踊部。
- 44) 舞踊は不可欠なもの…集団舞踊は一共同体で連帯感を獲得する…多く社会的機能を持ち、習慣と儀式と密接にかかわりあって…ある民族にとっては、舞踊は組織化するための主要な手段である（R・ランゲ著 / 小倉重夫訳 1981：152）。
- 45) 『産経新聞』2019年12月30日付「朝鮮学校生徒減少の背景に少子化・帰化・国際結婚で深刻に」10年前の平成21年から児童・生徒数が3000人以上減り、来年には5000人を切ることが確実な情勢になった朝鮮学校）。
- 46) 例えば、チマ・チョゴリ制服の（通学時の）廃止など、韓東賢（2006）は、「在日朝鮮人を日本人の下位に位置づけようとする日本社会において、チマ・チョゴリ制服は抵抗的なアイデンティティを表し、民族の誇りの象徴とされてきた」と指摘している（注22参照）。
- 47) 『朝鮮新報』2021年1月30日付「舞踊教育の重要性」<https://Chosonsibo.com>（2021年9月25日閲覧）、朴貞順（2000）。

参考文献

<日本語文献>

- 坂垣竜太ほか（2009）「朝鮮学校の社会的研究—京都朝鮮第三初級学校を中心に」同志社大学社会調査実習報告書 NO.17（1）
- （2018）「朝鮮学校と銀閣寺—京都朝鮮中高級学校と地域社会との関係をめぐって」『同志社大学社会調査実習報告書』NO.27（5）
- 呉永鎬（2019）『朝鮮学校の教育史－脱植民地化への闘争と創造』明石書店
- 小沢有作（1973）『在日朝鮮人教育論—歴史編』亜紀書房
- 金徳龍（2004）『朝鮮学校の戦後史—1945～1972』社会評論社
- 金恩漢（2003）「崔承喜研究—北朝鮮での舞踊活動（1946～1967）を中心に」お茶の水女子大学博士論文
- 金泰泳（2005）「在日韓国・朝鮮人の変貌—日本社会と在日アイデンティティの現在」梶田孝道編『新・国際社会学』名古屋大学出版会
- 徐希寧（2020）「植民地近代朝鮮における民族伝統舞踊の形成過程と変容」『国際関係論集』第19号、pp.1-19（立命館大学国際関係学会2019年度）
- ソニアリヤン（2005）『コリアン・ディアスポラ—在日朝鮮人とアイデンティティ』明石書店
- 宋基燦（2012）『「語られないもの」としての朝鮮学校—在日民族教育とアイデンティティ・ポリティク

ス』岩波書店

_____(2018)「朝鮮半島における平和実現のための「節合の知」—在日コリアンの歴史的経験と日常適実践から」『コリア研究』第9号、pp.19-31

鄭榮鎮(2018)『在日朝鮮人アイデンティティの変容と揺らぎ「民族」の想像/創造』法律文化社

野村雅一(1983)『しぐさの世界—身体表現の民族学』日本放送出版協会

韓東賢(2006)『チマ・チョゴリ制服の民族誌—その誕生と朝鮮学校の女性たち』双風舎

朴貞順(2000)「民族舞踊教育の重要性についての考察—在日朝鮮学生の民族教育における民族舞踊教育」、『朝鮮大学校学報』4、pp.96-105

_____(2013)「在日朝鮮同胞の民族舞踊を考える」『朝鮮大学校学報』23、pp.59-87

_____(2015)「朝鮮民族舞踊基本動作」(崔承喜)の特徴と変遷『アジア文化研究』22、pp.150-115

朴尚得(1980)『在日朝鮮人の民族教育』岩波書店

朴三石(1997)『日本のなかの朝鮮学校—21世紀にははばたく』朝鮮青年社

_____(2012)『知っていますか、朝鮮学校』岩波書店
R・ランゲ著/小倉重夫訳(1981)『舞踊の世界を探る』音楽之友社

<한국・조선어문헌>

김종옥(2014)『한국근대춤자료사 1899년도~1950년도』한국: 도서출판 아라

박정순(2000)『제일조선학생들의 민족성교양과 민족무용교육』평양: 문학예술종합출판사

송기찬(2018)「정체성의 정치에서 정체성의 관리로: 조선학교 민족교육과 제일코리안의

정체성」『한국문화인류학』Vol.51 No.3 pp.207-278

_____(2020)「신체화되는 아이덴티티: 조선학교의 조

선무용에 관한 고찰」『국제고려학회』제18호、pp.507-542

최승희(1958)『조선민족무용기본』평양: 조선예술출판사

_____(1958)『무용극대본집』평양: 조선예술출판사

_____(1963)『조선아동무용기본』평양: 조선문학예술총동맹출판사

국립국악원편찬(2018)한민족음악총서6『북한의 민족무용』한국: 국립국악원

국립국악원편찬(2019)한민족음악총서8『재외동포 원로예술 구술채록—일본편』한국: 국립국악원

국립국악원편찬(2020)한민족음악총서9『북한의 조선예술 1956-196』9 한국: 국립국악원

허영일(1999)『민족무용학』한국: 시공사

<英語文獻>

La Meri(1977). *Total Education in Ethnic Dance*, New York; Marcel Dekker, Inc.

<映像データ資料>

在日本朝鮮文芸藝術家同盟中央舞踊部(2012年度)崔承喜の『朝鮮民族舞踊基本動作』DVD

在日朝鮮學生中央芸術競演大会(1989年度~2019年度)DVD

<インターネットサイト>

韓国統一部国立統一教育院 <https://www.uniedu.go.kr>

在日本朝鮮文学藝術家同盟 <https://munedong.com/>

<新聞>

『東亜日報』

『解放新聞』

『朝鮮新報』

寄稿

日韓わだかまりの淵源 —大韓民国の正統性から問い直す—

徐正根（山梨県立大学）

キーワード：3.1 運動、大韓民国臨時政府、建国、民族主義、アイデンティティ

1. はじめに

日本の敗戦によって朝鮮は植民地支配から解放されたが、米ソの進駐で南北に分断され、3年後には二つの国家が成立した。そして2年後、南北は3年にわたって戦火を交え、休戦後70年近くが経過したのに未だ終わりを迎えていない。

東西冷戦下で日本は朝鮮半島の南側のみと国交を結び、それから60年近く北側とは断絶状態のままである。日本が冷戦時代から一貫して北側と敵対関係を維持している理由は自明で、終戦宣言しない米国を差し置いて関係改善など望むべくもないからだ。日本同様米軍が駐留している南側共々、同盟国の一員として足並みを揃え、国際社会における米国のプレゼンス維持に役買ってきた。

日本政府が日米関係を同盟関係だと認めざるを得なくなったのは1981年のこと、それで当時の外務大臣は引責辞任した¹⁾。同時期、南側は「軍事独裁体制」であった。その政権は反共防波堤論を掲げて日本に多額の経済支援を要請し、日本はあくまでも「経済援助」であるとしながら破格の借款を提供した。

改めて言うまでもなく南側は自由民主主義を標榜する大韓民国（韓国）であり、北側は社会主義を標榜する朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）で

ある。韓国は南韓・北韓と称し、朝鮮民主主義人民共和国は北朝鮮・南朝鮮と称している。互いに、法律で朝鮮半島には政府が一つしかないと定めているからだ。

韓国では朴正熙の時代から「韓米日の軍事同盟」は理の当然で、米国も同様である。しかし、日本は非核三原則でも見られたように建前を貫いて、国内向けには「軍事」はないという姿勢を長きにわたり崩すことがなかった。21世紀の今から見れば隔絶の感がある。全斗煥政権は、韓国が日本の防波堤になっていると揺さぶりをかけ、不沈空母論を唱えた中曽根政権と良好な関係を築き、中曽根はレーガンとロンヤス蜜月関係を築いた。

この時期に限らず、朴正熙政権から盧泰愚政権までは、日韓間に燦る問題が表出することは度々あったものの、極度に悪化することはなかった。しかし、冷戦体制が崩壊し、日本が停滞期を迎え、韓国が発展を遂げることによって、日韓の懸案事項が噴出するようになった。

日本はバブル崩壊を境に1990年代以降「失われた20年」を過ごし、2021年に至ってもデフレから脱却できていない。韓国は1987年に民主化を達成し、1993年には凡そ30年ぶりに文民政権が誕生、以降保守陣営と進歩陣営の間で政権交代を繰り返している。そして1996年にOECD加盟国となってから20数年、いよいよ先進国隊列の一員になったと自負するようになった。こうして日韓の圧倒的だった格差が大幅に縮まり、事によっては逆転現象が見られる中、両国の政府間関係は小淵・

金大中「日韓パートナーシップ宣言」をピークに下降局面を辿り、安倍、文在寅政権下では国交正常化以降、最悪の状況に陥っているとされた²⁾。

日韓間の懸案事項は教科書、独（竹）島、靖国神社参拝、従軍慰安婦、元徴用工の問題が主な 이슈で、これらの展開として「慰安婦問題合意の撤回」、元徴用工裁判判決に基づく「日本企業の資産差し押さえ」がシビアナ事態になっている。さらに現在進行形の半導体関連素材輸出管理強化や日本産水産物輸入規制問題、今後の福島原発処理水の海洋放出なども争点化している。そして、済州国際観艦式における自衛艦旗（旭日旗）の掲揚自粛要請、自衛隊機に対するレーザー照射、軍事情報包括保護協定破棄通告など軍事関連の摩擦も生じている。

これら懸案事項表出の状況要因はまちまちだが、構造要因としては日韓基本条約と日韓請求権協定の解釈の相違が挙げられ、その大本にあるのが歴史認識問題である。さらに突き詰めれば、結局のところ淵源は日本の植民地支配に行き着く。

「日韓問題を解決したければ歴史認識を正せば良い」。ポイントはこれに尽きる。しかしながら、誰がどのように自国もしくは相手国の歴史認識を正すのか。事実は何なのか、何であったのか、歴史とは何か等々議論は噴出するし、価値基準や判定基準を設けることが困難なことも容易に想像がつく。これまで行われた日韓首脳会談の合意に基づく日韓歴史共同研究では、対立点が際立ちこそすれ、双方の歩み寄りが見られたわけではなく、互いに満足し得る結果を導き出せていない。

こうした観点から、本稿では韓国の歴史認識がどのように培われてきたのかを検討する一助として、大韓民国という国家及びその政府の正統性と正当性がいかに規定され、国民に伝えられてきたのか、そしてそれらの基底をなす韓国のナショナルアイデンティティとは一体何であるのかを、憲法前文に記されている建国理念と建国の淵源をたどりながら検討する。そして、そこから見えてくる日韓懸案事項解決に向けたヒントを最後に示してみたい。

2. 憲法前文に見られるナショナルアイデンティティ

朴槿恵大統領が弾劾によって罷免された後の2017年5月、「機会は平等で、過程は公平で、結果は正義に反してはならない」をモットーとし「積弊清算」を公約に掲げた文在寅政権が出帆した。文大統領は就任早々改憲作業に取り掛かり、2018年5月24日、国会本会議に改正案が上程された。前回の改正からはほぼ30年が経過しており、野党からも改憲案が提示されるなど、改憲自体に異論は多くなかった。しかしながら、結局のところ野党陣営の合意を得るには至らず、投票不成立と相成った。

大統領が提案した改正案では前文改定の趣旨をこう記している。「大韓民国が追求する価値と志向を明らかにできるよう、憲法的意義を有する重要な歴史的事件と社会的価値を明示する必要がある。そこで、民主化運動の過程で重要な意味を有する4.19革命、釜馬民主抗争と5.18民主化運動、6.10抗争の民主理念を継承するという点を明らかにして、自治と分権、地域間の均衡発展及び自然との共存など、重要な社会的価値を明示する」³⁾。つまり1987年民主化に至る道程の標を明記したいということである。

このことは、憲法で政体は民主共和国だと宣いながらクーデターで政権の座についた全斗煥はもとより、朴正熙の正当性をも否定することにつながりかねないので、保守陣営からすれば受け入れ難いところがあると言える。2020年4月に実施された国政選挙では、与党プロ民主党が大勝して6割の議席を獲得した。ただし、憲法改正の発議には国会議員3分の2の賛成が必要であるため、野党「国民の力」の合意ないし野党議員一定数の賛同を得られなければ、改憲は実現しない。

一般的に、憲法にはその国がどういう国で何を目指すのか、即ち国体や政体、理念が示されている。韓国の現憲法は1987年10月29日に公布された、1948年7月17日の最初の公布以来、9次にわ

たって改正され、受け継いできたものである。その前文は次のように記されている。

「悠久なる歴史と伝統に輝く我ら大韓国民は、3.1 運動により建立された大韓民国臨時政府の法統と不義に抗拒した 4.19 民主理念を継承し、祖国の民主改革と平和的統一の使命に立脚し、正義・人道と同胞愛にて民族の団結を強固にし、あらゆる社会的弊習と不義を打破し、自律と調和をもとに自由民主的基本秩序をより確固たるものにし、政治・経済・社会・文化のあらゆる領域において各人の機会を均等にし、能力を最高度に発揮させ、自由と権利に伴う責任と義務を完遂させ、内においては国民生活の均等な向上を期し、外においては恒久的な世界平和と人類共栄に貢献することにより、我らと我らの子孫の安全と自由と幸福を永遠に確保することを誓いつつ、1948 年 7 月 12 日に制定され 8 次により改正された憲法をここに国会の議決を経て国民投票により改正する。」。

そして 1948 年の憲法前文の冒頭部分は次のとおりである。「我ら大韓国民は、己未三一運動により大韓民国を建立し、世界に宣布した偉大な独立精神を継承し、ここに民主独立国家を再建するにあたり…（中略）…檀紀 4281 年 7 月 12 日、この憲法を制定する。」。

これまでの改正で「3.1 運動」の文言は外されたことが一度もなく、歴史的経緯や諸々の要素を鑑みて「3.1 運動の独立精神」が大韓民国のアイデンティティに相当すると言ってもよいだろう。故に、その精神を継承することで政府は正統性を担保することになる。

表は前文の 3.1 運動に連なる記述を比べてみたものである。これまで 9 回の改正で文言が 4 度変わっている。最初は第 5 次改正時、5.16 クーデターの後に朴正熙が国家再建最高会議議長兼大統領権限代行を務めていた時で、李承晩政権の不正を糾弾した 4.19 と自身を正当化する 5.16 が記載された。2 度目は第 7 次、維新体制を敷くために改正され、祖国の平和的統一が記載された。3 度目は第 8 次改正時で、全斗煥の大統領就任半年後のこと、この時には 5.16 共々 4.19 の記述が削除された。

そして 4 度目が第 9 次改正時で、「独裁体制」の終焉を迎えつつ、民主化の達成を憲法で謳うこととなり、4.19 が復活した上に 3.1 運動に関連する部分でかつてない文言が記入された。「大韓民国臨時政府の法統」⁴⁾である。

この文言は改正に際して、独立運動家だった金俊燁が強く進言し、取り入れられたとされている⁵⁾。そして、これは後に物議を醸し国論を割るような論争をもたらすことになる。なお、本稿ではこの法統を正統と同義に捉えて扱う⁶⁾。

憲法前文における 3.1 運動の表記の変化

憲法	改正年	前文における 3.1 運動の表記
1 号	1948.7.17 施行	己未三一運動によって大韓民国を建立し、世界に宣布した偉大な独立精神を継承し、ここに民主独立国家を再建…
2 号	第 1 次 1952.7.7	同上
3 号	第 2 次 1954.11.29	同上
4 号	第 3 次 1960.6.15	同上
5 号	第 4 次 1960.11.29	同上
6 号	第 5 次 1962.12.26	3.1 運動の崇高な独立精神を継承し、4.19 義挙及び 5.16 革命の理念に立脚し、新たな民主共和国を建設…
7 号	第 6 次 1969.10.21	同上
8 号	第 7 次 1972.12.27	3.1 運動の崇高な独立精神と 4.19 義挙及び 5.16 革命の理念を継承し、祖国の平和的統一の歴史的使命に立脚し、自由民主的基本秩序をさらに強固にする新たな民主共和国を建設…
9 号	第 8 次 1980.10.27	3.1 運動の崇高な独立精神を継承し、祖国の平和的統一と民族中興の歴史的使命に立脚した…
10 号	第 9 次 1987.10.29	3.1 運動によって建立された大韓民国臨時政府の法統と不義に抗拒した 4.19 民主理念を継承し…
11 号	第 10 次改正案	3.1 運動によって建立された大韓民国臨時政府の法統と不義に抗拒した 4.19 革命、釜馬民主抗争と 5.18 民主化運動、6.10 抗争の民主理念を継承し…

資料：国家法令情報センター HP

1919年2月8日東京で発せられた独立宣言に次ぐ3月1日の独立宣言と示威運動は、日本の植民地支配に抵抗する全国規模の初の運動であり、意志表示だった。「朝鮮国は独立国であり、朝鮮人は自主民であることを世界に告げ、人類平等の大義を克明し、民族自存の正当なる権利を永遠に有し、こう主張するのは全人類共存同生の権利の正当な発動であり、かつ東洋の平和を重要な一部とする世界の平和、人類の幸福に必要な階梯となさしめるものである」⁷⁾。この主張に対して、どこの誰が異を唱えられるだろうか。この崇高な宣言を体现すべく、独立運動家たちは臨時政府を組織し、1919年上海で大韓民国臨時政府が発足したのである。

ヤン・スンテは「ナショナルアイデンティティは、一旦国家全体が追求する疏明や決心、及びその対象となる価値や理想以外、他の次元では想定し得ないだろう」と述べ、加えて「国民というその構成員が共有する永続的な理想や理念」だと定義している⁸⁾。当然のことながら、今現在の韓国のアイデンティティ＝3.1独立精神と単純に図式化して言うことはできないが、現憲法にあえて記入した意図を推察するならば、「自主独立の精神とその行動」を核にすべきという権力機構の判断と「国民的合意」があったと捉えることができよう。

3. 建国節論争と大韓民国臨時政府

韓国には公に定められた建国記念日がない。なぜなら、いつを建国と見做すかで国論がまとまっていないからだ。3月1日3.1節、8月15日光復節、10月3日開天節などが祝日に指定されていて、これらはいずれも建国日に相当するという主張がある。独立を宣言して運動を展開した日、植民地から解放された日、5千年前に開国した日である。

韓国が今日に至る政府を樹立したのは1948年8月15日、月日は光復節と同じだが、年が違うので安直に8月15日を記念日とするわけにはいかない。同年9月9日には朝鮮民主主義人民共和国が

創建され、以降分断体制の下で話が込み入っている。

2008年、李明博政権は「大韓民国建国60周年記念事業委員会」を設置し、各種記念事業を推進した。これに対して臨政記念事業会など55団体が憲法訴願審判請求書と効力停止仮処分申請を憲法裁判所に提出するなど、反対運動が展開された。こうした世論の動きに李大統領は「ナショナルアイデンティティを毀損する極めて幅広く根深い状況がある」と発言している⁹⁾。続く朴槿惠政権も同様のスタンスを維持し、2016年8月15日の記念行事の祝辞で「今日は第71周年となる光復節であり、建国68周年を迎える歴史的な日です」と述べた¹⁰⁾。これについて文在寅トプロ民主党代表（当時）は「建国68周年は間拔けた主張」と辛辣に批判した¹¹⁾。そしてこの翌年、大統領に就任してからは青瓦台に独立遺功者たちを招待した席で「2年後の2019年は大韓民国建国と臨時政府樹立100周年にあたる意義深い年」で「建国100年を振り返りながらこれからの100年を準備していく」¹²⁾と語った。

これを見ただけで容易に想像がつくであろう。1919年と1948年のどちらが建国年なのかが政争の焦点になっているのである¹³⁾。ことの発端は2006年に李栄薫が寄稿したコラムだと言われている¹⁴⁾。1945年よりも48年を重視するという李は、光復は自力で達成したものでないわけで「真に意味ある光は1948年8月15日の建国の日を訪れた。我々もその日に国民皆が踊って歌える建国節をつくろう」¹⁵⁾と主張した。臨時政府樹立を建国と見るか、独立後に樹立した政府をもって建国とするのか、この見解の違いは正統性論争にも関係してくる。

1948年5月10日、国連韓国臨時委員団の監視のもと総選挙が実施された。しかし、ソビエトが駐留する北側はこの選挙を拒否したため、南側のみで実施され、その結果、南北分断が事実上確定した。片肺飛行となったことを是としない立場からは、分断状況を克服できなかった韓国政府に正統性があると認められないのである。もちろん、南

北分断のみが正統性論争の根拠になっているわけではない。李承晩の政権運営そのものを批判する視点もあるし、後に朴正熙、全斗煥と続く「軍事独裁体制」、それを支持してきた保守陣営を丸ごと否定する立場もある。そうした進歩陣営は大方、大韓民国臨時政府樹立を建国と見做している。ただし、保守陣営にしても臨時政府自体を否定するわけではない。その精神の継承は認めているし、一定の役割を果たしたことについては評価する。憲法前文がその何よりの証であると言ってよい。

では、論点は何であり、対立点はどこにあるのか。内と外の論点が微妙に絡み合って複雑化し、さらに名分と実体をどう評価するのかという点も加わり、見解は分かれる。

まず、1948年8月15日建国節を唱える立場は、国家の体を成したのがこの時点からだ主張する。日本の敗戦によって解放され米ソが進駐して3年、国連による信託統治を拒否して三権のシステムを確立した上で選挙を行い、代表を選出して政府を樹立、そして主権を回復したのがまさにこの日である¹⁶⁾。

その統治権が南側にしか及ばないこと以外は異論を挟む余地がないように見える。しかしながら、韓国の憲法では第3条「領土」で「大韓民国の領土は韓半島とその附属島嶼とする。」と規定しており、「この地域には大韓民国の主権が及ぶのみであり、大韓民国の主権と対立するいかなる主権の政治も法理上認定されないと見なければならぬ。」という判例も示されている¹⁷⁾。つまり、この憲法の規定と判例は、裏返すと領土の半分しか実効支配できないという事実を示していないことになる。

南北共に国連加盟を果たした実状から、北を国家として認めるか否か、これは国内法の規範を再定立するのかどうかという問題に繋がる。言い換えると、もし国家と認めるならば現行法の根拠が何かという問題が生じる。憲法や国家保安法などに照らし合わせると、北朝鮮は、その体制が存続する限り、いつまでも、あくまで「言うことを聞かない身内」になるわけである。

結局、片肺飛行の建国は「統一国家」もしくは国権の再興を前提とする限り、正統性に欠けるといふ批判を免れ得ない。臨時政府の主席を務めた金九も南側の単独政府樹立に最後まで反対していた。また、こうした要素を補うかの如く、政府樹立以降、南北は国際的に己の正統性を示さんがために独自の外交を展開した¹⁸⁾。

一方、大韓民国臨時政府を建国と見做す側は、1948年の政府樹立を否定するわけではないが、それを建国と見做すことについては頑なに拒否する。あくまでも1948年の憲法前文に記されたとおり、「政府は臨時政府を継承し、国家を再建した」と捉えるのである。実際に李承晩は臨時政府の大統領であつたし、独立後のしばらくの間、臨時政府が定めた「大韓民国」という年号も使用していた¹⁹⁾。当時の執権者にしてみれば、すべて繋がっていることであり、特段区別する必要・意味合いを感じなかったのではないかと推察する。

1919年を建国年と見る根拠として、韓詩俊は、臨時政府が「代表機構としての機能」と「独立運動機構としての役割」を果たしたことを挙げる。具体的には国号を決定し、官制を創設、國務院を選出して憲法を制定・公布した。その上、君主主権の歴史に終止符を打ち、国民主権へと民族の歴史の大転換をもたらしたと捉える²⁰⁾。これすなわち滅亡した大韓帝国を継承した国家の再建に他ならないという立場である。

金喜坤は、趙東杰が論じた臨時政府の「存立価値」と「役割価値」を援用し、奪われた国権を取り戻すことを使命として、バラバラに展開されていた独立運動を総体的にまとめ臨時政府を樹立したこと自体に存立価値を認める。次いで役割価値としては、①統治権の有無について、限界はあったが統治の意欲と姿勢が見られ、臨時政府はそれ自体だけで実体のある政府であり、歴史的承継性と主権的正統性が確認でき、②最高指導機関足りえたかという点では、微力であったことを否めなため正統性の一部だけを有し、③臨時政府自ら先々大韓民国に至る道筋を明示できたのかという点では、「臨時」と命名したこと自体が独立するま

での一時的な政府だということであり、「正式」政府を志向したことは自明だと判断できる、と主張する²¹⁾。要するに政府として、国家としては不十分、不完全であることを認めた上で、形式的には建国の条件を満たしていたという考えである。

こうした見解の他に、民族の精神論を加えて臨時政府をより肯定的に評価し、民族意識を鼓舞するような論調は少なくない²²⁾。確固たる活動実態があったとする見方から形式的肯定論まで幅はあるが、いずれにしろ臨時政府が国家足りえたとするのが1919年建国説の立場である。

4. 大韓民国臨時政府の正統性

次に、臨時政府樹立が建国であったとする根拠の正統性について検討する。

金榮秀は1919年4月11日に制定された大韓民国臨時憲章やそれを引き継いだ9月11日施行の大韓民国臨時憲法に正統性を見出している。臨時憲法が3.1運動の「民族的主体性」に依拠しており、民族と国家の自主独立と自由平等を謳い、民主共和国を宣言しているからだ。こうした根本原理を規定した基本精神に基づいて設立された臨時政府は、韓国独立運動の唯一の最高機関として、民族史を断絶することなく、正統意識を繋いだと捉える²³⁾。前述したように存立価値があり、不十分とはいえそれなりの役割を果たした。加えて目指すもの、その理念が正統であるが故に臨時政府の樹立を建国と見做すことができると考えるのである。

今日に繋がる普遍的価値と政体を掲げた臨時政府の理念に異論を挟む余地がないにもかかわらず、批判に晒されるのは、そうした理念を政府が、国家として体現したのかという点である。独立宣言をして憲法を公布して、政府を樹立したとして、領土は、国民は、統治の実態は、主権の有り様はどうだったのか、つまり国家の資格4要件が問われるわけである。

臨時政府は当時最も都合が良いと判断された上

海に置かれた。日本支配下の本国では満足に活動できないからで、当然のことながら、統治対象である国民に向けては、ほぼ何もできなかった。例えば、臨時憲法第2条で定めた「人民の権利と義務」に関して、納税と兵役、教育を受ける義務を課することができなかったし、国民の諸権利を保障することもできなかった。4要件のうち、後の二つは、臨時政府樹立から解放に至るまで、ずっと機能不全だったわけで、張りぼての誹りを免れ得ない。「亡命政府」の性格を有したという向きもあるが、「大韓帝国と時間的連続性がなく、主体勢力も異なり、理念も違うため、亡命政府にはなり得ない」²⁴⁾というのが定説である。

「領土」と「国民」と「政府」は存在する、しかし統治できない。「主権の行使」は主に日本以外の国と国際社会に働きかける外交に限られていた。当事者もその限界を認識していたからこそ「臨時」の政府と銘打ち「政府の存在＝国の存立」であるとの信念を貫いた。それを当の国民がどう受け止めるのかが最も重要なポイントではなからうか。日本の植民地支配を受け入れない民にとっては、支配が及ばず、投票など意思表示ができずとも、自分たちの代表であり、政府なのである。ここに主観と客観が対立・交差する余地が生まれる。

この他にも臨時政府の正統性を揺るがす論点はある。樹立から解放に至るまで、臨時政府内ではヘゲモニー争い、分派・党派対立が引も切らさず、解体論も論議されて離合集散を繰り返した。四半世紀の間に4度も行われた改憲がその証であると言えなくもない²⁵⁾。当初、李承晩の強い要求を受け入れ採用された大統領制は、李の弾劾と免職²⁶⁾の後、國務領を長とする体制に移行、さらに國務會議の議決で意思決定を行う「集団指導体制」を経てから、國務委員会に主席を置く体制に変貌を遂げた。リーダーの権力欲が多分に作用したこともあるが、ソビエト誕生やウィルソン米大統領の「民族自決」主義宣言など、国際情勢の激変が理念やイデオロギーの対立と闘争路線の食い違いに大きく影響を及ぼしたのである。

さらに、李承晩は臨時政府内における対立で、己

の正統性を「漢城臨時政府」に求めた。そもそも1919年9月11日樹立の臨時政府は国内外三つの「臨時政府」を統合したものであった。「上海」と「露領」、そして「漢城」の三「政府」で、「上海」は統合5ヶ月前に創設され、「露領」はロシア領内で活動していた大韓国民議會を指す。通説では、「漢城」は13道の代表が名を連ねた「国民大会」によって決議された「政府」と理解されてきた。明らかになっている「国民大会趣旨書」と臨時政府閣員・評定官・6条からなる約法などを記した「宣布文」には、国名と臨時政府名どちらも記載されておらず、ただ「臨時政府」の語句が記されただけである²⁷⁾。故に通称「漢城政府」は後に「ビラ政府」のレッテルを貼られた²⁸⁾。

金榮秀は、臨時政府統合当時、「その正統性は漢城政府になければならないという主張」が通り、「国民議會が上海臨時政府に吸収され、上海臨時政府が漢城政府に一体化されることによって単一の独立運動推進機構としてその地位が確立された」と論じている。国内で創設された臨時政府に付与された意味合いがどれだけ大きかったのかを物語っている。つまり大韓民国臨時政府の正統性は「漢城政府」と一体になったからこそ認められたということだ²⁹⁾。これはいかに名分が重視されたかという証でもある。

だが、実際には「国民大会」で認めたこの臨時政府が上海臨時政府と一体になったものという説には疑義がある。趙東杰は「漢城政府」は「大朝鮮共和国」だと述べているが³⁰⁾、尹大遠は京城独立団本部が主導した「新韓民国政府」だという³¹⁾。また、大韓民国臨時政府第二代大統領を務めた朴殷植は回想録で、当時、「国民大会」の代表者が上海に來たことに触れつつ、閣員名簿と臨時憲法草案を持ってきたのはソウルの独立本部が派遣した人物であると記している³²⁾。そして尹はさらに述べる。「上海臨政が漢城政府の法統性を継承したというのは通説とは異なり、漢城政府とは何の関わりもなかった。また、李承晩の漢城政府系統論は自ら漢城政府の執政官総裁または大統領を自認しながら、上海臨政と葛藤、対立する過程で、自身

の政治的利害関係を貫徹していく手段として活用されたにすぎない」³³⁾。

1919年当時、国内にいくつもの「臨時政府」が存在した。そしていずれもその実体を国民の目の前に示すことはできなかった。故に「独立を目指す精神」が正統性を有するとは言いようがないのである。それに実体が伴えばより説得力を増すため、時の「実勢」の方便から政治的神話が形成され、「漢城政府」の正統性や「全国の代表者が選出した代表」という言説が脈々と受け継がれて今日に至っていると解釈できる。

5. 独立運動と民族主義

前述したように韓国のナショナルアイデンティティの柱が3.1運動の自主独立精神であるとするならば、3.1運動を展開した人々のアイデンティティは何であったのかを当然問わねばなるまい。日本による韓国併合前後から独立運動に携わった人々は朝鮮王朝の民であり大韓帝国の民であった。王朝の官吏として奉職していた者、開化思想の影響を受けた者、いずれであっても国王（皇帝）に対して畏敬の念を有していた人士が少なかったであろう。国内では甲午改革、乙未改革が推進される中、自主独立と近代化の気運が高まり、加えて、日清戦争、日露戦争が勃発して日本が勝利を収めたため、民族の自意識はいやがうえにも強まった。そして独立運動家たちの意識は時代の移り変わりに応じて、王朝よりも国家、またそれ以前の概念として民族に向いていった³⁴⁾。

金九はこう述べている。「わたしは、孔子、釈迦、イエスの道を学んだことがあり、かれらを聖人として崇拝しはする。だが、たとえかりに、かれらが力を合わせて建設した天国、極楽があったとしても、それが、わが民族が建設した国でないかぎり、わたしは、わが民族を導いてその国に入って行きはしないだろう。血と歴史を同じくする民族というものは、それ自体完全な存在であり、自分のからだを他人のからだと取り替えることができ

ないのと同様に、一つの民族が他の民族になりかわることは、できないことだからである」³⁵⁾。

朴殷植もまた次のように述べている。「わが民族は、檀君の神聖な後裔で、東海の名勝の区域に居住し、人材の産出、文物の制作など、まことに優秀な素質をもち、他民族にはるかにまさっている。わが国は、四千三百年の歴史をもち、その血統、忠義心、道徳のなりたちは深く厚く、宗教、文学は早くからすでにさかんで、文明の余波は日本をうるおし、わが国は先進国の地位にあった」³⁶⁾。

この二人に限らず、独立運動家は皆民族主義者であったと言っても過言ではない。民族主義に目覚めて独立運動に加わった者もいれば、独立運動に加わって民族主義に目覚めた者もいたであろう。その民族主義を基底にして、共通のプラットフォームがあったからこそ、世界的に共和主義が広がりを見せる中、自由主義、民主主義を標榜した李承晩や金九、共産主義を標榜した李東輝や金元鳳、左右の融合に尽力した安昌浩、呂運亨など、不協和音が絶えなかった臨時政府が何とか最後まで体裁を保てたのである。そして朴の言葉にあるように、韓国の民族主義は歴史を遡り、檀君に辿りつくことによって神話を共有し一体感を形成してきた³⁷⁾。

その先導者となったのが申采浩である。20世紀に入り彼をはじめとする歴史家や運動家らによって民族主義は熟考され、広められた。国家存亡の危機に直面する中、民族という語が日本から伝わり³⁸⁾ イズムと化し、抵抗のイデオロギーとして、自己確認の手段として機能するようになる。

1907年6月20日と21日の皇城新聞に「民族主義」というタイトルの論説が掲載された³⁹⁾。それは1. 民族主義の原理、2. 民族主義の変遷、3. 民族主義の国家、4. 民族主義の人物、5. 民族主義の教育という順で構成され、排外独立の精神が第一で、民族は国家の基礎であると論じている。日韓併合前でありながら、亡国の過程を歩む切迫した状況が伝わってくる。

尹海東の言葉を借りれば、「民族主義とは、国民国家の構成員を民族という集団としてひとまとめ

に言説化するためのイデオロギー」である⁴⁰⁾。申采浩はアメリカのモンロー主義を援用しつつ「他民族の干渉を受けない主義」と規定し、民族主義を帝国主義に抵抗する「方法」として語っている⁴¹⁾。ただし、よく考えなければいけないのは民族という語が nation の訳語であり、日本でも韓国でも国家、国民と並べて訳された点である。したがって西洋で使われる nation と nationalism のニュアンスと民族・民族主義のニュアンスが異なりうることに注意が必要である⁴²⁾。そこから生まれる解釈の相違やそれに基づいて定着した考え方に関して、今日に至るまで数多の論争が繰り広げられてきた⁴³⁾。

韓国の場合、朝鮮末期から大韓帝国期にかけて近代化の萌芽があるにはあったが成長しなかった。したがって個の確立にも至らず、国民国家を形成することなく植民地支配された。それゆえ国民という定義が自他共に当てはめにくかったと言うことができよう。そこに民族という語が伝わったのである⁴⁴⁾。今日では、「国民(nation)とはイメージとして心に描かれた想像の政治共同体」であって「ナショナリズムは国民の自意識の覚醒ではない。ナショナリズムは、もともと存在していないところに国民を発明することだ」⁴⁵⁾ という定義や「民族同一性は虚構の産物」⁴⁶⁾ という見解が概ねコンセンサスを得ていると思われる。しかし、植民地統治の過程で、時代的な制約の中、韓国の民族主義は希望の灯火となり、粘り強く培われてきた。

申采浩は社会進化論、発展論、有機体説などに基づいて民族の概念を具体化し、自主的近代化の方向を定立しようとした。歴史の主体としての民族を強調するとともに、歴史研究は民族解放運動の一方便ではなく、歴史は単純に過去のものにあらず、現在の矛盾を批判的に克服し、望ましい未来に向かわせる道標であると認識したのである⁴⁷⁾。

申は1908年に大韓毎日申報で連載した『読史新論』にて「国家の歴史は民族の消長盛衰の状態を叙述するものであり、領土の得失を論じるもので

はない」と前置きした上で、民族の概念を古代史に関連させ、檀君に遡り、夫餘王朝と箕子、東明聖王、そして新羅、百濟、渤海の存亡に至るストーリーを展開した。檀君に関しては高麗時代の13世紀後半、文献に記され、朝鮮時代初期に議論があって当時の儒教的観点で見解がまとめられたとされるが⁴⁸⁾、申は独自の視点でそれを解説し民衆に知らしめたのである。これを起点にして朝鮮・韓民族は檀君の子孫であり、悠久の輝かしい歴史を有する民族だという神話が形成されてきたと捉えられている。

19世紀末に独立協会で活動した愛国啓蒙主義者、民族解放運動を展開した民族主義者、植民地支配下で独立運動に行き詰まったアナキストとしての顔を持つ申采浩の生涯は、まさに韓民族主義の縮図のようにも見える。官吏としての奉職を辞退して啓蒙運動に携わり、上海臨時政府樹立にも加わった。しかしながら、李承晩と激しく対立した上に、創造派と改造派との対立の際、創造派の主導者として上海を離れロシアに拠点を移したが、ロシア政府によって組織は解体されてしまう。袂を分かつた理由は路線の違いであり、それを下支えする理念の、熱情の違いである。自分たちの力不足を認識し実力を蓄えるべきであるという実力養成論や米国、国際社会に期待を寄せる外交論に対して、直接的な独立を最優先としないのは見せかけだけの理想に過ぎないと喝破し、自強論に基づいて武力闘争を主張した。結局のところ朝鮮の独立は自力で成し遂げることができなかったわけで、申がアナキズムに傾倒したのは必然的であったと受け止めることもできよう。そして、独立運動の路線の違いもどれが正しかったのかはある意味空虚な問いとなったのである。

民族主義には右も左もないとされ、「個人における『神経症』と同様、近代発展史の不可避の病理である」⁴⁹⁾とも言われている。陳徳奎、黄秉周は植民地支配下における「運動としての民族主義」を保守右派の啓蒙運動と左派社会主義の民族解放運動に区分し、「民族主義は現実において多様な理念及び思想と結合して現れるようになるが、これは

民族主義が二次的イデオロギーという特徴を有しているためである。つまり、それ自体で民族主義は具体的内容を持ちづらく、他の思想と理念に結合して特定の内容を兼ね備える」⁵⁰⁾と述べている。

韓国の民族主義は、帝国と植民地の関係から産み落とされた日本に対する抵抗のイデオロギーであり、ある意味単純で分かりやすく、容易に受け入れられたし機能も果たした。一方、民族主義は原初的に排他性を内包していて自己肯定的になりやすい。外敵に相对するために内内の結束を図るには効果的であるものの、内部の矛盾を解決する機能は備わっていない。植民地朝鮮にとっては日本を排しない限り独立はなし得ないため、それを唱えるのは当然とはいえ、民族主義そのものは、罷り間違えれば、独善に陥ることも十二分にあり得るのである。

6. 単一民族論と檀君神話

韓国の民族主義を論ずるに際し、避けて通れないのが単一民族論である。民族が「想像する共同体」であるなら単一民族というのも単なる想像でしかない。科学が発達した今日、人類発祥の地がどこで、どのような経路で移動してきたのか解明されつつあり、なおかつ遺伝子解析が行われている中、普通に考えて「純血の民族」など存在し得ないことは容易に考えつくだろう。しかし、単一民族という政治的神話はクレデンダとなり⁵¹⁾、いまだに多くの人々の心理に根付いている。

姜珍雄は、「申采浩は国家を『民族精神から形成された有機体』と捉え、たとえ肉体が失われても精神が生きていれば、その生命力は維持されると主張したりした。民族精神を通じて失われた国家を取り戻そうとしたし、こうした目的論的希願から民族の永続的抽象化と理念の絶対化を追究した。これによって民族精神を鼓舞する歴史づくりが進行し、韓民族は古代から現代に至るまで優秀な単一民族として崇拜される政治的神話がつくられた」と論じている⁵²⁾。ただし、申采浩は単一民

族論を主張してはいない。彼は、韓民族が鮮卑・夫餘・支那・靺鞨・女真・土・蒙古・日本の八族と関わりがあり、このうちその度合いが微かな蒙古と日本を外し、六族のうち夫餘族が他の五族を吸収・統合して血脈、精神ともに東国民族の主体になったと論じた。そして夫餘族は檀君を始祖としているため、我々の民族意識のルーツは檀君に遡らねばならないとした。徹底した歴史考証が十分でないとしながらも、申采浩は諸種族の混合と混血を論じていたのである⁵³⁾。

それでも1920年前後から単一民族論が広がりを見せる。1919年の3.1運動が大きな影響を及ぼしたことは言うまでもない。日本に対する抵抗意識はますます強まり、己の立場を嘆きつつも檀君神話は韓国民の自尊心を支える役割を果たしたと言えるのではないか。「3.1」、「2.8」などの宣言書には「半万年」の歴史と共に「民族」が数多く記されているが、単一民族の記述はない。しかし、同年5月14日、パリ講和会議の議長宛にしたためられた書簡には次のような一文がある。

「韓民族は固有の文明と文化を担う単一民族国家を築いてきており、韓国は極東アジアにて4200年の間、永々と独立国家であり続けた」。「韓民族は固有の言語を所有しており、日本が野蛮国の状態から脱する遥か以前から最も発達した文明を築いた国のなかの一つである」⁵⁴⁾。

また1920年4月6日東亜日報の論説では「民族は各々一つの特徴を有しており単一の実体を構成し、他と混合しない性格を有している。したがって現代国家の基礎を単一民族の上に求めることは団結を堅固にする」と論じている⁵⁵⁾。

さらに李光洙が1933年に書いた「朝鮮民族論」がしばしば引き合いに出されたりする⁵⁶⁾。彼は「朝鮮民族が血統的に、文化的にすこぶる単一な民族だということは、我ら朝鮮人なる者としては誰もがはっきりと意識しており、一点の疑いもないのである」と述べている。ただし、李光洙の場合は1910年の時点で「大皇祖檀君」と「朝鮮民族の歴史四千年」と言葉を並べて「肉身の血統よりも精神の血統がより重要である」と論じていたのであ

る⁵⁷⁾。この「精神の血統」は申采浩とも相通じるものであり、当時の知識人たちの間では、血脈や血統でつながる種族主義的な民族はフィクションであり、故に精神性を強調することの当為性が共感されたのだと思われる。

その一方で、外交文書に「政府見解」として記されていることからして、「単一民族」という語が政治的に用いられたことは疑う余地がなく⁵⁸⁾、新聞報道や影響力のある人士の発言が繰り返され、言説になっていったと考えられる。さりとて、その言説がどれほど民衆に浸透したのかは疑問である。

3.1運動を境に日本の植民地統治は「武断政治」から「文化政治」に転換された。それによって言論活動も以前より制約が少なくなったわけだが、そもそも当時の識字率は低く、情報と知識がどれだけ民衆に伝わったのかを論じるのは難しい⁵⁹⁾。

しかしながら、それが「信仰」に近くなれば話は変わってくる。単一民族論の展開は始祖檀君なくしてはあり得ないわけで、盛んになった檀君の歴史研究をもとに、檀君の古朝鮮建国を民族の出発点と定め、檀君の子孫であることをアイデンティティとし、民族的結束と自主独立及び発展を目指す政治思想と宗教運動への展開は軽んじることができないであろう。それが檀君民族主義として小中華思想と内鮮一体論を克服する民族意識の求心点になったため、朝鮮総督府の抑圧対象にもなった⁶⁰⁾。

A. ゲルナーはこう述べている。ナショナリズムは極めて特殊な種類の愛国主義であり、実際のところ近代世界でしか優勢にならない特定の社会条件の下でのみ普及し支配的となる。ナショナリズムが忠誠心を捧げる単位は文化的に同質的で高文化であろうと努力する文化に基礎付けられている。その特性は同質性、読み書き能力、匿名性が鍵となる。そして集団（民族）は時代を超えて存続し、これらが存続した一つの重大な要因は、人間がこれらの集団に対して感じた忠誠心であり、彼らが集団に一体感を抱いたという事実であった⁶¹⁾。

まさにこの言葉のとおり、韓国では解放後、李承晩政権によって民族主義が強調され、権力基盤の確立と安定のため、単一民族論と檀君神話は「制度化」された。その代表例が教育である。

1949年大晦日に制定された教育法の第1条は次のように記されている。「教育は弘益人間の理念の下に、すべての国民が人格を完成し、自主的生活能力と公民としての資質を具有させ、民主国家発展に奉仕し、人類共栄の理念実現に寄与することを目的とする」⁶²⁾。言うまでもなく弘益人間は「三国遺事」「帝王韻紀」に記された古朝鮮建国に登場する理念で、韓国の政教の最高精神であり、利他主義的倫理観に基づいた現世主義的思考の人本主義的思想である⁶³⁾。これが語られるたび、当然のことながら檀君が思い浮かぶ。するとほぼ自動的に「我ら単一民族は」というフレーズが連想されるように、仕組みがつくられたのである。

李承晩は教育法制定に先立ち、建国まもない1948年10月9日、国民統合の理念として「一民主義」を打ち出した。その「誓い」は「我らは一民である。忠誠を祖国に、愛は民族に、努力は統一に」とされ、綱領は四つ掲げられた。まず、経済においては貧困の打破。次いで、政治においては大多数の民衆の地位向上と上等階級の待遇享受。そして、地域差を打破し大韓国民は皆、一民族であることを表明すること。最後に、男女同等主義を実践し、禍福と安危の責任を三千万が等しく分担する、という内容であった。分断国家となった現状に直面しながら李承晩は民族主義を用いて反共を唱え、国家への忠誠と単一民族としての団結を国民に対して訴えたのである⁶⁴⁾。

こうして解放後、半島の南側においては、「国民」を形成し近代国家の体裁を整えていく過程で、民族主義は解放以前にもまして強調され拡散していく。名目上かつ形式的には民主主義体制下、教育水準を高めるよう注力し、学校教育を通じて、共産主義の脅威から国を守るため、人々の意識は反共民族主義で染められた。こうして植民地支配下で共通のプラットフォームであった民族主義は、主敵である日本が眼前から消え、重石が外されたこ

とによって、目的と対象を変えて時の権力者に都合よく利用されていく。

7. 反共独裁から民主化へ

大韓民国臨時政府の代表であった李承晩が独立後に権力の座に着き12年、自由民主主義を標榜する民族主義者の統治に韓国民は反旗を翻した。その理由を一言で述べれば失政ということになるであろう。では、彼の統治理念はどう評価されるのだろうか。本稿でそれを論じる余裕はないが、憲法に「不義に抗拒した4.19民主理念の継承」が謳われていることからして、李承晩政権の正統性は肯定されているとはいい難い。しかしながら、反共民族主義は継承され、今日に至っても息づいている。

1961年5月16日クーデターの際、軍事革命委員会は六つの公約を掲げた⁶⁵⁾。その第一は「反共を国是の第一義とする」ことで、第三には「退廃した国民の道義と民族の精気を再度正す」とあり、第五には「民族的宿願である国土統一のために共産主義と対決しうる実力の培養に全力を集中する」と表された。要するに、民族の精気を取り戻すには宿願である統一を成し遂げる必要があり、そのために全力で共産主義と対決することを国是と定めたのである。

李政権時にトーンダウンした反日民族主義は⁶⁶⁾、朴正熙政権になってさらに鳴りを潜めた。革命公約第四に掲げた「国家の自主経済再建」を成し遂げるために、遅々として進まなかった日本との国交正常化をクーデター後四年目にして、全国民的反対運動が激しく展開される中、実現にこぎつけた。植民地支配に対する「責任」の所在を曖昧にした日韓基本条約は抵抗的反日民族主義の立場からは到底受け入れられないものだったはずだ。それを朴政権は「実利」の代償として差し出したと言っても過言ではないだろう。朴正熙が批難され続けるのもクーデターと人権を抑圧した維新体制に加えて「親日」のレッテルがつきまとう

からである。

それでも「民族中興の立役者」⁶⁷⁾と評される朴正熙は、経済問題解決のために「屈辱外交」と言われながら対日関係を改善する一方で、民族主体性を強調する文化政策をも推進した⁶⁸⁾。その一例が愛国先烈彫像建立委員会の設立であり、その最たる象徴が世宗路に建てられた李舜臣像である。これは安保意識の高揚と反共及び反日イデオロギーを同時に体现し、政権に対する国民的合意を導き出すために利用された⁶⁹⁾。

政権の奪取からその最期に至るまで、主敵である北に対抗するため反共を掲げて日米と連携、日本からは経済発展の原資を引き出しつつ国内の反日イデオロギーを巧みにコントロールした。そして重化学工業化を推進して高度経済成長を達成し、経済基盤を確立したことが朴政権の正当性となり、「正統性の欠落」を反共民族主義で補いつつ今も韓国保守層の求心力になっている。

1961年から27年間、韓国では民主共和政を掲げながら民主主義が封殺されたが、民族主義は暗黙知化した。反共独裁体制の末期、反共防波堤論を掲げた全斗煥も教科書問題をきっかけに独立記念館建設に取り組み、1987年8月15日開館に至らした。同年の選挙で韓国民は全斗煥が後継指名した盧泰愚を大統領に選出、次いで、1992年には民主化運動の旗手の一人であった金泳三が当選し33年ぶりの文民大統領となった。ただし金は「軍事独裁体制」の主軸たちと手を結んだため、負い目を感じたのかもしれない。任期半ばに朝鮮総督府庁舎の解体撤去を開始するなど民族主義を強調した。光州民主化運動を抑圧したことに対する裁きと共に政権の正統性、レガシーを強く意識したに違いない。

こうして反日民族主義が再び頭をもたげ始めたかに見えたが、金泳三政権末期、「IMF危機」に見舞われ、続く金大中政権では経済対策が最重要課題となった。そうした中、1998年に日韓パートナーシップ宣言が発表され、2002年には日韓W杯が開催されたのである。加えて韓国における日本文化開放、日本では韓流ブームが巻き起こり、日韓関

係は良好に推移していきそうに感じられた。しかしながら、それに水を差すかのごとく独（竹）島問題で、順風に見えた航海は暗礁に乗り上げてしまう。

盧武鉉政権は、大統領就任の翌年に反民族究明法を制定し、植民地支配下における反民族行為の真相究明に乗り出した。さらに独（竹）島問題では日本との「外交戦争も辞さない」という断固とした姿勢を示し、反日民族主義の「復活」を可視化したように受け止められた⁷⁰⁾。

その後、盧武鉉政権のレガシーを否定した李明博大統領は2008年の訪日時、記者会見で次のように発言している。「韓日関係は、遠い過去の歴史を我々は忘れるわけにはいかない。しかし、過去に縛られ未来に向かうことに支障をきたしてはいけない。歴史認識に対する問題は日本が相対することで、我々が未来に向かうのに制約を受けてはならないということを日本も十分理解していると考ええる。…21世紀の未来に向かって韓日が共に歩むことが両国の繁栄のためになり、東北アジア繁栄のためにもなる。東北アジアの平和を維持するためには両国の協力が極めて重要である。…未来の価値を認識し、共に進むわけで、過去が繰り返されるようなことはないし、前に進めると考える」⁷¹⁾。

これから4年後の2012年、退任を半年前にしてレイムダック化した李は、国民感情を抛り所に、独（竹）島に上陸した初の大統領となって、日韓関係を極度に悪化させてしまう。

その半年後、日韓関係がこじれている状況下で大統領に就任した朴槿恵は、3.1節の記念辞で「我々は五千年の輝かしい伝統文化を持っております」と枕詞を述べたあと、日本との関連で次のように述べた。「歴史は自己省察の鏡であり、希望の未来を開く鍵です。韓国と日本、両国間の歴史も同様です。過ぎ去った歴史に対する正直な省察がなされる時、共同繁栄の未来も共に開いて行けるのです。加害者と被害者という歴史的立場は千年の歴史が流れても変わらないことです。日本が我々と同伴者となり、21世紀東アジア時代を共に

導いていくためには歴史を直視し、責任を取る姿勢を持たねばなりません。そうした時こそ両国間にかたい信頼が積み重ねられ、真の和解と協力が可能となります。両国の未来の世代にまで、過去史の重い荷物を背負わせてはいけません。我々の世代の政治指導者たちの決断と勇気が必要とされる時点です」⁷²⁾。

この「千年」という言葉は日本で相当な物議を醸したが、厳しい両国関係に直面しながらも朴槿恵政権は2015年に懸案事項であった慰安婦問題で政府間合意にこぎつける。これで、何とか関係改善に向かうのかと思われたのも束の間、文在寅政権によって合意は白紙化された。

この政府間合意には正式な名称もないのであって、良くも悪くも曖昧な妥協であったことは否めない。韓国では日韓合意が違憲であるとの訴えがあり、大法院はそれを却下したものの、文大統領の言い分は「慰安婦合意を受容できない国民の情緒と現実を認め、韓日が共に努力しましょう」というものだ⁷³⁾。この「国民情緒」が反日民族主義であることは自明である。

8. 反共民族主義の矛盾

ここまで建国論争と民族主義に焦点をあててサーベイしてきた。大韓民国臨時政府とは何であったのか、それを解放後どう引き継いだのか、さらに現代にどう繋がっているのか、一世紀を超える長いスパンの話である。結論の前に民族主義から派生する愛国心について少し触れておきたい。

韓国が独立以降、今日に至る過程で「歴史教育において最も民族主義が強化された時代は朴正熙軍事独裁の時期であった」⁷⁴⁾と言われる。その事例は数多くあるがここでは二点だけ言及する。

まずは1968年、朴正熙大統領は、民族中興を歴史的使命として掲げた国民教育憲章を頒布した。自主独立の姿勢を確立し人類共栄に貢献するため、目指すべき教育の指標を示したのである。公益と秩序、敬愛と信義に根ざした相互扶助など国

民が知るべき基本精神と実践目標を明示し、最後に反共民主精神に透徹した愛国愛族が我らの生きる道で、民族の叡智をもって新たな歴史を創造しようと締め括られている⁷⁵⁾。

この憲章は全ての教科書に掲載され生徒は暗唱が義務付けられた。頒布された日は記念日になり全国に碑も建てられた。それが1994年に記念式行事が中止され、以降、教科書からも削除されて2003年には記念日も廃止された。軍事独裁体制の残滓、国家主義的思想の強制という批判があった上に、日本の教育勅語に酷似していたことへの反発感もあったとされる。

もう一つは、法律で定めている国民儀礼である⁷⁶⁾。元々は植民地支配下で日本から導入され、独立後、その中身が大韓民国の国旗、国歌、英霊に変わって今日に至る。

何らかの行事の際に必ず行われるこの儀礼は、まず、国旗に対する誓いを朗読する。これは1972年から教育現場で実施され、1974年から2007年までは、次のように文言が定められていた。「私は誇り高き太極旗を前に、祖国と民族の無窮の栄光のために身と心を捧げ忠誠を尽くすことを固く決意します」。その後で国歌を斉唱し、最後に英霊らに黙祷を捧げる。南北分断状況であることが、こうした愛国・忠誠を当然視、正当化する根拠になっているのは言うまでもない。愛国の理由、そのあり方はどういうものなのか、それは個人の選択ではなく、国家による「強制」であったわけで、法律が改定され多様化が進んだ21世紀に至っても、根本的に変わってはいない。

こうした国民の意識構造は主に兵役の義務を課すことと教育の力によって確立された。

ムン・ドンソク [2003] によると、2002年に教育人的資源部が発行した「初等学校教師用指導書社会6-1」で、初等学校の歴史科目の学習目標は社会的価値としての「民族アイデンティティ」の確立と「新たな文化創造」、「社会の発展に能動的に参与」を強調しており、教科書の歴史記述は生徒たちに「誇らしい韓国人」としてのアイデンティティを有するよう求めている。そして歴史教科書

記述の特徴は、民族の起源、国家の形成を通した「民族づくり」、民族と国家の継承を一元的に把握する記述、周辺国との関係を侵略と抵抗、支配と被支配という差別と排除で把握、歴史的実体である日本帝国主義をいたずらに超歴史化して象徴と化し、わが民族の自主的民族国家樹立の悪役に仕立て上げていること、以上四つに整理できるという。また、檀君神話にしても半島に人類が登場した時期から考えると歴史がずいぶんと経った後の話であって、古代国家である古朝鮮と関連した建国神話で、民族史の出発点ではない。さらに檀君神話を民族の始祖神話にたてまつる叙述は、夫餘や高句麗、百濟、新羅など、他の国々の建国神話もある中で、多様な神話の中の一つだという認識を妨げることにつながる。と論じている。

つまり、政治的な象徴としての記念日や記念碑が削除、排除されても、肝心な中身は、李承晩、朴正熙と続いた、反共民族主義強化のために用いられたスタイル・システムがそのまま維持されて、韓国民の歴史認識を再生産してきたのである。

国力増強のために国民には一丸となって粉骨碎身、奮起、努力してもらわねばならない。その原動力となるのは忠誠心であり、対象は尊い国と民族である。国あつての国民であることを痛感した韓国民は、民族あつての個人であることをも教訓にしてきたはずである。日本に国を奪われ、独立後は北に攻められ「亡国」の危機に瀕した。国の独立と民族の解放を目指すのに精神的支柱となったのが民族主義イデオロギーであつたとするなら、朝鮮戦争後に支えとなったのもまた民族主義イデオロギーである。ただし、それは抵抗的反日民族主義から反共民族主義へと相対する主敵が変わっている。

しかしながら、北を主敵とすれば「同族対決」になるわけで、民族主義対民族主義の対立・闘争となり、前述したように内部矛盾に陥る。そこで何が正統なのかという点を考えることが必要になる。単純に自由民主主義対社会主義・共産主義で割り切ることも可能ではあるが、基本的に両者の共存は不可能に近い。どちらかがどちらかを打ち

負かす、北が言う「非妥協的闘争」にならざるを得ないのである⁷⁷⁾。それに南は当然の如く「滅共」で対抗してきた。

もし、対決が必然であるなら、何のための民族主義なのか。同じ親から生まれた兄弟が兄弟喧嘩をする際、親から生まれた「正しさ」で優劣を決するのがナンセンスであるように、同じ民族の民族主義対決は、まったくもって無意味で、もはやイデオロギーになり得ないばかりか、突き詰めると同じ民族であること自体が不都合なことになってしまう。

反共民族主義が、民族主義を掲げる同じ民族を滅すために、協力する相手は第一に米国、第二に日本である。日米が同盟関係にあるが故、必然的に「韓米日同盟関係」が形成される。ところが、韓国の民族主義は反日民族主義から始まっているわけで、反共を掲げて色褪せたように見えても、それが払拭されることはけっしてない。分断の原因が直接的には米ソにあるとはいえ、日本の植民地支配が元凶であるため、どのような形であれ分断状況が克服されない限り反日が消えることはないのである。

こうして反共民族主義は反日を内包しているにも関わらず、「民族主義の対決」で本来の主敵と手を結ぶという逆立ちした状況を招き、時の政権はそのことに無頓着であつた。もっとも独裁体制下では、そうした指摘が公論化することはなかった。反政府的論調は封殺され、冷戦体制の硬直したイデオロギー対立の下、柔軟な思考が妨げられていたからである。

21世紀に入り南の大統領が北に行く時代を迎え、「主敵は北」という概念が崩れだした。それと歩調を合わせて、すなわち反共民族主義の後退と共に、対日関係はぎくしゃくし出したのである。

9. おわりに

最後に改めて建国論争を振り返ってみよう。臨時政府建国論と1948年建国論の双方が、3.1運動

の精神が正統であると共に感ずるのであれば、その見解の相違を、多様な見解が並存する多元社会の長所として受け止めればよいという考えがある。[李完範 2009:88]は両者共に一理あるとしながら、「1919 年大韓民国臨時政府の樹立に正統性を見出して、1948 年大韓民国政府樹立に合法性—正当性を見出せば、両者間の葛藤関係も和解できるし、臨時政府の正統性が大韓民国の合法性として継承できるはずだ」と述べる。そして「半年建国論」をも併せて学問的に議論しつつ、建国論争を脱政治化すべきであると説いている。

もっともな妥協点だと思える。ただ、主観と客観の理解の問題をどう克服するかは難題である。臨時政府が「裸の王様」でないことをどう論証するのだろうか。理念と信念のみで国家が成立するのか、国家を「想像の共同体」「民族精神から形成された有機体」として捉えるとしても、リアリズムの観点から批判は免れ得ないだろう。ましてや、これから北との統一過程を考えた場合、どう解き明かしていけばよいのか課題は多い。

臨時政府の正統性の根拠はその「信念」と日本に抵抗した事実、この二点である。当時の感覚と現代から当時を見つめる観点、歴史認識が一致しているとは限らないが、国が失われた状況下、清、ロシアを打ち負かした大日本帝国の抑圧に抗し、まさに命懸けで「政府」を樹立したこと自体が「偉大な独立精神」の表れであることは、南側で議論の余地がない。しかしながらこの抵抗的反日は 1945 年 8 月 15 日に終止符を打つことになる。解放を迎えたことにより、抵抗する必要がなくなったからだ。そうであるにも関わらず、反日は消えることなく脈々と継承されてきた。過去の反日の正統性を引き継いだとしても、解放後のそれは、当時とは全く意味合いが異なることを認識する必要がある。

そして、臨時政府樹立の「信念」に関して見ると、自主独立に向けた準備で臨時と銘打ちつつ形を整え具現化したことについては、当時も今も認識に違いはないであろう。その政府に正統性が付与されるのかに関しては、まず、大韓帝国の系統

を引き継いでいないことからその筋での正統性はなく、臨政樹立が「君主主権に終止符を打ち、国民主権へと民族の歴史の大転換をもたらした」という現代の見方は、現実離れた、誇張した受け止め方である。大韓帝国に終止符を打ったのは日本であり、臨時政府の意志で専制を終わらせていない。国民主権確立は国民の認定・承認・受容・服従などがいずれも得られていない。信念の正統性を担保するために民族主義が打ち出され、血統の正統性は民族の正統性として檀君系譜を利用、理念は自主・独立・民主・共和などに加えて弘益人間の「教義」を援用して正統性 (orthodoxy) を加味した。それでもなおかつ、臨政内での具体的国家像は未統一で、ただ植民地支配を打破するという一点で糾合されていたというのが実態と言えよう。

独立後、北では社会主義国家が創建され、自由民主主義に基づく国家の樹立は全民族の宿願ではなかったことが立証された。それにもかかわらず、南側で認められてきた臨時政府の正統性は保守右派の限定的なそれを超えろには至らず、南に、正味の国民主権に基づく民主主義社会が到来するまで 42 年という歳月を要した。

北は、3.1 運動を、民衆による抵抗的反日民族主義の表出ではあったが、革命的階級と革命的党がリードしなかったために失敗に終わったと断定し、臨時政府は、海外独立運動団体を分裂瓦解させ、愛国同胞から「運動資金」を巻き上げ蕩尽した、ブルジョア民族運動を没落させた「事大売国奴」だと切って捨てている⁷⁸⁾。

一方、唐突にも 1993 年には発掘調査の結果、檀君が実在したことを確認したとし、朝鮮民族の始祖として檀君陵を建設した。南側は考古学的見地からの実証が確認できないため、公式に「正しい」とは認めていない。さりとて、民族の始祖であるという北の主張は当然共有するわけである。北は檀君の子孫であるとしながらも、今は金日成民族であることを公言している⁷⁹⁾。族譜で記されているように氏族の分派はあるが、民族の枝分かれを認める話は朝鮮・韓民族で考えたことすらな

いであろう。

韓国の一般国民は檀君神話を信じてはいる。あくまでも神話として。弘益人間の思想も異を唱える余地がないし、感覚的に民族の同質性をあえて否定する必要があることもまずないだろう。ならば、南北統一を必ずすべきだと考えているのか。近年減少傾向とはいえ、2020年の調査によるとほぼ6割が肯定的な意見を表明している⁸⁰⁾。

では、統一すべき理由は何か。まず、その効果面から考えた一般市民の見解を挙げると、①地域の平和と安定に寄与する、②経済的にプラス効果発揮、③国際社会におけるステータス向上、④離散家族の再会である⁸¹⁾。次いで、統一部統一教育院のテキストには①一つの民族、一つの国家を成し遂げ、生きていくため、②分断の苦痛を取り除き、人道的問題を解決するため、③自由と人権が保障され、全民族の幸せな生活のため、と記され、①に関しては高麗建国以降、ずっと一民族一国家であったためだと補足している⁸²⁾。

以上の理由や効果はもっともなことであり、実現すべきである。ただ、これらはテキストの①を除いて、南北が統一しなくても平和的な環境が整えば、実現可能なことである。

この点でも、「べき論」は客観的な理由というよりも信念と情念の話になっている。これぞまさに臨時時代の信念と情念を継承しているように見えて仕方がない。近代化の過程で植民地となり自力で国民国家を形成できず、解放後は分断国家となって、一つの国民国家ではない二つの「二分の一」国家になってしまった。これは当然のことながら望むところではない故、何をおいても、是が非でも、統一しなければならないという思いに至る。

21世紀現在、多様化が進み、分権化が志向される時代に、あえて統一しなければいけないのは、一度国民国家を形成しないと次の段階に移行できないという理念的帰結と関連しているからではないだろうか。つまり、「国民国家解体」のために国民国家を形成しなければならないという矛盾に近い問題を抱えているかのように捉えられる。

こう考えると、臨時政府の「信念」は今でも息づいていることになるし、それが現実化、達成されない限り、いつまでも歴史に、心のひだに残り続けることになる。よって、まずは南南葛藤が止揚されなければならない。そして紆余曲折を経つつ南北が統一してこそ、積年の「恨」がようやく晴れ、デフォルトになる。日本との真の和解も、そこから再構築されることになるものと思われる。

(2021年10月14日脱稿、2022年2月3日改稿)

注

- 1) 鈴木首相とレーガン米大統領の日米共同声明で、初めて日米の「同盟」という言葉が盛り込まれた。鈴木首相は「同盟」に軍事的意味合いは含まないという見解を示したが、伊東外相は「当然含まれる」と明言した。平成19年5月17日提出、鈴木宗男議員による質問第231号『1981年5月に行われた日米首脳会談をめぐる閣内不統一に関する質問主意書』、〔衆議院〕
- 2) 例えば、「国交正常化以降で『最悪』日韓、出口見えぬ対立の行方」〔朝日新聞〕、「どうなる“最悪”の日韓関係～解決の糸口はあるのか～」〔NHK〕
- 3) 『大韓民国憲法改正案』提出者：大統領文在寅。
- 4) 法統という言葉は本来仏教用語で「仏法の伝統、法門の系統、仏法の流派」等を指す。この他に「比喩的に用いられることもある」〔国語大辞典〕し、辞書によっては「法の系統や伝統」という記述もある〔標準国語大辞典〕。またキム・ソクホは「異端を選り分けるためにつくられた宗教的概念で、その的確な法的・政治的意味は今も学会と法曹界の論議事」と述べている〔朝鮮日報2018〕。〔シン・ヨンヒョン2018:209〕は「大韓民国臨時政府の法統」とは「国民主権主義の原理や民主共和制に立脚した法的正統性」、「臨時政府の立憲主義的・自主独立的・民族自決主義的性格と理念」、「実定憲法秩序上の適法性の継承ではない正当性ないし正統性の継承」など学者によって多様な解釈があることを紹介している。
- 5) 「光復軍金俊燁、最後の任務—憲法前文に『臨時政府法統継承』を入れる」〔ハンギョレ2017〕。金俊燁の進言の背景には、李炫熙らの研究蓄積があり、加えて国会での議決には李鍾賛らの働きかけがなければ発議されなかっただろうと言われている。
- 6) 〔金喜坤2006:154〕は次のように述べている。「法統という言葉は正統に比べて馴染みがない。歴史の叙述においても法統という言葉が使われたケースを探すのは難しい。それは法学においても同様

だ。寡聞であるせいかわからないが、憲法前文に登場する『法統』という用語を正統と比較して分析した法学者はほとんど見当たらない。その概念の違いを学問的に解釈するのに不確実な点があるからだろう。憲法学においては正統性という単語を大抵 *legitimacy* と表現するが、それが法統という用語と同一に使われると見るには難がある。1987年改正憲法の前文に『法統』という言葉が入った過程で、それが正統性の概念とどのような違いをもって使われたのかはわからない。したがって本研究は、法統性が憲法史の次元において、正統性が国家史の次元において使われると捉え、法統と正統という言葉とを厳密に区分して使用しないことにする。また〔金榮鎬 2008: 25〕は、デビッド・ビーザムを援用して「韓国の民主化と権力の正統性問題を考えるならば、『法的正統性』と『政治的正統性』に分けることができる」と論じている。なお、大韓民国臨時政府の記録文書には「法統」がしばしば用いられているが、〔尹大遠 2009:123〕は1922年12月23日付『独立新聞』に掲載された「国民代表会議の目標」を取り上げ、臨時政府の「法統問題」が批判的に論じられているものの、「法統」が具体的に何を意味しているのか露わになっていないと述べている。そして、本稿では基本的に正統性を *legitimacy* として用い、教義・教説の意味合いで *orthodoxy* も排除しない。概念をめぐる議論はあるが、正当性は *justification*、社会的妥当性の意味合いとして用いる。また、政治的正統性においては血統（君主の由来など）、服従の動機や主観（信念）と客観（社会的価値やシステム）の二面性を念頭に置いている。〔政治学辞典〕、〔湯本 2020〕

- 7) 宣言書の抜粋。なお、独立宣言書は民族代表 33 人が名を連ね、3月1日にソウルで朗読されたものだけではない。幾多の宣言書、要望書、檄文が国内外で発布、提出された。〔姜徳相 1967:41〕。
- 8) 〔ヤン 2010:194,199〕
- 9) 「MB アイデンティティ発言は『国政揺さぶる左派』警告?」〔中央日報 2008〕
- 10) 「朴槿恵『今日は光復節、そして建国 68 周年』」〔ブレシアン 2016〕
- 11) 「文在寅『建国 68 周年』は間拔けた主張」〔韓国日報 2016〕
- 12) 「『2019 年は大韓民国建国 100 周年』…文大統領、建国節論争一蹴」〔中央日報 2017〕
- 13) 〔ヤン 2020:42〕は建国をめぐる南南葛藤について次のように述べている。「歴史意識で国民的合意が存在しない国家において、政治派閥間の対立が、単純に政策的葛藤にとどまらず、国家が志向すべき根本的な目標に関わることですら極限的な対立に

至るのは必然である。そして、政治派閥間でそのような対立が存在する時、政党政治が破行的になることまた必然である」。

- 14) 「保守政党だけが『建国節騒ぎ』…国民・メディア・学会『もう消耗戦は終わりにしよう!』」〔京郷新聞 2018〕
- 15) 「我々も建国節をつくろう」〔東亜日報 2006〕
- 16) 〔梁東安 2013:25〕は、モンテビデオ条約の基準を引合いに出し、大韓民国という国家の国家構成要素具備は1945年8月15日から始まるのであって、建国とは国家構成の必須要素を完全に備えた政治的結社の出現を意味することであるため、大韓民国建国は国家構成の必須要素を完全に備えた1948年8月15日に達成されたという点に議論の余地はない、と断言している。
- 17) 1961.9.28 大法 4292 行上 48、〔小法典 :1〕
- 18) 1948年12月の国連総会決議第195号(Ⅲ)や第三世界、非同盟諸国に対する外交について次の文献、資料を参照。木宮正史〔2016〕、「政府樹立と国連」及び「南北対決外交と国連」〔国家記録院〕
- 19) 年号の沿革「'48.08.15 ~ '48.09.24: 大韓民国(1919年元年として使用)」、「'48.09.25 ~ '61.12.31: 檀君紀元(年号に関する法律制定、1948年を檀紀4281年として使用)」、「'62.01.01 ~ 現在: 西暦起源(年号に関する法律改正)」〔行政安全部〕
- 20) 〔韓詩俊 2013〕「大韓民国の歴史、いつから見るべきか」
- 21) 〔金喜坤 2006:153-173〕。〔趙東杰 2007:157〕は後に存立価値を発生価値と置き換え次のように述べている。「3.1運動により誕生した臨時政府の発生価値は誰も否定できない。しかし、発生価値を忠実に遂行したかという役割価値については人によって評価を異にし得る。ただ、その存在自体が韓国独立運動の特徴を規定する表象とみて良いだろう」。
- 22) 一例を挙げると「臨時政府が示した多様な軍事活動と抗日武装闘争のための努力は、今日必ず継承しなければならない我が国軍の精神的伝統と言える。上述したように臨時政府の民族史的正統性は臨時政府の組織的側面と位相面によく現れていると言える」。〔劉準基 2009:13〕。劉はまた、臨時政府が1941年12月10日に「対日宣戦布告」したことを取り上げ、連合軍との軍事作戦等々、独立運動戦線の拡大と統一を高く評価すべきだと述べている。〔同 :7〕
- 23) 〔金榮秀 1995:66, 78〕。近年に至っても金や前述の臨政建国論者たちと同様の見解は示されている。「大韓民国臨時政府は、3.1運動で表明された民族史的念願を基盤に韓国最初の『民国』を標榜して樹立された独立運動の総指導機関であった。民族

代表機構であると同時に独立運動を指導・統括していく独立運動の最高中枢機構だったわけで、それが、大韓民国臨時政府が民族的正当性・正統性を確保している根拠に該当するのである」。「オ・イルファン 2019:214」。大韓民国臨時憲法本文は「国家法令情報センター」を参照

- 24) [韓国民族文化大百科事典:大韓民国臨時政府]。一方で次のような見解もある。「大韓民国臨時政府は大韓帝国とは異なり民主共和制を追求するが、大韓帝国が追求し挫折した主権国家建設運動を引き継ぎ、以後展開される多様な新国家建設運動の法制的・歴史的基盤となったことに留意する必要がある」。「金泰雄 2020:74」
- 25) 1919年9月11日に臨時憲章を改定して制定された臨時憲法は、1925年4月7日、1927年3月5日、1940年10月9日、1944年4月22日に改正されている。
- 26) 李承晩の臨時政府大統領在任期間は1919年9月から1925年3月であるが、李が上海に滞在したのは1920年12月から翌年5月までの約6ヶ月間であった。「韓国民族文化大百科事典:李承晩」、[李仁秀 1988:35]
- 27) [姜徳相 1966:453-455]
- 28) 「漢城政府」をピラ政府と規定するならば、これに限らず当時国内で設立された「政府」は総じてピラ政府となる。
- 29) [金栄秀 1995:56, 67]
- 30) [趙東杰 2007:152-153]
- 31) [尹大遠 2009:106]
- 32) [朴殷植 1972:131,208]。朴によれば1918年10月に独立運動本部がソウルで生まれ、キリスト教と天道教の指導者たちと協議し、挙国一致の活動を準備した。そして孫秉熙を公選して指導者にした。己未独立宣言後、「朝鮮民国元年」4月10日付けの「朝鮮民国臨時政府組織布告文」と33条からなる「朝鮮民国臨時政府創立章程」が1919年4月9日京城で発見された。それには政府代表の朝鮮民国正都領孫秉熙と副都領兼内閣総務卿李承晩の連名で政府各部務の人事が都領府令として記されていた。これが国内で生まれた「臨時政府」の中で最も体裁が整っていたものである。また、4月17日には「新韓民国政府宣言書」が鉄山、宣川、義州地方で発見された。執政官李東輝、(國務)総理李承晩他9人の名が記されていた。そして23日には13道代表者が名を連ねた「国民大会趣旨書」と「宣布文」を発見。この宣布文には臨時政府閣員と評定官、6条からなる約法が記された。ここでは李承晩が執政官総裁で李東輝は國務総理、年号は「朝鮮建国」を記していて日にちは空欄のままである。そしてこの文書いづれにも国名が書かれてい

ない。[姜徳相 1996:400, 449-455]。こうした一連の流れを見ると、独立宣言直後に孫秉熙らが投降して逮捕拘禁されたため、当初の計画に支障をきたし試行錯誤を繰り返したことは想像に難くない。そして、朝鮮民国臨時政府案に勝る記録がないことから、これが臨時政府の根元になったものと考えられる。

- 33) [尹大遠 2009:130-131]
- 34) 1925年4月7日に改正されるまで臨時憲法には「旧皇室の優待」条項があった。また、大韓帝国期に立憲君主制の主張は封殺されたが、その滅亡後に登場した「臨時政府」は皆一様に民主共和を掲げ、近代市民社会を志向した。
- 35) [金九 1973:321]
- 36) [朴殷植 1972:4]
- 37) [韓洪九 2003:76] はこう述べている。「国が危機に直面したとき、檀君を掲げて民族の求心点としたのは、大韓帝国時代から日帝時代初期にかけての進歩的な民族主義者たちの知恵でした」。
- 38) 日本語の辞書に民族が初めて掲載されたのは明治40年(1907年)で、活字体としては明治0年代(1868年-1876年)にわずかながら使用が確認でき、30年代(1897年-)から増加している。明治期においては国民と民族の明確な区分がまだ定着しておらず、用いる際に混同しているケースもよく見受けられるという。[齊藤美野 2015:120,132]
- 39) [国立中央図書館デジタルアーカイブ]
- 40) [尹海東 2017:152]
- 41) [大韓毎日申報 1907]
- 42) [木村自 2013:128] によれば、「東アジア的語彙としての『民族』は、19世紀末に『ネイション(nation)』の訳語として日本で創造された。ところが『ネイション』概念が意味するものと『民族』概念が意味する範囲とはおそらく大幅に異なる。加えて、日本で創造された『民族』は、中国語に、朝鮮語に、ベトナム語に導入され、それぞれの言語政治的な文脈のもとで、歴史的に意味形成するようになった。そのため、同じ漢字語の『民族』を用いていても、その意味するところは必ずしも同じではない。まずは翻訳上のずれとして、次に語義の言語政治的なずれとして、『民族』は記号論的な問題系のもとにおかれることになった」。また、当時の国際情勢を鑑みながら、[小野容照 2021:81-197] はウィルソン米大統領らが唱えた「self-determination」が「民族自決」と訳されて報じられた経緯と、それが日米中露と本国で活動していた独立運動家の間で、受け止め方が異なっていたであろうことを詳しく論じている。
- 43) 民族、国民、ネイション、ナショナルイズム、ナショナルアイデンティティをめぐっては原初論・根源

論と近代論、主観論と客観論、一般論と特殊・例外論、西洋と非西洋、市民と種族など二分法的対立軸で論じられ、道具主義、構成主義、文化主義など多くの論点が示されてきた。近年、韓国では民族主義を克服すべき対象として脱民族主義を唱える声も多くなってきたが、南北分断状況が続く中、それに批判的な、抵抗感を表明する意見も未だ根強い。

- 44) 創刊直後の1920年4月6日東亜日報に掲載された論説では次のように論じている。「朝鮮の民族運動と言われるが、これは国家学的概念である『国民』の運動を意味することではなく、歴史学的或いは人類学的概念である『民族』の運動を意味する」。『世界改造の劈頭に向き合い民族運動を論ぜよ(三)』
- 45) [B. アンダーソン 2007:24]。また、[A. ゲルナー 2000:1] によれば「ナショナリズムとは、第一義的には、政治的な単位と民族的な単位が一致しなければならないと主張する一つの政治的原理である」し、[A.D. スミス (1999):320-322] は「人間集団の自治・団結・アイデンティティの形成と維持のためのイデオロギー的な運動」と規定し「ネーションとナショナリズムはまた、何世代もの時間の経過の過程で結合し、形成以前よりもずっと存在し続けている伝統と遺産の産物である」と論じている。なお、(nation) は筆者が挿入。
- 46) [小坂井敏晶 2011:5]
- 47) [尹海東 2017:229-274]、[解説・自主的近代化と民族解放の正論直筆][ハ・サンイル 2017:163-170]
- 48) [韓国民族文化大百科事典: 読史新論]
- 49) [B. アンダーソン 2007:23]
- 50) [韓国民族文化大百科事典: 民族主義]
- 51) 知性に対して権威の継続性に同意することを迫るような理由を内包しているもの「信条体系」のこと。決して合理的である必要も科学的である必要もない。[C.E メリアム 1973:164-175]
- 52) この文脈は誤解を与えそうだが、[姜珍雄 2019:7] 自身は、申采浩が単一民族を論じたとは言っていない。読史新論以降、民族概念の神話化と政治化が単一民族イデオロギーを形成し、政治の場では権力の手段、学問の場では信念の手段に変化したと論じている。
- 53) [カン・チャンドン 2010:6]、[朴賛勝 2009a:2]
- 54) 『パリ平和会議議長に送った書簡』(1919年5月14日韓国代表団の文書)[韓国史データベース]
- 55) 『世界改造の劈頭に向き合い民族運動を論ぜよ(三)』[東亜日報 1920]
- 56) [カン・チャンドン 2010:13]、[朴賛勝 2009a:2]
- 57) 「大皇祖檀君が無窮花世界に初めて国家を建てたとき、その時の国名は何であったか。朝鮮ではな
- いか…(中略)…朝鮮民族という名は永劫、無窮に変わらない。…(中略)…朝鮮の人である青年とは、朝鮮で生まれ育ち白い服を着た若者だからと皆『朝鮮の人である青年』とは限らない。日本人でもそれはなし得るし、友邦人であってもなし得るのである…(中略)…大皇祖から大きな抱負を授かり、それを成就する者にのみ『朝鮮の人である青年』という貴重な呼び名が相応しいのである。肉身の血統よりも精神の血統がより重要であることを知るべし!。『朝鮮人である青年に』(1910年6月・少年三年六巻所蔵)[李光洙 1962:484-485]
- 58) 臨時政府の議事録にも単一民族発言が残されている。1925年5月25日改憲委員会第13次会議における申榮三の発言「混合制を主張する。素昂先生案には反対する。我々は単一民族であるからして分区する必要はない。混合制を行うからといって政府の基礎が揺らぐことは決してない。」(改憲委員会議事録)。他にも1928年5月14日付で官憲が押収して処理した南満青年総同盟の宣言には「朝鮮独立万歳!」「単一民族党完成万歳!」と記されている。[韓国史データベース]
- 59) イ・ヨンソンはパク・ヨンギュの研究を引用して「1930年に文盲率は77%程度であり、失業率も73%に達していたため、当時、一般人の低い賃金水準では新聞を購入することは困難であった」と記している。[わが歴史ネット]。1935年に総督府が発行した『昭和五年朝鮮国勢調査報告全鮮編第一巻結果票』によると、確かに朝鮮在住日本人の識字率が79.6%であったのに対して、朝鮮人の識字率は22.3%であった。それを年齢別に分けて見ると、最も高い群は20～24歳男で55.7%、女の場合、最も高い群が15～19歳の16.5%であった。[国会図書館デジタルコレクション]
- 60) [韓国民族文化大百科事典: 檀君民族主義][鄭榮薫 1995:1-116]
- 61) [A. ゲルナー 2000:229-230] (民族) は筆者が挿入。
- 62) 教育法の代わりとして1997年に制定されて今日に至る教育基本法でも、第2条(教育理念)に「弘益人間の理念の下に人格を陶冶すること」と記されている。
- 63) [韓国民族文化大百科事典: 弘益人間]
- 64) 『一民主義の体系表』(ピラ)、一民主義普及総本部発行[韓国の知識コンテンツ]。なお、イ・ジェソク、ノ・ヨンギによれば、「一民主義は同じ血統と運命という民族の共通の基盤の上に理論的な枠組みを有している。この理念で提示された社会像は単一民族で統一された自由民主主義社会像である。また、そのような社会は一つの民の集合体としての統合を阻害する障害がない理想的な社会でもある」。特にそのブレンであった安浩相は「一

民主主義を新羅の花郎主義と繋げて資本主義と共産主義を批判した」。そして現実的には、反共イデオロギーとして機能したものの、統治においては機能を果たすことができず、包括的な理念に止まったという。[韓国民族文化大百科事典：一民主義]

- 65) 軍事革命委員会革命公約6箇条。第一に、反共を国是の第一義とし、これまで形式的で掛け声倒れに終わった反共体制を再整備し、強化する。第二に、国連憲章を遵守し、国際協約を忠実に履行し、米国をはじめとする自由友邦との紐帯をさらに強固なものとする。第三に、この国の社会のあらゆる腐敗と旧悪を一掃し、退廃した国民の道義と民族の精気を再度正すために清新の気風を奮い立たせる。第四に、絶望と飢餓線上に喘ぐ民生苦を早急に解決し、国家の自主経済再建に総力を傾注する。第五に、民族的宿願である国土統一のために共産主義と対決しうる実力の培養に全力を集中する。第六に、(軍人) このような我々の課業が成就されれば、斬新かつ良心的な政治家たちにいつでも政権を委譲し、我々本然の任務に復帰する準備を整える。(民間) このような我々の課業を早期に成就し、新たな民主共和国の屈強な土台をつくるため、我々は身と心を捧げ、最善の努力を傾注する。[わが歴史ネット]
- 66) 社会通念になっている一例を挙げると「親日残滓勢力の精算や、分断克服などの課題に対する臨時政府の核心となる政策もまた、大韓民国においては継承されませんでした」。[韓 2003:51]。一方、李承晩の擁護者は次のように述べている。国を滅した張本人たちはすでに死亡しており、多くの国民が日帝下で彼らに協力して生計を建てた事実があることから、親日派の是非は下手をすると国民間で感情の対立を激化させ、新たな分裂をもたらしかねなかったため、この問題の解決には民族的な叡智が求められていたのである。[李仁秀 1988:57-58]
- 67) 2017 年にも次のような書籍が出版されている。朴正熙『民族中興の道』キバラン
- 68) 1971 年に出版された著書で朴正熙が記した檀君民族主義の文言をいくつか挙げる。「韓国は、民族国家としての基盤を築いた歴史的な観点から見ると、祖国のない流浪民族または部族国家だったものが、今世紀にはじめて初めて国家の統一を成就した新生国家と根本的に異なるのである。韓国が本格的に国家の形態をととのえたのは、実に四千余年前のことだからである。」「一つの王朝が別の王朝に変わったことはあったが、一つの統一民族国家としての命脈は綿々と維持されてきた。」「自主と民主、統一と平和に象徴されるわが民族精神を掘り下げてみると、われわれの建国理念である

弘益人間の精神と、統一新羅の精神的支柱であった花郎道精神にその淵源を見出すことができる。『弘益人間』は民族の始祖だと信じられている檀君の建国理念を一言で表現したものであり、その根本精神は『人類社会を広くたすける』という意味である。[朴正熙 1973:33, 38] 花郎道精神に関しては彼が陸軍軍人であったこと、一民主義の影響があったことが関連しているものと推察する。

- 69) [チヨ・ウニ 2009:256]
- 70) 正式名称は「日帝強占下親日反民族行為真相究明に関する特別法」2004 年 3 月制定。独(竹)島問題争点化の発端は、島根県が 2005 年に「竹島の日を定める条例」を制定したことによる。また、「外交戦争も辞さない」という強い表現とは裏腹に国民に向けたメッセージはソフトなものであった。その骨子は次のとおりである。「日本国民の多くは一部の国粋主義者と彼らに支えられている政権勢力とは考えを異にしているので、日本国民全体と敵対したり、不信を抱いたりしてはいけない。国民間で不信と憎悪の感情が芽生えれば、とてつもない不幸を招くことになるので、冷静に落ち着いて対応することを望む。そして、日本には、帝国主義侵略史の暗い過去から果敢に抜け出し、21 世紀東北アジアの平和と繁栄、そして世界平和に向けた決断を期待する」。[盧武鉉史料館]
- 71) [ハンギョレ 2008]
- 72) [駐日本大韓民国大使館]
- 73) 2017 年 5 月 11 日に日韓首脳電話会談で文在寅大統領が安倍首相に話したという。[中央日報 2017.5]
- 74) [ムン・ドンソク 2003:91]
- 75) [大韓民国歴史博物館]
- 76) 国民儀礼規定(2017 年施行) 第 4 条(国民儀礼の手順及び施行方法) ②国民儀礼の正式手順は次の各号の順序と方法で施行する。<改定 2016.12.30>
1. 国旗に対する敬礼(国旗に対する敬礼曲と共に国旗に対する誓いの言葉)。
 2. 愛国歌斉唱。
 3. 殉国先烈と護国英霊に対する黙祷。敬礼の際に唱える文言は 2017 年以降次のように修正された。「私は誇り高き太極旗を前に、自由で正義に溢れた大韓民国の無窮の栄光のために忠誠を尽くすことを固く決意します」。
- 77) 北朝鮮は、公式には 1993 年 4 月 6 日に金日成が「祖国統一のための全民族団結 10 大綱領」を発表し、民族愛と民族自主精神に基づき、互いを尊重し団結すべきであると述べている。なお、現在この綱領は「古典的労作」とされている。[朝鮮の今日]
- 78) [朝鮮全史 1980:224] [歴史辞典 1971:79] [近代朝

鮮歴史 1984:430]

79) [朝鮮の今日]

80) KBS による 2020 年のアンケート調査結果は「統一しない方が良い」という答えが 16.2%、「相当期間共存状態を維持」が 24.3%、「大きな負担がなければ統一した方が良い」は 44.2%、「必ず統一すべき」が 15.4% であった。肯定的な意見がほぼ 6 割で、前年、前々年と比較して減少傾向を示しているが、過半数を超える国民が基本的に同意していることになる。大統領選挙での得票率が 5 割を下回ることを考えれば決して少ない割合ではない。[2020 年国民統一意識調査]

81) [DAILY NK 2012]

82) [チョン・ソクホン 2006:14-17]

参考文献

日本語

- ・小野容照 (2021)『韓国「建国」の起源を探る - 三・一独立運動とナショナリズムの変遷 -』慶應義塾大学出版社
- ・姜徳相編 (1966)『現代史資料 25- 朝鮮 1』みすず書房
- ・姜徳相編 (1967)『現代史資料 26- 朝鮮 2』みすず書房
- ・木宮正史 (2016)「1970 年代第三世界をめぐる南北外交競争と韓国外交」現代韓国朝鮮学会『現代韓国朝鮮研究』第 16 号、pp1-13
- ・木村自 (2013)「民族を使いこなす - 『脱政治化』論と『民族』の政治論的展開について -」大阪大学中国文化フォーラム編『現代中国に対する 13 の問い』pp127-147
- ・金九 (1973) 著、梶村秀樹訳『白凡逸志』東洋文庫 234、平凡社
- ・金泰雄 (2020) 著、崔誠姫訳「解放後韓国人識者層の 3.1 運動認識の変遷と多様な模索」『朝鮮史研究会論文集』No.58、朝鮮史研究会、pp59-84
- ・金栄鎬 (2008)『日韓関係と韓国の対日行動』彩流社
- ・小坂井敏晶 (2011)『補説 民族という虚構』筑摩書房
- ・齊藤美野 (2015)「翻訳語『国民』『民族』の普及の様相: 明治期の非翻訳テキスト (辞書・雑誌記事) の分析」『通訳翻訳研究』15 (0)、日本通訳翻訳学会、pp127-145
- ・朴正熙 (1973) 著、金定漢訳『民族の底力』サンケイ新聞社出版局
- ・朴殷植 (1972) 著、姜徳相訳『朝鮮独立運動の血史 1』東洋文庫 214、平凡社
- ・韓洪九 (2003) 著、高崎宗司監訳『韓洪九の韓国現代史』平凡社
- ・湯本和寛 (2020)「政治的正統性 (正当性) 概念の再

検討」『法學研究』Vol93、No.12、慶應義塾大学法學研究会、pp207-232

- ・尹海東 (2017) 著、沈熙燦・原佑介訳『植民地がつくった近代』三元社
- ・A.D. スミス (1999) 著、栗山靖司、高城和義他訳『ネイションとエスニシティ - 歴史社会学的考察 -』名古屋大学出版会
- ・A. ゲルナー (2000) 著、加藤節監訳『民族とナショナリズム』岩波書店
- ・B. アンダーソン (2007) 著、白石隆、白石さや訳『定本 創造の共同体 ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山
- ・C.E. メリアム (1973) 著、斎藤真他訳『政治権力 (上)』東京大学出版会
- ・『現代政治学辞典』おうふう、1994 年
- ・国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/>
『昭和五年朝鮮国勢調査報告全鮮編第一巻結果票』
- ・衆議院ホームページ (HP)
https://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_shitsumon.nsf/html/shitsumon/a166231.htm
- ・NHK クローズアップ現代、2019 年 8 月 27 日
- ・駐日本大韓民国大使館 「第 94 周年 3.1 節記念辞」
<https://overseas.mofa.go.kr/jp-ko/index.do>
- ・朝日新聞 2019 年 7 月 31 日

韓国語

- ・姜珍雄 (2019)「韓国民族主義研究の争点と課題」『民族研究』73 号、韓国民族研究院、pp4-25
- ・カン・チャンドン (2010)「単一民族史観の社会史的形勢と多文化教育の方向探索」『教育社会学研究』vol.20.no4、韓国教育社会学会、pp1-25
- ・金栄秀 (1995)「大韓民国臨時政府憲法とその正統性」『憲法学研究』第 1 巻、第 1 号、韓国憲法学会、pp55-79
- ・金喜坤 (2006)「大韓民国臨時政府と大韓民国の正統性」『韓国史学史学報 13』韓国史学史学会、pp153-173
- ・リ・ジョンヒョン (1984)『近代朝鮮歴史』社会科学出版社
- ・ムン・ドンソク (2003)「初等歴史教科書に表れている民族主義に対する批判と考察」『社会科教育』第 42 巻 1 号、韓国社会科教育学会、pp87-108
- ・朴賛勝 (2009a)「脱植民、解放と『民族』『民族主義』談論」『民族共同体の現実と展望 - 分断、ディアスポラ、アイデンティティの社会史 -』ソウル大学統一平和研究院
- ・朴賛勝 (2009b)「韓国民族主義と種族的民族主義の解釈、中起旭『韓国民族主義の系譜と政治』」『歴史と現実』(72)、韓国歴史研究会、pp339-349

- ・シン・ヨンヒョン (2018)「大韓民国憲法の正統性」『立法学研究』第15集1号、韓国立法学会、pp207-234
- ・チョ・ウニ (2009)「南北韓正統性づくり、歴史と比較」『統一と平和』1巻1号、ソウル大学統一平和研究院、pp243-284
- ・チョン・ソクホン (2006)『主題がある統一講座 15 わかりやすく書いた統一のはなし』統一部 統一教育院
- ・鄭榮薫 (1995)「檀君と近代韓国民族運動」『韓国の政治と経済第8集-檀君と近代韓国民族運動』韓国精神文化研究院、pp1-116
- ・梁東安 (2013)「大韓民国の起源」『現代史広場』第2号、大韓民国歴史博物館、pp22-33
- ・ヤン・スンテ (2010)『大韓民国とは何か—国家正統性問題に対する政治哲学的省察—』梨花女子大学出版社
- ・ヤン・スンテ (2020)『大韓民国 何が危機なのか』哲学と現実社
- ・オ・イルファン (2019)「大韓民国臨時政府の統合とその政治的意義」『統一戦略』19 (1)、韓国統一戦略学会、pp187-225
- ・劉準基 (2009)「大韓民国臨時政府の歴史的正当性とその意義」『韓国民族運動史研究』61、韓国民族運動史学会、pp5-19
- ・尹大遠 (2009)「臨時政府法統論の歴史的淵源と意味」『歴史教育』110、歴史教育研究会、pp103-135
- ・李光洙 (1962)『李光洙全集』第一巻、三中堂
- ・李完範 (2009)「建国起点論争:1919年説と1948年説の両立」『現状と認識』33 (4)、韓国人文社会科学会、pp71-90
- ・李仁秀 (1988)『大韓民国の建国』チョップル
- ・趙東杰 (2007)『韓国独立運動の理念と方略』韓国独立運動編纂委員会 独立記念館 韓国独立運動史研究所
- ・ハ・サンイル (2017) 編集『申采浩随筆選集』知識を作る知識
- ・ハン・ギョンス、ハン・ゴンス (2007)「多文化社会概念と韓国社会多文化談話に対する省察」『韓国社会学会 社会学大会論文集』韓国社会学会、pp20-36
- ・韓詩俊 (2013)「大韓民国の歴史、いつから見るべきか」『現代史広場』第2号、大韓民国歴史博物館、pp34-51
- ・ホ・ドンヒョン (2009)「韓国近代における単一民族神話の歴史的形成過程」『東北亜歴史論叢』23、東北亜歴史財団、pp7-35
- ・『朝鮮全史15』社会科学院 歴史研究所 1980年
- ・『小法典』1996年版、玄岩社
- ・『国語大辞典』第3版修正版第2刷、民衆書林、2000年
- ・『標準国語大辞典』国立国語院、1999年
- ・『歴史辞典II』社会学出版社、1971年
- ・『2020年国民統一意識調査』KBS 南北交流協力団
- ・国家記録院 HP <https://theme.archives.go.kr/>
「政府樹立と国連」「南北対決外交と国連」
- ・国家法令情報センター HP「憲法」
<https://www.law.go.kr/>
- ・国立中央図書館デジタルアーカイブ
https://nl.go.kr/newspaper/oldnews_age.do
- ・国史編纂委員会『韓国史データベース』
<http://db.history.go.kr/>
『わが歴史ネット』 <http://contents.history.go.kr/>
「日帝強占領期の言論と広告」「5.16軍事政変時革命公約」
- ・盧武鉉史料館 <http://archives.knowhow.or.kr/>
- ・大韓民国歴史博物館「国民教育憲章」
<http://www.much.go.kr/L/0SUrcV5YOU.do>
- ・『韓国民族文化大百科事典』韓国学中央研究院
<http://encykorea.aks.ac.kr/>
[大韓民国臨時政府][李承晩][民族主義][弘益人間][読史新論][檀君民族主義][一民主義]
- ・韓国の知識コンテンツ <https://www.krpia.co.kr/>
- ・行政安全部 HP
<https://www.mois.go.kr/chd/sub/a05/markLang/screen.do>
- ・自治分権委員会 HP『大韓民国憲法改正案』
<https://www.pcad.go.kr/>
- ・京郷新聞 2018年9月3日
<https://m.khan.co.kr/politics/politics-general/article/201809032239005>
- ・大韓毎日申報 1907年5月28日
- ・DAILY NK 2012年12月26日
<https://www.dailynk.com/>
(読者投稿)「南北韓が統一しなければいけない六つの理由」
- ・東亜日報 1920年4月1日、4月6日(韓国史データベース)
2006年7月31日
<https://www.donga.com/news/Society/article/all/20060731/8335196/1>
2016年12月19日
<https://www.donga.com/news/Culture/article/all/20161219/81922321/1>
- ・朝鮮の今日「我が社会主義祖国は金日成祖国であり、わが民族は金日成民族である」
<https://dprktoday.com/news/51653>
- ・朝鮮日報 2018年7月16日「歴史的正当性では1919年、民主的正当性では1948年建国『あらためて見る1948年大韓民国出帆』」
https://www.chosun.com/site/data/html_dir/2018/07/16/2018071600161.html

- ・ 中央日報 2008 年 12 月 14 日
<https://www.joongang.co.kr/article/3432276#home>
 2017 年 5 月 12 日
<https://www.joongang.co.kr/article/21565276#home>
 2017 年 8 月 14 日
<https://www.joongang.co.kr/article/21843624#home>
- ・ プレシアン 2016 年 8 月 15 日
<https://www.pressian.com/pages/articles/140069>
- ・ ハンギョレ 2008 年 4 月 1 日
<https://www.hani.co.kr/arti/politics/diplomacy/283158.html>
 2017 年 8 月 5 日
https://www.hani.co.kr/arti/politics/politics_general/805621.html#csidx8b1f6f4e870131ca4d4fa7a34b89a79
- ・ 韓国日報 2016 年 8 月 15 日
<http://www.hankookilbo.com/News/Read/201608152092506559>

日本の「韓国学」、人文・社会科学分野の研究と教育の動向

—国際高麗学会日本支部と関西地域の大学を中心に—

裴光雄（大阪教育大学教授、国際高麗学会本部事務総長）

I. はじめに

日本において韓国および北朝鮮研究を行う学会は、日本学術会議等¹⁾が運営するデータベース「学会名鑑」<https://gakkai.jst.go.jp/gakkai/>で「韓国」「朝鮮」という語を入力し検索すれば、朝鮮学会と現代韓国朝鮮学会の2つの学会がヒットする。朝鮮学会は日本の奈良県にある天理大学文学部朝鮮文学朝鮮語学科を拠点とする言語（朝鮮語）を主として、民俗、文化、歴史等を研究する学会で、1950年に設立された最も古い学会である。現代韓国朝鮮学会 Association for Contemporary Korean Studies in Japan、略称 ACKJ は、最初の南北首脳会談が開催された年の2000年11月に設立された。

日本学術会議には学会登録していないが、日本において韓国および北朝鮮研究を「コリア学」と称し、活発に独自の研究活動を行っている研究組織、学会として、国際高麗学会日本支部（以下、日本支部）がある。日本支部は全国的な研究組織の学会であるが、理事や学会員の多くは関西地域（西日本）にある大学の研究者が中心である。一方、現代韓国朝鮮学会も全国的な研究組織の学会であるが、理事や学会員の多くは関東（東日本）にある大学の研究者が中心である。

本稿の目的は2つある。本報告では、韓国学中央研究院による「日本の関西における韓国学の研究動向について報告してほしい」という要望を受け、したがって日本支部の研究活動を紹介する。こ

のことが本報告の目的の一つである。その際、日本支部の研究活動の意義をより鮮明化し、分かりやすく紹介するために、現代韓国朝鮮学会の研究活動と対比しながら述べることにしたい。なお、朝鮮学会は人文科学中心で社会科学研究をそれ程網羅していないこと、筆者は同学会に所属しておらず、殆ど知らないことから、本報告では取り上げない。

本報告の目的のもう一つは、これも韓国学中央研究院から「日本の関西における韓国学の教育動向について報告してほしい」という要望があったので、このことに関しても報告者の知見の限りで論じることにしたい。

報告者は今回の報告主題の専門家ではない。また、この原稿を執筆している現時点では報告者はソウルに滞在中で、インターネット以外の資料、本や紙ベースの論文等を参考にできない。よって、本報告の原稿内容が報告者の独断と経験および感性に基づいたものにならざるを得ず、そのことで学術的な深さはかなり不足していることを予めお断りしておきたい。

II. 日本支部の「コリア学」研究活動の意義

1. 日本支部の概要

日本支部は、国際高麗学会 International Society for Korean Studies、略称 ISKS が世界に有する7つの支部、支会等の一つである²⁾。国際高麗学会の HP :

<https://www.isks.org/> によれば、1990年8月5日、日本の大阪国際交流センターで開催された「第3回朝鮮学国際学術討論会」閉会式に続いて「国際高麗学会創立会議」が開かれ、この席に日本、中国、アメリカ、ヨーロッパなど各国の学者、研究者が集まり、参加者の同意を得て、本学会本部の創立が宣言されたと記されている。日本支部は国際高麗学会本部の創立とほぼ同時期に設立された。事務局は本部と同様、大阪にある。会員数は約200名。傘下に人文・社会科学研究部会、科学技術研究部会がある。両部会は毎年、3カ月に1度程度の頻度で研究会を催している。2019年2月の時点で、人文・社会科学研究部会は93回、科学技術研究部会は73回を数える。これらの研究会の内容に関しては、当初は『日本支部通信』によって会員への連絡事項、情報提供とともに掲載していた³⁾。2013年より学会誌『コリアン・スタディーズ』が

年1度に発刊されている。

2. 学術大会シンポジウムの特徴ー現代韓国朝鮮学会との対比からー

表1は日本支部が毎年開催してきた学術大会シンポジウムの一覧である。これまで25回実施されている。シンポジウムの主題を①南北関係及び米朝等の国際情勢、②韓国の政治、経済、社会等、③北朝鮮の政治、経済、社会等、④日韓・日朝関係および歴史問題、⑤在日コリアン関連の5つに分類すれば、①は3回、②は7回、③は0回、④は7回、⑤は8回である。表2に見られるように、現代韓国朝鮮学会の場合は、①は5回、②は12回、③は4回、④は8回、⑤は0回、⑥は4回である。

日本支部の学術大会シンポジウムの特徴は、第1に、在日コリアン関連の研究が盛んに取り上げられていることである。カテゴリー分類では日本

表1 国際高麗学会日本支部 学術大会シンポジウム 主題 一覧

第1回	『解放・分断の50年』95.10.10 …④
第2回	『現代韓国の政治と経済』96.11.10 …②
第3回	『南北朝鮮の新体制と経済政策』98.11.15 …①
第4回	『朝鮮と日本の近代100年』99.11.21 …④
第5回	『在日コリアンの現状と未来』00.11.19 …⑤
第6回	『在日コリアンフォーラムー在日コリアンと公共性』02.11.23 …⑤
第7回	『グローバリゼーションと韓国社会』03.11.30 …②
第8回	『在日コリアンの民族教育』04.11.28 …⑤
第9回	『インターネット時代のメディアと市民参与』05.11.20 …②
第10回	『どうなる日韓関係：韓流と嫌韓流、二つの潮流を読む』06.5.20 …④
第11回	『在日コリアン研究の現状と課題』07.5.20 …⑤
第12回	『韓国における政権交代と南北関係の行方』08.5.25 …②
第13回	『世界同時不況化の韓国社会ー彷徨う企業と若者たち』09.6.6 …②
第14回	『韓国併合』100年と日韓・日朝関係』10.6.13 …④
第15回	『在日コリアンをめぐる今日的課題』11.6.5 …⑤
第16回	『揺れる朝鮮半島ー金正恩体制と韓国大統領選挙の行方』12.5.27 …①
第17回	『朴槿恵新政権の誕生と日韓関係の行方』13.6.1 …②
第18回	『ヘイト・スピーチ、排外主義の台頭と在日コリアン』14.6.8 …⑤
第19回	『新たな米中関係下の日韓関係の在り方について考える』15.6.6 …④
第20回	『日本の新安保法制と東アジアの安全保障』16.6.4 …①
第21回	『躍動する韓国市民社会と日韓関係ー文在寅新政権の行方』17.6.3 …②
第22回	『朝鮮半島の民俗芸能と在日コリアン』18.6.10 …⑤
第23回	『3・1独立運動の多元的可能性』19.6.8 …④
第24回	『“韓国併合”110年ー日本による植民地支配の比較研究：戸籍制度から見る人的管理制度を中心に』20.10.31 …④
第25回	『女が書く、女を書くー文学の中の在日朝鮮人女性』21.6.30 …⑤

※丸数字①から⑤は、①南北関係及び米朝等の国際情勢、②韓国の政治、経済、社会等、③北朝鮮の政治、経済、社会等、④日韓・日朝関係および歴史問題、⑤在日コリアン関連という分類を示している。どちらにも当てはまるような場合、より相応しいと考える方を選択した。

出所) 国際高麗学会 HP <https://www.isks.org/office/japan.html> より作成。

支部は最も多い8回であるが、現代韓国朝鮮学会は最も少ない0回である⁴⁾。日本支部は在日コリアン研究の拠点であると言っても過言ではない。第18回『ヘイト・スピーチ、排外主義の台頭と在日コリアン』、第22回『朝鮮半島の民俗芸能と在日コリアン』、第25回『女が書く、女を書く一文

学の中の在日朝鮮人女性』は、企画の独自性、解明・解決を要する社会的・時代的要請等、とりわけ日本支部の学術大会シンポジウムの「最高傑作」と称することができる。

第2に、北朝鮮を単独では取り上げていないことである。日本支部は0回であるが、現代韓国朝

表2 現代韓国朝鮮学会 研究大会シンポジウム等 主題 一覧

第1回	『首脳会談後の朝鮮半島—和平方から共存へ』00.11.18 …①
第2回	『IMF 経済危機とその後の韓国の変容』01.11.17 …②
第3回	『日韓自由貿易協定が拓く未来 —東アジア経済連携のイニシアティブ』02.11.8 …② 『韓国学の可能性』02.11.9 …⑥
第4回	『朝鮮半島：危機の構造』03.11.15 …① 『韓国における社会改革運動』03.11.16 …②
第5回	『日韓関係の100年』04.11.13 …④ 『三金政治の総決算』04.11.14 …②
第6回	『日韓関係を問い直す』05.11.12 …④ 『北朝鮮研究とソ連・東欧資料』05.11.13 …③
第7回	『朝鮮半島問題とマスメディア』06.11.18 …① 『韓流現象をどうとらえるべきか』06.11.19 …④
第8回	『大統領選挙と韓国政治』07.11.10 …② 『韓国新政権の戦略的課題—一次の5年間』07.11.11 …②
第9回	『国境を越える地域連携—福岡と釜山の試み』08.11.15 …② 『南北関係60年』08.11.16 …①
第10回	『李明博・鳩山政権と日韓関係の展望』09.11.14 …④
第11回	『朝鮮半島と中国』10.11.14 …②
第12回	『朝鮮半島研究をどうするか：ディシプリンとの関係の中で』 11.11.19 …⑥ 『朝鮮半島研究をどうするか：地域研究としての朝鮮半島研究』 11.11.20 …⑥
第13回	『社会科学としての朝鮮半島研究—地域研究の新しい挑戦課題と方法論』 12.11.10 …⑥ 『新指導者の朝鮮半島—李明博政権の総括と大統領選挙後の展望—』 12.11.11 …②
第14回	『歴史問題解決へ向けて—請求権をめぐる実証研究と国際政治』 13.11.30 …④ 『「脱北者」問題の現在』13.12.1 …③
第15回	『市民運動と日韓・日朝関係』14.11.8 …④ 『日本海をまたぐ日韓・日朝関係』14.11.9 …④
第16回	『東アジアの未来—日中韓協力から考える』15.11.7 …① 『社会運動から考える現代韓国社会』15.11.8 …②
第17回	『韓国民主主義再考・・・その思想と行動』16.11.26 …③ 『高齢化する韓国社会—その帰結と課題』16.11.27 …②
第18回	『北朝鮮文化研究の最前線』17.10.21 …③ 『韓国の若年層を取り巻く雇用環境と派生する社会の諸問題』 17.10.22…②
第19回	『歴史認識問題の政治学』19.11.9 …④
第20回	オンライン大会、自由論題のみ。シンポジウム・共通論題はない。

※同学会は、シンポジウム、パネルディスカッション、共通論題などの名前で、大会によって、1回ないし2回行っている。

※丸数字①から⑤は、①南北関係及び米朝等の国際情勢、②韓国の政治、経済、社会等、③北朝鮮の政治、経済、社会等、④日韓・日朝関係および歴史問題、⑤在日コリアン関連、⑥その他（地域研究としての模索等）という分類を示している。どちらにも当てはまるような場合、より相応しいと考える方を選択した。

出所) 現代韓国朝鮮学会 HP <http://www.ackj.org/> より作成

鮮学会は4回取り上げている。現代韓国朝鮮学会は、「朝鮮半島の地域研究」として社会的運動とは距離を置いた客観的な学術研究を志向しており、会員にとって朝鮮半島はあくまでも研究対象に過ぎない。一方、日本支部が志向する「コリア学」は朝鮮半島を単なる地域としてとらえるのではなく、南北分断の「痛み」を治癒し、克服していこうとする学問的熱情を内に秘めている⁵⁾。このことが、むしろ北朝鮮研究の困難さを考える場合、逆説的に「純粋な」客観的研究が難しいことを真摯に受け止め、北朝鮮を単独のシンポジウムの主題として設定していない理由となっている。

第3に、韓国の政治、経済、社会等と並んで、日韓・日朝関係および歴史問題が多く取り上げられていることである。主題名は現代韓国朝鮮学会とほぼ類似している。しかし、3.1 独立運動をシンポジウムの主題として取り上げているのは、日本支部の独自性であり、新進気鋭の研究者を招聘して実施され、発表者の中には朝鮮大学校の研究者である康成銀教授も含まれている。3.1 独立運動を日本、韓国の視点のみならず、北朝鮮の政府・研究者の視点からどのように捉えているのか、を論じている⁶⁾。このようなシンポジウムを開催できるのは、日本支部が国際的に国内的に幅広い「コリア学」研究者のネットワークを有していることを物語っている。

3. 特別講演会から見られる日本支部の研究活動の特徴

学術大会のシンポジウムと自由論題発表、人文科学研究部会と科学研究部会による研究発表を通じた研究活動以外に、特別講演会を随時開催している。表3はその一覧である。特別講演会では日本のコリア学研究者だけでなく、本部の役員、本部および日本支部会員の国際的なネットワークを通じて、韓国、米国、中国の著名な研究者を招聘している。会員の自著の書評会も行われている。

Ⅲ. 関西の大学における「韓国学」関連の教育状況

1. 大手4私立大学の場合

関西の大手私立大学である同志社大学、関西学院大学、関西大学、立命館大学では、「韓国学」関連の授業がどのように行われているか、考察する。方法はネット公開されているシラバス検索で「韓国」を入力し、表れた授業名をチェックすることにした。

同志社大学では、157件がヒットした。「韓国学」に該当する講義科目は、『朝鮮半島の社会と文化』『朝鮮半島の政治と経済』『日朝関係史論』『朝鮮文献研究』『コリア文学（韓国近現代短編小説を読む）』『コリア語で読む地域文化研究』などがある⁷⁾。これらの講義科目以外には、「アジア」「東アジア」という言葉が付く講義名の授業で、アジアないし東アジアの国々の中の1国として、事例的に取り上げられ、大半が1から2回という極めて限られた僅かな時間数で学ぶ授業がある。幾つか紹介すれば、『国際関係特殊講義』の中で「日韓関係の歴史と将来（1）（2）」として2回講義、『現代政治特殊講義（アジアの政治と経済）』の中で「韓国：脱格差政治の失敗？」として1回講義、『アジア教育文化論特講』の中で「韓国（1）—高等教育制度」等、3回講義、『アジア経済』の中で「開発独裁から民主化へ：韓国と台湾の事例研究」など全講義15回中半数ほど、などがある。

関西学院大学では114件がヒットした。しかし、殆どは韓国語の授業である。「韓国学」に該当する講義科目は、『韓国の政治と外交』のみである。『東アジアの政治B』『平和研究』という講義では恐らく全授業のうち1回から2回、韓国が取り上げられているのではないと思われる⁸⁾。

関西大学では34件ヒットした。「韓国学」に該当する講義科目は、『韓国現代文化論』『現代法特殊講義（韓国法概論）』『プロフェッショナル・リーディング（韓国語で学ぶ文化と社会）』などがある。講義名に韓国という用語は付いていないが、『北東

表3 国際高麗学会日本支部 特別講演会 一覧

1994年	11月4日	韓国から見た南北経済交流 韓義泳（ソウル大学名誉教授・福井県立大学教授）
1995年	5月12日	編集者としてかかわってきた韓国・朝鮮 松本昌次（影書房編集長）
	12月18日	コリアン女性と人権 姜光錫（ニュージャージー州立工科大学教授）
1997年	12月13日	Korea学はどうあるべきか 高泰保（国際高麗学会科学技術部会委員長、OIC 研究所所長）
1998年	4月18日	祖国統一と在外朝鮮人の役割に関する一考察 呉清達（国際高麗学会常任顧問・大阪経済法科大学教授）
1999年	2月27日	客員教授として3ヶ月湖南大学校（光州）に滞在して 張年錫（大阪経済法科大学客員教授）
	5月12日	ポスト冷戦時代におけるロシアの北東アジアの政策 アレクサンダー・ボロンツォフ （韓国外語大学校客員教授、ロシア科学アカデミー東アジア研究所）
2000年	3月6日	私の研究活動について 張 敏（大阪経済法科大学）
2001年	5月18日	東北アジアの経済協力の現状と課題 柳鐘一（KDI/韓国開発研究院）
	12月21日	北朝鮮の改革・開放は可能か 崔応九（本学会常任顧問）
2002年	3月10日	四・三事件における史実と創作 －中村福治著『金石範と「火山島」－をめぐって－ 丁海亀（聖公会大学）
2003年	2月18日	ノムヒョン時代の幕開けと南北関係の展望 朴明林（韓国 延世大学校国際学大学院）
2004年	2月7日	日本軍性奴隷問題に対する認識の差異を超えて 姜貞淑（一橋大学外国人客員研究院）
	5月29日	ハーゲン・クー著「韓国の労働者－階級形成における文化と政治－」（御茶の水書房、2004年3月）によせて 報告者：瀧澤秀樹（大阪産業大学）、高龍秀（甲南大学） 討論者：金元重
2005年	6月30日	韓国の姓名 金鎮宇（米国・イリノイ大学）
2006年	12月9日	映画「ディア・ピョンヤン」を語る 梁英姫（映像作家）
2007年	10月20日	北朝鮮の核問題と東北アジアの多角的安全メカニズムの建設 趙銀亮（中国・上海復旦大学）
2008年	12月20日	相互依存の韓日関係 永野慎一郎（大東文化大学）
2009年	12月19日	絡み合う2つのこと—40 数年を振り返って 田中宏（一橋大学）
2011年	6月18日	韓国における経済教育課程と経済教科書の開発 金景模（韓国慶尚大学校師範大学）
2014年	3月16日	滝沢秀樹教授 退職記念講演会 私のコリア研究の足跡—現代史、文学、そして大衆歌謡まで— 滝沢秀樹（大阪商業大学）
2016年	11月19日	文京洙教授 退職記念講演会 『新・韓国現代史』をめぐって 文京洙（立命館大学）
2018年	11月16日	朝鮮半島における秩序変革の今後 －政治の時代から経済の時代へ－ 三村 光弘（環日本海経済研究所 調査研究部主任研究員） コメンテータ：文京洙（立命館大学）

出所）国際高麗学会 HP <https://www.isks.org/office/japan.html>

アジア経済論』は(1)が韓国経済、(2)が北朝鮮経済を全面的に取り扱っている。

立命館大学では、298件がヒットした。「韓国学」に該当する講義科目は、『現代韓国研究』『韓国イニシエーション実習』『朝鮮語で読み解く世界と経済』『東アジアと朝鮮半島』『現代朝鮮言語文化特殊問題』『朝鮮語で議論する社会事象』などがある。

同志社大学と立命館大学で「韓国学」に該当する講義科目が比較的多いのは、同志社大学ではグローバル地域文化学部アジア・太平洋コースを有しており、韓国研究者が居ること、立命館大学では全国に先駆けたコリア研究センターがあり、韓国研究者が集まっていることなど、人材面が充実しているからであろう。

2. 関西の教育大学の場合

まず、京都教育大学で同じように「韓国」をキーワード入力し、シラバス検索をすれば、1件のみヒットした。講義科目名は『異文化理解研修(韓国)』であった。シラバスの「授業の概要」では、「本学の交流協定校である韓国・春川教育大学校の学生との交流を通して、文化的・社会的理解を相互に深めることを目的とする。本科目では、本学学生が春川教育大学校の学生とオンラインで定期的に交流し、教育的課題について自ら立案し、議論を行う」としている。

奈良教育大学では、キーワード検索機能が無くできないため、講義科目一覧で全ての講義科目名をチェックした。講義科目数は955であった。結果、語学韓国語の授業を除けば、韓国に関する講義科目はなかった。『人権と教育』『教師のための多様性理解』『国際理解教育演習』『異文化理解研究』『国際理解地域研究』でも韓国やマイノリティの在日コリアンに言及したシラバス上の記述はない。

兵庫教育大学では、「韓国」を入力しフリーワード検索を行った。講義科目名に韓国が付いた授業はなかった。4件がヒットした。『政治学特講』では「日清戦争と韓国併合」の1回授業、『外国史演習』では、「日清・日露戦争の時代、韓国併合から

第二次世界大戦へ」の1回授業、『グローバルスタディーズ』『韓国の教育事情』の1回授業を行っているようである。最後の一つは『韓国語コミュニケーション』であり、事実上、語学韓国語の授業である。

大阪教育大学では、語学韓国語以外でヒットしたのは、3件であった。『音楽教育学』では「韓国の音楽科カリキュラムと授業実践」の1回授業、『アジア理解教育』では「韓国の社会と文化」と「多文化共生教育と在日コリアン」の2回の授業、『国際教育比較実践交流』では「世界の国語教科書：ロシア、イギリス、韓国、アメリカ」の中で韓国も取り上げられている。授業回数は分からない。

IV. おわりに

関西地域での「韓国学」の研究においては、国際高麗学会日本支部の研究活動を事例として紹介し、考察した。韓国学中央研究院が言う「韓国学」のなかに、在日コリアンが入っているのか、どうか知らない。だが、国際高麗学会が言う「コリア学」には在日コリアンが重要なカテゴリーの一つとして捉えられている。上述したように、日本支部は日本における在日コリアン研究の最重要拠点であり、これまで輝かしい数多くの業績を積み上げてきた。その象徴が『在日コリアン辞典』明石書店、2010年11月の出版であり、韓国においても青巖大学校在日コリアン研究所によって、ソニンから翻訳出版されている。本稿では紙幅や報告時間の制限もあり、学術大会シンポジウムと特別講演会の紹介と考察に留まっており、学術大会自由論題発表、人文社会科学研究部会での研究発表、そして何よりも学会誌『コリアン・スタディーズ』掲載の研究論文等に関する紹介・考察ができなかった。これらについてはまた報告する機会があればと思う。

また、関西地域での「韓国学」の教育に関しては、まず大手私立4大学を考察した。尹東柱の碑

石がある同志社大学と平和と民主主義を理念とする立命館大学では、ある一定の「韓国学」に関するカリキュラムがあり、見るべき講義科目がある。関西学院大学と関西大学では「韓国学」に該当する講義科目が乏しい感が歪めない。教育大学では「韓国学」に関する講義科目は殆どないといえる。日本の将来の教師が「韓国学」、すなわち隣国韓国のことを授業で殆ど学ばず、理解する機会が余らないのが現状である。「未来志向の日韓関係」を築くためにも「韓国学」の普及が望まれる。

最後に、韓国学中央研究院が「韓国学」の発展に尽くしてきたように、国際高麗学会は「コリア学」の発展に尽くしてきたことを申し上げたい。本部現会長の宋南先は『日本支部通信』第17号に「よりコリア学的なものへ」という巻頭言を寄稿している (<https://www.isks.org/office/japan/paper/tuushin/tuushin017.html>)。コリア学に関する最も学術的な考察がなされている文章である。筆者は現会長が言う「コリア学というものは、一つの領域というよりは、一つの志向」という思考に共感する。内容に関しては、是非本文を参考にされたい。

注

- 1) その他は、日本学術協力財団、科学技術振興機構である。
- 2) 日本支部以外に、ソウル支会、平壤支部、北米支部、欧州支部、アジア分会、オセアニア支部がある。全世界の会員は1,000名を超えている。
- 3) 1993年10月に創刊号が発刊され、2012年11月の第30号まで継続し、学会誌の発行を契機にその役割を終えた。
- 4) 現代韓国朝鮮学会においても自由論題報告では在日コリアン研究の発表が行われている。

- 5) 高泰保（国際高麗学会科学技術部会委員長、OIC研究所所長、当時）は、『日本支部通信』第6号で「Korea学」を考える、という巻頭言を記している。一部を引用し、紹介する。「Korea学」は、「朝鮮学」あるいは「韓国学」と言い換えることもできる。にもかかわらず、あえて「Korea学」としているのは、朝鮮半島の分断という現実を考慮した結果であり、国際高麗学会の設立理念によるものと考えている。「Korea学」の学問的特徴の一つは、それが学際的な学問、総合的な学問である。「Korea学」の学問的特徴の他の一つは、その未来学的な性格にある。「Korea学」においては今日の問題だけでなく、「未来学」的研究も重要な要素となる。すなわち、グローバルな視点から朝鮮の文化を検証し、民族の統一問題を視野にいれながら、文化発展の方向性を明らかにしていく研究が期待される。

<https://www.isks.org/office/japan/paper/tuushin/tuushin006.html>

- 6) このシンポジウムで発表された論文は、日本支部の学会誌『コリアン・スタディーズ』第8号、2020年6月に、論考で特集として掲載されている。外村大「特集に寄せて」、康成銀「朝鮮民主主義人民共和国における3.1運動史研究について」、水野直樹「三一運動期の植民地権力と朝鮮民衆—地域における「対峙」の様相を考える—」、裴始美「解放直後における在日朝鮮人の3.1運動記念日闘争—8.15解放記念日との比較検討」、飯倉江里衣「龍井3・13独立運動における朝・漢両民族関係を考える」。
- 7) 講義名を正確に記せば、「○○○I」「○○○1」のように、ローマ数字やアラビア数字が付いている場合があるが、ここではその数字は削除した。
- 8) 同志社大学の場合、講義科目名だけでなく、シラパスの内容まで、したがって15回の授業内容まで対外公開している。関西大学と立命館大学も同様。しかし、関西学院大学の場合、講義科目名と授業担当者名しか分からない。

キルチャビ

許南麒と七冊の日本語詩集

任正嫻

許南麒は在日朝鮮人を代表する詩人として知られている。数多くの詩を残したが、なかでも長編叙事詩『火縄銃のうた』は名作として、日本の詩壇でも高く評価されている。

1918年に慶尚南道亀浦に生まれた許南麒は、21歳の時に日本に渡り、日大芸術学部に進学、その後日本中央大学法学部を卒業、解放後は在日朝鮮人連盟の活動に従事しながら詩作に励んだ。1949～1967年まで日本語による詩集を七冊出版しているが、ここではそれらを紹介しながら所感を述べてみたい。それによって、詩人・許南麒の活動の一端が明らかになり、より多くの人が関心を持つ契機となれば幸いである。

詩集と初版本

本の初版は出版部数が少なめで、改訂版が出た場合に希少価値が高くなる。また、装丁や帯も内容を意識したものであるが、帯は時間が経てばなくなることも多い。ゆえに、帯が付いた初版本を集める愛好家も少なくない。

筆者は初版本に特別なこだわりはないが、例外は詩集である。有名な詩人ともなれば、すべての作品が網羅された全詩集が出版されることがあり、それを読めば済むかもしれない。しかし、詩集の場合、初版本の「まえがき」や「あとがき」には作者の心情が込められ、装丁も当然それを反映する。ゆえに、それらすべてが一つの作品と思う

からである。

もっとも、そのような思い出があるのは二人だけで、一人は戦前にプロレタリア詩人として活躍した小熊秀雄、もう一人が許南麒である。学生時代に『火縄銃のうた』によって許南麒の詩に触れ、その後、1960年に朝鮮文化社から出版された許南麒編訳『現代朝鮮詩選』によって朝鮮の詩に親しんだ。この本の装丁は許南麒自身が手掛けており、装丁に興味をもったのもこの本によってである。



在りし日の許南麒

1979年に同成社から5冊の詩集をもとに『許南麒の詩』が出版され（以下、同成社版）、さらに2006年には勉強出版から＜在日＞文学全集の第二巻として『許南麒』が出版された（以下、全集版）。同成社版に2冊の詩集を加えたもので、これが全詩集に近い。同成社版の「あとがき」で許南麒は次のように書いている。

わたくしは、主に 1945 年の秋から、1960 年頃まで、朝鮮語による詩作とともに、日本語の詩作も並行してやってきた。わたくしのつもりでは、日本語の詩は、朝鮮のおかれていた位置と境遇とを、なるべく多くの日本人にわかってもらうためのものであった。だから、朝鮮語の詩の場合もそうであるが、日本語の詩の場合、詩そのもののいわゆる〈芸術性〉なるものを度外視した作品の方が多い。それでは、詩でも何でもなかろうと言うかもしれないが、わたくしの場合は、朝鮮が現在でくわしている状況の方が、より大事であった。

許南麒にとって詩作は芸術の追求ではなく、在日朝鮮人運動における活動家としての使命を果す手段であったのだろう。では、その間に出版された詩集はどのような状況下で、どのようにして生まれたのか、七冊の初版本を出版順に辿ってみよう。

最初の詩集『朝鮮冬物語』

許南麒の最初の詩集は 1949 年に朝日書房から出版された『朝鮮冬物語』である。題名からハイネの『ドイツ冬物語』を連想させるが、この長い詩はバリーに亡命していたハイネが 1843 年の秋、故国ドイツに帰った時の感慨を歌いあげたものである。それに対し『朝鮮冬物語』は、異国の地にある作者が故郷への思いを詩にしたものである。

「傷だらけの詩に與える歌」をはじめ望郷詩集、釜山詩集、慶州詩集、大邱詩集、木浦詩集、光州詩集、扶余詩集、ソウル詩集、春窮詩集、動物詩集、十月詩集の全 13 章からなる。釜山からソウルまでを順に辿りながらの詩集が一つの特徴といえるが、プロローグともいえる「傷だらけの詩に與える歌」の最後は次のように終わっている。

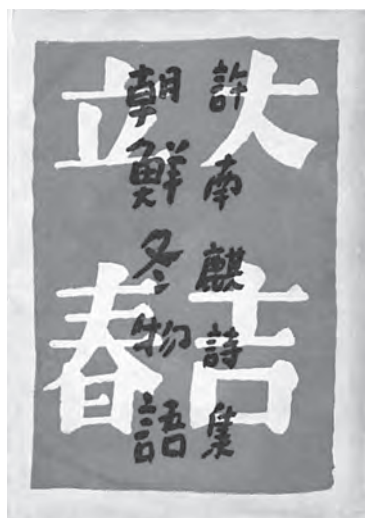
お前たち、／貧しい俺の 同志たち、／いまこそ 起き上がれ、／いまこそ 肩を組み、／

夜明け前の街に出よう、／俺たち、傷つけられた者、／俺たち、しいたげられた者の／時がくるのだ。／いまこそ 鎖をならして それを告げよ、／いまこそ、／いまこそ それを歌え。

何かに立ち向かう決意のようなものを感じるが、「あとがき」で許南麒は次のように書いている。

わたくしは永らくしゃべり疲れた。餘にも多くのものを語り過ぎたような気がする。しかし、もうこれ以上、わたくしが語らなくてもいい時が来たようだ。あきらかにすべてのものが示される時が来たようだ。一刻一刻と、時が近づいて来る。一步一步と、すべての歴史が、その最後の行きつくところへと進んで行く。一九四九年の九月、十月は、わたくしがこの貧しい詩行に送る別れの言葉を書きつづける間も、大きな刻みをつけながら近づいて来つつあった。わたくしは、もうこれ以上なにを語る必要がある。銃と剣は、既に手許にある。立てばよい。進めばよい。すべてはそのあとに来るのだ。

この頃に何があったのか、その真意は後述する青木文庫の「まえがき」で明らかになる。詩集の



『朝鮮冬物語』(1949)

最後に作家・中野重治が「跋」で「この詩集のために、何にかが書けることをわたしはよろこぶ。またそのことを名誉あることに思う。この人の詩をはじめてみた時のわたしの捕えられた感動をわたしは持続的なものに感じた。それはその通りであった。」と書いた。全集版解説によれば、この中野重治の激賞によって、日本の詩壇に旋風を巻き起こしたとう。

さて、詩集の表紙の前は「立春大吉」、後には「建陽多慶」と印刷されている。「春が来て縁起がよく、喜ばしいことがたくさん起こることを願う」という意味で、それをお札にして門に貼るのが朝鮮の伝統的風習である。初版出版時の楽観的な心境を反映しているが、青木文庫の一冊として刊行された時の「まえがき」で、許南麒は状況の変化を次のように書いている。

わたくしがこの詩集を書いて、はや四年になる。わたくしはこの詩集の初版をあとがき書きながら、もう朝鮮は決定的な段階に来ており、遠からず朝鮮のすべての問題は、その大きな歴史の暁を迎える苦痛と共に解決される時期に立至るであろうと考えた。しかし事態はそんなになまやさしくはなかった。依然として朝鮮は悲しみと怒りの中にあり、依然として夜は深く、闇は南朝鮮の山河に垂れ籠めている。そして不幸なところには、わたくしが現在土をふみしめているこの日本をも、その闇は埋めつくし覆いかくして、去ろうとしない。

この文庫版が出版されたのは朝鮮戦争時の1952年7月であるが、後述する『火縄銃のうた』『巨済島』の出版もこの時期である。朝鮮戦争最中の厳しい状況においても闘い続ける詩人の姿がそこにある。

元校長先生の詩と『日本時事詩集』

許南麒の二冊目の詩集は『朝鮮冬物語』以降の時事的な詩を集めた『日本時事詩集』である。この詩集は最近入手したのだが、その目的は民族教育に携わる者が語り継ぐ「これが俺達の学校だ」がどこに出ているのかを確かめるためである。

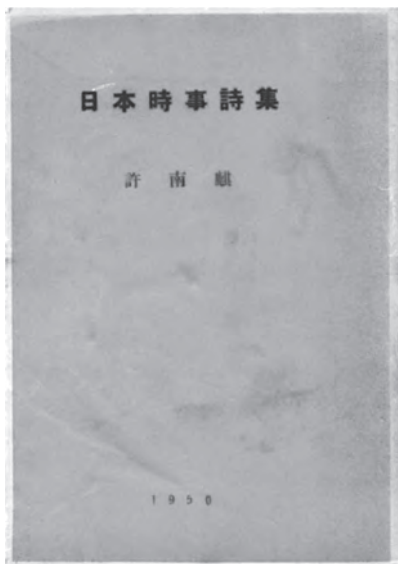
子供達よ／これが俺達の学校だ。／校舎はたとえ 見すばらしく、／教室は たった一つしかなく、／机は／君達 身をよせると／キーツと 不気味な音を立て／いまにもつぶれてしまいそうになり、／窓という窓には／窓ガラス一枚 ろくに入れられなくて／長い冬は／肌をさく北風で／君達の 櫻んぼのような頬をあおぎませ／そして／雨の日には雨が、／雪の日には雪が、／そして一九四八年春三月には／時ならぬ嵐がすさび、／この窓を吹きこみ、／君達の本をぬらし、頬をうち、／あげくのはては 学ぶ自由まで奪いあげようとし、／見渡せば／百が百／何一つ 満足なもののない／俺たちの学校だ。

このように始まるこの詩は元朝連小学校長の詩Ⅱで、「一九四八年四月一五日、東京京橋公会堂で開かれた朝鮮人教育不法弾圧反対学父兄大会によせた朗読のための詩」となっている。

同成社版には、Ⅰ「風の中を」、Ⅴ「一九四九年十一月二日」も収録されているが、Ⅰは「一九四七年川口朝連小学校入学式の日」に、Ⅴは「この日川口朝連小学校は閉鎖され子供達は再び日本の学校に送られた」とある

では同成社版にも全集版にも収録されていないⅢ、Ⅳはどのような詩なのか。時期的にこれらが収録されているのは『日本時事詩集』であり、これも確かめたかった。

元校長先生の詩は5篇ともあった。Ⅲは「ポプラのように」、Ⅳは「この先生は」で、Ⅱと同じ朗



『日本時事詩集』(1950)

読のための詩とある。

入学式の日、風の中を歩いてくる新入生を迎え、貧しくともこの学校が異郷で育った子供たちを祖国の空に帰す学校であると校長先生は語る。そして、「朝鮮の山河をうずめるポプラのように／子供達よ／君達元気で育て」と子供たちを見守り、ドーデの「最後の授業」を教えた時に、もし俺たちの学校にそのようなことが起きたらどうしようと涙をぬぐう子供たちを前にして、無力であっても立ち向かうと先生は心に誓う。しかし、その日、学校は閉鎖され日本学校へと転入される子供たちに別れをつける。

敵のとりこになって行く朝鮮の同志達、／この先生は／君達を／日本の学校の門前まで送ることが出来ず、／この閉ざされた学校／この傷だらけの校門に立ったまま／君達をおくるのだ。／さようなら、／さようなら、／元気で闘ってくれ、／さようなら、／さようなら、／俺の小さな同志達。

5篇の詩を通読する時、草創期の民族教育とともにあった学父母と子供たち、そして教員の心の叫びが聞こえてくる。教育援助費・奨学金をはじ

めとする祖国の温かい配慮と在日同胞たちの熱い思いによって民族教育は輝かしい発展を遂げた。しかし、現在も日本政府の差別政策は変わっておらず、闘いの日々は続く。

詩集の「あとがき」で許南麒は次のように書いている。

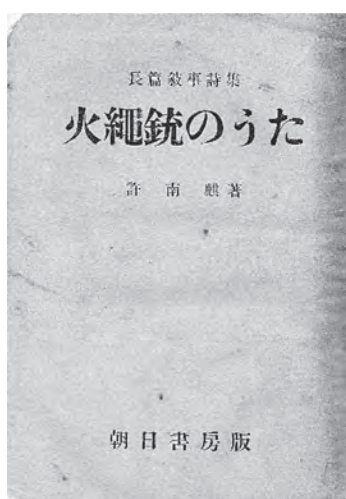
わたくしはいまここに収められている三十一篇の詩をうたう間に、もっとうたわねばならぬもの、もっとうたうべきであった多くのものをうたい逃し見逃して来ました。いや正確にはうたい逃し、見逃してしまったと言うべきかも知れません。どちらにしても闘いと憎しみこそをうたわねばならぬ詩人のひとりとして自分の勇気の足りなさに対する大きな恥じらいを禁ずることが出来ません。

「闘い」はわかるとして、「憎しみこそをうたわねばならぬ」というのは、どのような状況なのだろうか。詩集が朝日書房から発行されたのは1950年11月で、朝鮮戦争が起こってすぐである。そこに至る殺伐とした雰囲気の中、詩人の前にはあまりにも多くの出来事があったのだろう。

『火縄銃のうた』と叙事詩の系譜

詩人・許南麒の名声を不動のものとしたのが長編叙事詩『火縄銃のうた』であることに異論はないだろう。これが三冊目の詩集である。

ジュヌア／お前は いま／銃を磨いている、
／お前は いま／聞慶島嶺の檜の木と／忠州山間の銃鉄でもって出来た／そのかみの 百両の銃、／この祖母が／嫁入り道具に持って来た／衣装一切と／銀の指輪と 銀のかんざし たたき売って／ようやく祖父さんにもたすことのできた／その 火縄銃を磨いている。



『火縄銃のうた』(1951)

その火縄銃を持って、祖父は東学の乱を闘い、父は三・一人民蜂起に参加した。そして、息子は今朝鮮戦争に向かおうとしている。祖母はその孫の姿を見守りながら朝鮮民衆の物語を語る。「ジュヌアお前はいま銃を磨いている」というフレーズは何度となく登場するが、それが一種のリズムとなり長編にもかかわらず読者を惹きこむ。

小熊秀雄は長編叙事詩『飛ぶ櫓』の序で、日本には俳句短歌などの根強い短詩形の伝統があり、それを打ち破る長編叙事詩の創作は、質的に量的に充実させることは難しいと書いた。それでも、「僕はいま日本に叙事詩が生まれなければならない現実的な環境と必然性と考え当分この長詩の形式を追求していきたい」と実践するのだが、そのなかの一篇に朝鮮人老婆を主人公としたものもある。「長長秋夜」で小熊は「ちゃんちゃんちゅや」と朝鮮語のルビをふっている。

朝鮮民族は白衣民族と呼ばれるように白い衣服を常用する。ところが、植民地時代日本帝国主義者はそれを禁じ、それを着ていた老婆は墨をかけられる。それでも老婆は洗濯してそれを着る。それが繰り返されても老婆は屈しない。詩はそんな老婆の心情とともに植民地下の理不尽を映しだし、次のようにして終わる。

かよいい手をふりあげて／強く石をうつ／強

く朝鮮の歌をうたい出す／黒く汚れた白衣を
棒で打つ／打つパンチも泣いている／打たれた
白衣も泣いている／うつ老婆も泣いている
／打たれる石も泣いている／すべての朝鮮が
泣いている

最後の一節は詩人の心情を吐露したものだが、これほど朝鮮人に寄り添った詩を筆者は一つを除いて他には知らない。その一つとは横村浩「間島パルチザンの歌」である。

思ひ出はおれを故郷へ運ぶ／白頭の嶺を越え、
落葉松の林を越え／蘆の根の黒く凍る沼
のかなた／緒ちゃけた地肌に慟ずんだ小舎の
続くところ／高麗雉子が谷に啼く咸鏡の村よ
雪溶けの小径を踏んで／チゲを背負い、枯れ
葉を集めに／姉と登った裏山の楡林よ／山番
に追はれて石ころ道を駆け下りるふたりの肩
に背負ひ縄はいかにきびしく食い入ったか／
ひざわれたふたりの足に／吹く風はいかに血
ごりを凍らせたか

この詩句から始まる「間島パルチザンの歌」は朝鮮独立に身を投じた青年の心情を詩でつづったもので、当時のプロレタリア文学において例のない国際連帯の視点に貫かれていたと高く評価されている。そして、この詩こそ日本における長編叙事詩の嚆矢といわれているものである。

全集版解説では、『火縄銃のうた』の登場は衝撃的な「事件」であったと書き、横村浩、小熊秀雄、そして許南麒に続く叙事詩の系譜を確認している。三人にこのような接点があるとは思いつかなかったが、それはけっして偶然ではなく、自分たちがうたうもの、うたうべきものは、長編の叙事詩でなければ伝えられなかったのだろう。

『火縄銃のうた』が朝日書房から出版されたのは1951年7月で、「まえがき」も「あとがき」もなく、装丁もごく素朴である。それだけに、緊要に出版されたものではないかと思われる。翌年に青木文庫の一冊として刊行されたが、ここには「あ

とがき」があり、この詩を通じて三つのことを訴えたかったと書いている。

まずは日本では歪曲され報道されている朝鮮戦争の本質、次に三世代の朝鮮の若者が青春をささげ、女性たちがそれを見守る過酷な運命を担ったこと、そして、置かれた状況への日本人への警告である。文庫本は版を重ねたが、それは作者の訴えが多くの人に届いたということなのだろう。

もう一つの長編叙事詩『巨済島』

朝鮮戦争時、『火縄銃のうた』を発表した許南麒は、もう一の長編叙事詩を創作した。1952年に理論社から出版された『巨済島』で、これが四冊目の詩集である。

巨済島は朝鮮半島南海岸にある済州島に次いで二番目に大きい島である。ここには朝鮮戦争時、捕虜収容所があり朝鮮人民軍兵士に対する虐待が行われた。詩集はその実態を告発するために書かれたもので、副題に「世界にうったえる」とある。許南麒は「まえがき」と「あとがき」で次のように書いている。

わたくしは、いま朝鮮で行われている三つの大きな非人道的な侵略者の行為、すなわち細菌爆弾の使用と、水豊ダムをはじめとする多

くの平和施設に対する破壊工作と非戦闘員の殺戮と、そして戦時捕虜に対するでたらめな虐待、拷問、大量虐殺のうち、巨済島における捕虜収容所の問題を、日本のみなさんに訴えようと思う。

わたくしは、この訴えが…必ずや、世界の多くの良心をたたき起こし、全世界を震撼させる大きな平和の声となって、かいらい帝国主義者達をわが祖国から追い出し、一切の侵略行為を、朝鮮と、アジアと、世界のすみずみから駆逐しないではおかないと思う。

全6章から構成され、2章と5章は散文形式の200頁以上にもなる大作である。その内容と形式は素人が所感を語るにはあまりにも重く、ここでは全集版解説を引用するに留めたい。

捕虜収容所でのありとあらゆる凶器(兵器)を使つての拷問・虐待のさまが克明に描かれている。それはいま湾岸戦争、アフガン戦争、イラク戦争など一極覇権をほしいままにしているアメリカによる理不尽な侵略行為—半世紀の時を経てなおそっくりな残虐行為が、朝鮮の地で、朝鮮の島でおこなわれていたことが、今更のように胸を締めつける。改めてこの詩を読んでわたしたちは怒りを通り越して、正面“アメリカ”と向かい合わねばならないと痛感する。

解説を書いたのは出海溪也で、「抜群の編集能力と感性豊かな詩論で戦後詩のプログラム作りに参画し、その後の詩の発展に大きな影響を及ぼした詩人」(図書館流通センターデータベース)である。出海溪也と許南麒は古くからの知り合いで、この『巨済島』は野間宏と理論社小宮山量平社長と話し合つて上梓にこぎつけたとある。なお、解説には「民族のたたかいを歌い上げる」と表題が掲げられている。



『巨済島』(1952)

はじめての『許南麒詩集』

朝鮮戦争が終わった3年後、許南麒ははじめて自分の名を冠した詩集を上梓する。それが五冊目の詩集で、1955年に東京書林から出版された『許南麒詩集』である。この詩集では1945年から1954年までの抒情的な詩をおもに集めている。収録されているのは33篇の詩であるが、以前の詩集に収録された5篇を除く28篇が初出である。

わたくしは永い間、こういう形の詩集を一冊編んで見ようとおもっていた。そして、いま、それを編み終えることができた。名づけて『許南麒詩集』。何だか肩の重荷が下りたような気がする。

これまでとは違い、どこか穏やかでゆとりのようなものを感じるが、1955年7月の発行で少し前に総連組織が結成され在日朝鮮人運動も新たに出発した。そんななかで許南麒もこれまでのような、戦闘的な詩集とはちょっと性格が異なる詩集を出そうと思ったのかも知れない。表紙の絵も彼自身が画いたものである。



『許南麒詩集』(1955)

故郷をへだてる『朝鮮海峡』

さらに4年後の1959年に六冊目の詩集である『朝鮮海峡』を国文社から出版する。追われるもののうた、対馬詩集、大村紀行、寓話、朝鮮海峡の5章からなるが、「あとがき」で許南麒は次のように書いている。

ここでは主として、朝鮮海峡とそれを取りまく幾つかの問題についてうたったものを集めて見た。ここ二三年の間、私が追掛けていたものたちの一部である。



『朝鮮海峡』(1959)

『朝鮮冬物語』からちょうど10年、この詩集を出版した時の許南麒は故郷との距離が近かった。というよりも心はその地にあった。それに対して『朝鮮海峡』では、自分と故郷との間にある海峡を主題としている。ある意味、日本に定住せざるをえなかった在日朝鮮人一世の歴史が反映されているといえるかも知れない。

再び編む『許南麒詩集』

許南麒の七冊目の詩集は1967年に出版された『許南麒詩集』で、五冊目と同じ題名であるがむしろ内容は異なる。三部構成のアンソロジーで、I

とⅡは『朝鮮冬物語』『日本時事詩集』から選定し、Ⅲに初出といえる詩を収録している。「あとがき」には次のように書かれている。

いままで、書きちらした詩のなかで、いまでも、われわれの問題について語りかけてくれていると思われるものを選んで、一冊にした。(中略)ここに収められた詩篇だけでは、もちろん、われわれ在日朝鮮人が当面しているいろいろな問題を、全部、しかも十分に訴えるということにはならないと思うが、しかし、いくらかは語りかけてくれると思う。わたくしが、この詩集を編んだ理由も、それに尽きる。



『許南麒詩集』(1967)

この詩集によって許南麒は日本語による詩作に一つの区切りをつけたといえる。許南麒にとって詩作は芸術の追求ではなく、活動家としての使命を果たす手段であったと書いたが、まさにそれを如実に示す詩集である。

以上のように許南麒の七冊の日本語詩集を紹介したが、同成社版には『火縄銃のうた』『朝鮮冬物語』『抒情詩集』『おくりもの』『朝鮮海峡』が収録されている。ただし、『抒情詩集』は『日本時事詩集』と他の詩集から選定されたものである。「あとがき」には、その他の詩集とは出海溪也が編んだ『抒情詩集』で、それが許南麒の個人詩集であるの

か、あるいは複数の詩人たちのアンソロジーなのかはわからない。また、『おくりもの』は東京書林版『許南麒詩集』の最初に収録されている詩である。

全集版は、同成社版に『許南麒詩集』『巨済島』の二冊を加えたもので、この『許南麒詩集』は1967年版のⅢに該当する。初版本と全集版では、漢字の表記や仮名遣いなどで異なることもあるが、本稿では初版本によった。

詩人の生涯

許南麒は1988年に70歳でこの世を去ったが、彼の生涯と功績については1993年に朝鮮青年社から出版された孫志遠編著『鶏は鳴かすにはいられない－許南麒物語－』に詳しく書かれている。

生まれた家庭環境からはじまり、どのような少年時代を過ごし、どのようにして玄界灘を渡ってきたのか、そして解放を迎えて運動家としての活動とともに、様々な文芸運動を行ったことなど、興味深い内容となっている。ちなみに、この本の題名は「詩人」という詩に由来する。

ひねもす 風が吹いている。／風見やぐらの頂上で／にわとりが ふり落とされまいとしがみついて／悲しいと時刻^{とき}を告げている。／とりはなかずにやいられないものだ。／とりは／風に向いて涙をかわかしている。

初出の『日本時事詩集』では「詩人」であったが、同成社版では「にわとり」と改題されている。若い頃には「風に向いて涙をかわかす鶏」という自画像を描いた許南麒も、その時代はすでに過ぎ去ったと思ったのかもしれない。では、晩年に許南麒はどのような自画像を描いたのだろうか？本格的な「許南麒詩論」とともに、今後の研究に期待したい。

書評

金学鉄著・大村益夫編訳『たばこスープ』（金学鉄文学選集 1—金学鉄短篇小説選）

（新幹社、2021 年、365 頁）

宮島美花（香川大学経済学部）

日本で初めて金学鉄文学選集が刊行されることになり、その第 1 巻として、短編小説を集めた『たばこスープ』が大村益夫先生（早稲田大学名誉教授）の編訳により刊行された。私が初めて金学鉄の作品に触れたのは、1996 年に延辺大学に留学するにあたって、短編小説「靴の歴史」を読んだのが初めてだった。「靴の歴史」は、『シカゴ福万（ボンマニ）：中国朝鮮族短篇小説選』（高麗書林、1989 年）に収録されて日本に紹介されており、このときの翻訳を担当されたのも本書と同じく大村益夫先生であった。

私は、1996 年に延辺大学に留学して以来、現在も延辺を主たるフィールドとして朝鮮族研究を行っているが、社会科学（国際関係論、国際政治学）の分野からのアプローチで、文学研究は門外漢である。したがって、文学研究の枠の中で専門的に書評を行うことはできないが、朝鮮族に関心を持つひとりの金学鉄作品の読者として、そして、晩年の作家にお会いする機会があった者として、ここに、本書と作家・金学鉄を紹介する文章を書くことを許されるのならば幸いに思う。

作家・金学鉄の生涯については、本書の巻末の、訳者の大村先生による「解説」に詳しいが、簡単に略歴を紹介すると次のとおりである。1916 年に朝鮮の元山に生まれ、1935 年に抗日の志を抱いて上海に渡る。1940 年に中国共産党に入党し、朝鮮義勇隊（のちに拡大して朝鮮義勇軍）の一員として河北省太行山で八路軍とともに抗日戦を闘うなかで、41 年 12 月、左足を負傷して日本軍に捕え

られ日本に移送される。当時の朝鮮人は「日本人」であったためであろうか、戦争捕虜としては扱われず、「国体ヲ変革スルコトヲ目的トスル結社ニ加入シ、其ノ目的遂行ノ為ニスル行為ヲナシタル」ことにより治安維持法違反として懲役 10 年の判決を受け（判決文も本書巻末に収録）、長崎刑務所に収監された。その後、諫早刑務所に移監され、負傷していた左足の切断手術を受ける。

日本の敗戦後はソウルに戻るが、米軍政下での左翼運動弾圧に命の危険を感じ、46 年に北朝鮮へ移動した（このときの 38 度線越えに護衛看護師として同行した仁川出身の女性と翌 47 年に結婚）。朝鮮戦争が勃発すると、北朝鮮から中国へ避難した。52 年から吉林省延辺に定住し、専業作家として旺盛な創作活動を行っていたが、57 年、反右派闘争で批判され、執筆を禁じられる。文化大革命が始まると、ひそかに執筆し保管していた小説『20 世紀の神話』の原稿を、紅衛兵の家宅搜索で発見されてしまう。小説の内容は毛沢東体制を批判するもので、反革命罪により 10 年間を監獄で服役した。1980 年に「平反」（復権、名誉回復）して創作活動を再開すると、『激情時代』などの代表作を執筆していった。85 年に中国国籍を取得し、中国作家協会延辺分会副主席に就任。89 年中国共産党党籍回復。2001 年 9 月永眠（享年 84 歳）。

本書に収録されている短編作品は次のとおりである。1946 年～1947 年にソウルで書かれた作品として「ムカデ」「亀裂」「たばこスープ」、1947 年～1950 年の平壤時代に書かれた作品として「勝利

の記録」、1950年～1957年、つまり反右派闘争で執筆を禁じられるまでに中国で書かれた作品として「松濤」「軍功メダル」「靴の歴史」、1980年～2001年に延辺で書かれた作品として「戦乱の中の女たち」「こんな女がいた」「仇と友」「太行山麓」「囚人医師」が収録されている。

本書のタイトルにもなっている作品「たばこスープ」は、中国で抗日戦を戦う朝鮮義勇軍の話である。主人公の兵士は、何をやってもグズで居眠りばかりしており、戦闘場面は少なく、兵士たちの日常生活をユーモラスに描いている。金学鉄作家は、若い時期の作品から晩年の作品まで、生涯を通じて、抗日戦を舞台とする作品を多く書き、「たばこスープ」を含め本書の収録作品も多くは抗日戦を舞台としている。それらの作品は、作家自身の抗日戦での体験に着想を得たもので、登場人物にはモデルとなった実在の人物もいる。したがって、「たばこスープ」で、個人的に興味深いと思うのは、抗日戦の中で、兵士たちが、どんな食事をしていたのか、日常の暮らしはどのようなであったのか、といったことが垣間見れる点である。そして、もちろん小説では実際よりも脚色されているだろうが、日本軍と戦う登場人物が、虫が苦手だったり、ドジを踏んだり、仲間うちでもそりが合わない人がいたり、と、人間らしい点が面白いと思う。「仇と友」は、大村先生を含む日本人との交流を描いた自伝的内容で、抗日を扱っていても、金学鉄の作品の主題はけして「反日」ではない。

抗日戦以外では、朝鮮戦争、農業生産合作社（集団化）、文化大革命などが作品の舞台となっている。私が初めて読んだ金学鉄作品である「靴の歴史」も、本書に再び収録され、約25年ぶりにもう一度読みかえた。「靴の歴史」は、1950年代前半の新中国建国初期に、集団化が進められていく農村を舞台にしている。延辺に生まれ、貧しい小作農だった主人公の青年は、靴にまつわる悲しい思い出や嬉しい思い出を抱えており、その半生を、ひとり語りのように語る形式で物語がすすめられる。

よく知られているように、かつて間島（現在の延辺）の総人口の7～8割を占めた在満朝鮮人は、多くが貧困な小作農であった。中国では貧農に土地を配分する土地改革の後、農業集団化が進められ、在満朝鮮人も、新中国の朝鮮族となって、この政策・制度のなかで生きることとなった。集団化は、農家同士が農作業の助け合いを行う互助組から、10～30戸程度の農家が土地私有権を保持したまま資本を共同で利用する初級合作社へ、さらに、初級合作社を合併して、200～300戸分の土地や資本も合作社が所有する高級合作社へと、急速に進められた。そののちに、生活も集団化させ、さらには行政機能も持たせて一体化させた人民公社へと拡大していく。行き過ぎた集団化が失敗に終わったのは周知のとおりであるが、この作品（「靴の歴史」）を読んでいると、集団化の初期において、朝鮮族農民の暮らしは一直線に順調に向上していったわけではなく、少しずつ暮らし向きがよくなっていつているのを実感したり、とはいえ、ひとたび凶作となれば食糧の不足を心配したり、という紆余曲折を経ながら、それでも共同で生産・経営を行って生活を安定させていこう、豊かになっていこう、という希望や気概が朝鮮族農村には満ちていたのではないか、と思えてくる。金学鉄作家は社会主義者なので、啓蒙的な意味合いもあったのかもしれないが、個人的には、集団化の初期においては、未来がよくなっていくことを信じる朝鮮族が多く、朝鮮族社会にはその機運が満ちており、それを感じ取った作家がこの作品にそれを書きこめたのではないかなと思う。

このような作家・金学鉄のひととなりを紹介するために、個人的な思い出を書いてみたい。私は、学生時代に、早稲田大学語学教育研究所（通称「語研」）の図書室で中国語図書と朝鮮語図書の整理をするアルバイトをしていて、そのうち、ご縁があって、語研の大村研究室のTAになった。大村先生から、延辺に行ったら金学鉄作家を訪ねてみるように、もう高齢なのでこの機会を逃さないように、とおっしゃっていただいたのだが、一介の日本大学生が畏れ多いことだという思いが強く、1996年に

延辺で実際に作家のご自宅へ電話をかけるときは、かなり勇気を振り絞ったことを今でもよく覚えている。

流暢な日本語で、うちへ遊びにいらっしゃい、迎えをやるから、と誘ってくださり、延吉市内の河南という町の「衛生所」（保健所）で待ち合わせをした。すると、背が低く、短いパーマで黒髪のおばあさんがやってきて、私に向かって、何かジェスチャーをしながら「金学鉄？」のように言う。迎えの人かしらと思って、朝鮮語で、はい、金学鉄先生と約束している学生です、と言うと、「日本の朝鮮人」（＝在日コリアン）かときかれた。日本人です、と言うと、なぜ朝鮮語がわかるのか、ときかれ、勉強して少しわかります、のようなことを言った。そのような朝鮮語での簡単な会話を交わすと、おばあさんがニッと笑って、突然、私の腕に自分の腕を回し（恋人同士のような腕組みで）、作家の自宅まで連れて行ってくれた。このフレンドリーなおばあさんは家政婦さんかなにかしら、と思っていたら、なんと、このおばあさんが金学鉄夫人であった。上述したように、左翼弾圧が強まる米軍占領下の韓国から北へと移動する作家に護衛看護婦として同行した人物である。とんでもない勘違いをしたものである。

ご自宅にお邪魔すると、白髪の作家は水色のパジャマ姿で、もしやどこか具合が悪いのだろうかと思ったが、（片足を失っていることもあって）普段の自宅ではこのように楽な服装で過ごすとのことだった。日本語が驚くほど流暢で、日本のラジ

オ放送を聞き、日本の最新の時事問題にも詳しくかった。作家からは彭徳懷の人柄についてうかがったり、私からは、1995年に日本で公開になったばかりのアメリカ映画「フォレスト・ガンプ」を、トルストイの「イワンのばか」ではないけれど、愚鈍なほどの誠実さや勤勉さが幸運を呼ぶ男の話だと紹介したりと、いろいろな話題を話した。そのなかでも、「社会主義という考え自体は、絶対に正しいと思っている」ときっぱりおっしゃったことが思い出される。しかし本当の社会主義を実現するのは難しく、これは人間のやり方のほうに問題があるからだ（＝社会主義という考え方に問題があるのではない）、ともおっしゃっていた。

大村先生、（私の早稲田大学の先輩で、同じく延辺大学で勉強した経験を持つ在日コリアンの）鄭雅英さん、また、その尊父の鄭敬謨先生の安否を尋ねられたので、大村先生と鄭雅英さんはお変わりないこと、私は鄭敬謨先生とは直接の面識がないことを伝えた。あとで鄭雅英さんから聞いたことには、鄭敬謨先生の翻訳で『激情時代』を日本で出版する話があったが、いろいろな事情で、結局出版には至らなかったということがあったそうである。当時、おそらく金学鉄作家は、日本でのその出版のことを気がかりにしておられたのかもしれない。今回の金学鉄文学選集では、続く第2巻として『20世紀の神話』が刊行され、その『激情時代』も、第3－4巻として今後刊行される予定だそうである。心待ちにして待ちたい。

木宮正史『日韓関係史』 岩波新書、2021年9月

朴一

本書の課題と分析視角

本書は、日本を代表する韓国研究者が、植民地期から現在までの日韓関係の変化と連続性について考察した本である。歴史問題をめぐって日韓関係が悪化するにつれ、日本の言論界には、韓国の政府の対応や司法の判断を問題視する書籍が反乱しているが、本書は、日韓双方の立場に立ち、極めて冷静な視点で、日韓関係が複雑化していく過程を分析している。

韓国が経済成長し、民主化を遂げた1990年代、日韓関係の未来を楽観視していた人々は少なくないだろう。本著の著者である木宮氏も「日韓が類似の存在になり、交流が深まることで、関係改善につながるはず」（本書、4頁）と考えていた学者の一人である。なのに、なぜ、ここまで日韓は関係が悪化してしまったのか。筆者の問題意識は、このような楽観論の再検討にあるが、本書の醍醐味は、日韓関係の変化を植民地期から遡る比較的長期の時間軸と、米国、中国、北朝鮮など日韓関係に大きな影響を与えてきた国際関係の変化という地域軸の両面から考察したところにあると思われる。

日韓関係の時代区分

まず、評者が本書に注目するのは、植民地期か

ら現在までの日韓関係の時代区分である。100年に及ぶ日韓関係の歴史を描く場合、どの時点の日韓関係の転換点にするのが重要であるが、木宮氏は以下のような時期区分を設定し、日韓関係の変化を考察している。

- ① 日韓関係の前史：1875～1945年
- ② 冷戦下の日韓関係の誕生：1945～70年
- ③ 冷戦の変容と非対称的で相互補完的な日韓関係：1970年代・80年代
- ④ 冷戦の終焉と対称的な日韓関係の到来：1990年代・2000年代
- ⑤ 対称的で相互競争的な日韓関係へ：2010年代

こうした時期区分からわかるように、木宮氏が日韓関係の変化のターニングポイントにしているのは、国際関係では冷戦から脱冷戦（デタント）、日韓の関係性では「非対称的で相互補完的な関係」から「対称的で競争的な関係」への変化である。冷戦から脱冷戦とは、1990年前後に生じたベルリンの壁の崩壊、ソ連邦の解体などの西側の資本主義陣営と東側の社会主義陣営の対立構造が終焉し、西側世界と東側世界の交流が生まれたことで、日韓関係も変容を迫られることになったと理解できる。では、日韓の非対称的關係から対称的關係への変化とは、こういった変化を意味しているのだろうか。本書によれば、「支配者（日本）」と「被支配者（韓国）」、「先進国（日本）」と「途上国（韓

国)」、「民主主義国家(日本)」と「独裁国家(韓国)」といった日韓の対称的關係が、韓国の独立、経済成長、民主化によって、自由や人権といった価値観を共有する民主主義国家としてお互いを認め合い、より対等で競争的な関係になったことと解釈できる。

しかし、韓国が急速な経済成長を遂げ、民主化するにしたがって、「相互補完的」な関係は崩れ、日韓の不幸な過去の清算をめぐる対立を繰り返すようになった。何故か。そもそも1965年以降の日韓の相互補完的な関係を構築してきた「65年体制」は、日韓の歴史の清算問題を曖昧化し、冷戦下での共産主義勢力の脅威から日韓を防衛するという安保協力と日韓の経済協力を優先したものであった。この結果、韓国は60年代から70年代に日本から部品と原資材を輸入し、それを国内の低賃金労働者が組み立てた完成品を米国に輸出するという対日依存的貿易構造に組み込まれることで、従属的な経済発展を許された。日本も韓国の開発独裁下での労働統制を利用し、環境問題や賃上げに苦しむ企業の生産拠点を韓国の輸出自由地域に移転するなど、65年体制下の日韓の安保・経済協力はある意味でウインウインの関係であったといえる。それは、皮肉な言い方をすれば、木宮氏が指摘するように「韓国の権威主義体制を日本の民主主義が支え、逆に日本の民主主義体制を韓国の権威主義体制がささえていた」(本書、97頁)のである。

非対称な関係から対称的な関係へ

しかしながら、ベルリンの壁が崩壊し、ソ連が崩壊するなど、いわば冷戦の崩壊によって、日韓関係も大きく変化することになった。木宮氏は、1990年を境にして、日韓関係は新たな関係、「非対称から対称」(本書、129頁)という新たな関係に突入したと分析している。ここで、「非対称から対称」的關係について、木宮氏は日韓の①国際政治への影響力や経済力・軍事力などの「国力の均

衡化」、②自由、人権、民主主義などの「価値観の均質化」、③還流、日琉などの「文化領域における相互浸透」、④「双方向化」(とくに日本人の韓国への関心の高まり)を挙げている。しかし一方で、こうした日韓関係の垂直的關係から水平的関係への変化は、日韓関係に影を落とすことにもなったと筆者は分析している。

日本が韓国にもっていた優位さがなくなり、競争相手の韓国にはもはや譲歩する必要がないという焦燥感を持つ一方で、日本に助けをもらう必要がなくなった韓国としては、民主化にともなって、権威主義体制下で抑制してきた戦後処理に対する不満を日本にぶつける機会がようやく訪れたと考えるようになったことで、「対称関係」への変化がお互いに妥協できない「歴史戦」に突入することになったというのである。

日韓関係の転換点

近現代の日韓関係の転換期をいつに設定するかは難しい問題である。おそらく韓国研究者の共通理解では、まず日本の韓国支配が終焉し、韓国が独立した1945年、この年を境に日韓の「支配・被支配」関係は収束し、自立した国と国との関係に転換したという学説に異議を唱える学者はいないだろう。次に繰り返しになるが、1965年の国交正常化、この日韓条約をきっかけに、日韓はその後、歴史・領土問題の解決を曖昧化することで、強固な安保・経済協力関係を構築することに成功した。さて問題は、この65年体制が揺らぐようになった最大の転換期をいつに求めるかである。

木宮氏は、この大転換期を冷戦が終焉した1990年前後であるとし、この時期に日韓関係が「非対称的」関係から「対称的關係」に転換したと述べている。確かに韓国の民主化が本格化することで、女性の人権問題の一つとして慰安婦問題が浮上し、日韓「歴史戦」の火ぶたが切られたのが1990年10月の韓国挺身隊協議会の声明であった。

慰安婦問題への対応を迫られた日本政府は、「植

民地支配に関する請求権問題については、65年の請求権協定で解決済み」としながらも、1993年「河野談話」を発表し、慰安婦問題への軍の関与を認めて謝罪し、95年には「アジア女性基金」を創設し被害者への補償に乗り出すなど、慰安婦問題解決に向けた誠意ある取組みを続けた。こうした補償は「日本政府が法的責任を認めたものではない」と韓国側は評価しなかったが、韓国の金大中大統領と日本の小渕恵三首相はエスカレートする歴史戦を封じ込め、98年「日韓共同宣言」を発表し、市場経済と民主主義という共通の価値観を認めて協力関係を発展させる共通認識を構築したことに成功したと木宮氏は論じている。

なぜ日韓は歴史戦を抑え、「日韓共同宣言」にたどり着けたのか

ここで気になるのは、なぜ両国は慰安婦問題をめぐって加熱する歴史戦を抑え、「日韓共同宣言」にたどり着くことができたのかということである。木宮氏も指摘したように、65体制下で、韓国の権威主義的な保守政権が日韓の歴史問題の解決を棚上げすることができたからこそ、皮肉なことに日韓関係が安定化してきたのであった。とすれば、日韓の歴史問題の解決という民主化の課題を背負ったリベラル派の金大中政権が誕生すれば、過去の問題はすでに解決済みとする日本政府との葛藤はさらに高まるはずではないか。「自由、人権、民主主義などの価値観を共有できる国どうしなら、信頼できる同盟関係を構築できるのではないか」という人も少なくないが、歴史問題の解決という呪縛を抱えた日韓にとって、このロジックはまったく通用しない。韓国が民主化すればするほど、韓国人の人権意識が高まり、戦後処理に応じようしない日本との関係は悪化するの当然である。

にもかかわらず、日韓が「日韓共同宣言」という友好的ムードを演出できた理由として木宮氏は韓国側が「金大中政権というリベラル派政権で

あったという点が大きい」（本書、161頁）と述べているが、この説明には違和感が残る。むしろ、リベラル派として過去の問題を放置できない金大中政権にとって、「日韓共同宣言」は歴史問題での日本の歩み寄りを期待したものであり、「歴史戦」という爆薬を内蔵したものであったのではないか。日韓共同宣言は、日本側が歴史問題（慰安婦問題）に向き合う姿勢を示し続けてきたからこそ実現したのであり、日本がその姿勢を放棄すれば、たちまち崩壊する爆弾を抱えたものであったと評者は思う。なぜなら、日韓共同宣言には、「日韓の未来を構築する」というテーマが優先される一方で歴史問題に関する日韓の約束事は何もなかったからである。木宮氏の日韓共同宣言に対する評価が気になるところである。

「慰安婦問題」への日本政府の対応

実際、日韓共同宣言後も、韓国政府は日本政府に歴史問題の解決を迫り、日本政府がその対応に苦慮するという関係は繰り返されることになった。とくに2011年8月、韓国の憲法裁判所が、「慰安婦問題」について対日交渉しない韓国政府の不作为を違憲と断定したことで、韓国政府も「慰安婦問題」を放置できなくなった。李明博大統領は、日韓首脳会談で野田政権に慰安婦問題への誠実な対応を求めたが、日本政府から前向きな対応がみられないとし、2012年8月、歴代大統領として始めて「竹島（独島）」に上陸、歴史問題が領土問題に飛び火したことで、日韓関係は一層冷え込むことになった。李明博政権の後を引き継いだ朴槿恵政権と日本の安倍政権は、日韓関係を修復するために、2015年12月、慰安婦問題が最終的かつ不可逆的に解決されることを確認する「日韓合意」を発表した。その内容は、韓国政府が元慰安婦を支援するために設立した「和解・癒し財団」に10億円を拠出するというものであった。しかし、2018年11月、文在寅政権が同財団を一方的に解散し、日韓合意では慰安婦問題を解決できないとしたた

めに、日本政府との溝は深まり、慰安婦問題の解決は遠のくことになった。

1990年から2018年までの慰安婦問題をめぐる日韓の対応を整理すると以上のようなものになると思うが、この流れは「韓国政府は従軍慰安婦問題における最大の難問である『誠意ある対応』—言い換えるなら従軍慰安婦問題の解決方法—の策定という難問を一歩的に日本政府に押し付け」（木村幹『日韓歴史認識問題と何か』ミネルヴァ書房、2014年、178頁）てきたようにも見える。日本政府は、こうした韓国側の要求に対し、「河野談話」を発表し、「アジア女性基金」を設立し、さらに10億円を拠出して「和解・癒し財団」まで創ったのに、韓国側に何度もちゃぶ台返しされたという訳である。日本人の読者なら、この本を読んで、こうした反発を覚える人がいるかもしれない。しかしながら、木宮氏の日韓関係を視る視線は、どこまでもクールである。一度として日本側に立つことなく、研究者という第三者の視点から日韓関係のもつれを冷静に分析している。

「歴史戦」における日本政府の反撃

しかし、文大統領が「和解・癒し財団」を解散してから、歴史戦の主導権は明らかに韓国政府から日本政府に移ったように見える。「歴史戦」をめぐる日本政権の反撃が始まったのである。2018年の朝鮮人徴用工に対する日本企業の非人道的な人権侵害行為に対する慰謝料などの損害賠償は、65年の日韓請求権協定では未解決という韓国大法院判決を受けて、日本政府は半導体素材の韓国への輸出規制措置を実施し、ホワイト国から韓国を除外した。日本政府は韓国への輸出規制措置は「経済安保」の観点から行われたと釈明しているが、本音は徴用工判決に対する報復措置であったと多くの人々は認識している。その後は、日韓がお互いに経済制裁を繰り返すという悪循環に日韓は陥ることになってしまった。さらに、こうした経済摩擦が日韓関係の「聖域」であった安全保障の分野

でも亀裂を生じさせていることは、北朝鮮がミサイル発射実験を繰り返す現在、由々しい事態であると言わざるを得ない。

日韓関係をどうすれば正常化できるのか

では、ここまで悪化した日韓関係をどうすれば正常化することができるのだろうか。木宮氏が指摘するように、現状は、日韓関係悪化の責任をもっぱら相手のせいにし、相手の価値観や基準よりも自らの価値観や基準の方が正しいと主張する傾向にある。対立の原因である「歴史問題はアイデンティティをめぐる争いであるために日韓関係が対象化すればするほど、容易に妥協し難く、競争的側面がより一層強く刻印される」（本書、217頁）が、非対称から対称へという変化に日韓両政府が追い付いていないと木宮氏は述べる。ではどうすればよいのか。木宮氏は「歴史問題という非対称的な関係時に形成されたアイデンティティをめぐる葛藤を、現在の時点の価値観に照らし合わせ、お互いの考えの違いを接近させていくという普段の努力」、「非対称的な関係であった時の『解決』を金科玉条のように守っていくだけでは不十分である。過去における解決を尊重しながらも不断に進化させていく取り組み」（本書、218頁）が双方に必要だという。

要するに、木宮氏の提言は、日本政府には65年の請求権協定で解決済みという枠組みにこだわるべきでないとし、韓国政府には日本側の事情にもう少し配慮した対応をしてほしいという両国の「歩み寄り」解決案のようにも理解されるが、はたして65年体制の存続を望む日本政府と、65年体制の解体、新たな日韓関係の再構築を望む韓国政府との間に、双方とも納得できる「歴史問題」の解決策などあるのだろうか。そもそも2015年の慰安婦問題に関する「日韓合意」も日韓両政府がお互いの考えの違いを接近させていった結果生まれた「妥協の産物」であった。より複雑化した徴用工問題が、慰安婦問題に関する「日韓合意」のよ

うな「妥協の産物」的政治決着にたどりつける可能性はきわめて低いと思われる。2018年の徴用工判決に激怒した日本政府は、徴用工問題の解決方法の策定を韓国政府に丸投げするようになった。「請求権協定で快活済み」とし、韓国政府からの解決案を拒否する権限を日本政府がもっていると認識する限り、「歴史問題」をめぐる日韓の「歩み寄り」も困難な状況である。

「いますぐ日韓関係の諸懸案を解決する特効薬のようなものはない」（本書、244頁）という木宮氏の言葉は重いが、米中対立が激化し、北朝鮮の核・ミサイルの脅威が高まる現在、歴史問題が安全保障や経済面での日韓協力関係に摩擦を引き起こす現状は改善しなければならない。日韓両政府には、困難な歴史問題の解決策を模索し続ける一方で、経済・安保関係協力は歴史問題と切り離し

て進めるという戦略的互惠関係を再構築する必要があることは言うまでもない。本書ができれば韓国でも翻訳出版され、韓国の多くの人々にも本書の思いが伝わることを願ってやまない。

（朴一・大阪市立大学名誉教授）

参考文献

- ・木宮正史「日韓関係：非対称的な相互補完から対称的な競合へ」大矢根聡・大西裕『FTA・TPPの政治学』有斐閣、2016年
- ・木宮正史・李鐘元・磯崎典代・浅羽祐樹『戦後日韓関係史』有斐閣、2017年
- ・木宮正史『ナショナリズムから見た韓国・北朝鮮近現代史』講談社、2018年
- ・木村幹『日韓歴史認識問題とは何か』ミネルヴァ書房、2014年
- ・金恩貞『日韓国交正常化の政治史』千倉書房、2018年

書評

李里花編著『朝鮮籍とは何か——トランスナショナルな視点から』

(明石書店、2021)

李洪章 (神戸学院大学)

「朝鮮籍」は、本来越境的な存在である在日朝鮮人をナショナルな文脈へと結びつけ、法的・政治的・社会的・精神的に管理・支配するためのツールとして機能してきたいっぽうで、当事者によってさまざまに意味づけられ、そのエスニシティ／ナショナル리티のあり方を象徴するものでもある。複数の他者からのまなざしと、複数の当事者の思想や意思が錯綜することで、この「国籍」は、きわめて複雑で多義的な「概念」として機能してきたのである。本書は、在日朝鮮人の越境性、すなわち「南でもなく北でもなく、かつ南でもあり北でもある」という立場性に立ち返り、この複雑な「概念」の中身を、複雑なまま描き出すことを試みた労作である。そうした意図は、本書の構成に顕著にあらわれている。6つのコラムもそれぞれ魅力的な内容であるが、紙幅の都合上、本編のみを紹介する。

まず、第1、2章では、朝鮮籍に対する正確な理解を促すべく、「朝鮮籍とは何か」という問いに対して、法学的・政治学的観点から詳細な考察が試みられている。戦後の日本国籍剥奪、南北分断体制、日本による韓国の限定承認などを背景とした、複数の「当該国」における制度的な瑕疵と政治的思惑によって、その不安定で矛盾に満ちた地位が形作られていったことが明らかにされている。

つづく第3、4章は、近年の日本・韓国両社会において、朝鮮籍者に対して政治的にいかなるまなざしが注がれてきたのかを描き出している。第3章では、日本政府が意図的に朝鮮籍を「北朝鮮」と

直結させ、再入国許可の恣意的運用に象徴されるように、移動する権利を侵害するなど、排除と弾圧の対象としてきた経緯が描き出されている。つづく第4章では、韓国におけるリベラルと保守が、朝鮮籍者を「北朝鮮」や総連と同一視する立場を共有することでその政治的多様性を覆い隠してきたことを批判し、「親北」と「非北」という対極的なイメージを、その双方から突き崩すことが試みられている。

第5、6章では、文京珠と丁章がそれぞれ、自身の「朝鮮籍」をめぐる経験を綴っている。文は、越境する複数のローカリティ（「故郷」）に、「二世」あるいは研究者として向き合うなかで、韓国籍の取得へとシフトとしていった経緯について語っているが、同時にそのことを、「朝鮮籍」として生きた歳月と向き合っただけでなかったのではないかと振り返る。その叙述からはまさに「北でも南でもあり、北でも南でもない」という複数性が浮かび上がる。また丁は、「朝鮮籍」を維持する理由として、「統一朝鮮への想い」と「国家そのものへの懐疑」を挙げており、その姿勢は極めて一貫している。韓国への入国をめぐって、「臨時であっても韓国国民になる気はない」という考えのもと、旅行証明書（臨時パスポート）ではなく、再入国許可書を使用して申請を繰り返したが、ことごとく拒絶されたという経験は、くしくも丁の「志操」の正当性を裏づけている。

最後の第7章では、編者である李里花が、朝鮮学校に在学経験のある、2000年代以降に2、30代

を迎えた朝鮮籍者へのインタビューを通じて、そのアイデンティティの内実を描き出している。李はその特徴として、「個人化」と「再民族化」の2点を挙げる。すなわち、自らのナショナル／エスニックなものへの態度を、いずれかのカテゴリーへの帰属を前提とするものではなく、あくまでも個人的なものとして認識するが、同時に、そうした状況に疎外や孤独感を感じ、「在日」というエスニックな紐帯を(再び)求める者もいるという。そして李は、そうした多様なアイデンティティのあり方が共通して、「トランスナショナルな感覚」に基づいたものであると論じる。

ここで、本書の副題にもなっている「トランスナショナル」という概念について考えてみたい。まず言えるのは、「トランスナショナル」は決して新しい現象ではないということである。玄武岩¹⁾が解き明かしたように、日本帝国期から冷戦期を経て現在に至るまで、トランスナショナルな「コリアン・ネットワーク」は継続・発展し続けてきた。しかし、従来の在日朝鮮人研究は、国民国家を大前提とした「方法論的ナショナリズム」に陥ってきた。たとえば、在日朝鮮人のエスニシティに関する「祖国志向／定住志向／帰化志向」といった、類型的な理解がそうである。すなわち、本国と居住国というふたつの国民国家に対する距離感の違いこそが、在日朝鮮人の複数性であると解釈されてきたのである。さらには、その存在を共和国と同一視するまなざしも相まって、特定の国民国家への帰属を表すわけではない「朝鮮籍」を保持する人々の存在は見落とされてきた。まさに、丁章による「無国籍の朝鮮籍を生きる」といったような主張は「夢か幻、子どもじみた戯言」(p.197)とされ、そこに確かに存在するリアリティは捨象されてきたのである。本書の最大の意義は、そうした国民国家の「はざま」に生きる人々やそこで起きていることに光を当てるための視点を提示したことにあるだろう。

しかし、こうした視角に対して疑問がないわけではない。それは、「方法論的トランスナショナリズム」の陥穽にかかわるものである。すなわち、移

民の越境的な営みを一貫して脱国家・脱領域的文脈から読み解くことが、その存在を国民国家の「他者」として位置付けるという点で、「方法論的ナショナリズム」と軌を一にするという問題である²⁾。本書は、「トランスナショナル」を、「[「超国家」や「脱国家」という「国家とは別の次元」]を指すものというよりは、「複数の国家が関わる地平」を捉えるための概念として提示している(p.9)ことから、決してその陥穽に無自覚なわけではない。それにもかかわらずこうした危険性を指摘せざるをえないのは、「南でもなく北でもなく、かつ南でもあり北でもある」という視点を打ち立てながらも、「南でもあり北でもある」こと、すなわち「祖国」を求める姿が後景化しているように思われるからである。言い換えれば、政治的多様性の名の下で、「～でもある」という肯定形の自己規定の語りを、「～であるとは限らない」という部分否定へとすり替え、捨象してしまう危険性を感じるのである。実際に、李里花はトランスナショナル・アイデンティティを「これまでのナショナル・アイデンティティ」とは区別し、その特徴として「一つの国民国家に帰属しなければならない、という感覚がない」(p.227)ことをあげている。しかし実際には、「無国籍の朝鮮籍を生きる」という主張があるいっぽうで、共和国に自主統一に向けた政治的正当性を見出し、朝鮮籍にそうした共和国とのつながりを見出す者もいる。その意味では、「北でもある」という主張もまた、「朝鮮籍＝(絶対悪としての)北朝鮮」という主流社会からのまなざしに対する、真正面からの抵抗のかたちと言えるはずである。

中村一成は本書コラムにおいて、朝鮮籍者の語りに、「翻弄され続けてきたからこそ「国」の重み」を強く感じ、「どちらかを選び、どちらかに背を向ける」ことを拒む姿(p.108)を見出したうえで、「[「祖国」を目指すことを通じて]「先人たちと、そして世界の、国民に非ざる者たち、措定された境界の外から「私たちの祖国」を希求する者たち」(p.109)と繋がりたいと語る。こうした姿勢はまさに、「トランスナショナル」という視角が決して

欠いてはならないものであろう。

以上のように述べたが、本書は在日朝鮮人問題をトランスナショナルな問題として捉える視点を提供し、なおかつそれを日本のみならず、韓国や共和国、ひいては在日朝鮮人社会に対して、トランスナショナルに提起したという点で重要な著作であるといえる。

注

- 1) 玄武岩、2013、『コリアン・ネットワーク——メディア・移動の歴史と空間』北海道大学出版会。
- 2) 大井由紀、2006、「トランスナショナリズムにおける移民と国家」『社会学評論』57（1）、143-156。

書評

詩人・許玉汝に老いはない

金正守（金剛山歌劇団団長）

長きに渡り民族教育の場で活動してきた在日朝鮮詩人許玉汝（ホ・オンニョ）が第3詩集《羽が生えたように》を世に出した。

第1詩集《山つつじ》、第2詩集《出発の日に》以来15年ぶりの出版となる。

異国に生まれ育ちながらも母国語をこよなく愛し、ウリマルの詩作を貫いてきた詩人だが、今回は日本語編《共に歩む人よ》に31作品の日本語詩を発表した。

この15年の歳月を顧みると、在日朝鮮人を取り巻く環境はまさに嵐の中を乗り越えて行かなくてはならない厳しい状況であった。

そして、それは今もなお続いていると思われる。

その中で苦難の坂道を共に歩み、力になってくれた大事な日本の友人の心に、直接飛び込みたいと願う詩人の切なる想いが作品から感じとれる。

詩集を読みながら評価したい一点は、ひとつひとつの詩の素材が、きらきらと輝いているということだ。

常々感じてきた事だが詩人の目、耳、そして鼻までもが四六時中、素材の獲得のために集中しているように見える。

そしてそのすべての素材が同胞を思う自らの行動と実践の中で得た宝物のようで光を放っているのである。

《自転車》、《写真》、《クッパブ》、《マフラー》、《招待状》、《貯金箱》、《一輪車》、《停留場》、《年賀

状》、《時計》、《雨》等の素材は、厳しい差別の中でも、明日を信じ生き抜く在日朝鮮人社会の、真実の姿の中から生まれ輝いている《物》たちである。

詩人は、いつもその現場の中心に立ち、苦悩しながらも力強く生き抜くなかで素材を発見し、その素材が詩という叫びに変わるのである。

もう一点は、詩集のページをめくるたび、素晴らしい人物の姿に出会う事ができるという事だ。

登場人物すべてが、この社会の不条理に屈することなく、強く明るく生きている。

高校無償化差別に反対し、毎週火曜日、高齢の身でありながらも府庁への抗議の坂道をのぼる《ボンスンおばあさん》。

金婚式の朝、「今日はどう過ごされますか？」と問う娘に、「もちろん見守り隊に行くよ、ウリハッキョの子供たちの笑顔が一番の贈り物だから」と答える老夫婦。

朝鮮学校に通う生徒たちに防災用頭巾やマスクを魔法の手技のように作り届ける《スニハルモニ》。

過去の苦しみを孫たちには味あわせてはならないと、今を頑張る在日朝鮮人の姿が映像のごとく目に浮かんでくるのである。

さらに、詩集には幾人もの日本の友人たちが登場する。

《あなたの涙を忘れない》の中のアサ子さん。

《雨が逃げたぞー！》の中の由美子さん。

《忘れないあなたの眼差しを》の中の淳さん。

そして障がいを負いながらも、「朝鮮学校に補助金を！」のゼッケンをつけ、火曜行動の日、何時間も府庁前に立ち続けてくれた日本の友人。

皆、詩人の行動の中で出会った《共に歩む人》たちである。

この詩集に接し、私たちを応援してくれる数多い日本の友人たちがいることに、読者たちはどんなに多くの勇気をもらったであろうか。

もらった勇気は自己反省に変わり、新しい行動へと移っていくのである。 それを考える時、詩の力とはいかに素晴らしいものであるかと改めて思い知ることが出来る。

この人たちの中で今を生き、言葉を紡ぐ詩人が、またどんなに幸せであろうか。

そして、詩集には祖国分断の悲しみのなか父母の故郷を万感の思いで巡る《故郷－済州島詩抄》（母国語）や、詩人の生まれた地である青森県の田舎町を、70余年の歳月を経て初めて訪ねる記念詩《生まれ故郷－碇ヶ関を訪ねて》（日本語）、愛する息子への鎮魂歌《十五年の時が流れて》（日本語）が掲載されている。

すべての作品がセピア色のアルバムをめくるよ

うに次々と場面を変え読者の心に迫る。

特に生地である碇ヶ関の役場で朗読した《ふるさと》は、詩人の長い歴史であり、苦労の中でも決して過去を忘れず、信念を持ち生き続ける、深い深い想いの姿である。

ある人が私に言った。

「許玉汝は鉄の女」だと。

ウリハッキョと同胞社会を愛し、民族を愛し、祖国統一のために怯むことなく強く生きているのだと。

また、ある人が私に言った。

「許玉汝のあだ名は藤山直美」だと。

言葉を愛し、芸術を愛し、話術に長け、そして、苦しみを笑いに変えて生きているのだと。

第3詩集を拝読しながら切に思った事は、今の我々には繊細な叙情より骨太の情感が必要だということだ。

これからもずっと詩人の情感を我々の心に届けてほしい。

詩集のタイトル《羽が生えたように》は、電動自転車をプレゼントされた時の喜びの詩だが、言葉が羽のように時代を舞う、今の作品群のように思える。

詩人・許玉汝に老いはない。

書評

橋本みゆき編著、猿橋順子／高正子／柳蓮淑著 『二世に聴く在日コリアンの生活文化―「継承」の語り』

〔社会評論社、2021 年〕

伊地知紀子（大阪公立大学）

「生活文化」という表現は、一見、身近で最も手軽に取り出すことができるものであるかのような錯覚を生み出す。なぜなら、誰もが自分の日常生活に存在していることを知りながらも、いざ言語化しようとするとなかなか困難となる領域だからである。このことを示すように、「序章」では本書の執筆メンバーの一人である橋本みゆきのエピソードが紹介されている。在日朝鮮人史研究会（おそらく東京の）の月例会で、橋本が本書のテーマを紹介した時に、「こんなことが研究になるんだ」という発言があったという。「生活文化」は「こんなこと」なのである。これは「生活文化」領域に実に失礼な言い方である。本章でも紹介されているが、日本生活文化史学会もあるのだ。学会 HP で言及されているように、確かに定義は困難である。だからこそ多様な解釈が可能であり、「こんなこと」と言われそうな、当たり前の事柄に丁寧に向き合おうという姿勢があって初めて対象化される。例えば、何をどのように食べるのか、食材の入手経路や調理方法、これらにまつわる思い出など、こうした一見瑣末な事柄に、人びとが生きてきた痕跡が刻まれている。

在日コリアンについての研究は、時代とともにテーマが多様化してきた。歴史、政治、経済、法律、教育、宗教、社会問題、差別撤廃運動、アイデンティティ、文化などであり、これらを包括する『在日コリアン辞典』の初版が国際高麗学会日本支部から刊行されたのは、2010 年であった。韓国にも、在日コリアンに関する研究センターや機

関が設立されるようになり、在日コリアン研究者による調査研究も増えている。研究領域の拡大や担い手の増加のなかで、「生活文化」についてはそれほど蓄積がないという状況にある。こうした領域を得意とする文化人類学でも、儀礼や生活史についての研究成果は公刊されているが、日常生活の様々な営みを主たる対象とし、かつそれらが世代から世代へといかに継承されているのか、あるいはないのか、といった通時的視点の分析はほとんど見当たらないといってよいだろう。さらに、前述したような目線もあり、最も後回しにされたテーマなのである。加えていうならば、最も手間暇のかかる対象であるともいえる。

また、本書は在日コリアン 2 世が対象である。頻繁に語られる在日コリアン 2 世像は、1 世とは異なり日本で生まれ育っているために文化を身体化しておらず、日本社会の差別と排除の壁による被差別意識を根強く抱えてきたというものだ。しかしながら、2 世といっても多様である。世代論はどこに焦点を当てて論じるかによって、かなり融通の効くカテゴリーなのである。この点を踏まえたうえで、本書は、在日コリアン 2 世が「生活文化」を継承するとは、いかなる営みなのかを知ることから始めた。

執筆メンバーは、こうした重要でありながら、なかなか誰も手をつけようとしなかった課題に果敢に挑戦し、数々の滋味溢れる知見を次々と繰り出している。執筆者も多様である。日本人、在日コリアン 2 世、留学を契機として韓国から日本へ移

住したコリアンによって構成され、4名とも女性である。それぞれの得意な領域を活かし、在日コリアン2世11名を事例として本書は構成された。対象者の居住地も大阪、東京といった頻繁に取り上げられる地域だけではなく、愛媛でのインタビューによる調査記録も大変貴重なものとなっている。

本書は、序章と本章が2部立てという構成となっている。1部では地域の異なる3名の「生活文化ものがたり」が取り上げられ、2部は11名の事例をもとに「生活文化の『継承』」を考察するテーマ別論文が8章分と終章である。2部の個別テーマは、「親子間継承／非継承の語りに現れる『民族』」、「1世・2世が食べたものとその語りかた」、「四国で受け継ぐ済州島S村の祖先祭祀」、「継承言語のはたらきとアイデンティティ」、「母娘関係の振り返りと関係観の変容」、「母の故郷、2世の『故郷』」、「貧困と階層の語り」、「ジェンダー化された抑圧と解放」、「仕事観にみる世代の連なり」である。

インタビュー調査のデータから、多様なテーマを切り出すことは簡単ではない。11名へのインタビューから、個人の生活史だけでなく複数のテーマを析出し、メンバーの専門領域を活かしながらの考察は、従来の在日コリアン研究が捉えきれなかった様々な問いを提示している。いくつか取り上げよう。

まず、母への着目である。生活文化をテーマとする際、「家事」を構成する多様な仕事は手掛かりとなる。家族の日常生活を維持する「家事」の担い手は往々にして女性となるため、彼女たちについての語りが多くなる。このことによって、在日

コリアン2世から見た母の姿が、いかに様々であるのかを本書は示している。1世であるからといって、朝鮮料理をつくるとは限らない。日本の料理も作るが、それ以前にゆっくり家族で食事を取る暇も余裕もない日常が語られる(2部2章)。また、母が日本人である場合、娘が婚出した後も、生家の祖先祭祀をサポートしている様子が報告されている(2部3章)。また、親が1世であるからといって、朝鮮の生活文化をもれなく身につけているという自覚を持って渡日しているわけでもない。2世である娘が婚出した場合、夫方の民族団体系統と自身の親たちのそれとが異なる場合がある。日本国内の地方の相違も重なる(2部4章)。こうした細々とした一人ひとりの事情が、生活する中でどのように記憶され、表現され、解釈されていくのか、を示すことによって、「故郷」とは何か、「民族文化」とは何かという問いを示していくのである。

多様な語りを多角的に分析していく記述を読むと、読者はおそらく、この問いは別の著作や論文で何気なく描かれた「あの」場面や「この」解釈とつながるのではないか、と思い当たるところが多々あるだろう。本書は、執筆メンバーが様々な検討可能性を持ち寄っていたのだらうと、その姿が見えるようであった。貴重なこれらのデータ分析をさらに展開する機会があるならば、「継承」を困難にした時代的社会的背景、可能としたそれらを盛り込んだ説明的記述が加わると、在日コリアンの歴史に詳しくない読者にも、執筆者たちがエンパワーされたものが「継承」されていくのではないだろうか。

国際高麗学会日本支部

2021 年度

学会活動

●国際高麗学会日本支部 第 25 回学術大会

日 時：2021 年 5 月 30 日（日）10：00 ～ 17：00

会 場：オンライン

【午前の部】10:00 ～ 12:00

◎自由論題報告

1. 関智焄（立命館大学）「韓国政府の慰安婦問題への対応と日韓関係」
 2. 今里基（立命館大学大学院）「在日コリアンの母国留学－ライフスタイル移住の視点から－」
- 司会：全ウンフィ（大阪市立大学）
3. 高橋優子（広島女学院大学）「在日大韓基督教会の歴史に見る韓国人被爆者救援活動」
 4. 山口祐香（九州大学）「「素晴らしくて楽しい」実践の模索－戦後日本における雑誌『日本のなかの朝鮮文化』の位置づけをめぐる研究可能性について」

司会：孫片田晶さん（立命館大学）

◎第 15 回 理事会 5 月 29 日（土）16:00 ～ 17:00 オンライン開催

◎第 25 回 総会 12:30 ～ 13:00

【午後の部】13:00 ～ 17:00

シンポジウム「女が書く、女を書く－文学の中の在日朝鮮人女性」

〔パネリスト報告〕

「初期在日朝鮮人文学における女性表象 -1970 年以前の小説を中心に」 宋恵媛（大阪市立大学）

「戦後を生きる「オモニ」- 在日朝鮮人の母性表象の一断面」 鄭鎬碩（聖学院大学）

「金史良の日本語作品に描かれた朝鮮人女性」 高橋梓（一橋大学）

原佑介（金沢大学）「日本近代文学にあらわれた「不逞鮮人」と朝鮮人女性－田宮虎彦「朝鮮ダリヤ」と中西伊之助「不逞鮮人」を手がかりに－」

コメンテーター：浮場正親（名古屋大学）

洪ジョンウン（大阪市立大学）

岡崎享子（立命館大学）

司会：伊地知紀子（大阪市立大学）

●人文社会研究部会

第 99 回人文社会研究部会

日 時：2021 年 9 月 26 日（日）14:00 ～ 16:30

会 場：オンライン

タイトル：戦後日本における台湾人の歴史的自己省察

報告者：岡野（葉）翔太（大阪大学大学院）

コメント：権香淑（上智大学）

コーディネーター：石川亮太（立命館大学）

●科学技術研究部会

第 74 回科学技術研究部会

日 時：2021 年 6 月 26 日（土）16:00 ～

会 場：オンライン

報告者：金穂香（京都大学）

タイトル：光受容タンパク質 PYP のシグナル伝達機構：共通のタンパク質が示す多彩な光反応

第 75 回科学技術研究部会

日 時：2021 年 9 月 18 日（土）16:00 ～

会 場：オンライン

報告者：李太起（大阪市立大学）

タイトル：Layer-by-layer 法による CdTe ナノ粒子超格子の作製と新規光物性の解明

第 76 回科学技術研究部会

日 時：2022 年 2 月 19 日（土）16:00 ～

会 場：オンライン

報告者：白凜（独立行政法人日本学術振興会、一般社団法人在日コリアン美術作品保存協会）

タイトル：語られてこなかった美術史－1950 年代の在日朝鮮人美術史

●特別講演会

「文在寅政権の成果と課題―第 20 代大統領選挙を見据えて」

日 時：2021 年 12 月 11 日（土）14 時～

会 場：オンライン

講 師：文京洙（立命館大学）

コメンテーター：金榮鎬（広島市立大学）

「在日コリアン研究 40 年を振り返る」

日 時：2022 年 3 月 26 日（土）16 時～

会 場：大阪駅前第 4 ビル 2302 会議室 + オンライン

講 師：朴一（大阪市立大学）

コメンテーター：金早雪（大阪商業大学）

1. 投稿資格

国際高麗学会日本支部は、学会誌『コリアン・スタディーズ』を年1回発行する。掲載される原稿は、朝鮮半島および朝鮮民族に関するあらゆる分野の学術的な論文、研究ノート、書評論文、キルチャビ、書評である。論文、研究ノートについては、国際高麗学会日本支部会員は自由に投稿できる。投稿については、寄稿規定並びに執筆規定を熟読すること。ただし、当該年度までの会費納入を要する。投稿論文は常時受け付ける。また、編集委員会で企画する特集については、非会員にも寄稿を依頼することがある。

2. 投稿条件

投稿される原稿は、未発表の書き下ろし作品のみとする。同一原稿を『コリアン・スタディーズ』以外に同時に投稿することはできない。

3. 審査

寄稿された原稿を掲載するか否かは、別途定める査読規定に基づいて編集委員会で審査の上決定する。

4. 使用言語

本文は日本語のみとし、注および参考文献に限り外国語を使用できる。要旨およびキーワードは日本語および英語とする。

5. 枚数

原稿枚数は400字詰め原稿用紙換算で50枚以内とし、本文（タイトル、氏名含む）、注、参考文献、図表を含めたものとする。論文には、日本語要旨、英語要旨およびキーワード（日本語および英語）を付けることとする。ただし、いずれも枚数には含まない。枚数を超過した場合、審査対象としないこともあるので、下記を確認すること。

論文 50枚以内+日本語要旨（400～800字）、英語要旨（800～1000語）+キーワード（日本語および英語）

研究ノート 50枚以内

キルチャビ 20枚以内

書評 5～15枚

6. 投稿形式

投稿は原則として電子文書とし、マイクロソフト・ワード形式かリッチテキスト形式で作成したものを投稿規定10にある提出先のe-mailアドレスに送付すること。図表や写真は可能な限り本文中に挿入すること。マイクロソフト・ワード形式かリッチテキスト形式以外での提出については、投稿規定10にある問い合わせ先に連絡すること。必要に応じて印刷された原稿の郵送を求めることがある。

7. 抜き刷り

本誌は国際高麗学会日本支部会員には1部ずつ、論文、研究ノート各1本につき1部配布する。抜き刷りをご希望の場合は別途有料となるので、投稿の際に申し添えること。問い合わせについては10を参照のこと。

8. 校正

校正は原則として著者校正のみで、内容のみならず、投稿規定および執筆規定に則った形式に訂正することも校正作業に含まれる。審査により採用決定となった後に行われる初校段階での誤植以外の修正は原則として認めない。なお、再校は初校段階の訂正を確認するだけの作業となる。

9. 原稿の保管

投稿原稿の保管や取り扱いについては編集委員会が責任を負う。

10. 提出先および問い合わせ

投稿原稿は下記宛に提出すること。

国際高麗学会 日本支部事務局

〒530-0047 大阪市北区西天満4丁目5-5 マーキス梅田 506号

tel 06-6314-3775 fax 06-7660-7980

isksj@ams.odn.ne.jp <http://www.isks.org/>

投稿などに関する問い合わせは、上記住所の支部事務局にお願いします。

11. 著作権

投稿された原稿の著作権は国際高麗学会日本支部に所属するが、原著者が『コリアン・スタディーズ』に掲載された当該論文を自著作の単行本や論文集に再掲載することは妨げない。

(2014年6月30日)

国際高麗学会日本支部学会誌『コリアン・スタディーズ』執筆規定

2020年6月19日一部改訂

1. 本文

(1) 基本用語

- 原稿は日本語、横書きとする。図表や図版は原稿本文に組み込み、紙幅の制限内に含める。
- 朝鮮、中国に関わる人名・地名は漢字（日本の現代漢字も可）で表記し、漢字不明の場合はカタカナ表記とする。欧米由来の度量衡はカタカナ表記とする。

(2) 数字

- 数字はアラビア表記を原則とし、場合に応じて漢数詞を用いる。
- 年号は西暦を用い、国家・地域固有の年号を使用する際は西暦を（ ）で付記する。

(3) 見出し

- 章はアラビア数字で1、2、3…と表す。「はじめに」と「おわりに」（あるいはそれ等に該当する見出し）にも数字を振る。「はじめに」は1とする。
- 章以下の節は（1）、（2）、（3）の順で表す。
- 節以下の項はa、b、cの順で表す。

（例）第1章⇒1、第1節⇒（1）、第1項⇒a

2. キーワード

論文、研究ノートには日英5語以内でキーワードを付けること。キーワード間は読点ではなくコンマを入れること。

3. 文献引用

（1）本文や注、図表で文献を表記する際は、編著者の姓（刊行年：ページ）のみ表記し、文献の詳細は参照文献リストに表示する。朝鮮人の名は姓名とも表記する。編著者名が付いていない刊行物の場合は、発行機関名を表記する。

（例）文献全体を示す場合

鈴木 [2005]、朴統一 [2011] によれば・・・

文献の一部を示す場合

…投票率は低かったとされる [キムハヌル 2012: 11-13]。

（2）2度目以降の引用でも前掲書・前掲論文、同上書・同上論文などの用語は使用せず、上記（1）のように

表記する。

(3) 新聞・雑誌記事や社説の場合は本文・注・図表に新聞・雑誌名、発行年月日を記した上で、参考文献リストに新聞・雑誌名を入れる。

(例)

…保守言論による歪曲は深刻である [『月刊朝中東』2001 年 1 月]。

…と指導者は発言している [『労働新聞』2012 年 4 月 16 日]。

4. 注

(1) 注は、本文の内容について文脈上の解説や言及をする必要がある場合に用いる。

(2) すべて文末注とし、片カッコ付アラビア数字で表示する。

(例) 1)、2)、3)・・・

5. 図表

(1) 図表のタイトルは、図の場合は図の下に、表の場合は表の上に付ける。

(2) 刷り上がり 1/2 ページ大の場合は 500 字分、刷り上がり 1/4 ページ大の場合は 250 字分として換算する。

6. 参考文献

(1) 本文、注記、図表で用いたすべての文献を「参考文献」として本文の最後に一括して表示する。参考文献とは、本文中または注において引用した文献を指す。

(2) 文献リストは言語ごとに分け、日本語文献は著者名の 50 音順、韓国・朝鮮語文献は著者名のカナダラ順などに並べる。

(3) 参考文献については、著者名・(刊行年)・書名・号数(発行年月日を入れてもよい)・発行所・頁等で示す。筆者名のある新聞・雑誌記事は雑誌論文と同様に表記し、発行年月日も記入する。

(4) 英文文献の場合、書名はイタリックで表記する。論文名は単行本所収か雑誌所収かに関わらず一律クォーテーション・マークで括る。

(例)

単行本の場合

・朴一(2005)『朝鮮半島を見る眼－「親日と反日」「親米と反米」の構図』藤原書店、pp.123－125

・이광우(2004)『신경과학』법문사, pp.153.

・Kim, L. (1997). *Imitation to Innovation: The Dynamics of Korea's Technological Learning*. Boston: Harvard Business School Press.

論文の場合

・文京洙(2005)「戦後 60 年と在日朝鮮人“国民”の呪縛を超えて」『思想』No.980、岩波書店、pp.8－9

・김신일(1991)「교육자치의 당위성과 현실」『교육학연구』Vol21, 교육출판, pp. 11－18.

・Min, Pyong Gap. (2001). “Koreans in New York: An ‘Institutionally Complete’ Community.” *New Immigrants in New York*, edited by Nancy Foner, New York: Columbia University Press, pp.173-200.

・Koh, Y.S. (2008). “Financial and Corporate Reform in Korea: Survival Strategies of the Korean “Chaebols””, *Asian Studies*, 54 (2), pp.71-88.

7. 論文タイトル

日本語および英語でつけること。

編集後記

『コリアン・スタディーズ』の今号は、学術大会でのシンポジウムを特集に組みました。あわせて、投稿論文、研究ノート、寄稿、キルチャビなど、コリア、コリアンに関するきわめてバラエティに富む充実した内容になったのではないのでしょうか。

さて、『コリアン・スタディーズ』の発刊が10号を迎えました。創刊号の編集後記には、「誌名『コリアン・スタディーズ』には文字通りコリアとコリアンに関わるすべての研究を網羅する意図が込められている」とあります。ところで、しめきりとは破られるためにあるのかどうか、なかなか期限どおりに原稿が集まらないのが編集の悩みです（ほかの雑誌も同じだと思いますが）。とはいえ、集まった原稿はすべてが充実した内容ばかりで、まさしく、「コリアとコリアンに関するすべての研究を網羅」しているといえ、それらを編む役割にあることにあらためて身を引き締める思いです。2013年の創刊以来、ご執筆ならびに編集などにご協力いただいたみなさんにあらためてお礼申し上げます。

『コリアン・スタディーズ』11号の投稿締め切りは9月末日の予定です。多くの投稿をお待ちしております。

（鄭栄鎮）

『コリアン・スタディーズ』編集委員

鄭栄鎮（編集委員長）

文京洙

高正子

朴一

鄭雅英

蔡徳七

裴光雄

伊地知紀子

森類臣

全ウンフィ

洪ジョンウン

岡崎享子

金友子

孫片田晶

コリアン・スタディーズ

第 10 号

Korean Studies No.10

頒価 1,000 円

2022 年 6 月 1 日 発行

編集・発行団体 国際高麗学会日本支部

〒 530-0047

大阪市北区西天満 4 丁目 5-5

マーキス梅田 506 号

TEL 06-6314-3775

FAX 06-7660-7980

E-mail isksj@isks.org

発行者 国際高麗学会日本支部会長 鄭雅英

編集代表者 鄭榮鎮

装丁 金文男

制作 株式会社 田中プリント

Korean Studies
Vol.10 2022

Feature Articles : Women Write, Women Are Written; Zainichi Korean Women in Literature

Foreword : What to write, what to be written. IJICHI Noriko

Representing Zainichi Korean Women:

An Analysis of Novels by Male Compatriot Writers before the 1970s Hyewon Song

Reading 'Omoni': The Postwar Trajectory of Ethnic Korean Mother in Japan Hoseok JEONG

Representations of Korean women in the Japanese-language works of Kim Saryang

..... TAKAHASHI Azusa

"Futei Senjin" and Korean Women in Modern Japanese Literature:

Focusing on Nakanishi Inosuke's "Futei Senjin" and Tamiya Torahiko's "Chosun Dahlia"

..... Hara Yusuke

Articles

The Film "Korean Envoys in the Edo Period" and the Screening Movement

in the History of Citizen Movements in Japan in the 1970-80's Yuka YAMAGUCHI

The Literary Resistance and Korean Awareness of Tomoji Abe in the 1930s:

Study on 'Fuyu no Yado' Hirose Yoichi

Notes on Research

Life and Events of Koreans in Yao: Focusing on the Period Before 1945 CHUNG Youngjin

The Succession and Significance of "Ethnic Dance" within the Korean Residents in Japan

-Through Interviews with the Leader of the Joseon School's Ethnic Dance Club-

..... SUH HEE YOUNG

Contribution

The Causes of the Feud between Korea and Japan

—Investigating The Legitimacy of the Republic of Korea— Seo Jeong-Gun

Kilchabi (Compass)

"Korean studies" in Japan, Trends in research and education in the fields

of humanities/social sciences - Focusing on International Society

for Korean Studies Japan Branch and universities in the Kansai region - Kwang Woong Bae

On Poetical Works of HO Namgi IM Jong Hyok

Book Review

Tobacco Soup Translated by OOMURA Masuo MIYAJIMA Mika

History of Japan-Korea Relations by KIMIYA Tadashi PARK II

Stateless "Chosenseki" Zainichi Koreans in Japan: From Transnational Perspective

by Rika Lee (ed.) LEE Hong Jang

Growing Wings by Ho Ok Yeo Kim Jong Su

The Narratives of the Second Generation *Zainichi* Koreans about "Inheriting"

the Culture of Life by Hashimoto Miyuki / Saruhashi Junko / Koh jeongja / Yonsuk Yu

..... IJICHI Noriko

Published by the Japan Branch of International Society for Korean Studies

4-5-5-506, Nishitenma, Kita-ku, Osaka, Japan